
本日天気晴朗ナレドモ浪高シ——
明治三十八年五月二十七日早朝、
日本海の濛気の中にロシア帝国の
威信をかけたバルチック大艦隊が
ついにその姿を現わした。国家の
命運を背負って戦艦三笠を先頭に
迎撃に向かう連合艦隊。大海戦の
火蓋が今切られようとしている。
感動の完結篇。 解説・島田謹二
巻末に「あとがき集」他を収む。



文春文庫

し 1 35

文春文庫

司馬遼太郎の本

最後の將軍

十一番目の志士 (上)(下)

世に棲む日日 (一)～(四)

酔って候

竜馬が³ゆく (一)～(八)

功名が³辻 (一)～(四)

故郷忘じが³たく候

歴史を紀行する

幕 末

夏草の賦 (上)(下)

義 経 (上)(下)

坂の上の雲 (一)～(八)

日本人を考える 対談集

殉 死

余話として

翔ぶが³如く (一)～(十)

木曜島の夜会

歴史を考える 対談集

対談 中国を考える

菜の花の沖 (一)～(六)

ロシアについて 北方の原形

文春文庫 最新刊

秘

密

池波正太郎

家老の子息を殺し、江戸を逃れた主人公。身を隠す生活の中に人の情けと心意気があった

逃亡弁護士

和久峻三

女性を襲った男を死亡させ、戸籍を買い取つて弁護士となった男に脅迫者の魔の手が迫る

貴

花散る

相撲小説集

もりたなるお

貴ノ花、北の湖、朝潮などの花形力士の栄光と苦悩を、資料を駆使してえがく実録小説集

琥珀の技三船十段物語

三好京三

一五九センチ、五六キロの小兵ながら、生涯無敗をほこつた柔道家、三船久蔵の堂々の生涯

小説の周辺

藤沢周平

処女小説のこと、郷里のこと、少年時代、師友のこと、時代小説の第一人者が綴る随筆集

読むクスリPART 6

上前淳一郎

社内で意見を述べる時の注意、心暖まる教師の話etc。面白くてタメになるシリーズ第六集

ドジ添乗員物語

深田祐介

貧民夜想會

関川夏央

昭和天皇とっておきの話

河原敏明

青春の一冊

文藝春秋編

迎撃のスポーイ上下

リシャル・ケルラン

村松潔訳

燃える季節

ウエイン・D・ダンディー

佐々田雅子訳

ラグビー伝説

ビジュアル版

スポーツ・グラフィック「ナンバー」編

海外旅行添乗員にトラバリーユした新人ギャル由美子を描くユーモア小説。大爆笑の奮戦記

鋭い時代感覚でそれぞれの文化の地層を考察した臨床的海外ルポルタージュ・エッセイ

昭和天皇の八十七年の生涯から人間味豊かなエピソードを精選。併せて新皇室の話も紹介

青春時代に読んだ本は忘れない。豪華執筆陣がそれぞれの想い出の書について語る随筆集

米国亡命を図つたソ連原潜技師を追うGRU将校。大韓航空機撃墜に至る国際サスペンス

中西部を舞台に追う私立探偵と追われる男。いつしか男の友情が、ハードボイルドの名品

日本ラグビー九十年の歴史に刻まれた十の伝説をいま解き明かすラグビーファン必携の書

高橋 治 自白の構図

高橋 揆一郎 伸(のぶよ) 予

高見 順 いやな感じ

滝口 康彦 主家滅ぶべし

滝口 康彦 乱離若き日の立花宗茂の風

立原 正秋 美しい城

立原 正秋 女の部屋

立原 正秋 きぬた

立原 正秋 果樹園への道

立原 正秋 たびびと

立原 正秋 血と砂

田辺 聖子 千すじの黒髪

田辺 聖子 甘い関係

田辺 聖子 猫も杓子も

田辺 聖子 言い寄る

田辺 聖子 求婚旅行全三冊

田辺 聖子 中年の眼にも涙

田辺 聖子 舞え舞え蝸牛

田辺 聖子 鬼たちの声

田辺 聖子 浜辺先生町を行く

田辺 聖子 スヌー物語

田辺 聖子 小町盛衰抄歴史散歩私記

田辺 聖子 私本・源氏物語

田辺 聖子 ダンスと空想

田辺 聖子 しんこ細工の猿や雉きじ

田辺 聖子 はじめに慈悲ありき

曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美
人間	虚構の家	愛	午後	夜と風の結婚	諧調は偽りなり	花情	花野	祇園の男	女たち	抱擁	ゆきてかえらぬ	朝な朝な	朝な
の	の		の	の									
毘全三冊			微笑										

高橋治	鷹羽十九哉	高樹のぶ子	高樹のぶ子	高井有一	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子	曾野綾子
絢爛たる影絵	虹へ、アヴァンチュール	波光きらめく果て	その細き道	北の河	神の汚れた手上・下	ボクは猫よ	不在の部屋上下	青春の構図	遠ざかる足音	残照に立つ	奇蹟	春の飛行	春の飛行

新藤兼人	城山三郎	城山三郎	城山三郎	城山三郎	城山三郎	城山三郎	城山三郎	城山三郎	白石一郎	白石一郎	白石一郎	子母澤寛
小説田中絹代	怒りの標的	甘い餌	忘れ得ぬ翼	当社別状なし	学・経・年・不問	緊急重役会	一步の距離	鼠 鈴木商店焼打ち事件	サムライの海	幻島記	天 ^{あま} 翔 ^か ける女 ^{ひと}	剣客物語
瀬戸内晴美女	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	瀬戸内晴美	杉本苑子	杉本苑子	杉本苑子	杉本苑子	杉本苑子
優落	奈	みじかい旅	夜の会話	花	あなたにだけ	死せる湖	輪	冬の	冥府回廊上下	開化乗合馬車	影の系譜	埋み 火上下

豊臣家朋樓

志水辰夫	島田莊司	柴田鍊三郎	柴田鍊三郎	柴田鍊三郎	柴田鍊三郎	柴田鍊三郎	柴田翔	柴田翔	芝木好子	司馬遼太郎	司馬遼太郎	
あっちが上海	夏、19歳の肖像	徳川太平記上・下	われら九人の戦鬼全三冊	鳴呼江戸城全三冊	裏返し忠臣蔵 <small>柴鍊立川文庫3</small>	真田幸村 <small>柴鍊立川文庫2</small>	猿飛佐助 <small>柴鍊立川文庫1</small>	われら戦友たち	されどわれらが日々―	隅田川暮色	菜の花の沖(一)(六)	木曜島の夜会



文春文庫

坂の上の雲(八)

定価はカバーに
表示してあります

1978年4月25日 第1刷

1990年1月30日 第21刷

著者 司馬遼太郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁・乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-710535-7

連合艦隊編制表 (日本海海戰時)

(駆逐隊・艇隊は略す)
参謀などは主なもののみ

連合艦隊司令長官 東郷 平八郎 (大將)

第一艦隊 (旗艦三笠)

第三戰隊	第一戰隊	
司令官 出羽 重遠 (中將) 参謀 山路 一善 (中佐) 巡洋艦笠置 (旗艦) 千歳・音羽 新高	司令官 三須宗太郎 (中將) 参謀 松井 健吉 (中佐) 戰艦三笠・敷島・富士・朝日 装甲巡洋艦春日・日進 (旗艦) 通報艦竜田	司令長官 東郷平八郎 (大將) 参謀長 加藤友三郎 (少將) 参謀 秋山 真之 (中佐) 参謀 飯田 久恒 (少佐) 参謀 清河 純一 (大尉) 副官 永田泰次郎 (中佐)

第二艦隊 (旗艦出雲)

第四戰隊	第二戰隊	
司令官 瓜生 外吉 (中將) 参謀 森山慶三郎 (中佐) 巡洋艦浪速 (旗艦) 高千穂・ 明石・对馬	司令官 島村 速雄 (少將) 参謀 竹内 重利 (少佐) 装甲巡洋艦出雲・吾妻・常磐 八雲・浅間・磐手 (旗艦) 通報艦千早	司令長官 上村彦之丞 (中將) 参謀長 藤井 較一 (大佐) 参謀 佐藤鉄太郎 (中佐) 参謀 下村延太郎 (少佐) 参謀 山本英輔 (大尉) 副官 田中治平 (少佐)

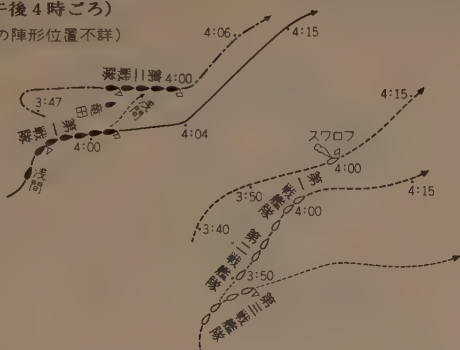
第三艦隊 (旗艦厳島)

第七戰隊	第六戰隊	第五戰隊
司令官 山田彦八 (少將) 参謀 伊集院 俊 (少佐) 装甲海防艦扶桑 (旗艦) 砲艦高雄・筑紫・鳥海・ 摩耶・宇治	司令官 東郷 正路 (少將) 参謀 吉田 清風 (少佐) 巡洋艦須磨 (旗艦) 和泉・ 千代田・秋津洲	司令官 武富邦 邦鼎 (少將) 参謀 野崎 小十郎 (少佐) 巡洋艦厳島 装甲海防艦鎮遠 巡洋艦松島・橋立 (旗艦) 通報艦八重山

日本海海戦図 5

(午後 4 時ごろ)

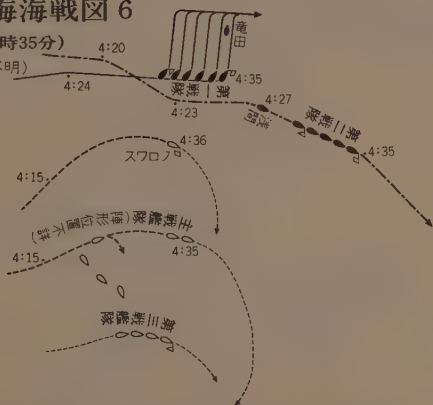
(敵の陣形位置不詳)



日本海海戦図 6

(午後 4 時35分)

(距離不明)



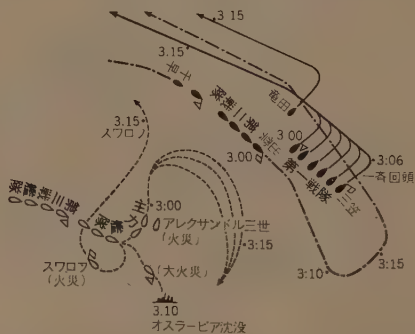
日本海海戦図 3

(午後2時40分)



日本海海戦図 4

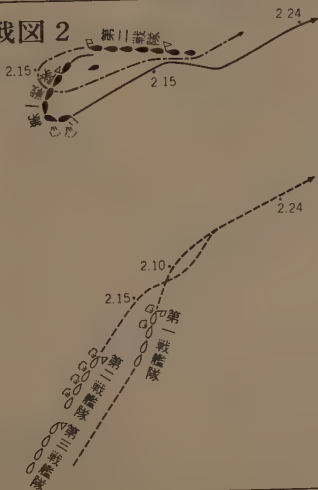
(午後3時～3時15分)





日本海海戦図 2

(午後2時08分)
砲撃開始



- | | |
|---|------|
| ● | 日本 |
| ○ | ロシア |
| ● | { 戦艦 |
| ○ | |
| ● | 巡洋艦 |
| ● | 通報艦 |

日本海海戦図 1

(5月27日午後2時の位置)



關連地圖

(地圖作製・高野橋 康)

ここを作者は「東へ」という暗示的な項目で説き出し、「敵艦見ゆ」「運命の海」「死闘」と息つくひまをも与えない局面を盛り上げ盛り上げ、「鬱陵島」「ネボガトフ」と、項目を二つつらねて終る。ここが中心部の中の中心部で、雄大無比な交響楽の絶頂を作る。それを「雨の坂」の終曲が、ぷつんとみじかく、それだけにかえて味わい深くうたいおさめる。

そうだ、「うたう」という文字を用いたが、この物語は散文で語った一曲の大叙事詩なのである。『平家物語』以来、久しく耳にすることのできなかつた諸行無常の哀調を、花やかな勝利のうしろにどこかでしみじみときかせている。日本人が胸のおくに、様に隠し持つ一ばん深い基調音を、低音でしのび鳴らしながら、読者の心をえもいえぬ感動へ導いてゆく。『坂の上の雲』は、七百年の歳月をへだてて、国民文学の大海に、白々と光る漚^{みお}をひきながら、つづいていった。ただ一部に偏したせまい範囲の文芸の愛好者だけに訴えるのではない。日本人一般の各層にひろく、ふかく、ながく読まれ、聴かれ、味わわれる大作を、司馬遼太郎は、海にとりかこまれたこの国土に暮すわが民族のために残してくれた。何という偉業だろう。

それから宮古島の漁民や沖の島の島守などを点描して、庶民もこの戦争に参加した心意気を忘れないように作者は心使いをしているが、それは当然な配慮であつたろう。ただそうすると、頭脳戦に心血を注いだ学者たちの努力のあとも、もう少し大きな比重をしめて語るに価するものはなかったか。

*

序曲につづいて、中心部が展開する。この後半部は、まず山本権兵衛、小村寿太郎、児玉源太郎の三人男——つまり、秋山兄弟より身分がもう一段高い層から政戦両略を構想させる部分によつて導入する。遼陽までは、戦況が比較のほとんどん拍子にすすんだこともあつて、事も筆も流れるようにすすんでゆく。それが旅順口、沙河で一停頓するところから、どうなるのかと読者たちは胸をワクワクさせる。

項目を眺めると、「砲火」とか、「黄塵」とか、「海濤」とか、無季の季題めいた詩的印象語が、「遼陽」「旅順」「沙河」「黒溝台」「印度洋」というただ地名を伝える固有名詞のそつけない投げ出しと連鎖して、ふしぎに深々とした象徴性をおびてくる。

一九〇五年三月十日にきわまった日本陸軍としては大詰めの決戦「奉天」は、「会戦」と「退却」という露わな二章の中にたたみこまれて、中心部のヤマの一つをつくる。

しかし、この戦争の大団円は陸戦によつてつけられず、主人公の一人秋山真之が花形の立役者になつて脚光をあびる一九〇五年五月二十七日の日本海海戦によつて一挙に可能になった。そこが中心部の最大のヤマである。

自然にわかれてゆくだろう。

いやそれだけではなかった。当時の宣伝力と情報力は、アングロ・サクソン民族の手ににぎられていた。かれらは自利のため、その力をたえず日本のため有利になるように流しつづけていた。そのため、国際世論の上で、日本にいつも有利であった。

こういう内外の諸条件がそろってみると、日露戦争の帰結は、今日からみると、当然であった。日本は勝つべくして勝ち、ロシアは負けるべくして負けた。

たしかに政略、戦略から大観すれば、そういうことになると思うが、戦場で相対した将士の知謀と武勇とは局面局面に依じて、千態万様であった。その実相を作者の筆は縦横に活写している。ことに、日本の兵資がだんだん底をついてきたため、手に汗をにぎらせる沙河、黒溝台の遭遇戦、作戦の下手際をバクロした旅順の攻囲戦など、説き、語り、考え、論じ、評する作者の筆は、統帥部と参謀部と第一線部隊と兵站部との本質と関係に説き及び、圧巻である。くり返して精読に価する。

ただ将器と謀才とを何人かの将士の中に識別する時、わかりやすく善玉と悪玉とに説きわけすぎた点がありはしなかったか。広い意味の小説だから、無理はないと思うが、それにしてもそこに多少のひっかかりを感じとる読者がいないわけでもなからう。

それにもうひとつ、戦争はいやでも応でも一つの国家の全力をあげさせ、あらゆるエネルギーをすいとるものだから、女性（や子供たち）も政戦両力の意外なささえになっているはずである。それがあんまり出てこないのが寂しい。

両軍の政略と戦略がはっきりのみこめる。いやそれだけではない。両軍将士の闘魂はどうであつたか。じつに生き身の将士の力戦奮闘によつて、日本軍は勝ち、ロシア軍は敗けた。生きた人間の生きた精神の生きた働きを語り出すと、この作者の筆は神采^{えんき}奕々として光り輝く。人間研究者として訓練された見方と書き方とが、ここではものをいっている。伊藤は政論家である。司馬は作家である。

更にまた一例を加えようか。秋山真之が指導した日本海海戦の部分は、この長い物語の大団円として作者が心血を注いだものだろう。海戦史上何ものもなしとげえなかつた完全戦闘という成果をあげた、史上未曾有の戦いぶりを語りつくして、その筆は雄渾をきわめているのをおえ。

日露戦争の勝敗は、なんによつてわかれたのか？

日本は財政も頼りなく、兵力もとぼしい。ことに陸軍では兵資も十分にととのつていたとはいひ難い。しかし大戦略はちゃんと立っていて、前線の将兵も背後の国民もこの大方針を体していた。負けたら国は滅びるぞ！ その覚悟のほどはすさまじい。闘魂という点では、近代史に無類の熱狂性をもっていた。明治日本は、国民戦争の典型を具現化してみせた。これに反してロシアは専制国家の暗愚な国主が、私情と私利とに目がくらみ、側近にそのかされて侵略戦争に手をつけた。出先の将兵も、これでは闘魂がわきたたぬ。これでは一死をいとわぬ日本陸海軍に対抗して死力をつくす気持にはなれぬ。兵力と兵資だけは、だんだん増大してきたけれど、闘志はそんなに揚がらない。処々ではずいぶんねばつたけれど、非戦の風潮ははじめからひそんでいて、最後の粘りがきかなかつた。その点では陸海軍の総帥の統率ぶりも同じである。これでは勝敗も

のは、当然である。ああその戦士たち！ それにまた国策に対し従順に命を奉じた可憐な国民たち！ その真相を作者は語りつくそうとする。

＊

これだけの目標と見識は、つけやきばからは生れない。作者は日本語になった両国の公刊戦史、参戦将兵の回顧録、新聞記事（特に明治の「新聞集成」、従軍者及び遺族の談話と聞き書き。その他日本語に移された外国人の手になる文献を手びろくまた細かに読破した。例えば、参謀本部の大冊『日露戦史』の附録の地図何百枚かを座右において、図上戦術の対局者のように、両軍の配置と攻守と兵力量を辿り、両軍の運動の経過と理由を、両軍首脳部の立場から、また政略戦略の大局から、考えぬいたそうである。本文を読むと、さもありな^{まさのり}うなずける。

もちろんこの道には軍部当局者以外に、ひとりの先進がいた。伊藤正徳氏がその人である。この戦争のち相当の歳月をへて、文字通りに客観できるところに二人の記者は立っていた。両軍の進退を公正に眺めようとした視点も共通している。ただ終戦後間もなく、日本国民の意気をふるいたせたいという下心から、伊藤はことあるごとに「良き時代」を回顧して慷慨する。その著書の主眼は、国民精神の振起にあつたとみていい。それに対して『坂の上の雲』は、小説という形をとっているせいか、登場人物の人物や心理の機微により深く、より繊細にはいって、語り口ももっと自由自在である。それはより文学的だといつてよからう。読み去り読みきたって、いよいよ面白いゆえである。

一例を出そう。秋山好古の指揮する黒溝台戦の記述はどうか。軍事史に無知の読者にも、対抗

*

第二巻の最後の項目は、「開戦」（文庫版第三巻）と題され、いよいよ主眼とする戦争図を描き出す。それにしても、一九〇四年二月はじめ、ロシア帝国は強大な国力を背景に、龐大な陸海軍を備えもっていた。これに対しては、どう出たらよいのか。日本の当局は、海上は東洋の海面からロシア海軍を一掃する。陸上では機先を制し、出鼻をくじいて戦鬪に成功しているうちに、友好国の仲裁によって講和にもちこんでゆく。そういう大戦略をうちたてた。

国民は涙ぐましいぐらゐにこの大方策にしたがった。軍人は生命を投げ出して戦った。陸戦は旅順包囲戦など、時に準備の不足のためにこずりながら、大局の志向は、一九〇五年春の奉天戦でほぼ貫いた。しかしなんといってもロシアは大国である。そのままずるずるひきのばされて、満州の奥地へひっぱりこまれたら、日本の国力はもうへとへとだから、兵資が続かない。そのきわどい時に、日本海軍が極東艦隊を撃滅しおわって、ロシアからつづいて回航してきたバルチック艦隊を初夏には日本海で文字通りに全滅させた。それがきっかけになって、北米合衆国の大統領が仲裁にのり出し、平和条約が結ばれた……

それぞれ利害を打算しながら、手に汗を握ってみつめている諸外国がある。満州への侵略のためひき出されてきたロシアの陸海軍がある。それが前景になって、いよいよ戦火がひらかれれば、いのちがけで闘うのは人間の本性である。ロシア人だろうが、日本人だろうが、違いはない。もしもこの戦争に負けたら、日本は対馬も北海道も奪われてしまい、重税を課せられ、うかうかすればロシアの属国にもされかねない。それを思えば当時の日本人が生命を投げ出して闘う

芸を新しく見直し、批評の力がそのまま内部に沈潜して、よみがえらせてきた俳句と短歌の開拓者となる。――要するに文武の道にそれぞれうちこんだ四国は松山の明治青年三名を語りつ、描きつ、評しつ、伝えつする長編だといえよう。

大きくわければ、全六巻のうち第二巻のほぼ真中に位する「十七夜」（文庫版第三巻）あたりまでが前半部になる。見方によると、そこまでが序曲である。書き出しは、みごとである。瀬戸内に沿う松山の季節と風俗と生活と家庭のしつけが好ましい筆で語りつづけられている。主人公の秋山兄弟のやや順調な生い立ちと、短詩型の革新に打ちこんだのちの正岡子規の病と闘いつつ、生命をすりへらしながら、独自の文学を残してゆく労苦とは、ことごとく対照になっている。

項目も、「春や昔」とか「ほととぎす」とか、ゆかしい風雅なしらべがきこえるかと思うと、「須磨の灯」とか「十七夜」とか、どこからともなく哀調がしめやかに流れてきて、ああ文芸の世界も入っているのだなと合点される。そうかと思うと、「騎兵」とか「軍艦」とか、まるで兵隊将棋から抜け出した用語かと疑われるものが現われてくる。そこへ「真之」とか「列強」とか、およそ小説様式の中では御目にかかれなような項目も入りまじる。「七変人」のうちの一人は、新聞記者に転身した。一人は「日清戦争」「威海衛」「渡米」「米西戦争」と目まぐるしくうちつづく十九世紀末の風雲の中に、海軍将校として目鼻立ちあざやかに登場する。作者が語るこれらの多様な項目は、背景と舞台と人物と事件とをゆるやかにないまぜ、その間にこの作者独得の解釈と評価とが適量におりこまれる。その配分と配列は、雄大な交響楽の適切な序曲にふさわしく、注目に価するものではないか。

なことをされては西洋諸国から総スカンをくって、うかうかすれば人種戦争になる。日本としては、そういう強硬論にはひきとつていただいて、もっぱら戦場になる東三省以外は、中立の立場をとってもらいたいと要望して、その内諾を得ていた。

ロシアの出方は、いよいよひょうたんなまずである。待てば待つほどひきずられる。もうこうなれば、時間の問題である。ロシア側は一日のびれば一日有利になり、日本側は一日遅ければ、一日不利になる。ロシア政府は、続々と軍艦と軍隊とを極東に送って、武力を増強した。もはや日本としては、日本の権益を守るために、必要な行動をとる以外に策はない。

一九〇四年二月五日、日本政府は国交断絶をロシアに通牒した。この時の日本の立場からいえば、チョーセン、シナの支配権をロシアとあらそったというよりは、自衛上の必要に迫られて、戦いをいんだという方があたっている。しかも、この戦いは、国運を賭した必死の戦いであった。

*

筆を前にもどそう。

この物語は「坂の上」にうかんだ「雲」を目指してか、雲にひかれてか、登ってゆく若者たちの群像を中心にすえている。それは、「明治」という世界史上ユニークな時代を背景にした日本の青春像である。その若者の兄弟は、時代の波にもまれながら、環境の要請から陸海の軍人になって、それぞれの役割りに応じ、それぞれの特長を、それぞれに生かしぬいてゆく。病氣になつて正規の学業も中道で捨てたその友は、万事新しいものごみの明治に生きながら、伝統の古文

が持つ權益をお互に確認したいと提案した。交渉は一九〇三年からはじまった。ロシアはグズグズして、なかなか土俵にのぼってこない。いよいよ返事をする段になると、チョーセンの問題については相談にのるが、満州に対しては口ばしを出すなという素気ないもので終始した。

ロシア側が急にふんぞりかえって、こういう強硬案を打ち出してきたのは、専制君主ニコライ二世が、その周囲の強硬派のためにおどらされたからである。その本心は、満州はロシアのものにする。チョーセンは日本のものにはさせないという腹があった上、日本は小国だ。タカがしれている。イギリスのうしろ楯があるにしても、いざとなればひっこむと信じていたからである。万が一戦争に持ち込むならば、すでに一八九八年以来、着々と用意していたロシア海軍の拡張案が具現化して、日本側にグウの音^ねもいわせぬ武力が完備する一九〇五年度までは、ひきのばしておきたいと考えていた。

この戦争の勝敗のみこみは、ロシアが樂觀していただけでない。他の国々も、日本は敗けるだろうと見ていた。好意的なアメリカ海軍でさえ、ロシア艦隊は一撃の下に日本艦隊を叩きつけると予想していた。同盟国イギリス海軍の首脳部でさえ、日本艦隊がロシア艦隊に全滅せられる地点はほぼこの辺だろうと、政府当局に耳打ちしていたという秘報さえ残っている。

日本は、英米とはたえず連絡をした。両国もまた日本に対して、好意的に考えてくれた。ドイツは、こっそりロシアの尻押しをしながら、つかずはなれずである。フランスは何とかして戦争にならぬよう調停にのり出そうとした。

問題はシナの出方である。日本と同盟してロシアと戦うという意見も一部にはあったが、そん

なると、フランスは横槍をいれて、戦場にのりこんでくるかもしれない。そのおそれに対して、イギリスとしては極力フランスと仲良くして、両国が日露戦争にまきこまれぬよう、できるだけ気を付ける以外には、うつ手がない。

一方、フランスとしては、ロシアに多額の資本投下を行なっているから、ロシアが戦争をはじめると、経済的にフランスは打撃を蒙る。戦争に巻き込まれるのは極力避けたい。こうなると、同じ立場にたつイギリスとは、期せずして手を握り合うような形になった。

ドイツはずるい。ロシアが戦争にのり出せば、ドイツに対するロシアの圧力がそれだけ減ずる。戦争はできるだけしかけたい。日本に対しては、ドイツを敵視する国の中に日本が入り込まないよう警戒する。

アメリカはどうか？　日本が満州からロシアの勢力を追い払うことは、シナに対するアメリカの利益に合致する。そういう見地から、日本を支持する態度をはっきり見せた。

一九〇二年十月、ロシアはこのまま進めばあぶないと計算して、満州から兵をひくと声明し、一部の撤兵は実行した。各国ともホツとしていると、いつの間にか満州を永久に占領するという方策にかわってきた（一九〇三年四月）。これでは日本として引き込むわけにゆかぬ。両国の外交折衝は、ツバゼリ合ひのように緊迫してきた。日本はチヨールセンに勢力を持っている以上、チヨールセンの安全を要求する。そのチヨールセンの側面をロシアが占領する時は、チヨールセンの独立がたえず脅かされる。シナも安全ではなくなる。だから、日本とロシアはそれぞれの利益のぶつかる点を調節したい。具体的には、ロシアは満州で、日本はチヨールセンで、それぞれ両国

アの出兵をおのれ一国で押えることは得策でないと判断して、いま日本に目をつけている。国力のまだ不十分な日本にとっては、もしもイギリスとの同盟がまだできるなら、国民の士氣をたかめ、外交上の立場は有利になる。より確実であり、より安全だと思う。どうしても日英同盟でゆこう。……

——そう考えた政治家たち、外交官たち、軍人たちの方針が効を奏して、一九〇一年の夏から話はグングン進み、伊藤たちのロシア妥協説をきわどいところでおさえこみ、一九〇二年一月、日英同盟は成立した。それは、第一条、極東、すなわちチヨースン、シナの平和のために両国が同盟を結ぶ。第二条は、日本もイギリスも、シナとチヨースンの独立を保障する。第三条は、従来の差別待遇をなくして、シナ、チヨースンの貿易は、両国ともに權利を同じくする。第四条は、もしも日本に対して第三国が戦争をしかける場合は、イギリスは中立を守って、日本のために不利にならぬようにする。第五条は、日本が第三国と戦争をする場合、他国、たとえばフランスやドイツが第三国に合体して、日本を敵にまわす場合には、イギリスが立って、第三国とその加担国を武力でたたくと約束する。……

世界一の富力和武力を持つイギリス帝国とこういう同盟ができたことは、日本の立場からいえば、特定の一国を相手どって、専心戦いうる態勢が実現したことを意味する。

もちろん各国とも腹の中は複雑である。イギリスの腹づもりでは、この同盟の結果日露戦争がおこるとしても、それだけではイギリスはすぐに戦争に参加せねばならぬ義務はない。イギリスにとってこわいのは、フランスの出兵である。ロシアとフランスの同盟がある以上、日露戦争と

ど、かれは日本の実力を知りぬいている。この成り上りの小日本を大イギリス帝国が相手にして、同盟を結ぶなどとは考えられない。ありえないものを夢みたところで仕方がない。大体そういうのが二人の本心だったろう。

一方ロシア事情に精通する外交官や軍人たちは、ロシアをご都合主義の国とみた。自分が有利になるためには、約束もするが、都合が悪くなれば、何もかもけとばしてしまふ。ロシアの国策を、現実の歴史に即して調べてみると、フィンランドの次にはスエーデン戦争をおこした。ポーランドも割取した。ロシアはいつも土地をまきあげる。シベリアのような不毛な土地でさえうばいとった。満州から蒙古にいたる線まですでにわがものにしてしまった。この侵略癖は、あの国の根性というか、国柄というか、とにかく油断はできない。

それに対して英人はせちがらく、自己本位で、自分の利益にならなければ、鼻もひっかけない。しかし、約束したことは実行する。国と国との関係でも、*give and take* である。ずるいけれど、確実だ。イギリス自体は、必ずしも土地を欲しがらない。むしろ実際の権力を手中におさめて、うらからその国を意のままにあやつる。イギリス人は利という点では、ものわかりが良い。俺の利はこれ、お前の利はそれと共通点さえ見出せば、イギリスとは仲良くできる。与えるに利をもつてし、イギリスの利を犯さず、わが利を求める時は、「妥協」が成立する。……

一八九九年の秋から、イギリスは南アフリカ戦争にまきこまれたため、東洋に全力を挙げて立ちむかうことができなかった。その時、ロシアは南下政策を実現し、シナの抵抗を押し切り、チヨースンをまるめこみ、日本を圧倒しようとするやり方を露骨に出してきた。イギリスは、ロシ

ある。その日露間の決裂の経路を、前に公にした拙文の一節を借りて、筆者はこれから略記したい。

*

幕末から明治にかけて、日本の国策は富国強兵の一本槍だった。勝海舟が苦勞し、西郷隆盛がそのため城山で戦死し、大久保利通が暗殺される事態を生みながら、シナ戦争の終るまで日本の願いは、国力をつちかい、外圧に抵抗して、何とかして国家の経営をはかるということに集中していた。シナ戦争以降は、チョーセンとシナの独立と安泰とをはからなければ、日本の位置は危くなると考えて、それを国防の根幹においた。このとき、日本を脅かす実勢力は、海の彼方から津波のようにおしよせてくるアングロ・サクソンの経済力と、武力で土地をかすめとりながら一路南へ押し出してくるロシアの軍事力である。この二つはいつも日本を夢魔のようにおびやかしていた。

これに対する日本の国策は二つしかない。ひとつはロシアと和睦して、イギリスと対抗すること。他のひとつは、イギリスと合体して、うしろをかためながら、ロシアの出足をくじくこと。国内の有力な政治家たちのうち、伊藤博文と井上馨は前策にかたむいていた。――シナ戦争で勝利は占めたけれど、日本の国力もひどくいたんだ。旧に復するには、相当の歳月がかかる。その間は戦争はおこしたくない。それにはロシアと妥協して、ロシアの要求も多少は容れる。しかし、ことチョーセンに関しては、日本の要求をのんでもらう。そうしてしばらく時をかせいでいるうちに、また出方もあるだろう。イギリスは世界の大帝国で、海上武力と富力は世界一だけ

いた当年の日本の若いエリートたちは、当時の花形である軍事方面に群を成して赴いた。またその網の目をもれた少数のエリートは、日の目のあたらぬ世界で、独自の新しい文芸の花をほそぼそと開かせた。日本を代表する精神は、軍事と文芸と——その両面に異様な光芒を放った。これをきわめみることは、近代日本を知るのに絶対必要な仕事である。この作者がこの大作のために十年苦勞したのは、ある意味で当然であつた。

もちろん明治の日本は生き物である。しかしその生き物はそれだけで独自に存在し、生きられえた生命体ではない。周囲からこれを取りかこんで、時にはこれを誘導し、時には圧迫を加え、たえず強力な外圧を加える諸国家の群があつた。新しく目ざめて独自の針路を打ち出そうとする明治日本は、それらのものの方向をさぐり、たえずそれに対する具体策を打ちたてねばならぬ。

諸外国もまた生き物である。生き物と生き物とはそれぞれ独得の利害關係を持つてゐるから、しかるべく適応していかなければならない。日本内のどの分野の活動も国内のしきたりと必要から行なわれてはいたが、いつも關係のある外国との適切な調節をもつように配慮せぬわけにはゆかない。この作用はいつも一つの国家が生きぬくためには、絶対に要求されるもので、その調節を一步誤ると、摩擦を生じ、衝突しあい、恐るべき破局をさえ生む。それが戦争というものの実体である。どんな国の歴史にもそれは大きな意味を持つてとりあつかわれている。

戦後の日本のある風潮から、文筆の人の一部は、国民の精神がもつとも生き生きとそこにみとられる戦争をとりあつかうことを忌み嫌う。この作者はそうした風潮をしりめにかけて、敢然とこの大問題ととりくんだ。近代の日本研究にはどうしても無視することのできない現象だからで

解 説

島 田 謹 二

『坂の上の雲』は、その目標とする理想世界と、それにこめた作者のエネルギーと、その抱負の実現された成績と、さらに公刊された後、広く日本人一般の目をひらいて、新しい知見で感動させた点で、この作者の代表作のひとつである。

*

この作品は、昭和四十三年四月二十二日から四十七年八月四日まで、足かけ五年にわたって「サンケイ新聞」の夕刊に連載された。しかし、その前の準備の調査と読書と思索とに作者は五年余りの歳月をあてているから、かれは十年にわたる労苦をなめている。「サンケイ」に連載のころ、筆者ははじめから一日ももらさずに熟読し、玩味した。ある時は面白いと思つてくり返し、ある時は意想外な解釈に案を打って同感し、ある時はこの作者独得の筆力に驚嘆した。そのころの感動を思い起しながら、改めてこのたび原本六冊を一氣に通読し終えて、いろいろ合点する節があつた。それをこれから書きつらねてみよう。

*

明治の国家体制が新しく作られた時、長いこと資源乏しく貧しいがおだやかな生活に甘んじて

る。

「坂の上の雲」を書くについては、海軍のほうは諸權威の教えをずいぶん乞うた。陸軍については自分なりにやってみて、ほぼ誤りはなかったとひそかに自負しているつもりだが、やはり時を経ると、脆弱な部分に気づきはじめた。この「首山堡」における落合豊三郎の評価がそれである。

その契機になったのは、かれの著の「孫子例解」（大正六年刊）だった。ごく最近これを読み、まず文章の明晰さにおどろき、次いで内容のなかでごくわずかながら日露戦争の実例に触れているところがあって、その批評者としての態度に強靱な背骨がすわっていることを感じた。読後に得たあたらしい印象によってもう一度首山堡のくだりをふりかえてみると、事態の凹凸がよく見えてきて、これは改訂せねばならないと思った。が、全集のその巻がすでに進行していたため大幅には出来ず、改訂は今後の宿題にするとして、とりあえずこの月報で、そのことに触れておくことにした。

昭和四十八年十一月二十一日

した。奥・落合は、用心ぶかったといっている。奥軍では、このための軍命令を隷下に発したところ、その十分後に、総司令部から「スミヤカニ首山堡ヲ攻略スベシ」という旨の命令がきてしまったことになる。このため、前令を改め、あわてて総司令部の命令どおりにせざるをえなかった。要するに首山堡攻撃にともなう攻撃側の惨戦の責任は、総司令部の松川がとるべきもので、奥軍の落合がとるべきものでない。

遼陽会戦においては火力、兵力においてロシア軍が優越している上に、日本軍からみればどれが主抵抗線なのかわからず、その上情報が錯綜し、真偽をとりまぜたそれらを各級司令部は分秒のうちに判断してゆかねばならず、さらに判断を下した直後に、それに逆らう電話が前線からかってくる上に、焦燥、不眠、疲労という条件がかさなってゆくため、高等司令部においても平常の心理がどの程度保たれていたかわからない。

そういう背景でもって、総司令部と軍司令部のあいだに、ずいぶん感情問題があったらしい。谷寿夫著「機密日露戦史」によると、総司令部の松川は、奥軍の落合の慎重さがたえず氣にいらず、「首山堡」の直前において相当感情的になっているような印象がある。

「第二軍参謀長が首山堡の防衛工事堅固なる理由をもつて慎重なるは最も不可なり」

と、メモに書いている。さらに「機密日露戦史」によれば、総司令部の松川は上席の井口少将と相談し、落合を大本营将官参謀という閑職に転じさせることの腹案を決め、その上で奥軍に対し、首山堡を奪れ、と命令したという。何か、心理的情景として、常軌でないものを感じさせ

遼陽会戦における首山堡攻撃については、昭和期に入っても陸軍大学校では論議の多い教材だったらしい。

私は「公刊日露戦史」というあのぼう大なものを昭和二十九年だったか、道頓堀の古本屋のタナのいちばん高い段でホコリをかぶっていたのを買って以来、首山堡のくだりが理解できなくてこまった。参謀本部が、戦後まもなく編纂しはじめただけに、おそらく記述すれば迷惑する現存者が多かったため、重要な二三の要素を抜いてしまっているからに相違ないと思ったりした。

そういう先人主が私にあったために、首山堡のくだりを書くとき、公刊戦史のその項の記述を読むことに丹念さを欠いたきらいがある。

攻撃事前における首山堡の敵状については、搜索にあたっている秋山好古の支隊からしきりに報告がとどいていた。報告さきは奥軍司令部だが、総司令部にもとどいていたはずであった。それを黙殺したのは落合でなく、松川だった。秋山の報告によれば、「敵の重砲兵の如きもの首山にあり」とか、「首山の後方に多数の天幕あり」とか、「三塊石西方高地より首山にわたり防御工事を施しつつあり」とかいっただぐあいだ、これを事実であるとすれば（事実だったのだが）ロシア軍はあきらかに固い防御線を布こうとしていることがわかる。首山堡に攻撃の重点をむけることはやめるべきなのである。

奥軍の落合参謀長は、秋山らの報告その他を総合して、首山堡の敵状をさらに明らかにした上でとりかかるとにし、とりあえずの行動として、全軍をもって小沙河の線を占領しておこうと

撃の重点をかけなければならない。弱点を見つけ出すためには精粗無数の情報を作戦者はあつめ、その無数のなかからたった一枚だけのカードを見つけ出さねばならないが、遼陽会戦において、日本軍の作戦者が「首山堡^{しゅざんぽう}」というカードをとりあげたのは、重大なミスだった。首山堡は当初弱点にみえたが、実際にはもともと強固な陣地だったのである。このため、日本兵の屍山血河が現実するという凄惨な状況になった。

首山堡というこのカードをたれが引いたのかということについて、筆者は当然、その正面を担当した奥軍の参謀長（少将・落合豊三郎）であるとした。落合が軍参謀長の職にあるということのほかに、その後、他に転出しているということもあり、さらには、敵に対して慎重すぎ、ときに軍行動を鈍重ならしめがちなどころからみておそらくそうだろうと思った。

が、これは筆者の誤りだった。

落合はむしろ慎重で、慎重すぎるほどだったのだが、落合の頭上から首山堡を攻撃せよ、という指示や命令がきていたのである。

首山堡という不良カードをひいたのは、総司令部の作戦主任松川敏胤^{としたね}だった。総司令部というのは、原則として、正面を担当している軍に攻撃の重点の選択をまかせるべきであるのだが、この場合、どういう事情からか、お節介をした。むろん、松川としては指示は総参謀長兒玉源太郎の名前でもってし、命令は大山総司令官の名をもってした。

どうやら、それが真相らしい。

付・首山堡と落合

「坂の上の雲」という作品は、ぼう大な事実関係の累積のなかで書かねばならないため、ずいぶん疲れた。本来からいえば、事実というのは、作家にとってその真実に到着するための刺戟剤であるにすぎないのだが、しかし「坂の上の雲」にかぎってはそうではなく、事実関係に誤りがあるとはどうにもならず、それだけに、ときに泥沼に足をとられてしまったような苦しみを覚えた。

新聞連載であることが、多少は幸いした。連載中に誤りを指摘されることがあれば、本になるときに訂正できたからである。本になってからも、気がついたところは訂正した。全集の形になってからもそれを繰り返しかえした。いずれも軽微な誤りで、その点、安堵していたところ、やがて重大な誤りがあることに気づいた。その訂正を、とりあえずこの月報でしておきたい。

全集第二十五巻「坂の上の雲」第二冊目の「遼陽」（註・文庫版では第四冊）のくだりである。

ロシア軍の長大な陣地を攻撃するにあたって、当然ながらその弱点を見つけ出して、それへ攻

一人者である元技術少佐福井静夫氏によつて教わり、砲術のことは黛治夫氏に教わつた。

正木氏は、海軍とはどういう気分のものであるかということについて、本にすればほとんど三冊分になるかもしれないほどの分量のお手紙を私に書きつづけて下さつた。

河合太郎氏のような「三笠」乗組の生き残りのひとびとからも教示をうけたし、その他、あの海戦に参加した祖父や父からの伝聞をくわしく手紙に書いて送つてくださったひとびとを数えると、ほとんどかぞえきれないほどである。

ともあれ、そのようにしてこの「坂の上の雲」をぶじ書き了えることができた。書き終えてみると、私などの知らなかった異種の文明世界を経めぐつて長い旅をしてきたような、名状しがたい疲労と昂奮が心身に残つた。

昭和四十七年八月

両国の複雑な戦争計算がはじめてただ一つの共通の答えを出した。ロシアが完敗した。

日本海軍も軍令部編纂で官修戦史を出している。海軍の場合は軍艦という大きな戦闘単位が存在として明瞭で、むしろ明瞭すぎるほどであるため、あいまいな記述がしにくく、資料価値は陸軍のそれよりも高いようにおもわれる。しかも当時従軍した海軍軍人の文章なり談話なりが比較的正直に残されているため、陸軍ほどの苦労はすくなかった。

ただ苦の種は私の側にあった。私は海軍のことがわからず、一からそれを知らねばならなかった。英国海軍の伝統とか、海軍的秩序感覚とか、築地に兵学校が開設された早々の事情や状態、あるいはそれに参加した人々とか、帆船時代の海軍戦術とかを知ることからはじめねばならなかった。なぜ海軍士官は両袖に金筋を巻いているのだろうということや、海軍における軍医の位置とかいったような、素朴なことまで気になった。

もっともこまったのは、ネーヴィの気分というものであった。これを肌で知るために、多くのひとびとの援助を乞うた。このことについては私は非常に贅沢な人間関係をもつことができた。

私にとつての欲は、父上が海軍士官として日露戦争に従軍し、ご当人も海軍軍人でしかも戦術教育の機関である海軍大学校を出たという経歴のひとに接したいということであった。そういう人ならば父上の体験が、専門知識の中で十分咀嚼そしやくされて伝わっているはずとおもったのである。その該当者が、正木生虎氏であった。正木氏は私の望みを理解してくださって、山屋太郎氏など多数のひとびとにひきあわせてくださった。軍艦の機械的なことは、こんにち世界の海軍研究の第

ズムが一戦局ごとに日本の勝ちを宣言し、すばやく世界中に宣伝してロンドンの金融街だけでなく、ペテルブルグの宮廷までにそれを信じさせたのである。二十世紀初頭までの戦争としては稀有の現象であるようにおもえる。国際情報が日本をどんどん勝たしめて行つたのである。

ナポレオン戦争においては、これが逆であつた。ロシアに侵入したナポレオン軍は文字どおり破竹の勢いですすんだが、「ロシアは敗けに敗けている」という情報を、英国は流さなかつた。英国を主導国とする多くの国が反ナポレオン側に立ち、ロシアに対し全面的な同情的立場をとつていた。

それからみると、日露戦争におけるロシアは世界中の憎まれ者であつた。というよりタイムズやロイター通信という国際的な情報網をにぎっている英国から憎まれていた。英国の報道機構がしつこく日本の勝利を報じ、その電報が各国の新聞に掲載された。極端に言えば満州の陸戦における行司役はタイムズとロイター通信であつた。それによって国際的な心理や世論がうごかされた。日本が情報操作が上手であつたわけではなかつた。世界中の同情が弱者である日本にかたむいていたし、帝政ロシアの無制限なアジア侵略に重大な危険意識をもつていた。そういう面でのすべてが日本に有利であり、逆にいえば喧嘩というものはそういう諸条件が醸成されている場合でしかしてはならないことをこのことは教えているようでもある。

日露戦争を、政略・戦略・戦術ぐるみの一切合財の規模において、日本をして勝利に締めくくらしめたのは、日本海海戦における日本側の完全以上の勝利によるものであつた。この一戦で、

風景として目に映るようになったからである。

日露戦争は陸戦においては決して勝ってはいなかった。敗けてはいなかったが、押し角力にすぎなかった。たとえばクロバトキン是一九一三年（大正二年）に「満蒙処分論」というロシアの侵略主義国策を積極的に理論化した書物を出したが、かれはその著書のなかで「日露戦争はわずかに前哨戦にすぎなかった」と書いているように、ロシアの伝統的な戦法は、ナポレオン戦争やヒトラーのソ連侵入戦の場合においてもみられるように、一つ土俵に執着せずつぎつぎに土俵を空けては後退してゆき、最後に敵の補給線が伸びきったところではじめて大攻勢に出るのである。満州におけるロシア軍のとった戦法も多分に伝統的なものであった。

日本軍は一局面ごとに勝った。つまり相手の土俵——陣地——を奪った。しかし相手はさほどの損傷もうけずに後退してあたらしい陣地をつくってふたたび対峙するのである。そのくりかえしであった。ところが、一局面ごとに国際世論は、

「日本が勝ち、ロシアが敗けた」

と、世界にむかつて報じた。元来、一戦闘における勝敗の定義は軍事学の立場からいえばひどく定義づけの困難なものである。その定義が幾通りあるかはここではのべないが、すくなくともロシア側はその戦略的立場からみて「これは敗けではない。単に陣地転換をしただけである」といえると言ふことができた。しかしそういう軍事学的な基準よりも、素人の国際ジャーナリ

された。勝利の原因の最大の要因はそのあたりにあるにちがいないが、しかしその戦勝はかならずしも国家の質的部分に良質の結果をもたらさず、たとえば軍部は公的であるべきその戦史をなんの罪悪感もなく私有するという態度を平然ととった。もしこのぼう大な国費を投じて編纂された官修戦史が、国民とその子孫たちへの冷厳な報告書として編まれていたならば、昭和前期の日本の滑稽すぎるほどの神秘的國家観や、あるいはそこから発想されて瀆武^{とくぶ}の行為をくりかえし、結局は日本とアジアに十五年戦争の不幸をもたらしたというようなその後の歴史はいますこし違ったものになっていたにちがいない。

このため、日露戦争における陸戦をしらべるについて、ときにこの作業をやめようかと思うほどに難渋した。ただ右の官修戦史にはすばらしい付録がついていた。各巻ごとと五十枚ずつ、通計五百枚ほどの精密な地図が、戦局の推移が一目でわかるようにして付けられていたのである。内容の記述よりもこの地図を見てゆくほうがはるかにこの戦争が理解できた。編者はあるいは暗にその意図があつて、いちいち変化に対して忠実すぎるほどの地図をつけておいたのかもしれない。

この地図と、敗戦側であるロシア側の記録をつきあわせ、その局面に関するあらゆる資料や雑書のその部分と照合してゆくことによって、一つずつの局面が立体化して見られるようになった。その作業が後半から面白くなったのは、展望がようやくひらけてきて、ある局面と他の局面群の相関関係がすこしずつわかり、それらの因果関係もわかってきて、全体が一個の凹凸のある

に地質調査していた。このため当時まだ農商務省の技師だったこの高名な地理学者が派遣され、大山巖の總司令部付で参謀たちと同じ建物のなかで仕事をしていたのである。旅順包囲中の乃木軍司令部の無能についてのとうとうたる非難の声も總司令部で聞いた。記憶力のいい人だからそれらの作戦批判のことはほとんど覚えていた。小川博士の子息たちが貝塚茂樹博士や湯川秀樹博士らであるが、その当時の總司令部の空気をよく子息たちに話された。その後、第一次世界大戦で日本が青島を占領したときも、小川博士は政府の命令で青島付近の地質調査をされた。そのときに旧知の右の大佐に会われたのである。

その戦争を遂行した陸軍当局が、みずから戦史を編纂するということほどばかげたことはない。たとえば第二次世界大戦が終わったとき、アメリカの国防総省は戦史編纂をみずからやらず、その大仕事を歴史家たちに委嘱した。一つの時代を背景とした国家行動を客観的に見る能力は独立性をもった歴史家たちの機構以外には期待できないのである。また英国の場合は、政府関係のあらゆる文書は三十年を経ると一般に公開するという習慣をもっている。その文書類を基礎に、あらゆる分野の歴史家が自分の研究に役立ててゆく。アメリカもイギリスも、国家的行動に関するあらゆる証拠文書を一機関の私物にせず国民の公有のもの、もしくは後世に対し批判材料としてさらけ出してしまふあたりに、国家が国民のものであるという重大な前提が存在することを感じる。

日本の場合は明治維新によって国民国家の祖型が成立した。その後三十余年後におこなわれた日露戦争は、日本史の過去やその後のいかなる時代にも見られないところの国民戦争として遂行

なぜこういうばかばかしい官修史書が成立したかといえば、論功行賞のためであった。戦後の高級軍人に待っているものは爵位をうけたり昇進したり勲章をもらうことであつたが、そういうことが一方でおこなわれているときに、もう一方で冷厳な歴史書が編まれるはずがない。子爵になつた將軍にはそれらしい功を史書に盛らねばならず、大將や中將に昇進した連中にもそれ相当のことを、筆をまけても書かねばならない。それだけではなく参謀本部の中に設けられた戦史編纂委員会や執筆担当者（すべて参謀出身の軍人）に將軍たちから圧力がかつたという。「おれのことをもっと良く書け」といったふうなもののだが、このため総花式になつた。厳密には総花式にさえならなかつた。総花もまた一種の価値論なのだが、その式でやると現実の問題として戦場における前後左右との釣りあいがとれなくなり、なにも書けなくなる。このため功も罪も書かず、いっさい価値論をやめて時間的事実と兵力の出し入れの物理的事実のみを書くことによつてこの全十巻は作りあげられたらしい。

「そこまで譲歩しても氣に入らなかつた」

と、執筆責任者のある大佐が言い、このためかれは編纂が終わると青島チタオの守備隊司令官という閑職に追いやられたというのである。

「自分のかの日露戦史を書かされたことで、軍人としての生命がおわつた」

と、この人物はそのことをこぼしては酒ばかり飲んでほごなく予備役に編入されてしまった。

この大佐が青島で配所の月をながめて鬱々としていた光景の目撃者は小川琢治たくじ博士であつた。小川博士は日露戦争にも地質調査の技師として従軍した。陸軍は戦争を遂行しつつ石炭を得るため

迫感が私にあった。その切迫感が私の四十代のおびただしい時間を費やさせてしまった。

満州における陸軍の作戦は、最初から自分でやってみた。満州への軍隊輸送から戦場におけるその展開、そしてひとつひとつの作戦の価値をきめることを自分ひとりのなかで作業してみるのである。戦術的規模より戦略的規模で見るとしたため、師団以上の高級司令部のうごきや能力を通じて、時間の推移や事態あるいはその軍隊運用の成否を見てゆこうとした。

参謀本部編纂の「明治卅七八年日露戦史」全十巻（大正二年刊）というぼう大な官修戦史がいかに価値うすいものであるかについては第四部のあとがきですこし触れた。極端に言えば時間的経過と算術的数量だけが書かれているだけで、なぜそこにその兵力を出したか、出したことが良かったか悪かったか、悪かったとすればそれを誰がどういう思考基礎と意図もしくは心理でもってやったか、その悪しき影響はどこへどうひびいたかという価値論については毛ほども書かれていないのである。価値論のない歴史などは単なる活字の羅列にすぎず、この明治末年から大正初年にかけて刊行されたあらゆる書物の中で最大の活字量をもつ官修史書をいくら読んでも日露戦争というものの戦史的本質がすこしもわからないというふしぎな書物なのである。明治後日本で発行された最大の愚書であるかもしれない。

私はこの全十巻を昭和三十年ごろ大阪の道頓堀の古本屋で買った。目方で売る紙クズ同然の値段だった。古書籍商人というものは本の内容についてじつによく知っており、値段は正直に内容をあらわすものである。

問われたことがあって、啞然としたことがある。小説の取材ばかりは自分一人でやるしかなく、調べている過程のなかでなにごとかがわかってきたり、考えがまとまったり、さらにもっとも重大なことはその人間なり事態なりを感じたりすることができると、これ以外に自分が書こうとする世界に入りこめる方法がなく、すくなくとも近似値まで迫るのはこれをやってゆくほかにやり方がない。

私はわずかな年数ながら、陸軍の下級士官を体験した。速成教育ながら戦術も教わった。このことは梯子^{はしご}として役に立った。

小説とは要するに人間と人生につき、印刷するに足るだけの何事かを書くというだけのもので、それ以外の文学理論は私にはない。以前から私はそういう簡単明瞭な考え方だけを頼りにしてやってきた。いまひとつ言えば自分が最初の読者になるというだけを考え、自分以外の読者を考えないようにしてしままでやってきた（むろん自分に似た人が世の中には何人かいてきつと読んでくれるという期待感はあるが）。私以外の読者の存在というのは、実感としてわかつているのは家内だけだったし、いままあそういうものだろうと思ってこの作品も書いてきた。

人間と人生について何事かを書けばいいとはいふものの、この作品の場合、成立してわずかに三十余年という新興国家の中での人間と人生であり、それらの人間と人生が、日露戦争という、その終了までは民族的共同主観のなかではあきらかに祖国防衛戦争だった事態の中に存在しているため、戦争そのものを調べねばならなかった。とくに作戦指導という戦争の一側面ではあったが、もしその事に関する私の考え方に誤りがあるとすればこの小説の価値は皆無になるという切

った。執筆期間以前の準備時間が五六年ほどあったから、私の四十代はこの作品の世界を調べたり書いたりすることで消えてしまったといつてよく、書きおえたときに、元來感傷を輕蔑する習慣を自分に課しているつもりでありながら、夜中の数時間ぼう然としてしまった。頭の中の夜の闇が深く深く、その中を蒸氣機關車が黒い無數の貨車の列をひきずりつつ轟々と通りすぎて行つたような感じだった。遠ざかつてゆく最後尾車の赤い灯をいつまでも見ている自分を滑稽にもおもえて、そのことをわざわざここに書くのが面映おもはゆくある。この十年間、なるべく人に会わない生活をした。明治三十年代のロシアのことや日本の陸海軍のことを調べるといふ作業は、前半は苦しくはあったが、後半は何事かが見えてきて、その作業がすこし楽しくなった。いづれにしても友人知己や世間に生活人として欠礼することが多かった。友人というほどではないが古い仲間の何人かが、その欠礼について私に皮肉をいった。これはこたえた。しかしやむをえないじゃないかと私は自分に言いきかせた。

しらべるについて、無數の困難があつた。そのひとつはロシア語だった。私は若いころ一年間ロシア語を習つたが、その実力は辞書がやっと引ける程度にすぎない。そこで、頻出度の高い軍隊用語の単語帳を自分でつくってみた。面倒な文章は、ロシア語のできる友人に大意を口頭で訳してもらつた。みじかい文章がわからなくて、深夜に起きていそうな知人をあれこれ物色して電話をかけたりしてその人を不愉快にさせたりした。

この作品世界の取材方法についてだが、あれはぜんぶ御自分でお調べになるのですか、と人に

という、かれはうれしそうに、「こういう目はメッケル家の特徴だといわれています」と答えた。

かれは大学を出てから会社勤めをせず、あまり収入のない仕事を自分でつくりあげた。日独経済事務所というべき組織で、かれはその専務理事をしている。

「自分の一生の方針はきまっています。日本とドイツのためにつくしたいということです。ただし大伯父のように戦争に関与するのではなく。――」

と、いった。一時代前のアメリカ青年のように陽気であかるく、未来を信じきっているような大らかさがあつた。

「兄さんがおられるんですってね」

という、兄はヒッピーみたいで、と笑つた。いまベルリンで絵を描いたり詩を書いたりして、女の人と同棲しています、といったが、そういう兄をひどく尊敬しているらしく、兄が出版した手書きの本をくれた。活字はつかわれていない。詩が手書きで書かれていて、イラストも付いている。変に気になるような絵で、造本もおもしろく、なにか特異な天分というようなものを感じさせた。もし戦術というものが精密な計算を第一過程としてしかもそれから離れて成立する芸術的直感力の世界であるとすれば、ヤコブ・メッケルの家系にはそういう才能の血が流れているのかもしれない。

この作品は、執筆時間が四年と三カ月かかった。書き終えた日の数日前に私は満四十九歳にな

ある。明治二十九年五月に山県有朋がドイツへ寄り、ポツダムの離宮で皇帝に拝謁したとき、当然メッケルのことが話題になった。メッケルが陸軍を去った直後のことである。「メッケルは惜しい人物であった」と、皇帝がいった、「しかし女性問題があつて罷免ひめんした。残念なことだ」といったという。が、実際には免職の辞令は出ていない。辞令は、第八旅団長に補せらる、というものだった。時期が時期だけに懲罰による左遷という印象が濃く、その点かれの名誉とはいいいがたい。メッケルは赴任せずに辞表を出した。進退のきれいな男であつたと考えていい。

メッケルという、たかだか少将で退役した軍人のことをドイツ人がながく記憶するはずがなかった。ドイツでは忘れられたが、日本で彼についての記憶がのこつた。というより、シーボルトやポンペといった医学者や、アーネスト・サトウという幕末の外交官などと同様、メッケルは日本歴史の中での人になった。

「この本を差しあげます」

といつて青年がくれたのは、なんとメッケルの伝記であつた。メッケルについてはまとまつた伝記書がないときいていたが、ごく最近に出たという。著者は *Georg Keiser* という人である。

メッケルには子がなかったために、弟がその遺品の多くを相続した。弟は建築家であつた。その弟の子が作家になった。その作家の子が私の前にいるアンドレアス・メッケル君であつた。家には日本政府や日本人から贈られた物がたくさんあつて、家宝にしているという。「北斎の絵とか花ビンとか……」と、青年はいった。

「君は目もとが大伯父さんに似ていますね」

な人間でも一定の効果をあげうるというものであった。満州の野で激突した日露兩軍は、その戰略・戰術にそれぞれの民族性が濃厚に出たとはいえ、ドイツ的思考法とフランス的思考法の衝突であつたということが、四捨五入すれば言えるかもしれない。

私は有本総領事に恐縮しつつ、そのような意味のことを簡単にいった。総領事は私のような若輩のために、その要旨をメッケル青年に通じてくださった。

ただメッケルの晩年は、不遇なようであつた。かれは陸軍大学校の教頭から參謀本部次長に進んだが、にわかに少将で陸軍を去り、ベルリンの西郊で隱棲した。かれは独身生活が長く、生涯修道僧のようにして送るのかとおもわれていたが、四十半ばでまずい戀愛をしたことが、かれの属する社会にはよくなかつた。まずい戀愛というのは醜聞として伝わりがちな性質のもので、友人の未亡人との關係であつたらしい。

「メッケルが少将で終わらざるをえなかつたのは、思慮ぶかい大人なら保身のために当然避けるはずの戀愛を、少年のようないぢぢさでやつてしまつたことらしいですね」

と、私はいった。さらに、メッケルという人物は稀世の戰術家でありながら、官界遊泳術の方はずいぶんまづかつたようですね、と笑いながらいうと、青年はユーモリストらしく大笑した。しかし大伯父の名譽のためにすぐさまこう付け加えた。

「ですが、その婦人と隱棲したあと、結婚しています」

つまり日本流でいえば好きな女のために二千石を棒にふつたということであらう。この恋は、^{カイセル}皇帝ウィルヘルム二世の耳にも入つていて、皇帝自身がその人事をおこなつたらしいという説も

「ヤコブは私にとって大伯父にあたります」と、青年がいった。

かれの大伯父のヤコブ・メッケルは明治十八年に日本にきて、数年間滞在した。これよりさき日本の陸軍は明治三年に、「海軍は英式、陸軍は仏式に依る」と定められて以来、フランス陸軍から教師団を招いたりして編制から軍服にいたるまでフランス式にし、極東においてフランスの出店が出現したような観があった。そのフランスが一八七〇年（明治三年）にドイツのためにやぶれて世界の陸軍国であつた座からおりた。

この普仏戦争でのドイツの勝利は、軍制と戦術の勝利であるといわれた。その方式と思考法を日本に導入するためにメッケルを招聘したのである。当時メッケルは老モルトケの愛弟子で、ドイツの参謀本部自体がかれを必要としていたため遠い極東の国へかれを送ることが困難だったし、メッケル自身も気乗り薄だった。しかしモルトケがそれを決断し、メッケルを送った。メッケルの戦術が日露戦争の満州における野戦にどれほどの影響をあたえたか測りしれない。当時、ロシアはフランス式の戦術の影響が濃かった。フランス戦術はナポレオンが創造したもののだが、それを実施するについてはナポレオンという天才によってのみその玄妙さを出しうるものだといわれていた。ナポレオンが去ってその戦術が形骸としてフランスに残った。フランス陸軍のそれを継承したが、形骸の研究だけにひどく算術的で、ある面では学理的であり、凡庸な者がやればほぼ失敗するといわれていた。ドイツ戦術を開発したのはメッケルの師匠である老モルトケであったが、この方式は実際の観念性がほとんどなく、その原理ややり方を理解してしまえば凡庸

あとがき 六

この稿の最後のくだりを書いているところ、私はドイツのデュッセルドルフのホテルで数日泊まっていた。

一泊した翌朝、人が訪ねてきた。私はこの土地で知人といえは小さな日本商社の支配人をして、いるのがあるだけで、彼がきたのかとおもって、いそいでロビーに降りてみると、別人だった。

若いドイツ人だった。私を見ると、旧知のように顔を笑みくずした。かれは日本語を話せなかったが、日本文字の名刺をもっていて、それをくれた。

「アンドレアス・メケル」

とあった。この稿の早い巻に出てくるドイツ陸軍の参謀少佐ヤコブ・メッケルの孫か曾孫に相違ないという予感がして、その旨をいうと、かれの笑顔が急に深くなった。目もとがメッケルの横顔写真にそっくりであった。

そばに有本総領事がおられて、気さくに通訳の労をとってくださいました。

とのいたわりのなかで守られた。かれは海軍をやめて出家しようとし、そのことを部内のひとびとからとめられると、自分の長男の^{ひろし}大に僧になることをたのみ、げんにその長男は無宗派の僧になることによって父親のその希望に^{こた}応えた。この天才は、敵の旗艦スワロフやオスラービアなどが猛炎をあげて沈もうとしているとき、そのことに勝ちを感じずるよりも、明治をささえてつづいてきたなにごとかがこの瞬間において消え去ってゆく光景をその目で見たのかもしれない。

昭和四十七年五月

の構成要素を感じることができると。

私はこの心的情景をいつか書きたいとおもっていた。それが、自分の中でいろいろなかたちにひろがって、おもわぬ書きものになった。

子規の下宿を去ってゆく真之の背中というのは、そしてそのくだりまでは私の心象の中の真之の像が大きいのだが、そのあと真之は海軍という一種の人格性をもった組織の中に入ってしまった。からは小さな粒子にすぎなくなる。陸軍にいる好古においてもおなじ情景である。その粒子になりはてた者たちをえがくには、むしろかれらそのものをとらえるよりも彼等の属した組織を人格的な部分でとらえざるをえず、さらにはかれらを埋没させたその組織がもっとも人格的な側面を過熱させたのは、時期的にはロシアとの対決であった。結局は同心円をえがいているつもりではあっても、その円の中に日露戦争が入らざるをえなくなった。むしろ日露戦争そのものを大円周の中でとらえることによって、同心円の中心をたしかめようとした。

明治十年代から日露戦争にいたる明治のオプティミズムはたしかに特異な歴史をつくりえたが、しかしどの歴史時代の精神も三十年以上はつづきがないように、やがて終熄期をむかえざるをえない。どうやらその終末期は日露戦争の勝利とともにやってきたようであり、蘆花の憂鬱が真之を襲うのもこの時期である。真之の場合は劇的な環境におかれた。日本海海戦において旗艦「三笠」の艦橋上にいたかれが、かれの立案した戦術によって最初の三十分の猛射のあいだに大局を制したとき、敵味方の惨況をみて深刻な衝撃をうけ、この後かれの精神は海軍部内のひとび

もに壮氣がふくらんでゆくことにすこしの滑稽感もいдаかず、その若い晩年において死期をさと
りつつもその残されたみじかい時間のあいだに自分のやるべき仕事の量の多さだけを苦にし、悲
しんだ。客観的にはこれほど不幸な材料を多く背負いこんだ男もすくなかったろうが、しかしこ
の男の樂天主義は自分を不幸であるとはどうしても思えないようであつた。明治というこのオプ
ティミズムの時代にもっとも適合した資質をもっていたのは子規であつたかもしれない。私は
「子規居士」という名をきくだけでも言いようのない痛々しさといとおしみをおぼえるのだが、
このひそかな私の感情は、子規においてときに突きとばされるような感動をおぼえるその底ぬけ
の明るさや稚氣と表裏をなしているようにおもえる。この子規の氣分が子規だけでなく明治三十
年代までつづくこの時代の氣分であるようであり、その氣分は好古にも真之にも通いあい、調べ
ていてときに同一人物ではないかと錯覚する瞬間がある。時代のふしぎさというものであろう。

私は少年のころに子規を知ったところから、真之が子規の下宿へ置き手紙をして去つてゆくとい
う、下宿を去つてゆく真之の背まで見えるようなその別れに、目に痛いほどのおもいをもって明
治の象徴的瞬間を感じた。子規は哲学志望をやめて文学をやるうとした。それへ真之をひきこ
み、ともに文学をやることを盟約した。ところが真之は兄の好古の安い給料にたよつて大学予備
門にかよつてゐるという事情があり、文学という遊民の遊惰の申しわけのたねにすぎないことが
できるような余裕がなかった。真之は好古に叱られ、その強要で授業料のいらぬ海軍兵学校に
転ずるのだが、真之にすればそのことが子規への裏切りになると大まじめにおもひ、「生涯会え
ないかもしれない」というわび状を置いて出てゆくあたりに、明治のオプティミズムのひとつ

成立している。

少年のころの私は子規と蘆花によって明治を遠望した。蘆花によって知った明治の暗さにひきかえ、金銭にも健康にもめぐまれず、癌とおなじく死病とされた結核をわずらい、独身のままで死んだ子規の明治というものが底ぬけにあかるかったのはどういうことであろう。子規は少年期が終わるころ、ゆくすえは太政大臣だじやうだいじんになろうとおもって上京し、大学予備門に入った。しかし在学中に西洋哲学のおもしろさにとりつかれた。明治十年代というのは大学で哲学なら哲学を専攻するということは日本の哲学の草分けになるということであつた。子規はそういう歴史時代であることを知っていた。かれは自分をもつて西洋哲学の源流たらしめようとした。秩序が確立された時代ならば、たとえば「寄生木」の小笠原善平が士官学校に入った時代なら、子規とはほんの十数年遅れてしまっているだけであるのに、すでに歴史はすぎていた。もし小笠原善平の世代の人間がそうおもえば誇大妄想として嗤わらわれるだけのものが、子規の青春期の環境ではそうおもうことのほうがむしろ自然だつた。ただ子規の同級生に、子規がみてとても及ばないという哲学青年がいたために、「あしはかれにはとても及ばない。かれの後塵を拝することがわかりきっているから哲学をやめよう」とおもいなおし、国文学科をえらび、のち日本の短詩型の変革を志し、のちの系譜の源流をなした。

子規のあかるさは、そういうところにあつたであらう。かれは開明期をむかえて上昇しつつある国家を信じ、らくらくと肯定し、自分の壯氣をそういう時代気分の上にのせ、時代の気分とと

オーヴィズムへゆき、キュービズムから抽象画になり、やがて非形象へゆくという発展の系列のなかでのみ画家たちがとらえられるように、明治後の日本の文学史も多分にそのようになっており、蘆花がどの位置におかるべきかが明確でないどころか座席さえあたえられていないかのような観がある。

正岡子規の場合はかれ自身の美学で日本の短詩型の価値観を再編成してその後の系列の大宗になったという事で様式史の位置が明快すぎるほどに明快だが、実際の組織世界においては大宗の位置に虚子きよこがついた。この師承の世界にあつては子規の影は師承の系列が枝わかれしてゆくに つれていよいよ薄くなっている。子規と蘆花の共通点は、かれらにとつて後世であるこんにち、ただ一点だけある。かれらのものが読まれないということである。戦後、文学全集が多く刊行され、もはやたね切れの観さえあるが、それでもなお、子規全集も蘆花全集も出ていないということとはかれらにとつて、あるいはひらきなおった意味での栄光であるかもしれない。

子規の散文は、平明達意な文章日本語を成立せしめたという点でもその価値が大きいが、この使命意識のつよい人物が平然として短命に甘んじたということとは、かれの文学者としての課題以上に人間としての大きな課題をもっている。しかしそれ以外の点では、子規は、たとえば蘆花のような特異な精神体質などはもっていないかった。子規はごくふつうの人であつた。明治期には子規のような一種の人生の達人といった感じの風韻のもちぬしは、どの町内にも村にも、ありふれて存在していたようにおもわれる。江戸期がのこした精神遺産が子規の時代ぐらゐまで継続していたといえるかもしれない、ひるがえつていえば日露戦争期の明治というのはそういうものの上に

終了するまで牢平として軍人社会をしばりあげていたこの秩序が、明治三十年代にすでにできあがっていた。つまり士官学校での成績抜群の者数人をのぞき、あとは陸軍大学校にも入れず、すべて少佐で停年になり、予備役中佐にでもらってこの社会を去る。将官になる見込みのない者に娘をやるということは、軍人社会の上層階級にはまずなかった。この作は全編を通じ、まるで深海の水圧をおもわせるような、どのように尾ひれをあがかせてもこの重秩序から抜けだしようのない暗さにおおわれている。あがけばあがくほど自分の内臓を破裂させるだけであり、げんに主人公は病いを得て陸軍を退き、文学を志し、まずその自伝を書いた。しかしすでに病いを得ており、若くして世を去る。十四、五歳という肉体が成長していく時期に「寄生木」のような作品を読むことはつらかった。自分の人生にも、自分が属している国家という環境にも前途にかがやきを感じなければ少年期の精神の重心が保てないような気がするのだが、この作品はそのころの私に絶望を教えた。

その後、私は「寄生木」を読んでいないし、私の書齋にもない。しかし蘆花への私の気持は、愛情というよりつい音信を怠っている故郷の肉親の叔父に対するような感じであり、蘆花とその全作品への私の心情は絵画でいえば暖色でいろどられており、ただ一点、ひえびえとした寒色の色彩をもつ「寄生木」でさえ暖色の色彩構成のなかにうまく嵌^{はま}って決して不調和ではない。

そのことは、蘆花の死後の不遇についての私のいたわりと無縁ではないかもしれない。ふつう、歴史は様式の変化でとらえられる。絵画史でも文学史でもそうで、前期・後期印象派からフ

狂的に信じつづけることによつてのみ、蘆花はこの重量感からまぬがれうるとおもつた。しかし現実のキリスト教は、たとえばヨーロッパにあつては国家の重量に莊嚴さを加えてきたという現実はある。その重量をゼロにするという作用はしていなかった。しかし蘆花はトルストイを知るにおよんで、蘆花自身が願望しているキリスト教、というよりも切実にいえば国家に父権的重量をあたえしめないという思想にはじめて邂逅し、ついにはヤースナヤ・ポリャーナにトルストイを訪ねてゆくまでにいたるのである。

少年のころの私は、蘆花の「寄生木」^{ヤドリギ}をはじめて読んだとき、読みつづけることが苦痛なほどの暗さを感じた。抜け口の無い洞穴のなかに入りこんでしまつたような感じであり、いまおもえばその暗さは、蘆花が感じつづけていた国家の重苦しさというものかもしれない。この小説は蘆花自身も書いてるように主人公の小笠原善平の自伝が基礎になっており、蘆花がそれに筆を入れたとされている。小笠原善平は岩手県の貧農の秀才で、東京に出てきて乃木希典の家の書生になった。やがて陸軍士官学校に入り、任官して日露戦争に従軍した。主人公はただ貧窮であつたがために軍人になつたが、しかしその性格は軍人に必要な陽性的なものを欠き、つねに懷疑的でとくに軍人社会というものに疑問をもつていた。かれはある高級将校の娘に恋をしたが、その恋はうしなわれた。最初、かれの士官学校での成績がよかったために娘の父はかれに好意をもつていたが、のち成績が落ちると露骨に冷たくなった。軍人の社会はそういうものになりつづけた。その立身は士官学校の序列（成績順）の成績できめられてしまうのである。太平洋戦争が

明治四十四年、幸徳秋水たちがいわゆる大逆事件で死刑の判決をうけたということについては、ここでみじかくふれることは困難である。日露戦争そのものは国民の心情においてはたしかに祖国防衛戦争であつたし、従つて政府は戦意昂揚を国民に強いる必要はなく、その種の政府による宣伝といふことはいっさいなかつたといつていい。自然、反戦主義活動についても比較的寛容であつた。ただ戦勝後、変わった。戦争がその国を変質させる作用は、敗れた側よりも勝つた側のほうに深刻である。戦勝後の日本は国家としての本質がすこしずつ変質しはじめた。檢察側の課題としての幸徳秋水事件は、そういう変質のなかにふくみこまれてゐるもので、近代を開いたはずの明治国家が、近代化のために江戸国家よりもはるかに国民一人々々にとって重い国家をつくらざるをえなかつたという国家的な物理作用はみとめるにしても、戦後はその重量が単なる重量でなくなりはじめたのである。蘆花は、そういう国家の重くるしさに堪えられなかつた。かれは国家が国民に対する檢察機関になつていくことを嫌惡し、第二次桂内閣をつくつた桂太郎に建白書を出したり、「天皇陛下に願ひ奉る」という一文を書き、次いで、第一高等学校における「謀叛論^{むはんろん}」の講演をした。

蘆花の父や兄にとっては、蘆花は心労であつたような氣配である。その意味では、蘆花自身の嫌惡や反撥には反応があつた。しかし国家は蘆花を無視した。蘆花は、父や兄をふくめた国家というものの重苦しさに堪えきれず、それらを超越するものとしての（蘆花は純粹にそう考へて）キリスト教を信じた。それを祈るかぎり、無償のそして無限の愛をあたえてくれるという神を熱

あとがき 五

あとがきとしてほかに書くこともなさそうなので、思いうかぶままのことを雑然と書きならべてみる。

私は少年のころ、父の書架に、正岡子規と徳富蘆花^{うか}の著書またはそれについての著作物が多く、つい読みなじんだ。

この二人はほぼ同時代でありながら文学的資質に共通点を見出すことがむずかしい。また明治国家という父権的重量感のありすぎる国家にも属しつつも、それへの反応はひどくちがっていた。蘆花の父一敬は横井小楠^{しょうなん}の高弟で、肥後実学を通じての国家観が明快であつた人物で、蘆花にとって一敬そのものが明治国家というものの重量感とかさなっているような実感があつたようにおもわれる。蘆花は一敬を憎悪し、一敬が病没したときは葬儀にもゆかなかつただけでなく、赤飯をたいて祝った。また父の代理的存在である兄蘇峰^{そほう}へも、一敬に対する嫌悪^{けんお}と同質のものがあり、しだいに疎隔してゆき、晩年は交通を絶つた。

ある。参謀本部編「日露戦史」十巻は量的にはぼう大な書物である。戦後すぐ委員会が設けられ、大正三年をもつて終了したものだ、それだけのエネルギーをつかったものとしては各巻につけられている多数の地図をのぞいては、ほとんど書物としての価値をもたない。作戦についての価値判断がほとんどなされておらず、それを回避しぬいて平板な平面叙述のみにおわってしまっている。その理由は、戦後の論功行賞にあった。伊地知幸介にさえ男爵をあたえるという戦勝国特有の総花式のそれをやつたため、官修戦史において作戦の当否や価値論評をおこなうわけにゆかなくなつたのである。執筆者はそれでもなお左遷された。かれは青島守備隊の閑職にまわされ、大佐どまりで陸軍をひかされた。

「わしがこのようになったのは、日露戦史を書いたからだ」

と、その人物は青島の配所にいるとき、しばしばぼやいていたという。

これによつて国民は何事も知らされず、むしろ日本が神秘的な強国であるということを教えられるのみであり、小学校教育によつてそのように信じさせられた世代が、やがては昭和陸軍の幹部になり、日露戦争当時の軍人とはまるでちがつた質の人間群というか、ともかく狂暴としか言えないような自己肥大の集団をつくつて昭和日本の運命をとほうもない方角へひきずつてゆくのである。

本稿の海軍のくだりについては、元海軍大佐正木生虎氏と元海軍技術少佐福井静夫氏に用語その他の校訂を乞ひ、懇切な添削をうけた。末尾ながらつつしんで感謝の意を表します。

昭和四十六年三月

「乃木軍司令官の気持がわからない。なぜ状況に一致しない命令を出すのだろうか」

と声を放ったというが、ともかくも乃木軍司令部がやった最大の愚行は、この第一回総攻撃において強襲法をとったということよりも、前線がどうなっているかも知らず、そのあまりにも大きな損害におどろいていつせいに退却せしめたことであつた。

一戸兵衛は、温厚な人物だけに、

「その理由が、あとでわかつた」

と、語っている。ただし、事實は明かさない。明かさなかつたのは、乃木・伊地知の名譽にかかわるからであり、これについてはできれば永久に沈黙しておかねば国民の反撥がどれだけ大きいかわからぬと思つたからであらう。第一線の実情がわからなかつた最大の理由は、軍司令部がぜつたいに砲弾のとどかない後方にあつたからであつた。本来なら軍司令部の位置をすすめて各師団の動きがみられるところへ置き、地下に壕を掘り、上を掩堆でかためればよい。それをせず、軍司令官以下が前線を知らなかつたことがこの稀代の強襲計画を、それなりに完結させることとさえせずにおわらせてしまった。この時期の満州軍総司令部の参謀たちの一致した意見では、

「第一回で奪れていたのだ」

ということであり、それだけに乃木軍司令部への風あたりがつよかつたのである。

この日露戦争の勝利後、日本陸軍はたしかに変質し、別の集団になつたとしか思えないが、その戦後の最初の愚行は、官修の「日露戦史」においてすべて都合のわるいことは隠蔽したこと

砲は市街にむかつての射角はもっていないから、要するに死角にとびこみうるということになる。大庭案がこれを目的としたものである以上、この「事実」を得たという点ではまるっきりの荒唐無稽な案であるともいえない。

その望台というこの大要塞の内ぶところにまで達した部隊は、金沢の第六旅団をひきいる少将一戸兵衛の兵であつた。かれらはその後の戦況からみれば夢のような話だが、八月二十四日の午前二時すぎ望台に達したのである。

が、背後の諸堡壘から猛烈な銃砲火をあびせられたため、一時望台高地の高地脚の下にさがつてかくれ、夜を徹した。

指揮官である一戸兵衛は、旅順陥落後、伊地知にかわつて乃木の参謀長になる人物だが、勇猛な上にすぐれた戦術感覚をもっていた。かれは新鋭な兵力の応援さえあれば望台は奪れるとみた。すでにその兵力として、第十一師団（善通寺）がそばにきている。夜が明け、一戸はなお占领地を保った。かれは午後二時を期し、第十一師団の突撃隊とともに望台の西北高地に突撃するつもりであつた。これは可能であつた。

ところが、乃木軍司令部は、退却を命じてきたのである。一戸は、

「いまにして攻撃を中止すればこれだけの死傷を出したことがすべてむだになる。望台はとれる。第十一師団の応援がえられないとすれば、わが旅団独力をもって攻撃を続行したい」と悲痛な意見具申をしたが、ついに容れられず、占领した拠点をすてて退却した。

一戸兵衛は謙虚で無口な男だが、このときばかりは、

ということ、乃木のもとにやられた者もある。乃木はそれをおとなしく受け入れた。乃木が総司令部参謀たちからすこしの尊敬も受けなかった理由の消極的なもののひとつには、そういう乃木のおとなしさということもあったかもしれない、同時に乃木のそういう点がのちの乃木の人気の核心になって行ったということもいえるかもしれない。

第一回のあのばかばかしい総攻撃（強襲突破）を立案した者は、乃木・伊地知のもとで参謀副長をつとめた大庭二郎であった。かれはこのあと、その責任を問われて後備第二師団参謀長に左遷されたが、しかし結局は長州閥に属していたために大将までのぼった。

「敵の堡塁はとてつよい」

ということを乃木軍司令部が総司令部に報告したのは、この第一回の強襲攻撃法に失敗してからのことである。敵の堡塁の強さを知るだけに一万余の死者を、まったく無意味に出さざるをえなかったというのは、驚嘆すべき消息というほかない。

しかしながらこの大庭案による奇襲・強襲の銃剣突撃法は、こまかく見てゆくとまるつきり無意味な作戦だったとはおもえない。

かれらの先頭の一部は、すさまじい損害ののち、なんと望台にまでたどりついているのである。驚嘆すべき勇敢さというほかない。旅順大要害の無数の堡塁群をすりぬけ、ともかくも望台——旅順市街を見おろす台地——までたどりついたという事実は、事実として存在している。市街へとびこめば、市街地は無防御であり、ステッセルの司令部を占領できたかもしれない。要塞

ながら、第三軍が創設されるとともにその軍司令官にえらばれたことであつた。

かれは、近代要塞の攻撃についての知識も見識もまったくなかつたといつていい。任命後、それについて研究すべく努力したという形跡もない。乃木はただ統帥上の精神だけは用意していた。

かれの最大の不幸は、かれの参謀長として少将伊地知幸介という能力も協調性もひくい人物をあてがわれたことであつた。陸軍の総帥である山県有朋の人事感覚は、軍司令官に一人の長州人もないことを不満として第三軍には乃木をえらんだのだが、そのかわり薩摩閥へのサービスのために伊地知幸介を乃木のコンビにもつて行つたらしい。

作戦が進行しはじめると、乃木軍司令部への悪評が高くなつた。伊地知が諸事我執がしやうのつよい人物であるためその傘下さんかの参謀たちがつい投げやりになり、その軍司令部の荒廃といつていいほどの空気が、総司令部につたわり、総司令部では乃木と伊地知への鬨々ごうごうたる非難がうずまいたが、しかしそれについては総司令部参謀たちは児玉の耳に入れることをはばかつた。児玉が乃木と同郷で、しかも親友であることを知っていたためである。さらには、乃木はべつとして「伊地知を交代させよ」という声がさかんにあがつたが、たれもが総司令官の大山巖の耳に入れることをはばかつた。なぜなら伊地知は大山の親戚だつたからである。

ついでながら、児玉は満州に総司令部を創設するにあたって、井口省吾、松川敏胤といった逸材を参謀本部からひきぬいて行き、無能者をのこした。伊地知は残され、乃木の下につく結果になつたのである。あるいはまた作戦がはじまつてから総司令部で不都合な参謀ができたとき、

「第三軍へやつてしまえ」

かれはその工兵監在任中のことについてみずから語っていったことばに、

「自分ができるだけのことをした。しかし要塞攻撃のための坑道作業の研究と訓練をおこたつた。もしこの工兵作戦を十分に工兵にたたきこんでおいたなら、旅順攻城戦に際してあれほど悲惨な犠牲をはらわずにすんだであろう」

というのがあるが、こういう点においても乃木の不幸の一材料が見出せるかもしれない。要塞攻撃における「正攻法」というのは、砲兵と工兵が主役であった。工兵は坑道を掘ってゆき、敵の堡塁下まで掘ってそれを爆破するのである。

戦後、

——要塞攻撃は正攻法しかない。

という思想が生まれ、明治三十九年十月、小倉練兵場において坑道演習がおこなわれた。熊本、広島、善通寺、小倉の工兵隊をあつめ、小倉工兵隊を防御軍にし、他が攻撃軍になり、双方あな（坑道）を掘ってゆくのである。表面にはほとんど露われない地下戦であった。攻撃軍が十分に爆破予定の地点にまで掘進して爆破をおこなったとき、大地を吹きあげて陽が暗くなるほどに壮観であった。これだけの技術が工兵にあれば、旅順であれほどのむだ死を出さずともすんだかもしれない。乃木希典はこの小倉における演習を見学しているが、かれがこれを見てなんと思つたかについては記録はない。

乃木希典の幸運は、何度も休職になっていっているいわば近代陸軍の中樞から離れていた中將であり

上原以前にも工兵科の伝統はあったが、たいしたものではない。戦国期には黒鉄者くろくわものといわれ、足輕以下の存在であり、維新後ほどもないころは鉄兵しやうへいとよばれた時期もあった。上原は少尉任官後、フランスに留学し、工兵連隊で実地に学んだが、しかし帰国後はかならずしもその道をすすんでいない。好古は閩外人だったからその兵科を練りあげることと専念できたが、上原は薩摩閩の寵児として参謀畑などの華やかなコースをたどったため、工兵科はそのままに捨ておかれた。日本の工兵科が面目を一新するのは、日露開戦の三年前、かれが工兵監に就任してからである。

わずか三年にすぎなかったため、そのやったところは多分に泥縄式であった面がつよい。それでもなお、はじめてかれは工兵のしごとについての諸教範をつくった。明治三十四年には「交通教範」と「架橋教範」、同三十五年には「築營教範」と「野戦築城教範」を出した。が、敵の障碍物を排除して軍隊を通過させる方法や、当時工兵のしごとの範囲内になっていた通信についてのことや鉄道についての内容まで改革できないまま開戦になった。旅順にとつてかんじんなことは、日本工兵は「坑道教範」をもっていなかったことであった。「坑道教範」は、戦後にできた。ともかく、この三年のあいだに日本の工兵は質的にまるでちがったものになった。上原は単にプランメーカーだけでなく、全国の実施部隊をあるきまわり、多少性格異常を感じさせるほどによくそれらを督励した。かれはこの間、「特別工兵演習」というものを集中的にやったが、明治三十五年十月に福島県下矢吹原においておこなわれた第二回特別工兵演習のときなどは、三日三晩の連続工事をやらせ、「日本の工兵が、どれほどの労役に堪えられるかをつかんでおきたいからである」として、作業兵についてに休息を与えなかった。

他の野戦軍以上にうまく行ったのは、田村がひとりで書きあげた「後方勤務令」によるものであった。田村は「後方」が前線の運命を決定することをおもい、ある部下を指名して「後方」の勤務内容、方則、運営法といった「令」をつくるようにと命じていたが、その部下の手にあまるしごとであった。元来、日本の国内戦の歴史で、「後方」というものが存在したのはわずかに秀吉の時期に例外があるが、概して経験がなく、その任務の内容どころか、その任務の概念を感覚としてつかまえることすらばうばくとしているといった傾向があった。田村はやむなく日清戦争の戦訓を点検しつつ「後方勤務令」を書きあげ、それを担当する諸部隊にくばり、そのしごとの原理や運営法などをさだめた。この一冊の書物が日露戦争に間にあわなかったなら、事態はずいぶんちがったものになっていたであらう。

「旅順」というものに運命づけられた乃木希典の運命は、栄光の面ではごく簡単に解明できる。かれが長州閥に属したということである。が、それが容易に陥ちなかったという不幸の面は無数にかぞえられる。日本陸軍において工兵科が十分な発達をとげていなかったこともそのひとつであった。

明治陸軍の工兵科は、近代騎兵科の成立と育成が秋山好古大尉という青年の手にまかされたように、工兵科もよく似た経路をとった。好古の同期生の上原勇作が士官学校に入るときに、上原の郷党（薩摩）の先輩である野津道貫（上原は、野津家の書生をしていた）が、工兵科にゆけ、といって指定したのである。

敵の主力さえ殲滅すれば、遼東半島というしっぱの先端にある旅順要塞などは立ち枯れてしまうというものであった。陸戦をのみ考えればそのとおりかもしれない。

が、海軍が旅順の陸上からの攻撃を要請した。

海軍にすれば、制海権の確立のために旅順艦隊（正称は太平洋艦隊）をことごとく沈めてしまわねばならない。一隻でも残せば満州と日本のあいだの海上輸送がかきみだされ、陸軍の安全が保障されなくなるばかりか、満州の弾薬や食糧の補給もあぶなくなり、戦争そのものが運営できなくなる。要するに対露戦の作戦上の基礎は、旅順艦隊をぜんぶ沈めるところにあった。

ところが、ロシア側の対日戦の作戦上の基礎も同様で、旅順艦隊を温存して本国艦隊（のちのいわゆるバルチック艦隊）を回航させ、日本海軍の倍以上の勢力をもって東郷艦隊を沈め、それによって満州の日本陸軍を孤立させてしまおうというところにあった。このため東郷艦隊が旅順口外にあってしきりに挑発したが、旅順艦隊のほうは方針としてその挑発に乗らなかった。東郷側は、港口の閉塞もやってみたが、これまたうまくゆかず、結局は旅順艦隊をいぶし出すためには内陸のほうから攻めてゆくしかないということになった。

旅順攻撃のみを使命とする第三軍（乃木軍）が編成されたのは、その理由による。田村原案にはなかったものである。

本来田村怡与造から、旅順攻囲軍が恩に着ねばならぬことはすくなくとも一つある。その後方（軍隊用語・戦時において戦線の後方にあって軍隊の給養、衛生、守備などに任ずるしごと）が、

が乃木希典である。

旅順要塞を攻撃しなくてもかまわない。

というのが、参謀本部の原案であつた。この原案は、田村怡与造いよぞうという参謀本部次長がつくつた。田村は日露戦争のために生まれてきたような人で、対露戦の作戰計画をつくることに苦心きん慘さん澹たんし、その心労がかさなつてついに開戦の四カ月前に病没した。

話は雑談めくが、この巻の「黒溝台」の項に、秋山好古のもとへ総司令部から田村守衛という中佐が使いにくる。その守衛の実兄が、怡与造である。山梨県（甲斐国）だったところから「今信玄」などとよばれて、対露戦の計画は、明治三十二年に病没した川上操六の下にいたところからかれが中心になつて練り、桂内閣が開戦へ決意したところに死んだのである。かれの死をきいた桂太郎はすぐさま田村の家へかけつけ、棺をなでて、「ああ、惜しいことをした」といったという話が有名だが、実際の事情もそうであつた。いよいよ開戦ともなればこの田村をして野戦軍司令部の総参謀長たらしめるということは、ゆるがせようのない予定だったのである。

田村がにわかに死んだため、田村よりはるかに先輩の児玉源太郎が、大臣の職をすててみずから格下げし、参謀本部次長になり、やがては満州軍の総参謀長になつた。児玉が、開戦まではほとんど連日にちかい作業で田村案のやりかえをやつたのは、田村案が氣に入らなかつたのではなく、そこに「旅順」という新要素が入つたからである。

田村は、旅順要塞を置きすていきなり満州の野で主力決戦をかさねてゆくというやり方で、

説にならない主題をえらんでしまっている。千数百年、異質の文明体系のなかにいた日本人という一つの民族が、それをすてて、産業革命後のヨーロッパの文明体系へ転換したという世界史上もっとも劇的な運命をみずからえらんだのだが、そういう劇的なことというのは、小説という世界にひきずりこむことはじつにむずかしい。双方、本来、質として無縁かもしれない。

そういう「異なつた文明体系に転換した」というこの民族が、実際には民族の内面の問題までは転換していない。二十世紀後半の多くの新興国家でさえそうであるように、国家能力といった面のみをとりあえず転換したわけであり、その国家能力というのは、この明治期という十九世紀末、二十世紀初頭にあつては各国とも濃厚に軍事のことを指す。不幸なほどに、軍事がその国家や民族の能力または意志を表現する最大の課題になっている。日本人は、転換後、三十余年をへてロシアという世界的な帝国と軍事の強弱をあらそねばならなくなった。

ロシアにとっては単なる侵略政策の延長線上におこつた事変であるという面が濃いが、日本にとっては弱小であるがゆえに存亡を賭けた国民戦争たらざるをえなかった。元老たちは戦争を回避しようとした。いづれにせよ日本は、別な文明体系へ転換してから三十余年後にその能力を世界史の上でテストせざるをえなくなった。それが、日露戦争である。

その日露戦争を接点にして当時の日本人というものの能力を考えてみたいというのがこの作品の主題だが、こういう主題ではやはり小説にはなりにくく、なりにくいまままで小説が進行している。さて、旅順である。

旅順攻撃というのは、日本人にとってきわめて不幸な事件であり、その不幸を象徴しているの

あとがき 四

第四巻を書きおえたあとの感想を、思いつくままに書きならべておきたい。

まず旅順のくだりを書くにあたって、多少、乃木神話の存在がわずらわしかった。それを信奉されているむきからさまざまなことを言ってこられたが、べつに肯綮こうけいにあたるようなこともなかった。沈黙のままでいた。日露戦争後、旅順は地理的呼称をこえて思想的な磁気を帯びたようであり、その磁気はまだ残っている。私はその磁気を消して単に地理的呼称としての旅順をめぐるさまざまな物事を考えてみたわけであり、そのため、いまなお磁場にいるひとびとの機嫌を損じたかもしれないが、やむをえないとおもっている。

乃木希典という人については、私はすでに「殉死」において書いた。この「坂の上の雲」にかれが登場するについては、この作品の主題上、かれの人間について触れることを遠慮した。

この作品は、小説であるかどうか、じつに疑わしい。ひとつは事実拘束されることが百パーセントにちかいからであり、いまひとつは、この作品の書き手——私のことだ——はどうにも小

であつた。この多忙な行政職のなかにあつても、寺内は部下が書いてくる書類をすべて目を通して、もしその書類の文字が罫線からずれているのを発見すると、相手が佐官であろうが将官であろうが、大喝して叱つた。

その寺内が、べつに戦功というようなものはなかったが、大正六年、元帥府に列せられた。元帥とは陸海軍大将のうち「老巧卓抜なる者」がその府に列せられ、終身現役になる。大山巖、東郷平八郎がその例として考えればいいであろう。寺内正毅の元帥というのは明治国家の能力主義の一表現としてみるべきではなく、明治国家の頂点のある部分を占めていた陸軍長州閥の裏面政治の果実として見たほうがよい。寺内は日露戦争の陸軍オーナーとしてどの程度の働きをしたのかについてはわれわれ後人としてはその痕跡をさがすのに苦しまねばならないが、その後の陸軍の人事に閥族主義の遺伝体質を残したという点では山県とともに十分あきらかであり、その意味で近代史のある部分の重要なかぎをにぎった人物であるといえる。この稿であつかった情景の背景には、右のような人物がいたということを、あとがきのかたちで触れてみた。

昭和四十五年五月

「すなわち教科書が無くては、その教育状態がはなだ不秩序になりはせぬかと思う」

というものであった。寺内は、独創よりも不秩序を憎む人であった。

しかし創造力の養成の場である陸軍大学校において、思考統一のための教科書をつくれということそのことが、重大であった。

井口は、職を賭して反対した。

「教科書というものは、人間が作るもので、ところがいったんこれが採用されれば一つの權威になり、そのあとの代々の教官はこれに準拠してそれを踏襲するだけになります。いま教科書がないために教官たちは頭腦のかぎりをつくして教えているわけでありす。すなわち教官の能力如何が学生に影響するために、勢い教官は懸命に研究せねばならぬということになり、このため学生も大いに啓発されてゆくというかたちをとっております。まして戦術の分野にあつては教科書は不要であります。どころか、そのために弊害も多いと思います。しかしそれでもなおこれを作れとおっしゃるのであります。私には教頭をやめさせていただくほかありません」

と井口がいったため、寺内もそれ以上言わなかった。寺内にはべつに定見があつて言つたわけではなく、ただ「不秩序に流れる」というかれの好みでいっただけのことである。そういう寺内が、たとえ戦時でなかったにせよ、参謀本部次長というもつとも能力的な職についていたところ、明治陸軍の要職人事の奇妙さがあつた。

その寺内が、戦時陸軍大臣になった。陸軍大臣は作戦には直接の指揮権はなく、いわば補給役であつた。ぼう大な事務処理をせねばならぬ部署であり、この点は寺内にとってはきわめて適職

は、わが大日本帝国の国辱である」

と、説諭した。この愚にもつかぬ形式論理はその後の帝国陸軍に遺伝相続され、帝国陸軍にあつては伍長にいたるまでこの種の論理を駆使して兵を叱責し、みずからの権威をうちたてる風習ができた。逆に考えれば寺内正毅という器にもっとも適した職は、伍長か軍曹がつとめる内務班長であつたかもしれない。なぜならば、寺内陸相は日露戦争前後の陸軍のオーナーでありながら、陸軍のためになにひとつ創造的な仕事をしなかつたからである。その点については、かれを賞めるために書かれた「元帥寺内伯爵伝」(大正九年発行・元帥寺内伯爵伝記編纂所刊)ですら、やむなく、「伯は創設的人というよりも寧ろ整理的の人であつた」と、須永武義(陸軍中将)のことばをかかげている。

これほど独創性のない人物が、明治三十三年、陸軍参謀本部次長というもつとも創造性を必要とする職についている。山県の長州閥人事によるものであり、日本陸軍が尖鋭能力主義思想をもつていなかったのはこのことでもわかるであろう。かれの参謀本部次長時代、当時陸軍大学の教頭をしていた井口省吾をよびつけ、

「陸軍大学校に教科書がないのははなはだ不都合ではないか」

と、いった。井口省吾は非藩閥人で、戦術家をもつて知られ、のち日露戦争がはじまつて大山巖と児玉源太郎が作戦頭脳を満州の現地に移すにあたり、松川敏胤とともに重要なスタッフとして連れて行つた人物である。

このとき寺内正毅の理由を右のかれの伝記のなかの文章どおりに紹介すると、

う。乃木がみずからを閉じこめたのに対し、寺内は他人を規律のなかに閉じこめようとした。

秋山好古が明治十年、陸軍士官学校に入ったとき、寺内正毅は大尉で、士官学校の生徒隊長であつた。そのころ寺内は士官学校にちかい土手三番町に住んでいたが、かれは当時の定刻に学校から退出しても、そのあと自宅の窓から双眼鏡で校舎をのぞくのが日常の作業になっていた。かれにとっては生徒は規律の中の囚人であり、囚人どもが行儀よく自習しているかどうかをスパイ同然の方法で見張ることが教育であつた。かれは夫人に対しても同様であつた。その夫人が襖ふすまをあけて出入りする動作をじつと見、すこしでも不行儀なふるまいがあると、客の前でも大声で叱つた。徹底した他律者であつた。

かれは西南戦争で右腕に負傷し、このため軍隊指揮官はやったことがなく、教育と軍政畑ばかりにいた。陸軍大臣になつてからなにかの用事で士官学校にやつてきたことがあるが、校門に「陸軍士官学校」と陽刻された金文字の看板が青さびて光沢を失っているのを発見した。重大な発見であつた。かれはすぐ校長の某中將をよびつけ、大いに叱つた。その叱責の論理は規律主義者が好んで用いる形式論理で、

「この文字はおそれ多くも有栖川宮一品親王殿下のお手に成るものである」からはじまる。「しかるをなんぞや、この手入れを怠り、このように錆さびを生ぜしめ、ほとんど文字を識別しかねるまでに放置しているとは。まことに不敬の至りである。さらにひるがえつて思えば本校は日本帝国の士官教育を代表すべき唯一の学校であるにもかかわらず、その扁額へんがくに錆を生ぜしめるとは、ひとり士官学校の不面目ならず、わが帝国陸軍の恥辱であり、帝国陸軍の恥辱であるということ

ところで、陸海軍の首脳についての能力である。

海軍を事実上一人で作ったといつていい山本権兵衛は、徹底した能力主義者であった。かれは藩閥に属しながら藩閥をも否定した。日露戦争の海軍は、山本がつくった第一級の軍艦群とかれの能力人事で旋回したといつていい。

が、長州閥でにぎられていた陸軍は、この点でおなじ民族とはおもえないほどに能力主義からいえば鈍感であった。海軍のオーナーが山本であるとすれば、陸軍のそれは山県有朋にあたるであらう。山県が老齡すぎるとすれば、形式上のオーナーは陸軍大臣の寺内正毅がそれにあたる。「君は重箱のすみをせせるような男だ」

と、同郷の児玉源太郎が寺内をそのようにからかったことがあるが、寺内のこの性癖は全陸軍に知られていた。この点、おなじ長州人の乃木希典に酷似しているが、乃木とのちがいは、乃木は極端な精神主義で、寺内は偏執的なほどの規律好きという点にあり、いずれもリゴリズムという点ではかわりはない。あるいは長州人のいくつかの性格の型にこの種の系列があるのであらう。たれかの言葉に、精神主義と規律主義は無能者にとっての絶好の隠れ蓑である、ということがあるそうだが、寺内と乃木についてこの言葉で評し去ってしまうのは多少酷であらう。かれらは有能無能である以前に長州人であるがために栄進した。時の勢いが、かれらを栄進させた。栄進して将領になった以上、その職責相應の能力發揮が必要であつたが、かれらはその点で欠けていた。欠けている部分について乃木は自閉的になった。みづから精神家たろうとした。乃木は少将に昇進してから人交わりしたように精神家になったのは、そういう自覚があつたからである

あとがき 二三

明治は、日本人のなかに能力主義が復活した時代であった。能力主義という、この狩猟民族だけに必要な価値判定の基準は、日本人の遠祖が騎馬民族であったかどうかはべつにせよ、農耕主体のながい伝統のなかで眠らされてきた。途中、戦国の百年というのが、この遺伝体質をめざめさせた。そのなかでも極端に能力主義をとったのが織田軍団であり、その点の感覚のにぶい国々を征服した。能力主義の挫折は織田信長自身が自分の最期をもって証明したが、しかしかれがやった事業は、秀吉や光秀たちの能力伝説によって江戸期も語りつがれた。江戸期は、能力主義を大勢としては否定した時代で、否定することによって封建制というものは保たれ、日本人たちはふたたび農耕型の精神と生活にもどった。それが三百年近くつづき、明治になる。

明治には非能力主義的な藩閥というものはあったが、しかし藩閥は能力主義的判定のもとにうまく人を使った。明治日本というこの小さな国家は、能力主義でなければ衰滅するという危機感でささえられていた。

んど質を一変させて戦うもので、旅順要塞におけるコンドラチェンコ少将や野戦軍におけるケルレル少将、それに旅順艦隊の二人目の司令長官マカロフのもとではロシア兵は他のロシア兵の数倍のつよさを示し、戦意はまるでちがっていた。この三人の将はいずれも相次いで戦没し、かれらが戦没したあと、その麾下^{きか}の軍は虎が猫になったようなくつきりしたちがいで弱くなった。

要するにロシアはみずからに敗けたところが多く、日本はそのすぐれた計画性と敵軍のそのような事情のためにきわどい勝利をひろいつづけたというのが、日露戦争であらう。

戦後の日本は、この冷厳な相對關係を国民に教えようとせず、国民もそれを知ろうとはしなかった。むしろ勝利を絶対化し、日本軍の神秘的強さを信仰するようになり、その部分において民族的に痴呆化した。日露戦争を境として日本人の国民的理性が大きく後退して狂躁の昭和期に入る。やがて国家と国民が狂いだして太平洋戦争をやつてのけて敗北するのは、日露戦争後わずか四十年のちのことである。敗戦が国民に理性をあたえ、勝利が国民を狂気にするとすれば、長い民族の歴史からみれば、戦争の勝敗などというものはまことに不可思議なものである。

昭和四十四年十月

ンで大攻勢に転じ、一挙に勝つというもので、それは要するに遼陽、沙河、奉天で時をかせぐうちに続々とシベリア鉄道で送られてくる兵力を北滿に充満させ、その大兵力をもって日本軍を撃つということであつた。もしこの大戦略が実施されておれば、当時奉天の時点ではもはや兵力がいちじるしく衰弱していた日本の満州軍は、ハルビン大会戦においておそらく全滅にちかい敗北をしたのではないかとおもわれる。この大敗北の予想と予感、クロバトキンよりもむしろ日本の満州軍の総參謀長の児玉源太郎自身の脳裏を最初から占めつづけていたものであり、敗北はまぎれもなかったであらう。むろん、奉天大会戦のあとに日本海海戦があり、ロシアのバルチック艦隊は海底に消えた。しかし海軍が消滅したとはいえ、ロシア帝国にその決意さえあれば講和をはねつけて満州の野で日本陸軍をつぶすこともできたのである。

しかし、ロシアはそれをやらなかった。ここにロシアの戦争遂行についての基本的な弱さがあり、満州における諸会戦のあとを見てみても、その敗因は日本軍の強さというよりもロシア軍の指揮系統の混乱とか高級指揮官同士の相剋とか、そのようなことがむしろ敗北をみずからまねくようなことになっている。ロシア皇帝をふくめた本国と満州における戦争指導層自身が、日本軍よりもまずみずからに敗けたところがきわめて大きい。むろん、ロシア社会に革命が進行していたということも敗因の一つにかぞえられるが、たとえこの帝国がそういう病患をかかえていたとしても、あれだけの豊富な兵力と器材をうまく運営しさえすれば勝つことは不可能ではなかったのである。兵員に革命思想が浸透していて厭戦気分になっていたということを過大にみる人があるが、それは結果から見すぎる見方であらう。兵員というものはすぐれた指揮官のもとではほと

いつさいする必要がなかったことであつた。

日本政府がやつた対露戦の戦略計画は、ちやうど綱渡りをするような、つまりこの計画といふ一本のロープを踏みはずしては勝つ方法がないといふものであつた。

ロシアという大男の初動動作の鈍重さを利用して、立ちあがりとともに二つ三つなぐりつけて勝利のかたちだけを見せ、大男が本格的な反応を示しはじめる前にアメリカというレフリーにたのみ、あいだへ割って入ってもらつて止戦にもちこむといふものであつた。緒戦ですばやく手を出してなぐりつけられ国際的印象が日本の勝利のようにみえ、戦費調達のための外債もうまくゆく。アメリカも調停する気になる。この点をひとつでも踏みはずせば、日本は敗亡するといふきわどさである。

このきわどさの上に立つて、その大テーマにむかつて陸海軍の戦略も、外交政略もじつに有機的に集約した。そういう計画性の高さと計画の実行と運営の堅実さにおいては、古今東西のどの戦争の例をみても、日露戦争の日本ほどうまくやつた国はないし、むしろ比較を絶してすぐれていたのではないかとおもわれる。

しかし、勝利というのは絶対のものではない。敗者が必要である。ロシア帝国における敗者の条件は、これはまた敗者になるべくしてなつたとさえいえる。極端にいえば、四つに組んでわれとわが身で膝をくずして上をつけたようなところがある。

たとえばクロパトキンが考えていた大戦略は、遼陽での最初の大会戦で勝つことではなかつた。遼陽でも退く。奉天でも退く。ロシア軍の伝統的戦術である退却戦術であり、最後にハルビ

た。

民衆はつねに景気のいいほうでさわぐ。むろん開戦論であった。この開戦への民衆世論を形成したのは朝日新聞などであった。学者もこれに参加した。帝大七博士といわれるひとびとがそれで、七人が一小党をなして政府にはたらきかけた。

「きょうは馬鹿七人がきた」

と、自宅の応接室から出てきて、ぼんやりした顔でつぶやいたのは、この時期の参謀総長大山巖であった。日本の実力からみてできもせぬ対露戦を、何人かの論客がせっつきにきたのである。

首相の桂太郎のもとにも、戸水寛人ほか六人の帝大教授がきてその弱腰を痛論し、「戦略戦術からみてもいま起ちあがらねば戦機を逸します」と、軍事専門家のようなことをいった。

桂太郎という人物はニコボンといわれたほどに調子のいい、調整能力に富んだ男であったが、この博士たちの戦略・戦術論をきいて苦笑し、

「忘れてもらってはこまります。私も軍人なのです」

と、いった。桂はフロック・コートを着た総理大臣で、全体の感じも軍人らしくない男であったが、しかし陸軍大将であった。

日本人は国民的気分のなかで戦争へ傾斜した。これら政府側の避戦論もしくは自重論者が結局は開戦の決議者になり、戦争の運営者になるのだが、かれらにとってやりやすかったのは、国民を戦争に駆りたてるための宣伝は、世論じたいが戦争にむかって奔馬のようになっていたため、

その後の日本の歴史にとって重大である。かれは帰国後、宮内省に対して何度も示唆をあたえ、ついにそれ以前の日本皇室とくらべると格段にちがうところの莊嚴性の高さを、宮内省に演出させることに成功した。私は、いわゆる明治的な天皇絶対制の基礎をつくったのが大久保利通であり、それを憲法によって制度化して、大久保の思惑よりも明朗なかたちにしたのが伊藤博文であり、その明色を暗色にしておもくろしい装飾をほどこしたのが山県だとおもっている。いずれにせよ、山県の帝室美学は、日露戦争前のロシアゆきによって着想された。そのロシアを日本がやぶり、それが近因の一つになってロシア革命がおこり、その華麗な帝室がたおれた。歴史の因果関係というのは、とほうもない意外性にとんでいる。

話が横にそれたが、政治家としての山県にそういう意味においての「思想」があるために、かれの開戦の是非についての計算なり判断に、わずかながらも詩的ファナティズムが入ることは否めまい。山県がいつのまにか開戦論者になっていたのは、そういうかれの性格にもとづくところが大きいであろう。後年の政治家でかれに似た人物をあげると、平沼騏一郎きいちろうであろうか。

この点、伊藤博文はじつにあっけらかんとしていて、日露間の風雲が急になったとき、在野の論客がかれをたずねてきては、開戦論を説いた。それらの一グループに対し、伊藤は、

「私は諸君の名論卓説よりも、大砲の数に相談しているのだ」

と答えた。かれの政治論理の明快さと政治家としての本質がこのあたりに出ている。

日露戦争前、政府はもっぱら避戦的態度であり、自然、政府系の新聞とされる国民新聞や東京日日新聞は自重論であり、これら数種の新聞は経営の危機がつたえられるほどに人気がなかっ

それを父親からうけた。それもおもに思想性のうすい歌学程度のものであったけれども、それでもなお国学的フアナティシズムというものがこの人物にある。

諸事開放的な伊藤とはちがい、かれは暗い工作室の人で、官僚の組織と秩序にほとんど芸術家的（偶然ながらかれにはそのような天分がある）意欲をもち、かといってその機能性を高めるという方向よりも、その莊嚴性を^{いんぎん}増したいという方向にかれの情熱はかたむきがちだった。かれは日露戦争よりずっと前の明治二十九年五月、ロシアのニコライ二世の戴冠式にまねかれ、日本の皇族の随員としてモスクワへ行った。このとき「山県・ロバノフ協商」といわれる朝鮮問題についての協商をむすんだが、そういうことよりも山県有朋にとって大きな収穫は、ロシア宮廷の莊嚴さを見たことである。

「宮廷はあああらねばならん」

と、滯露中、何度もいった。山県は趣味人としては造園史上まれな達人だが、かれはロシアの帝室が、ヨーロッパ史のなかでどういう位置と性格を占めるかということを知的に考えるよりも、美的に直感的にその宮廷美に感動した。なににしても東西の歴史を通じてロシアの帝室ほどの比類ない装飾性——重厚で華麗で宗教的なまでに莊重な——をもった帝室はどこにもないであろう。ロシアには遊牧アジア民族がもっている支配感覚の遺伝があるが、これもその遺伝のひとつなのか、それともギリシャ正教の装飾性の影響なのか、あるいは国内に十数種の異民族をもち、それを支配せねばならぬ必要からうまれたものなのか、そのあたりはよくわからないにしても、山県がこれをみて、「日本の天皇および帝室もこうあらねばならぬ」とおもったところが、

が、松陰はこの伊藤の無思想に不満をもち、やや軽んじた。伊藤は松陰の自分に対する輕蔑を感じていて生涯松陰に対しては山県ほどの好意はもたなかったような気配がある。それはいい。伊藤が一国の政治のかじとりとしてすぐれた業績をのこしたのは、むしろ松陰が重んじたそういう思想性がなかったからによる。

それに連想しておもうのだが、わかいころおなじように四万国艦隊の破壊力を体験した元勲山県有朋は、はじめは伊藤と同様避戦論者であった。しかしやがて開戦論にかたむき、伊藤のような徹底性を欠いていたのは、山県が軍人という戦争稼業の男で、元老になってからでも第一線の功名を夢想するところがあつたほど本来戦争がきらいではなかったという要素のほかに、山県は伊藤とおなじ現実主義者でも、伊藤にくらべてみれば多分に「思想性」があつたことにもよるであらう。思想性とは、おおげさなことばである。しかし物事を現実主義的に判断するにあつて、思想性があることは濃いフィルターをかけて物を見るようなものであり、現実というものの計量をあやまりやすい。ときに計量すら否定し、「たとえ現実はそのとおりあつてもこうあるべきだ」という側にかたむきやすい。芸術にとって日常的に必要なこのフィルターは、政治の場ではときにそれを前進させる刺激剤や発芽剤の役割をはたすことがあつても、ときに政治そのものをほろぼしてしまふ危険性がある。

山県は当初、半分ぐらい避戦論であつた。それが途中で伊藤をおきざりにして開戦論にかわつた。このあたりに、現実家山県の薄いながらもフィルターがある。かれの教養の基礎は国学で、

あとがき 一一

戦争という、このきわめて思想的な課題を、わざわざ純軍事的にみるとして、日露戦争というのは日本にとってやるべからざる戦争であつた。あまりにも冒険的要素がつよく、勝ち目がきわめてすくない、という意味においてである。

当然ながら日本政府の要人のほとんどが戦争回避論者であつた。なかでも元勲の伊藤博文が非戦のための尖鋭的存在だったことは、伊藤という人物がいかに愛国的ファナティズムにまどわされず、いかに政治家として現実主義的思考をくるわさずに生きえたかという点であらためて評価を重くしてやってもいい。伊藤はわかいころ四力国艦隊の長州攻撃を知っただけに先進文明のもつおそるべき破壊力を体で知っており、かれの政治家としての計算力は、つねにそういう物理的感覚の場所をはずさなかつた。だからかれは日露戦争には反対であつた。むろん思想からきたものではなく、本来伊藤は進歩の信仰者という以外にさほどの思想がなかつた。伊藤のわかいころの師匠であつた吉田松陰は思想家であるということにおいてきわめて純度の高い人物であつた。

騎兵集團とたたかい、かろうじて潰滅をまぬがれ、勝利の線上で戦いをもちこたえた。かれらは、天才というほどの者ではなく、前述したようにこの時代のごく平均的な一員としてこの時代人らしくふるまったにすぎない。この兄弟がいなければあるいは日本列島は朝鮮半島をもふくめてロシア領になっていたかもしれないという大げさな想像はできぬことはないが、かれらがいないと、この時代の他の平均的時代人がその席をうずめていたにちがいない。

そういうことを、書く。どれほどの分量のものになるか、いま、予測しにくい。

昭和四十四年三月

い国家のなかで、部分々々の義務と権能をもたされたスタッフたちは世帯が小さいがために思うぞんぶんにはたらしき、そのチームをつよくするというただひとつの目的にむかつてすすみ、その目的をうたがうことすら知らなかった。この時代のあるさは、こういう楽天主義オプティミズムからきているのであろう。

このながい物語は、その日本史上類のない幸福な楽天家たちの物語である。やがてかれらは日露戦争というとほうもない大仕事に無我夢中でくびをつつこんでゆく。最終的には、このつまり百姓国家がもったこつけいなほどに楽天的な連中が、ヨーロッパにおけるもともふるい大国の一つと対決し、どのようにふるまったかということを書こうとおもっている。楽天家たちは、そのような時代人としての体質で、前をのみ見つめながらあるく。のぼってゆく坂の上の青い天にもし一朶いちだの白い雲がかがやいているとすれば、そののみをみつめて坂をのぼってゆくであろう。子規について、ふるくから関心があった。

ある年の夏、かれがうまれた伊予松山のかつての士族町をあるいていたとき、子規と秋山真之が小学校から大学予備門までおなじコースを歩いた仲間であったことに気づき、ただ子規好きのあまりしらべてみる気になった。小説にかくつもりはなかった。調べるにつれて妙な気持ちになった。このふるい城下町にうまれた秋山真之が、日露戦争のおこるにあたって勝利は不可能にちかいたといわれたバルチック艦隊をほろぼすにいたる作戦をたて、それを実施した男であり、その兄の好古は、ただ生活費と授業料が一文もいらないうるだけの理由で軍人の学校に入り、フランスから騎兵戦術を導入し、日本の騎兵をつくりあげ、とうてい勝ち目はないといわれたコサック

いまからおもえばじつにこつけないことに米と絹のほかには主要産業のないこの百姓国家の連中が、ヨーロッパ先進国とおなじ海軍をもとうとしたことである。陸軍も同様である。人口五千ほどの村が一流のプロ野球団をもとうとするようなもので、財政のなりたつはずがない。

が、そのようにしてともかくも近代国家をつくりあげようというのがもととも維新成立の大目であったし、維新後の新国民たちの少年のような希望であった。少年どもは食うものも食わずに三十余年をすごしたが、はた目からみるこの悲惨さを、かれら少年たちはみずからの不幸としたかどうか。

明治は、極端な官僚国家時代である。われわれとすれば二度と経たくない制度だが、その当時の新国民は、それをそれほど厭うていたかどうか、心象のなかに立ち入ればきわめてうたがわしい。社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格をとるために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にもなりえた。そういう資格の取得者は常時少数であるにしても、他の大多数は自分もしくは自分の子はその気にさえなればいつでもなりうるという点で、権利を保留している豊かさがあった。こういう「国家」というひらけた機関のありがたさを、よほどの思想家、知識人もうたがいはしなかった。

しかも一定の資格を取得すれば、国家生長の初段階にあつては重要な部分をまかされる。大げさにいえば神話の神々のような力をもたされて国家のある部分をつくりひろげてゆくことができる。素姓さだかでない庶民のあがりがある。しかも、国家は小さい。

政府も小世帯であり、ここに登場する陸海軍もうそのように小さい。その町工場のように小さ

まで軽く、足尾の鉍毒事件があり女工哀史があり小作爭議がありで、そのような被害意識のなかからみればこれほど暗い時代はないであろう。しかし、被害意識でのみみることが庶民の歴史ではない。明治はよかったという。その時代に世を送った職人や農夫や教師などの多くが、そういつていたのを、私どもは少年のころにきいている。

「降る雪や明治は遠くなりけり」

という、中村草田男の澄みきった色彩世界がもつ明治が、一方にある。

ヨーロッパ的な意味における「国家」が、明治維新で誕生した。日本史上、大化改新という官制上（現実はどうであつたか）の強力な中央集権国家が成立した一時期はあつたが、その後、すぐ日本の自然形態にもどつた。日本の自然形態とは、大小無数の地方政権の寄りあいというかたちである。封建とか、地方分権主義とかよんでもいい。あの維新前における最強の政権であつた徳川政権ですら、徳川將軍家は、実質的には諸侯のなかでの最大の諸侯というだけにすぎず、その諸侯たちの盟主というにすぎなかつた。元禄期の赤穂浪士には浅野侯への忠義はあつても、国家意識などはなかつたのである。

ところが、維新によって日本人ははじめて近代的な「国家」というものをもつた。天皇はその日本の本質から変形されて、あたかもドイツの皇帝であるかのような法制上の性格をもたされた。たれもが、「国民」になつた。不馴れながら「国民」になつた日本人たちは、日本史上の最初の体験者としてその新鮮さに昂揚した。このいたいたしいばかりの昂揚がわからなければ、この段階の歴史はわからない。

あとがき 一

小説という表現形式のたのもしさは、マヨネーズをつくるほどの厳密さもないことである。小説というものは一般に、当人もしくは読み手にとって気に入らない作品がありえても、出来そこないというものはありえない。

そういう、つまり小説がもっている形式や形態の無定義、非定型ということに安心を置いてこのながい作品を書きはじめた。

たえずあたまにおいているばく然とした主題は日本人とはなにかということであり、それも、この作品の登場人物たちがおかれている条件下で考えてみたかったのである。

維新後、日露戦争までという三十余年は、文化史的にも精神史のうえからでも、ながい日本歴史のなかでじつに特異である。

これほど楽天的な時代はない。

むろん、見方によってはそうではない。庶民は重税にあえぎ、国権はあくまで重く民権はあく

「坂の上の雲」はこの文庫版では八冊であるが、単行本としては全六巻として刊行され、それぞれに「あとがき」が付されている。ここでは仮に「あとがき」一六」として掲載した。ちなみに単行本と文庫版の章の区分は以下の通りである。

単行本「第一巻」	——	文庫版第一冊「春や昔」	／	第二冊「威海衛」
単行本「第二巻」	——	文庫版第二冊「須磨の灯」	／	第三冊「開戦へ」
単行本「第三巻」	——	文庫版第三冊「砲火」	／	第四冊「沙河」
単行本「第四巻」	——	文庫版第四冊「旅順総攻撃」	／	第六冊「黒溝台」
単行本「第五巻」	——	文庫版第六冊「黄色い煙突」	／	第七冊「会戦」
単行本「第六巻」	——	文庫版第七冊「退却」	／	第八冊「雨の坂」

また「首山堡と落合」は「司馬遼太郎全集」第二十八巻の月報に執筆されたものである。

あとがき集（付・首山堡と落合）

かれをくるしめた満州の戦野をさまよいつづけているようであった。臨終近くなったとき、「鉄嶺」という地名がしきりに出た。やがて、

「奉天へ。――」

と、うめくように叫び、昭和五年十一月四日午後七時十分に没した。

（坂の上の雲 おわり）

が悪化し、二月四日未明、吐血して臨終をむかえた。臨終のとき枕頭ちんとうにあつまっていたひとびとに、

「みなさんいろいろお世話になりました。これから独りひとでゆきますから」

といった。それが最期のことばだった。兄の好古は検閲のために福島県白河に出張中で、小田原にあつまっているひとびとに「ヨロシクタノム」という電報を打っただけであった。

好古はやや長命した。

かれは大正五年に陸軍大將になり、同十二年に予備役に入った。その翌年故郷の北予中学の校長になり昭和五年満七十一歳で病没する年までその職をつづけ、やがて死の年の四月に辞任して東京へ帰った。老後を養うつもりであつたが、ほどなく発病した。

病名は糖尿病と脱疽だうそである。左足の痛みがはなはだしく、当人は最初は神経痛だろうとおもっていた。入院前、赤坂丹後町の借家にたずねてきた松山の幼友達に、

「もうあしはすることはした。逝いつてもええのじゃ」

といつたりした。

やがて牛込戸山町の陸軍軍医学校に入院し、はじめて酒のない生活に入った。医師たちは左脚を切断することにならずいぶんためらつたが、結果はその手術をおこなつた。しかし菌は切断部よりも上部に侵入していた。手術後四日間ほとんど昏睡こんすいしていたが、同郷の軍人で白川義則よしのりが見舞にきたとき、好古の意識は四十度ちかい高熱のなかにただよっていた。

かれは数日うわごとを言いつづけた。すべて日露戦争当時のことばかりであり、かれの魂魄こんぱくは

石碑が濡れはじめ、真之は墓前を去った。

雨になった。庫裡くらりで古笠ふるがさと古蓑ふるみを借り、供養料を置いて路上へ出た。

道は、飛鳥山あすかやま、川越かわごえへ通ずる旧街道である。雨のなかで緑がはるかに煙り、真之はふと三笠の艦橋からのぞんだあの日の日本海うみの海原うなばらをおもいだした。

秋山真之の生涯も、かならずしも長くはなかった。大正七年二月四日、満五十歳で没した。

日露戦争のあとのかれは海軍部内における穏当な官僚ではなかった。一見、突拍子とつぴょうしもない言動がしばしば人を面くらわせ、一部では一人格に天才と狂人が同居しているのではないかといわれたりした。

——君は頭脳を休める工夫をせよ。

と、真之がかつて仕えた上司の参謀長だった島村速雄がしばしば忠告したが、島村のいう「扇風器のような」頭脳は日本海における作戦の任務がおわってからも他に目的をもとめて旋回し、人類や国家の本質を考えたり、生死についての宗教的命題を考えつづけたりした。すべて官僚には不必要なことばかりであった。

ただ第一次世界大戦がおこったとき、かれは公務でパリへゆき、この大戦の進行と結末についての予想をたて、ことごとく的中させたことぐらいが真之らしい挿話といふべきものであった。

真之は大正六年中将に昇進したが、すでに健康をそこなっていたためそのまま待命になり、その三カ月後に死んだ。かれはたまたま小田原の知人の別荘に泊めてもらっているときに慢性腹膜炎

その死者自作の墓誌は真之の文章感覚からすれば一種ふしぎな文章のようにおもわれたが、しかし子規が主唱しつづけた写生文の極致といったようなものであった。子規居士とは何者ぞということが数行で書かれている。

「正岡常規つねのり又ノ名ハ処之助又ノ名ハ升のぼる又ノ名ハ子規又ノ名ハ瀬祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊予松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼はやた太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日歿ス享年三十〇月給四十円」

真之はこの墓誌を誦誦あんしやうしていた。ここには子規がそのみじかい生涯を費した俳句、短歌のことなどは一字も触れられておらず、ただ自分の名を書き、生国を書き、父の藩名とお役目を書き、母に養われたことを書き、つとめさきを書き、さらに月給の額を書いてしめくくっている。

子規は自分の墓誌を病床で書いた。書きおわったあと、友人の河東銓かわはしがしにそれを送り、これについて以下の手紙を同封している。

「アシヤ自分ガ死ンデモ石碑ナドハイラン主義デ、石碑立テテモ字ナンカ彫ラン主義デ、字ハ彫ツテモ長タラシイコトナド書クノハ大嫌ヒデ、ムシロコンナ石コロヲコロガシテ置キタイノヂヤケレドモ、万一や已ムヲ得ンコトニテ彫ルナラ別紙ノ如キ者デ尽シルト思フテ書イテ見タ、コレヨリ上一字増シテモ余計ヂヤ」

と、子規はその意図をのべている。この墓碑の文体は子規の写生文の模範というより、子規という人間が、江戸末期に完成した武士的教養人の最後のひとであつたことをよくあらわしている。

た。

——いいえ、あれは海軍士官じゃなかったですよ。

と、役僧が断定したのは、その人物が軍服を着ていなかったというだけの理由によるものらしい。

真之はそのあと三キロの道を歩き、田端の大竜寺まで行っている。

田端までゆくと、坂がきつくなる。のぼりきって台地に出ると、あたりに人家はすくなく、はるか北に荒川の川岸が望まれ、上り下りする白帆が空と水に浮かんでまるで広重の絵をみるようであった。

このあたりはケヤキやカヤの老樹が多く、とくに大竜寺の墓地の背後は鬱然としている。「あ、いしが死ねばあの寺に埋めてくれ」と子規みずからがその菩提寺をえらんだこの寺は、本堂がひどく田舎びて十間四方の大きな茅^{かや}ぶきであった。

墓地は本堂のむかつて左横にある。子規の墓はその奥にあった。

「子規居士之墓」

とみかげ石にきざまれた石碑があり、そのあたりの楓^{かえで}がみごとに色づいていた。

真之がこの墓前に立ったとき、まだ真鍮板^{しんちゅうばん}にきざんだ墓誌の碑はできていなかったが、その草稿だけはできていた。子規自身が生前に書いたものであり、子規の死後、真之もそれを見たことがある。

ときいたが、小女は子規の名も知らなかった。真之はだまって団子を食べた。

鶯横丁というのは弓なりにまがっている。板塀がつづき、そのむこうに檜や櫟の太木が風のなかで梢をさわがしている。横丁の道幅は、間ほどで、相変らずこの界限は排水がわるく、黒っぽい道が気味わるいほど湿っていた。

子規の家の前までくると、真之の身動きが急ににぶった。この一間幅の道からすぐ玄關の格子戸がみえる。家のなかに人の気配がした。母親の八重か、妹の律か、どちらかであろう。子規の遺族というのはこの二人しかおらず、病床の子規をまもって子規の生前から三人が寄り添うようにして暮らしてきた。そのひとりが欠けた。

頭上で、梢の鳴る音がした。真之はよほど長いあいだ路傍で立っていたが、やがて歩きはじめ、しだいに足早になった。

律は家の前に人影が立っていることに気づいていた。薄気味わるく思い、母親の八重に告げた。八重が路上に出てみると、真之のうしろ姿だけが見えた。

「あれは淳さん（真之）みたようじゃったが」

と、八重は家のなかにもどって、律にいった。律はおどろいてあとを追ったが、しかしもう姿がなかった。

「淳さんなら軍艦に乗っておいでじゃけん、人ちがいじゃろか」

と、格子戸の前で母親にささやいた。ところがあとでこの母娘は、子規の菩提寺の大竜寺からきた役僧の話で、目のするどい柔術教師のような壮漢が寺に供養料を置いて行ったことを知っ

ひとつの情景がある。

連合艦隊が横浜沖で凱旋の観艦式をおこなったのは、十月二十三日である。その翌々日の朝、真之は暗いうちに家を出た。

途中、根岸の芋坂いもざかとよばれているあたりの茶店でひとやすみした。この朝、

——根岸へゆく。

と言いのこして家を出たのは、子規の家にその母と妹をたずねるつもりだったのだが、朝食をとって来なかったためにこの茶店に立ち寄ったのである。真之は粗末な和服に小倉の袴はかまをはき、烏打帽をかぶっている。一見、神田あたりの夜間塾の教師のようであった。

「めしがあるかな」

と、茶店に入るなり、松山なまりで少女にいったために、返事もらえなかった。この茶店は「藤の木茶屋」とよばれて江戸のころからの老舗しんせなのである。団子を売る茶屋で、めしは売らなかった。その団子のきめのこまかさから羽二重団子とよばれて往還を通るひとびとから親しまれている。

「団子ならありますよ」

と、少女がいった。真之はやむなく団子を一皿注文した。

「鶯横うぐいす丁はすぐそこじゃな」

「半丁ほどむこうです」

「正岡子規という人の家があるが、知っておいでか」

をもっていたようであり、たとえば、

「日本の非力な騎兵が、数倍のミシチェンコ騎兵団をなんとか追いはらってゆくことができたのはおれの功績ではない。日本の騎兵が最初から機関銃を装備していたのに対してむこうが持つていなかったからである。精神力を強調するのあまり火力を無視するという傾向はどうも解せな
ら」

とよくいつていたのは、あるいは一種の乃木批判になるかもしれない。

乃木は身を犠牲にすると言いつつも、台湾総督をつとめたり、晩年は伯爵になり、学習院長になつたりして、貴族の子弟を教育した。

しかし好古は爵位ももらわず、しかも陸軍大将で退役したあとには自分の故郷の松山にもどり、私立の北予中学という無名の中学の校長をつとめた。黙々と六年間つとめ、東京の中学校長会議にも欠かさず出席したりした。従二位勲一等功二級陸軍大将というような極官にのぼった人間が田舎の私立中学の校長をつとめるというのは当時としては考えられぬことであつた。第一、家屋敷ですら東京の家も小さな借家であつたし松山の家はかれの生家の徒士屋敷かちのままで、終生福沢諭吉を尊敬し、その平等思想がすきであつた。好古が死んだとき、その知己たちが、

「最後の武士が死んだ」

といったが、バリで武士道を唱えた乃木よりもあるいは好古のほうがごく自然な武士らしさをもった男だつたかもしれない。

であつたのである。乃木は社会主義についてさほどの知識はなかつた。好古は乃木のために社会主義についての簡単な解説をした。

その解説が、

「平等を愛する主義です」

という簡単なものだつた。身分も平等、収入も平等の世の中にするということです、といふと乃木は大きくうなずき、

「しかし日本の武士道のほうがすぐれている」

と、多少質問の趣旨と食いちがつていゝといえ、ひどく断定的な調子でいつたため、記者のほうに圧倒された様子だつた。

乃木は、いふ。

「武士道というのは身を殺して仁をなすものである。社会主義は平等を愛するといふが、武士道は自分を犠牲にして人を助けるものであるから、社会主義より一段上である」

乃木という人物は、すでに日本でも亡びようとしている武士道の最後の信奉者であつた。この武士道的教養主義者は、近代国家の將軍として必要な軍事知識や国際的な情報感覚に乏しかつたが、江戸期が二百年かかつて作りあげた倫理を蒸溜じようりゅうしてその純粹成分でもつて自分を教育しあげたような人物で、そういう人物が持つ人格的迫力のようなものが、その記者を圧倒してしまつたらしい。

好古は乃木がきらいではなかつた。しかし乃木の旅順要塞に対する攻撃の仕方には無言の批判

の軍隊はロシアとはちがい、国軍であると、好古はよくいった。好古は生涯天皇については多くを語らなかつたが、昭和期において濃厚なかたちで成立する「天皇の軍隊」という憲法上の思想は好古の時代には単に修辭的なもので、多分に国民の軍隊という考え方のほうが濃かつた。

「ナポレオンはフランス史上最初の国民軍をひきいたから強かつたのだ」

と好古はよくいったが、日露戦争における両軍の強弱の差もそこから出ている、と好古は考えていたらしい。好古にすれば日本軍は国民軍であつた。ロシアのように皇帝の極東に対する私的野望のために戦つたのではなく、日本側は祖国防衛戦争のために国民が国家の危機を自覺して銃をとつたために寡兵をもつて大軍を押しかえすことができたのだ、という意味であるようであつた。

社会主義についての好古の理解の度合がどの程度のものであつたかはよくわからない。ただ、こういう話がある。

好古は乃木希典との縁が浅くなかつたが、その最初の出会いはパリにおいてであつた。

乃木は陸軍少将のときに外遊した。ときに三十九歳で、明治二十年のことである。パリへ行き、フランス陸軍省を訪ねたとき、ちょうど留学中だつた好古が通訳した。

そのとき新聞記者が訪ねてきて乃木に会見を申し入れた。乃木は承諾し、好古が通訳した。

その記者の質問が、

「社会主義をどうおもふか」

が清岡にとって多少意外なことだったが、無口で武骨だとおもっていた好古がその方面の知識を豊富にもっていたことである。

「なあに、耳学問だよ」

と、好古はいった。清岡はいよいよ驚き、閣下は社会主義者とおつきあいがあるのですか、と
きくと、ああフランスで知り合ったよ、と好古は答えた。

好古が若いころフランスに留学していたとき、しばしば酒場へ行った。かれのゆきつけの酒場
は社会主義者のあつまる所で、ある日、袖をひかれた。

袖をひいた男が、社会主義者だった。かれは好古にむかって社会主義がいかに正義であるかを
説いた。やがて親しくなると、地下室に案内された。そこでその方面のいろんな連中と会った。

「決して悪いものじゃないよ。いい所もあるよ」

と好古はこのとき清岡にもいったが、かれの晩年共産党の問題がやかましくなったときも「悪
意をもって共産党の問題を考えるようでは何の得るところもない」といったりした。

ロシアが社会主義国になるだろうという好古のかんは、ロシアがその栄光とする陸軍が日本の
ような小国にやぶれたからだという。

「ロシア陸軍は、国民の軍隊ではないからな」

とだけいった。ロシアのその世界最大の陸軍は皇帝ツァーリの私有物であるにすぎない、ということであ
ろう。その軍隊が外国に負けたとき人民の誇りはすこしも傷つかず、皇帝のみが傷つく。皇帝
の権威が失墜し、それによって革命がおこるかもしれない、ということであるらしかった。日本

「自勞自活は天の道、卑しむべきは無為徒食、一夫一婦は人道ぞ」とえんえんとつづいてゆくものであった。

好古が内地に凱旋したのは弟の真之よりもずっと遅く、明治三十九年二月九日であった。そのまま騎兵第一旅団の衛戍地である千葉県習志野の兵舎にはいった。

話は、好古の帰還以前にもどる。

好古が秋山騎兵団の軍隊区分を解き、出征以来直率してきた騎兵第一旅団のみをひきいて戦場を去り、十月二十三日以後、東坨山子という村で凱旋輸送の順序を待っていたころのことである。

身边には参謀も去り、副官だけがのこった。

「清岡よ」

と、ある夜、副官にいった。

「ロシアは社会主義になるだろう」

と予言めかしいことをいった。

どういふわけです、と清岡がきくと、

「理由など、わかるものか。かんじゃ」

と、好古はシナ酒を飲みながらいった。

ただ清岡には社会主義というものがよくわからず、率直にその解説を好古にもとめた。ところ

秋山騎兵団の成立は乃木軍司令部の若い参謀たちの気分をも昂揚させたい。ある参謀が、好古の司令部に電話をかけてきて森岡守成という好古の中佐参謀をよび出し、

「新編製の秋山騎兵団を一度も戦場に用いることなしにこの戦役を了えるのは残念なことだから、一度やってみないか」

と、いった。乃木軍司令部は旅順攻略の当初から司令部軍規がみだれているという定評があったが、ひとつにはこういう気分もそれを物語っているといえるかもしれない。乃木希典まれすけの意見をきくことなくいきなり下部団隊の参謀をけしかけるようなことをいつてくるのである。

攻撃すべき対象は、遼陽窩棚りょうようわほうにおいて強力な陣地を構築してしかも陣地外活動をしきりにやっているミシチェンコ騎兵団であった。

しかしすでにポーツマス条約の成立が確定しているときであった。

「武を漬ひがすものだ」

と、好古は断乎としてはねのけた。

やがて平和条約が批准されて、十月二十一日、かれの秋山騎兵団はその軍隊区分を解いた。

かれは凱旋にあたって兵士たちのために教訓歌のようなものをつくった。この人物は弟とちがつて文才はなかった。しかし弟よりも情じょうにおいてはいかにも江戸期の気分を残しており、その歌というのは「連合艦隊解散ノ辞」のように歴史や国家の前途を論じたものではなく、

「別れに臨んで教へ草、先づ筆とりて概略を」

という、一見おどけたような七五調で、田園や市井しせいにもどってゆく兵士に処世の道をさとし、

いる時期に、兵員の質の低下しつつある満州の戦線にあつては兄の好古はこういう文章を書かざるをえなかった。

好古がこの戦いの最初から献策しつづけてきたのは、かれの構想による日本の騎兵団の体質強化であつた。

まず火力の強化によつて敵のコサック騎兵の優越性に対抗しようという思想だが、そのことは機関銃の装備とか野砲や山砲を騎兵砲として使うということ、ある程度かなえられた。さらにかれは騎兵の特質を生かす道のひとつである集団使用の強化とその集団をさらに大規模ならしめて敵に対する穿貫攻撃力（せんかんせいりき）を増大するということをしつこく献策しつづけた。後年の戦車用兵に相当する思想を好古はすでに思想として騎兵の上に実現しようとしていた。

これがようやく実現をみたのは、休戦の直前である。かれ一人の指揮下に騎兵二十六個中隊が集中的に配属され、その装備火力も日本軍としては精一ぱいの充実をみた。

「秋山騎兵団」

という名称のもとに依然乃木軍の隷下におかれた。すでにのべたように二人の参謀も配置された。これによつて数量的にはなお敵のミシチェンコ騎兵団よりも劣勢ながら、日本における単独行動力をもつた機動兵団が最初に成立したのである。ついでながら戦後はこの思想が衰弱し、昭和十四年のノモンハンにおける敗北後、ふたたび日本軍の一部でこの考え方が成立したが、十分されないままに日本軍そのものが敗滅した。

った場合の教育が施されていなかった。西洋の場合はよく戦って力尽きて捕虜になるというのはあながち不名誉でなく、そのために捕虜としての倫理も確立していた。敵に味方の状況をしゃべるなどということがよくないということをたれでも知っていたが、「日本軍に捕虜はありえない」ということをたてまえとしている日本軍にあつては、いったん捕虜になった場合、敵の訊問にすら答えてしまう者が多い。好古はそのことに大いに迷惑し、

「やむをえず捕虜になつても、敵の訊問に答える義務などはないのだ。それをよく教えよ」

と、部下の各隊長に訓示を出している。その訓示の日付が九月二日であり、日本海海戦がおわつて三カ月も経つたところである。

以下、かれの訓示文を意識する。

「ちかごろわが騎兵団において生死不明者（捕虜）が増加しているのは諸官のよく知っているところである。ここ一、二カ月の統計をみてもその数はじつに十数名にのぼっている。その大多数は状況真にやむをえなかったということもあるだろうが、日本固有の武士道において大いに欠けるところがないでもない。ちかごろわが軍の機密が比較的明瞭に敵に知られてしまっているようである。しかもこれはわが俘虜の自由によるものらしいといいたつては驚かざるをえない。各隊長はこのさいよく部下をいましめよ。万一不幸にして負傷の結果、精神に異状を呈し、真にやむをえず俘虜になつた者があつたとしても、断じてわが状況を告白すべきではない。敵の訊問に答ふるの義務なきことを銘心せしむべし」

以上、最後の一行だけは好古の原文どおりである。真之が決戦と快勝についての名文を書いて

エルトはこれに感動し、全文を翻訳させて自国の陸海軍に配布した。真之の文章は以上の例でもわかるように漢文脈の格調を藉りつつ欧文脈の論理をできるだけとり入れているため翻訳に困難がともなうということではなかった。

満州における陸軍の状況は、海軍のばあいのように勝敗の色彩が明確ではなかった。

すでに連合艦隊が佐世保港に憩い、一方ポーツマスにあっては講和会議が進行中というのに満州の前線では彼我の騎兵斥候の衝突がたえまなく、数騎同士の戦闘では馬格の劣勢な日本騎兵にぶがすくなかった。好古が放った小規模の斥候で帰ってこない例が多かった。全滅した例もあれば、逃げきれず捕虜になる例もすくなくない。捕虜の例は戦いが終末に近づくにつれて多くなつた。

「どうも敵にわが方の配置が知られているらしい」

と、好古はしばしばこぼした。好古は自分ひとりで作戰計画をたて、部隊を指揮した。参謀がいなかった。戦いの末期になつてはじめて総司令部が二人の参謀をつけてくれたが、それでも好古は毎夜夜遅くまで蠟燭で地図を照らしてみずから戦いの設計を考えた。そういうとき、かれが右のようなことをひとりごちた。それを当番兵が耳にしたりした。

騎兵が捕虜になるとこまるのである。その兵科の性質上、兵卒でも味方の配置や状況に通じていることが多く、それを敵に喋らせてしまふらしい。

維新後、日本の国軍にあっては捕虜というものは不名誉なものとされており、自然、捕虜にな

戦時編制である「連合艦隊」が解散したのは十二月二十日で、その解散式は翌日旗艦においておこなわれた。旗艦はこの時期、敷島から朝日になっていた。朝日のまわりには汽艇が密集し、各司令長官、司令官、艦長、司令などがつぎつぎに來艦してきた。やがて解散式がはじまり、東郷は、

「告別の辞」

と、ひくい声で言い、有名な「連合艦隊解散ノ辞」を読み始めたのである。

長文であるため引用をひかえるが、この文章のなかでのちのちまで日本の軍人思想に影響したものをあげると、

「……百発百中の一砲、能く百発一中の敵砲百門に対抗しうるを覺らば、我等軍人は主として武力を形而上に求めざるべからず。……惟ふに武人の一生は連綿不断的の戦争にして、時の平戦に由り其の責務に輕重あるの理なし、事有れば武力を発揮し、事無ければこれを修養し、終始一貫その本分を尽さんのみ。過去の一年有半、かの風濤と戦ひ、寒暑に抗し、屢頑敵と対して生死の間に出入せしこと、もとより容易の業ならざりしも、觀ずればこれまた長期の一大演習にして、これに参加し幾多啓発するを得たる武人の幸福、比するものなし」

以下、東西の戦史の例をひき、最後は以下の一句でむすんでいる。

「神明はただ平素の鍛錬に力め戦はずしてすでに勝てる者に勝利の栄冠を授けると同時に、勝に満足して治平に安ずる者よりただちにこれをうばふ。古人曰く、勝つて兜の緒を締めよ、と」この文章はさまざまな形式で各国語に翻訳されたが、とくに米国大統領のセオドル・ルーズヴ

参謀清河大尉の記憶では、加藤があわただしく幕僚室に入ってきた。このとき清河は真之と一緒に長唄の蓄音器を聴いており、真之はソファに寝ころがっていた。

「秋山さんはむくりと起きあがって」

と、清河の話にある。真之はすぐその場で筆をとり、しばらく筆を噛んで考えている様子だったが、あと一気呵成に書きあげた。それが、「客歳二月月上旬」という文章からはじまる凱旋奏上文である。

「客歳二月月上旬、聯合艦隊カ、大命ヲ奉シテ出征シタル以来、茲ニ一年有半……今日復ヒ和平ノ秋ニ遇ヒ、臣等、犬馬ノ勞ヲ了ヘテ大轟（註・天皇旗）ノ下ニ凱旋スルヲ得タリ。（以下略）」

余談ながら明治期に入つての文章日本語は、日本そのものの国家と社会が一変しただけでなく、外来思想の導入にもなつてはなはだしく混乱した。

その混乱が明治三十年代に入つていくらかの型に整理されてゆくについては規範となるべき天才的な文章を必要とした。漱石も子規もその規範になったひとびとだが、かれらは表現力のある文章語を創るためにほとんど独創的な（江戸期に類例をもとめにくいという意味で）作業をした。

真之の文章も、この時期でのそういう規範の役目をしたというべきであつたらう。かれは報告文においてさかんに造語した。せざるをえなかつたのは文章日本語が共通のものとして確立されていなかったことにもよる。その言いまわしもかれ自身が工夫せざるをえなかつた。そういう意味で、かれの文章がもつとも光彩を放つたのは「連合艦隊解散ノ辞」である。

からはじまっている。

「天佑ト神助ニ由リ、我カ聯合艦隊ハ五月二十七八日、敵ノ第一、第二聯合艦隊ト日本海ニ戦ヒテ、遂ニ殆ト之ヲ撃滅スルコトヲ得タリ」

からはじまり、以後、「初メ敵艦隊ノ南洋ニ出現スルヤ、上命ニ基キ、当隊ハ予メ之ヲ近海ニ迎撃スルノ計画ヲ定メ、朝鮮海峡ニ全力ヲ集中シテ徐ニ敵ノ北上ヲ待ち……」といきなり事実関係に入っている。

これを、ロジエストウエンスキーがその皇帝に上呈した電報の報告文に比較すると、口提督のそれは単に経過を書き、結論もなく、しかも文章の多くは自分の運命について割かれており、自分が負傷したこと、知覚をうしなつたこと、自分が意識不明のあいだに、自分が収容されていた駆逐艦が日本側に降伏したことなどが書かれ、全般の戦況は不得要領にぼやかされ、勝敗についてもふれられていない。報告文においてもロジエストウエンスキーは日本側よりはるかに劣っていた。

この艦隊が東京湾に凱旋したのは十月二十日である。大将旗がかかげられた旗艦敷島はこの日横浜港に入り、水煙をあげて錨を入れた。

その翌々日、東郷は参内しなければならなかった。凱旋の奏上をするためであった。

凱旋の奏上は日清戦争の例では口頭でありこんどもその先例に準るはずと参謀長の加藤友三郎もおもっていたところ、陸軍がすでに文章を作りあげていると知り、加藤はあわてた。東郷が上陸する前日のことである。

予想外に少なかったことをわずかに慰めとしていた。が、戦闘で死んだよりもはるかに多数の間が火薬庫爆発といういわば愚劣な事故で死んだことに、真之は天意のようなものを感じた。あの海戦は天佑にめぐまれすぎた。真之の精神は海戦の幕が閉じてからすこしずつ変化しはじめ、あの無数の幸運を神意としか考えられなくなっていた。というよりも一種の畏怖いふが勝利のあとのかれの精神に尋常でない緊張をあたえはじめていたのだが、この旗艦三笠の沈没おんちようは日本に恩寵をあたえすぎた天が、その差引勘定をせまろうとする予兆のようにもおもわれたのである。

真之が到着した朝、大本営から命令が入った。

旗艦が、敷島に変わった。あれだけ奮戦した三笠はその栄光を受くべき凱旋の日の旗艦ではなくなつたのである。

真之は文章家とされた。

たしかにかれの文章は簡潔でしかも波瀾はとうのなかで砲火の閃々せんせんときらめくような韻律性に富んでおり、さらにはあたらしい観念を短切に表現するための造語力も持っていた。ただかれは文士ではなく、その文章は公文書のかたちで発表されたものであったが、しかし同時代の文章日本語にすくなからぬ影響をあたえた。

かれの書いた文章の特徴は、たとえば連合艦隊司令長官東郷平八郎が海軍軍令部長伊東祐亨へ送った戦闘詳報にもよくあらわれている。われわれはこの文章によって日本海海戦の戦闘経過を的確に知ることができるが、その事実関係で組みあげられたぼう大な報告文の冒頭は一個の結論

すぐさまひつかえし、佐世保鎮守府司令部の玄関に入ってみると、すでに事件直後のさわぎが応しずまったのか、庁舎内の廊下を歩く士官の表情の硬さだけが事件の名残りをのこしている程度だった。

当夜、死者は、三百三十九人であった。

他の半数は半舷上陸していたために危難をまぬがれた。火薬庫が爆発した。が、なぜ爆発したかとなるとよくわからず、推測の手がかりもない。下瀬火薬が貯蔵の条件によってどう変質するかということも、この火薬が開発されてそれが試ためされるだけの十分な時間が経っていないためにつきい不明であった。不平水兵が放火したのではないかという説もあったが、戦勝後でもありました土気の一般的状況からみて考えられなかった。結局は火薬の自然変質による爆発というごく常識的な観測が佐世保の現場での大かたの考え方であるようだった。

「現場をご覧になりますか」

と若い士官が真之にいったが、真之は見るにしのびなかった。かれとともに日本海の海上で戦ってきた三百三十九人の戦友が、敵弾で斃れることなく戦勝後事故で一挙に死んだ。数奇というよりもこの奇怪さが、真之の多分に宗教性を帯びはじめている感情には堪えられなかったのである。

ついにながら日本海海戦における侵入軍——ロシア側——の死者は約五千で、捕虜は六千余人である。防衛軍である日本側の戦死は百数十人にすぎなかった。真之はロシア人があゝの海戦であまりにも多く死んだことについて生涯の心の負担になっていたが、それにひきかえ日本側の死者が

との電報を送っている。たしかにその危険はあった。ロシアの帝政は強大な軍事力をもつことによってのみ存在し、国内の治安を保ってきた、とウィットもいつている。それが崩壊した以上、日露戦争はロシア国家にあたえた衝撃よりもむしろロマノフ王朝そのものを存亡の崖^{がけ}ぶちに追いこんでしまったことになる。

専制ロシアはただ一人の意志のみでうごいている。その一人とは、皇帝であった。ルーズヴェルトが駐露大使マイヤーに対して「拝謁して勸告せよ」とすすめたのはその事情による。

マイヤーはそのとおりにした。六月六日午後二時から一時間にわたって皇帝と膝をつきあわせて話し、その意志を決定するようにすすめた。

皇帝はそれに従った。

日本側はむしろルーズヴェルトに講和調停の旗ふりを頼んでいただけに、異存はなかった。

会場は米国のポーツマスであった。八月十日より両国が正式会談に入り、九月五日講和条約が調印され、九月十三日まで双方の陸軍が休戦地域協定をし、次いで同十八日海軍がそれをおこなった。さらに講和条約は十月十四日に批准された。

東郷とその連合艦隊の大部分は凱旋の命令があるまで佐世保港内にとどまっていた。

そういう待機期間中、珍事がおこった。旗艦三笠が自爆し、六尋^{いっけん}の海底に沈没してしまったのである。九月十一日午前一時すぎの出来ごとであった。

ちょうど東郷は陸路東京へむかいつつあった。真之も随行していた。その急報に接して真之は

戦争がつづいているあいだ第三国から講和を調停する意思表示が非公式ながらも何度かおこなわれたが、ロシア側の態度はそのつど硬かった。奉天での敗報が世界につたわったあとでさえロシア宮廷の空気はたじろぎもみせていない印象だった。

日本海海戦が、人類がなしえたともおもえないほどの記録的勝利を日本があげたとき、ロシア側はじめて戦争を継続する意志をうしなつた。というより、戦うべき手段をうしなつた。

このときロシアに働きかけたのは、米国大統領セオドル・ルーズヴェルトであつた。

かれは日本海海戦におけるロシア艦隊の全滅をまるで自国の勝利であるかのようによこび、その勝利から九日後に駐露大使のマイヤーに訓電し、ロシア皇帝ニコライ二世に直接会つて講和を勧告せよ、と命じた。ルーズヴェルトの友人である金子堅太郎にいわせれば「アメリカはワシントンが合衆国を創立し、リンカーンが奴隷を解放した。いずれも偉大な事業であるが、しかしそれらは国内での事業にすぎない。この合衆国大統領がみずからすすんで国際的な外交関係に手を出したのはアメリカ史上このときが最初である」とし、そのことをルーズヴェルトにもいつた。

「それによつて君は世界的名誉を獲得するだろう」

と、金子はいつた。

ルーズヴェルトより前にドイツ皇帝がニコライ二世に講和を勧告する電報を発しているし、同時にドイツ皇帝はルーズヴェルトに対しても、

「もしこの重大な敗戦の真相がペテルブルグに知れわたれば皇帝^{ツァーリ}の生命もあやういだろう」

対応せねばならなかった。

バルチック艦隊が五月二十七、八日の両日で全滅したにもかかわらず、満州の最前線にいる好古は六月十五日豪雨を衝いて基地を出発し、一兩日のあいだミシチェンコ將軍の騎兵団と激烈な戦闘をまじえ、かろうじてこれを撃退したが、しかし新占領地を保持するほどの兵力がなかったためそれをすてて後方へ撤収した。ミシチェンコはふたたびその地へやってきて根拠地にするという押しつ押しされつの戦況がつづいていた。

その戦場で好古は母親のお貞が病没したという知らせを受けた。真之は佐世保で知った。

——淳、お前もお死に。あしも死にます。

——といって幼いころの真之の腕白に手をやいて本気で短刀をつきつけたこの母親の死の報に接し、真之は佐世保の旅館の一室で終夜号泣した。兄の好古がこの報に接したのは花楊樹という村に駐屯ちゆうとんしていたときだったが、松山の友人の井手政雄にハガキを書き送っている。

「真之ガ働キシ故、号外ヲモチテ亡父ノ処ニ参リ候ナラント存候。コノ端書ノ面白味ヲ知ルモノハ大人ノミニ候」

とある。好古は母のお貞が「淳」という真之の腕白に手を焼いていたことも知っていたし、終生真之をもっとも愛していたことも知っていた。「あの腕白小僧をなんとか成人させたことは無駄ではなかったということを母は日本海の戦闘結果を知ってつくづく思ったことだろう」という意味を、好古は「面白味」という言葉の裏に籠こめているのである。

真之は佐世保において、

——満州はどうか。

という、陸軍の戦況について知ろうとした。東京からきた大本營の作戦関係者のはなしでほぼあらましはわかった。

兄の好古は左翼の乃木軍に属し、北から南下してくるミシチェンコ騎兵団を押しかえし、大小の戦鬪をまじえつつかうじて対峙^{たいじ}の形勢を保持していた。

クロバトキンと交代したロシア軍総司令官リネウイッチ大將は公主嶺の台地に総司令部を置き、

「雨期が終わらば日本軍を殲滅^{せんめつ}すべし」

と、豪語していた。

かれはシベリア鉄道によって送られてくる兵員、資材の補充が攻勢再興の能力を満たすにいたるのは満州にみじかい秋が訪れるころであらうとみていた。

それまでは陣地防御に専念していた。日本側もそれをすすんで覆滅する能力をもっておらず、作戦計画だけは公主嶺決戦とハルビン決戦を目標としてたてられているだけで、有能な下級將校の欠乏と砲彈の不足をおぎなうにはあと一カ年以上を要するという悲惨な実情にあった。

要するに、戦線は日露双方の事情によって膠着^{こうちやく}している。ただわずかにロシア側は得意のコサック騎兵団を放って日本軍の戦線をしきりに刺戟^{しきげき}していた。好古の騎兵団はそれに対しいいち

かれは白い夏衣を着ていた。病床の提督に手をさしのばして握手をし、そのあと、相手に威圧をあたえないようにベッドのそばのイスに腰をおろし、ロジエストウエンスキーの顔をのぞきこむようにしていった。

東郷は無口で知られた男であつたのに、この場合だけはひどく長い言葉をしゃべつた。

東郷の言葉は、通訳の山本大尉が記憶しているところでは以下のものである。

「閣下」

と、東郷はひくい声で語りかけた。

「はるばるロシアの遠いところから回航して来られましたのに、武運は閣下に利あらず、ご奮戦の甲斐なく、非常な重傷を負われました。今日ここでお会い申すことについて心からご同情つまつります。われら武人はもとより祖国のために生命を賭けますが、私怨しえんなどあるべきはずがありません。ねがわくは十二分にご療養くだされ、一日もはやくご全癒くださることを祈ります。なにかご希望のことがございましたらご遠慮なく申し出られよ。できるかぎりのご便宜をはかります」

東郷の誠意が山本から通訳される前にロジエストウエンスキーに通じたらしく、かれは目に涙をにじませ、

「私は閣下のごとき人に敗れたことで、わずかにみずからを慰めます」

と、答えた。かれは戦闘概況をロシア皇帝に伝奏したいがその便宜をはかつてもらえまいかと東郷にたのんだ。東郷にはそれを許可する権限はなかったがすぐさま承諾した。

案内は戸塚環海海軍軍医総監である。この病院の廊下は足がくたびれるほどに長かった。この間、東郷は無言であった。やがて病室に入ると、病床のロジエストウエンスキーがわずかに顔をうごかし、東郷をみた。この両将がたがいに顔を見たのはこの瞬間が最初である。

ロジエストウエンスキーは、かれが演じたあれほど長大な航海の目的地がこの佐世保海軍病院のベッドであつたかのようにしずかに横たわっている。そのことが一種喜劇的ではあつたが、元来、戦争とはそういうものであらう。戦争が遂行されるために消費されるぼう大な人力と生命、さらにそれがために投下される巨大な資本のわりには、その結果が勝敗いずれであるにせよ、一種のむなしさがつきまとう。

「戦争というのは済んでしまえばつまらないものだ。軍人はそのつまらなさに堪えなければならぬ」

という意味のことを、日本の將軍のなかでもっとも勇猛なひとりとされる第一軍司令官黒木為楨が、従軍武官の英国人ハミルトンに言つたというが、この場合のロジエストウエンスキーの役割はその最たるものであつたかもしれない。そのことを、かれの病床に近づいた東郷がたれよりもよく知っていた。

東郷は、相手の役割のつまらなさに深刻な同情をもっており、相手の神経をなくさめるためにのみ自分は存在していると思ひ、そのことを相手にわからせるために彼が身につけているほんのわずかな演技力でもって精一杯にふるまおうとした。

エストウエンスキーを病院にはこぶべく、軍医や看護兵を指揮してこの駆逐艦におもむいたからである。山本は通訳として同行した。

提督の体は担架に移された。コロソ以下幕僚たちが日本の看護兵をはばみ、

——自分たちがかつぐから。

——といって、それぞれが担架にとりついた。

あの戦場で、この提督は戦闘なかばで重傷を負い、鮮明な意識の人ではなくなった。提督はすでに戦士としては一水兵よりも無用の存在になっていたが、幕僚たち二十人はこの無用の人を救うべく旗艦スワロフをすてたのである。この旗艦は二十人のほかすべてが艦と運命を共にし、海底にしずんだ。ロシア艦隊の司令部がとったこの処置について、戦後、日本海軍側は罵倒^{ばとう}せず、いっさい論評を避けた。ただ水野広徳大佐だけがその著書においてこの経緯にふれ、司令部が兵を救わなかったことについて倫理上の攻撃を遠慮しつつも、客観的な態度で一句を挿入している。「嗚呼^{ああ}兵は兇器なるかな！を叫ばざるをえない」という。戦争は悲惨でこれを軽々になすべきではない、という意味である。

提督の体が汽艇におろされたとき、かれの意識がわずかに醒^さめた。山本信次郎がフランス語で東郷の意志を伝えると、提督の肉体は意外なほど活潑で毛布の中から腕をのばし、山本の手をにぎった。山本によればロジエストウエンスキーは涙を流したという。

数日後に、東郷が佐世保海軍病院にロジエストウエンスキーを見舞うことになる。

同行者は秋山真之と山本信次郎のふたりだけであった。

三笠が入港したとき、駆逐艦ベドーウイの負傷者はすべて陸上の佐世保海軍病院に移されていた。セミヨーノフ中佐も雨を避けるために毛布を頭からかぶせられて担架にのせられ、汽艇によつて陸上へ移された。

が、艦長室で臥せているロジェストウエンスキーのみは頭部の重傷のため移動は見合わされていた。参謀長のコロシ大佐はじめ幕僚一同も艦内にとどまっていた。かれらは、自分たちの手で一艦も沈めることができなかった東郷艦隊がぞくぞくと佐世保港にもどってくる光景をベドーウイから見た。

東郷は敵将が重態であることを知つて、見舞うことを遠慮した。

「病衣がよごれているのではないか」

とだけ言い、フランス語のできる例の山本信次郎大尉にそれを持たせ、ベドーウイへゆかせた。

ベドーウイの士官室で、コロシ参謀長らが山本と会つた。コロシは当惑しきつたような表情で、提督は意識もさだかでない、だから会つて頂くわけには参らぬ、といった。隣室は艦長室であつた。そこからうめき声が洩れてきた。山本は、

——武人の情だとおもひ……。

と、この間の心境を語っている。かれは提督に会わず、病衣のみを置いて去つた。

そのあとふたたび山本はベドーウイを訪ねざるをえなかつた。加藤という海軍軍医少監がロジ

るやかに航海している。濃灰色に塗られた艦体は被弾や火災によつてすこしは剥げていたが、しかしそれらの色体の群れは空と海によく映えていた。ただこれら濃灰色の群れが、黒ペンキで塗られた何隻かの軍艦を同行していることが多少開戦前とちがっていた。黒い艦のむれは、ネボガトフの降伏艦隊であつた。

五月三十日の太陽がやや傾くころ、東郷とその艦は佐世保に入港した。

(ベドーウィがいる)

と、上甲板にいた真之がめざとく発見した。ロジェストウエンスキー提督をのせた駆逐艦ベドーウィが、一足さきに佐世保港に入っていた。それを見たとき、真之の感情に異変がおこつた。かれはほんの一、二分のあいだが、涙が目にあふれ、激しく頬をつたつて流れた。この感情の変調は、敵へのいたわりか勝利への安堵といったようなものではなさそうであつた。後年のかれの言動から察して戦いそのものもつ悲惨さに撃たれたといふこともあつたであらう。さらにはかれがのちに信ずるようになった人為以上の意思をこの鉄のむれと水が構成する情景のなかではげしく感じたのかもしれない。

この日、午前中は晴れていたが、午後から雲が厚くなった。佐世保の地形は大小の島と岬と山が内懐ろの深い小湾をつくつていて海港としての自然が長崎をしのぐほどに美しい港であつたが、この午後、凱旋にふさわしくない曇天のために島々や岬の松林が黒っぽく、湾の水が鉛色で、真之の鬱情はいよいよ重いものになった。

小雨さえ降りはじめた。

びきのもとにあがいているポーランド人やトルコ人をよろこばせた。また元来日本びいきである南米のチリーやアルゼンチンのひとびとをよろこばせ、この海戦から半世紀経たこんにちなお、アルゼンチンなどは同国の大使が東京に赴任することに横須賀の記念艦三笠を訪問することがなれば恒例のようになっていくほどである。

撃沈されたロシア軍艦は戦艦が六隻、巡洋艦が四隻、海防艦が一隻、駆逐艦が四隻、仮装巡洋艦が一隻、特務艦が三隻で、捕獲されたものは戦艦二、海防艦二、駆逐艦一、抑留されたもの病院船二。脱走中に沈んだものが巡洋艦一、駆逐艦一で、他の六隻（巡洋艦二、駆逐艦一、特務艦二）はマニラ湾や上海などの中立国の港に逃げこみ、武装解除された。わずかに遁走に成功しえたのはヨットを改造した小巡洋艦一と駆逐艦二、それに運送船一のみにならなかった。

海は凪いだ。

三笠とそれがひきいる第一、第二戦隊は帰路についている。真之はときどき上甲板を散歩した。

海の凪ぎが、かれには変に虚々しくみえた。

戦いの最中、天も動き海も荒れた。敵味方の砲弾が飛びかい、それが空気を切り裂き、瞬時々に真空をつくることによつて異様な音が天に交錯した。落下弾は海をたぎらせ、駆けまわる各艦が狂ったように閃光を吐いた。

そのすべての状況が消え去ってみると、海表情まで一変してうそのように凪ぎ、どの艦もゆ

という疑問を提示した新聞もあった。むしろそれが専門家の常識であり、もし日本側の発表が真実であるならかれらは潜航艇をつかったにちがいないとも一部で論じられた。

もつとも装甲艦が演ずる近代戦の戦術についての著書のあるH・W・ウィルソンという英国の海軍研究家は、日露双方の発表によって事情が明快になったとき、

「なんと偉大な勝利であろう。自分は陸戦においても海戦においても歴史上このように完全な勝利というものをみたことがない」

と書き、さらに、

「この海戦は、白人優勢の時代がすでにおわったことについて歴史上の一新紀元を劃したといふべきである。欧亜という相異なつた人種のあいだに不平等が存在した時代は去つた。将来は白色人種も黄色人種も同一の基盤に立たざるをえなくなるだろう」

とし、この海戦が世界史を変えたことを指摘している。

たしかにこの海戦がアジア人に自信をあたえたことは事実であつたが、しかしアジア人たちは即座には反応しなかつた。中国人も朝鮮人も、また白人の支配下にあるフィリピン人もその他の東南アジアの民族たちも、この海戦の速報については鈍感であり、これによってアジア人であることの自信を即座にもち、ただちに反応を示したというほどまでには民族的自覚が成長していなかつた。

ただヨーロッパにおける一種のアジア的白人国（マジャール人などを先祖とするハンガリー、フィンランドなど）は敏感に反応し、自国の勝利のようにこの勝利を誇つた。さらにはロシア帝国のく

「わが方の損害は水雷艇三隻」

という、信じがたいほどの軽微さで、無傷というにちかかった。

世界の海軍がその世界での唯一最大の模範としてきたトラファルガーの海戦でさえ戦勝軍である英国海軍はその乗員の一刻をうしない、司令長官のネルソンは旗艦ヴィクトリーの艦上で戦死し、さらには敵の仏西連合艦隊三十三隻のうち十一隻をとりにがすという不完全戦勝であった。ところがこの日本海海戦にあつてはまだ詳細をえないとはいへ、ロシア艦隊の主力艦のことごとくは撃沈、自沈、捕獲されるという、当事者たちでさえ信じがたい奇蹟が成立したのである。

いったいこれを勝利というような規定のあいまいな言葉で表現できるだろうか。

相手が、消滅してしまつたのである。極東の海上権を制覇すべくロシア帝国の国力をあげて押しよせてきた大艦隊が、二十七日の日本海の煙霧とともに蒸発したように消えた。

——とうてい信じられない。

という態度を、同盟国である英国の新聞でさえとつた。バルチック艦隊は全滅し、東郷艦隊は水雷艇三隻沈没という報が達したとき、これを冷静に記事にしたのはただ一紙だけで、他の新聞は誤報ではないか、という態度をとつた。

「日本海軍は自己の損害を隠蔽している」

と書いた新聞さえあつた。

——装甲艦が単なる砲戦によってそなたやすく沈むはずがない。

「ドミトリ・ドンスコイ」

と、その正称を入れ、自沈場所に×印をし、日時を記入して顔をあげ、

「どうやら終わりましたな」

と、加藤参謀長にいった。加藤は返事もしなかった。加藤はおよそ劇的表現のきらいな男であり、かれにとってこの世界史上空前の大海戦を運営するにあたっても、まるで銀行員が事務を進行させてゆくようにして進行させた。後日、かれが東京にもどってからこの調子であった。戦勝を祝うために私宅を訪ねてくる客を拒絶し、たまに面接しても、「なんのご用ですか」と、相手を鼻白ませ、とりつく島もない態度をみせた。

そういう無愛想さは真之のほうがもつとひどかった。

「大変な勝利ですよ」

と、各艦から来る入電の整理をしていた参謀の清河大尉がやや昂奮していったときも真之は戦鬪概報を書く筆をとめ、ちよつと清河の顔をみたが、返事もせずにあつた鉛筆を走らせた。このため幕僚室はちよつとした奇人クラブの観があつた。加藤友三郎と秋山真之がそういう調子であるため、他の幕僚たちは大声をあげてはしゃぐわけにもいかず、ぜんたいの空気は病院の手術室のようにしずかだった。

東郷は長官室にいた。かれは入電してくる戦果についてもほとんど無表情で聴いていた。この間、かれはきわだった言動というものをいっさいせず、せいぜい湿った靴下をかわいた靴下にはきかえた程度が、従兵の目撃した記録的な動作であつた。

雨の坂

筆者の机上に、三笠の艦内で真之がのぞきこんでいた海図と同じものであろうとおもわれる古い海図が幾種類がある。

「二十九日天明、鬱陵島において装甲巡洋艦ドンスコイが日本の小艦艇群と奮戦のすえ自沈、残存乗員七百七十余人が上陸、捕虜となる」

と、その海図に書き入れたとき、二十七日以来、日本海の広大な海域を舞台にして争われた二つの帝国の海上戦はその最後の幕をとじた。

ドンスコイの装甲は強力なものであった。日本の小さな巡洋艦や駆逐艦の砲弾は無数にこの艦に集中したが、それらはこの艦の汽罐と舵機を破損させたのみで、装甲帯そのものは小石を投げられた程度といていいほどにびくともしなかった。結局、この艦は二十七日午後二時以来奮戦四十時間という記録をのこし、みずからキングストン弁をひらいて沈没した。

その電報が入ると、真之は海図に、

できるだけの力をもっていた。

艦長のレーベジェフ大佐は、降伏はいっさい念頭になかったらしい。かれは艦首を鬱陵島の方角にむけさせた。島にぶっつけて自沈するつもりであつた。それまでのあいだむらがる日本の群小艦にできるだけ損害をあたえようと決心した。

日本側は、包囲した。第四戦隊の四艦は右方から接し、音羽、新高は左方よりむかい、午後七時十二分、音羽の艦長の有馬良橘が八千メートルを測って射撃を開始させた。

ドンスコイは火災につつまれたが交戦をやめず、夜に入っても戦い、かつ逃げようとし、その間何発かの弾を日本側の各艦に命中させた。驚嘆すべきことにこのロシア軍艦は二十九日の午前七時までなお戦い、ついに力つきて鬱陵島にみずから艦をぶちあてた。艦長は乗員を上陸させたあと、艦底のキングストン弁をひらいて艦を自沈させ、のち捕虜になつた。

も手ひどく破壊され、なかには沈没寸前の姿で水を掻き進んでいるものもいた。

それらの艦は一、二の例外のほかはいずれも降伏せず、果敢に砲戦し、撃沈された。日本側はできるかぎりこれらの乗員を救助した。そういう救助のために、汽船に中小口径砲を積んだ仮装巡洋艦の亜米利加丸や佐渡丸がまるで救助専門の船種のように海域を走りまわるといった状況になった。

それら残艦のうち最大のものは、装甲巡洋艦ドンスコイ（六二〇〇トン）であつたであろう。

第四戦隊の浪速以下四隻の小さな巡洋艦が、この正称ドミトリー・ドンスコイが懸命に西北にむかっているのを発見した。

浪速はまず、無電をもつて、

「ドンスコイヨ、汝ノ司令官ネボガトフ提督ハ降伏セリ」

と、報らせた。が、ドンスコイはそれを黙殺した。返電もせず、いよいよ速力をあげた。浪速以下はそれを追つたが、しかし日清戦争当時のこの小さな老朽巡洋艦の脚ではとても追いつけそうになかった。

このときたまたま無電をうけとつた第三戦隊の二艦があらわれた。三等巡洋艦音羽、新高で、音羽にいたつては開戦後に横須賀海軍工廠で竣工した二十一ノットの艦である。ドンスコイは汽罐の蒸気をいかにあげても十七ノットしか出ない。しかも音羽と新高は二隻の駆逐艦（朝霧、白雲）をとまなつていた。

しかしドンスコイは装甲されているだけでなく、火力も、日本の三等巡洋艦など手もなく撃沈

グ大佐がその事実を知ったならば狂死したかもしれない。もし狂死しないとすれば、ペテルブルグの劇場以外ではありうべからざる一つの奇遇にかれはぼう然として言葉をうしなつたかもしれない。なぜならば戦艦朝日の艦長野元綱明大佐は、かれの親友だったからである。

野元はかつて駐露公使館の武官室に勤務したことがある。職務上当然のことながらロシアの海軍省の連中とつきあい、招^よんだり招^よばれたりした。ユングの家はペテルブルグのスラヴィヤンカにあった。野元はユングに招待されて何度もその家の客になつていたのである。しかしユングはあの野元が朝日の艦長になつてゐることは知らなかつたし、野元のほうもユングがどの艦にゐるかは知らなかつた。しかしたがい^いにその祖国のためにおなじ海域で砲火をまじえなければならぬということを知つていた。

野元がアリヨールの艦長がユングであることを知つたのは、捕獲してからである。しかしその病室を訪問することはできなかつた。ユングには降伏というこの事情を知らせていないからであつた。

アリヨールだけは破損がはなはだしくとうてい佐世保まで伴つてゆけないという状況だったので、舞鶴港へむかうことになつた。その途中、二十九日夜、ユングが死去した。その水葬式は三十日朝、アリヨールでおこなわれ、ロシア兵と日本兵が堵^と列^{れつ}した。野元は朝日の艦尾に佇^たみ、葬送のラッパの音が消えるまで立ちつくした。

この二十八日、さまざまな水域でロシア側の残艦が日本の各戦隊によつて発見された。どの艦

海防艦アブラクシンと同セニャーウインについては第二戦隊がこれをひきうけることになった。

ノビコフ・プリボイが乗っていた戦艦アリヨールの乗員の多くは戦艦朝日にうつされた。

プリボイも朝日に移った。プリボイが朝日の上甲板に移ると、日本の水兵たちはニコニコしながら応対してくれたという。すぐ昼食が出た。全員にタバコ一袋がくばられ、食事はコンビーフと白パンだった。復讐ふくしゅうされることを覚悟していたロシア兵たちはこういう待遇をうけるということとをたれ一人予想していなかったという。

プリボイは、戦艦「朝日」の艦内を見た。

「この日本の戦艦はあれほどわれわれの砲火を浴びながらすこしも痛手をうけていなかった。艦内の掃除はきれいにゆきとどいていたし、いろんな器具類もきちんとしていて、申しぶんがなかった。……われわれはいつたいあれほどの砲弾をどこへぶつ放したのだろう」

と、プリボイは乗艦早々の印象を書いている。

プリボイたちの艦長のユング大佐は重傷を負って体をうごかせなかったために、アリヨールのなかの小さな長方形の部屋の鉄製ベッドの上に横たわっていた。かれはほとんど意識がないにひしかつたから、自分の司令官が艦隊ぐるみ降伏してしまったことを知らなかった。かれの艦には軍医その他少数のロシア側の士卒が残っていたが、かれらもこの不幸な艦長に艦の運命を知らせなかった。

かれの部下の多くは朝日に移っているのだが、もし人一倍軍人としての誇りのつよかったユン

一同、飲み干した。

日本側の幕僚たちはロシア側の心情を察してことさらに表情を沈ませていたが、やがてその必要もないことがわかってきた。ネボガトフは日本風にいえば融通無碍ゆうずうむげの心境にあるらしく、ひどくあかるい態度で東郷に話しかけた。このあたりで、真之がこの公室へ入ってきた。以下、真之が後年メモしたところによる。

ネボガトフが、東郷に問う。

「閣下がなされた予測についてうかがいたい。どういう根拠でわれわれがツシマ海峡を通ると予知されたのか」

「予知したわけではない。推定したのである」

と、東郷。さらにネボガトフは、

「何に基づいて左様な推定をされたのか」

「地理天候その他の状況により、かくあらざるべからずと信じたるにすぎず」

パーティーは短時間におわった。そのあとネボガトフたちは退艦し、すでに日本の軍艦になったかつての自分の旗艦にもどった。

ネボガトフの旧艦隊の各艦については、捕獲の部署がさだめられた。そのことごとくを佐世保港へひっぱってゆく。たとえば戦艦ニコライ一世と同アリョールについては第一戦隊が担当する。

ていた。かれも安保清種と似たような感情のなかにいたことは、以下のことでも想像できた。

この光景のなかへ、第一艦隊所属の第二駆逐隊の四隻が割りこむようにして入ってきたのである。司令駆逐艦は臃^{おぼろ}で、電^{いんすま}、雷^{いかずち}、曙^{あけぼの}であった。それらの乗員たちが各艦の上甲板にむらがつて、三笠の艦橋上の東郷にむかい、「バンザイ、バンザイ」と声をあげたのである。

東郷はひどく不愉快な表情になり、

「あっちへ行けと言え」

と、どなった。たれかが艦橋から「沈黙せよ」という意味の合図をすると、あわてたようにして四隻が三笠の横をすりぬけて後方へ去った。

そのあと東郷は長官公室でネボガトフたちと会見した。

通訳には、真之の先輩のなかでかれともっとも親しい一等巡洋艦浅間の艦長八代六郎大佐があつた。八代は明治二十八年から四年間ペテルブルグの駐露公使館付武官をしていてロシア語に堪能であつた。

両提督は降伏と受降に関する形式上のことを終えたあと、一同にシャンペン・グラスが配られた。真之はこの場にいなかった。かれは敵の各艦に対し捕獲員の指図をしていたのである。

東郷はグラスをかかげ、

「海戦の終結を祝して」

と、日本語でいった。八代が大きな声でそれをロシア語で相手に伝えた。ネボガトフはグラスをかかげた。

「全滅。――」

と、つぶやいた。この時期、まだロジェストウエンスキー中将の洋上捕獲という事態が発生していなかったから、真之はスワロフとともに戦死したとおもっているし、ネボガトフはおそらく駆逐艦で逃げたろうとおもっていた。つづいてネボガトフは前日来の諸状況をききたがった。

こういういわば雑談は真之にとつて迷惑だった。東郷が三笠で待っているのである。たまりかねてそのことをいうと、多少のんき者の傾向のあるネボガトフは、

「おお！」

と、わが身が降伏者であることに気づいたらしい。真之の文章によると、同少将は「初メテ心付キタルガ如ク、蒼惶そうこう、私室ニ赴キ、従僕ニ命ジテ礼服ヲ出サシメ、之ヲ着替ヘラレタリ」

そのあとネボガトフとすべての幕僚は礼服を着て後甲板に出、総員に対し訓示をした。真之にはロシア語がわからないながら「その調子は悲壮で、涙を含んで懇々と演説されていた」という意味のことを書いている。

礼服姿のネボガトフ少将とその幕僚たちが三笠の舷側の舷梯をのぼってくるときの情景を、上甲板にいた砲術長の安保清種少佐が生涯わすれられぬ印象として記憶している。

「その悄然しょうぜんたる姿をみて、気の毒というか、涙のにじみ出るのを禁じえなかった。さても戦いとは勝つか死ぬか二つのほかはないとおもった」

このとき三笠の艦上は物音ひとつせず、森の中のようにしずかだった。東郷はなお艦橋に立つ

シ」

その他、数項目を告げた。

ネボガトフはいちいちうなずき、「貴命ニ従フベシ」と笑顔でいった。「ただ」と両掌をひらいて、その旨を各艦に伝達せねばならない、しばらくの時間をもらいたい、といった。

ネボガトフとその参謀長が去ったあと、真之らは三十分待たされた。

この三十分のあいだにネボガトフは士官室でその幕僚と協議し、かつ各艦に連絡した。

やがてネボガトフが入ってきて、「もうすこし待ってほしい」といった。その理由は戦死者の水葬をしなければならぬということと、三笠へゆく幕僚たちが服装を改めねばならないということの二つであった。さらに少将は無心をした。三笠にゆくために用うべき本艦の短艇^{ゴット}がごとごとく破壊されてしまっている、貴官の水雷艇に同乗させてもらえないか、ということであった。

真之は、

「どうぞ」

と、うなずいた。

そのあと、少将は着更えにゆきもせず、ちょうど話ずきの商人が商売をほったらかしにして雑談をするようにすわりこんでしまったのである。

ネボガトフの懸念は、すでに四散してしまった味方の各艦の運命に関することだった。

真之は、確報が入っているだけのぶんのことを話した。ネボガトフはなおも各戦艦のたどった運命について入念に問い、真之からいちいち答えを得たあと、不意に両眼を曇らせ、

ネボガトフは真之の懸念をうらぎって一向に降将らしくなかった。この白髪白髯はくはつはくぜんの肥った五十男は笑顔と大ぶりの所作で入ってきて、いきなり自分の体をたたいた。

「こんな服装で申しわけありません」

と、フランス語でいって握手をもとめた。真之は握手をしつつ、なるほどきかない服装だともった。

「少将、汚穢おわいナル戦衣せんいノ儘ままニテ出来いできり、鄭重ていじゆうニ握手セラル」

というのは、真之の文章である。大尉山本信次郎の後日談では、

「汚おれはてた石炭積みの作業服を着ていた。そのときはじめて知ったのだが、ロシアでは戦争をするときは作業服を着るものらしい。わが海軍は死装束のつもりで、晴れの軍服を着る」

と、ある。が、ネボガトフその人の人柄については「非常に善良そうな人」という印象を真之も山本もうけた。

ネボガトフと参謀長のクロッス中佐がテーブルのむこう側にすわった。

真之もすわりつつ、まず降伏を受け入れる旨のことを英語でいった。しかしネボガトフには通じなかった。

そのため予定どおり山本大尉がフランス語で通訳することにした。

「東郷提督ハ、ココニ惨烈ナル海戦ノ終リヲ告ゲルヲ貴官トトモニ喜ビ、カツ貴艦隊ノ降伏ノ申し出ヲ名誉ノ降伏トシテ受クベク小官ヲ送レリ。ツイテハ貴官ヲノ帯剣ハソノママニ帯セラレタ

と、真之は敵に対してではなく、自分に対しておもった。降敵の城に軍使として乗りこむというのは絵物語ならいかにも爽快な光景なのだが、いざその役目を自分に割りあてられてみると、陰惨さのほうが先立った。おそらくネボガトフが出てくるであろう。それに対してどういう態度をとっていいのか、真之は戸惑うおもいがした。待つあいだも通路をしきりに叫び声が走っている。

山本の顔が、緊張でこわばっていた。「いざとなれば武士らしくいさぎよく死のう」と山本はくりかえし自分に言いきかせては落着こうとしていたが、真之はべつにそう思わなかった。かれには通路の叫び声の正体がわかつているのである。真之はここまで案内されてくるまでのあいだに、将校や兵たちがなにをしているかを一瞥^{いちべつ}して見当をつけてしまっていた。かれらは信号書や機密書類などを海中に投棄するために号令を発したり、注意事項を叫んだりしているだけのことだとみていた。そういう書類の始末というのはかれらはつきり戦闘を放棄し降伏しようとしている証拠で、むしろあの騒^{さわ}ぎは真之らが軍使として安全な状態にあることを傍証づけているようなものである。

やがてネボガトフ少将が入ってきた。

真之らは、立ちあがった。相手のネボガトフが敵将であるとはいえ、海軍礼法によって階級相応の敬礼をしなければならぬ。真之はその後も同少将のことを書くときに敬語を用いているが、それが海軍礼法の強制によるものというより、かれが属した時代のごく尋常な礼儀感覚であるというほうが正確かもしれない。

いて行って、ひざまずいて黙禱もくとうしたからである。

山本の談話によると

「こんなときでも、秋山という人は変に度胸がすわっていた。ツカツカといつて前に跪ひざまずき」とある。

真之は敵の人心を攪とるためにこの動作をしたのではなく、いずれこの戦いがおわれれば坊主になろうと覚悟を決めていた彼は、自分の艦隊の砲弾のためにたったいま死んだばかりの死者たちの破損された肉体をみてひどく衝撃をうけ、おもわず冥福を祈る動作に移行しただけのことで、山本の語るところでも、「その黙禱の様子に偽りならぬ心が溢あふれていた。敵の兵員たちはじっとその様子を眺めていたが、その眺める目にも正直な感謝の情が動いており、それ以後、彼らの態度から反抗の色が消え、親しみに似た感情さえ仄ほのか見えた」とある。

上甲板で出むかえたのは、参謀長のクロッス中佐であった。かれはまだ三十代であつたし、それにもともと威勢のわるくない人物なのだが真之の目には雨に打たれたむく犬のような印象にうつた。ひとつには口ひげが伸びすぎ、潮風やら爆煙やらがこびりついてすだれのように垂れてしまっていたせいだったかもしれない。

真之と山本大尉は、司令官室に通された。他にたれもいなかった。どこかから叫喚きようかんの声がひびいてくる。やはり尋常な空気ではなかった。

(つまらない目に遭あうものだ)

と、山本信次郎がのちに語っている。以下、その談話である。

「秋山参謀と二人、水雷艇の“雉”に乗って本艦を離れ、敵の旗艦へ行った。その日は波が荒かった。その上、“ニコライ一世”という軍艦は舷側の斜角が急なので上にあがれない」

木の葉のような水雷艇の上から仰ぐと、舷側がそそり立って大要塞を見るような感じがした。そのうち上から索梯つなはしごが降りてきた。ちょうど山本のいる場所のほうに降りたため、山本は、

「お先に」

といって足をかけた。かれはいま登ってゆく艦内には降伏に反対する反乱兵とか、衝撃で気が変になっている連中とかが存在すると覚悟していたし、もし殺されるなら自分がさきに殺されるのが後輩としての道だとおもって一足さきに艦上にのぼったのである。すぐ真之ものぼった。た。

「艦内ではやはり異様な昂奮状態にあった」

水兵や将校が、口々になにかのしりわめきながらあちこちを駆けまわっている。「容易ならぬ形勢の不穩さ」と山本は形容しているが、実際には恐慌パニックがおこっているのでもなんでもなかった。かれらは水葬の支度をしていたのである。上甲板には戦死者の死骸がたくさん横たえられていて、それを運ぶ者、屍しかばねを包む者、それらを指揮する声、さらにはひざまずいて大声で祈禱をあげる者などの諸動作や声がそのあたりを駆けまわっている感じで、緊張の極に達している山本からみればそれがパニック状態にみえたらしい。

これが水葬の光景であると山本が気づいたのは、真之がそれら屍体のむれのそばへどんどん歩

名を得ているのは可哀そうじゃ、ということらしい。ひとつには子規を開祖としてひらかれた写生文の感覚からいえば、真之の文章というのは碧梧桐の氣に入るたちのものではなかった。

ともあれ、ネボガトフ艦長は機関をとめて、漂泊した。東郷は、

「秋山サン、ゆきなさろ」

と、受降のための軍使として真之をえらんだ。旗艦ニコライ一世へ乗りこんでゆき、ネボガトフと対面して降伏についてのうちあわせをせよ、ということであつた。

敵艦へゆくためには短艇ガートが必要だつたが、たまたま三笠のそばに「雉」キジという名前のついたちつぽけな水雷艇がちかづいてきたので、

「関よ」

と、真之は艦上からまねいた。雉の艇長は大尉で、関才右衛門といった。

真之は、それに乗った。かれは東郷のまゆをひそめさせた例のふんどし姿（剣帯を上衣の上から締めた恰好）をやめていた。武器は腰に吊っている果物ナイフのような短剣だけで、拳銃ももつてゐない。

（帰って来れるかどうかからない）

とおもつたのは、随行の山本信次郎大尉である。山本は三笠の分隊長をつとめていたが、フランス語が堪能であるため、通訳として従つたのである。

——私は死を決していた。

は碧梧桐も知らない。馬島とくらべて「秋山のじゅんさん」のほうは、目がするどく体中に氣魄（きはく）がみなぎっていて、

「じゅんさんが先頭に立ってけんかをするときにはな、われわれ悪童どもは胸が一杯になってきて、天下に恐（おそ）いものはいないというような勇氣やら安心やらが湧いたものでな」

と、いう。さらに碧梧桐は、

「われわれ悪童にとって馬島はやさしくて好きであり、じゅんさんはおそろしくて好きだった。人間というのは少年のころの感じのままの大人というのはめったにいないが、じゅんさんはあのままひげがはえているだけじゃがな」

秋山家では兄の好古のほうが好きで、真之にはどこかきわどさを感じていたようである。

だが碧梧桐はかれの兄貴株であり師匠でもあった子規と真之がともに文学をやろうとちかいあった仲だったということに無限の懐しみを感じていた。それが、兄の好古にどなりつけられてやめたという話も、好んでひとに披露した。

碧梧桐は、真之が電文や公報の起草者として名文家の盛名を世間で得たことを不満としていた。碧梧桐にいわせれば、

「舷々相摩す、などというじゅんさんの文章はあれは海図に朱線をひいてその赤インキの飛ばっちりじゃ」

という。真之が、碧梧桐の表現でいえば「他の窺知（うかが）することのできない慘澹たる経営でもって智囊を傾けつくした」バルチック艦隊の邀撃（ようげき）作戦こそじゅんさんの真骨頂で、くだらない美文で

いと思います。武士の情です」といった。すると上村はみるみる後悔の情をうかべて、

「気がつかんじゃった。射っちゃいかん」

と、大声でいった。もつともイズムロードを第六戦隊の一部が追ったが、脚が及ばなかった。

同艦はウラジオストック付近までゆき、座礁した。艦長は艦を破壊して陸路乗員を引率してウラジオストックへ入った。

「じゅんさんが、軍艦をうけとりに行っただけな」

と、後日、東京で俳人河東碧梧桐かわひがしへきどうが、松山出身の連中との会合があったときその話題になっ

た。
「秉公へいこう」

と、子規がやや年下の碧梧桐をそのようによんでいたように、真之も碧梧桐に対しては「秉公」だった。秉公のほうは真之が幼名を淳五郎といったために「秋山のじゅんさん」とよんでいた。
た

松山旧城下では上族町と町人町のこどもがたがいに団体を組んでけんかをしあうという習慣があつて、その餓鬼大将が真之だった。碧梧桐は年下だけに手下になって駆けまわっていた。

「大将が二人いてな」

と、碧梧桐は少年のころのはなしをした。もう一人の大将というのは馬島某ということでも、こどもながらも温厚寡黙でおのずから年下の悪童たちをなつかせていた。馬島某のその後の消息

切れ目があることに気づいた。東方である。

かれはにわかに東へ変針した。

「イズムルードです。追いましょう」

と叫んだのはこの快速艦の位置から南西にいた第二戦隊の殿艦磐手の艦長川島令次郎であった。おなじ艦橋上にいた司令官島村速雄にいったのである。

島村は度量の大きさに知られていたが、その島村を川島は生涯尊敬しつづけた。島村は黄海海戦まで東郷の参謀長をしていたが、そのときの功もいっさい語らず、「みな秋山がやったことだ」と私的な場でも公的な場でもいつていたし、そのあと第二戦隊の殿艦に座乗して司令官になり、二十七日の主力決戦をやったときも、あとあとまで艦長の川島の功のみをいった人物である。

追いましょう、と川島が気負いこんだときばかりは、

「まあまあ」

と、大きな体で川島をなだめるようにして、

「武士の情だ」

といった。島村のこのときの言葉を、川島は後年、古典劇の名場面を語るようにして語った。

同時期に、第二艦隊旗艦出雲の艦橋上でも似たような情景があった。

同艦隊の司令長官上村彦之丞が、とっさに撃て、あれを撃て、と叫んだとき、参謀の佐藤鉄太郎中佐が諫めた。佐藤自身が語っているところでは、「長官。あれはネボガトフ提督が、皇帝に最後の奏をするために出した使者ではないでしょうか。もはや一隻ぐらい逃がしてもかまうま

珍事がおこった。

ネボガトフが降旗をかかげ、各艦の機関を停止せしめようとした瞬間のできごとである。

それまで旗艦ニコライ一世の右舷に寄りそつてネボガトフのために通報のしごとをしていたのが、みるからに軽快そうな艦型をもつ軽巡イズムルード(三二〇三トン)であつた。日本海軍の軍艦分類法でいえば三等巡洋艦にあたる。

脚がはやい。

そのことはすでにのべた。日本側の類型艦でいえば明石とか新高などに相当する。が、速力がちがつていた。イズムルードが二十四ノットも出せるのに対し、日本のそれはたとえば明石が十九ノット強で新高は二十ノットである。日本の場合、戦艦が十八ノットほどで、一等巡洋艦が二十ノット、ただ二等巡洋艦のうち第三戦隊に属する笠置、千歳が二十二ノットの能力をもつていた。もつとも駆逐艦は二十九ノットとか三十ノットの速力を出すことができるが、しかし攻撃力と防御力の点で駆逐艦は巡洋艦にとうていおよばないから比較の場にもちこめない。要するに、イズムルードは日露両軍のなかでもつとも脚のはやい軍艦であつた。

艦長はフェルゼンという中佐で、この快速艦の艦長にふさわしく反射能力の鋭敏な資質をもつていた。かれは旗艦に降旗がかかけられたのをみて、型どおり自艦にもそれをあげた。しかし機関停止をしなかつた。

かれは司令塔のすきまから三方をのぞいていて、包囲環をちぢめてくる日本の各戦隊の一部に

しかしこの場の、ネボガトフとの対決においては表情の変化はなく、ただわずかに不機嫌そうであった。

五隻の敵艦に、砲弾が命中するたびに爆煙があがっている。

真之がその癖のある両眼を裂くようにして東郷をどなったのはこのときであった。

「長官、武士の情であります。発砲をやめてください」

と叫んだ声は、そばにいた砲術長の安保清種少佐がのちに大將になってからもそのときの真之の血相の変わりようを説明し、その言葉を繰りかえし口真似した。

が、東郷は安保清種の観察によれば冷然としていた。真之の言葉に切りかえすように、

「本当に降伏すツとなら」

と、薩音^{さつおん}でいった。

「その艦を停止せにやららん。げんに敵はまだ前進しちよるじゃないか。――」

東郷の戦時国際法の知識の確さは定評があった。たしかに軍艦が敵に降伏するとき、白旗をかかげるだけでなく機関を停止させねば完全な意思表示にはならなかった。

「秋山さんも返すことばがなかった」

と安保は回想しているが、真之は敵をみつ、この一種特異な精神の反応をもつ男は怒りとも悲しみともつかぬ感情をおさえかねていた。たしかに敵は間抜けであった。前進をつづけているだけでなく、砲火こそ噴かなかったがその全砲門は三笠にむけられていたのである。

が、ほどなく敵も気づき、機関を止めた。東郷ははじめて射撃を中止させた。

砲撃は十分以上つづいた。

その間、ネボガトフ艦隊は一発の応射もしなかった。

(どうも様子がおかしい)

と、最初に気づいたのは、秋山真之である。ただこの肉眼主義者は望遠鏡をもっていなかったため、横にいた加藤参謀長に、旗があがってはいませんか、とたずねた。

加藤の双眼鏡にも降伏信号までは識別できなかったが、白旗はみえた。参謀清河純一大尉が、「降伏です」

と、真之にいった。

ところが東郷はそれらの会話を聴きながらも沈黙し、「射ち方ヤメ」の号令を出さず、依然として射撃をつづけさせたのである。

「長官、敵は降伏しています」

と、真之はどなった。それでもなお東郷は右手で双眼鏡をかかげ、左手で長剣のつかをにぎったまま無言でいた。東郷は昨日、今日とつづいた戦闘中、一度も顔色を変えなかった。一度だけ顔つきが変わったのは、きのうの戦闘開始の直前、例の敵前回頭をやるとき、右手を左へ大きくまわして半円をえがいて「取舵一杯」を命じたときであった。かれは息を吸い、頬つぺたをふくらまし、半円を描きおわると息を吐いた。なにかかれが決断するときの少年のころからの癖だったという。

にあつめてかれらの了解を得ようとした。

「自沈しましう」

と叫ぶ声も二、三あがつたが、ネボガトフは両手をあげ、ほとんど泣き出しそんな表情をつくり、われわれには時間がないのだ、といった。そのことはたれにもわかった。すでに東郷の三笠は一万メートルにまで近づいていたのである。

そのうち、前艦に、

「X・G・E」

という三旒りゅうの信号旗があがつた。ワレ降伏ス、という意味である。さらにそのあと、テーブル・クロスで急製された白旗もかけられた。

後続の各艦が、それにならった。

が、三笠の東郷には、それが見えなかった。距離が遠すぎたからでもあつたが、ひとつにはまさか敵が戦わずに降伏するとはおもわなかつたのである。

このとき東郷のつた戦術はかれの性格の一面をよく物語っている。敵はすでに包囲されている以上、その自滅を期待したことである。かれは慎重に艦隊をうごかし、軽率に敵の射程に踏みこんで味方を傷つけないように配慮した。かれの麾下の諸艦のうち、もつとも遠距離へ射てる砲をもっているのは春日であつた。東郷はまず春日に指図して射たしめた。

ついで午前十時三十分、敵との距離が八千メートルに達してから、第一、第二戦隊がゆるゆると射撃をはじめたのである。

は敵国に軍艦を渡したからよろしくない、というのである。

結果からいうと、ネボガトフは戦後、クロンシュタット軍港において軍法会議にかけられ、死刑を宣告された。しかも軍法会議以前に軍籍をむしりとられていた。

皇帝ニコライ二世は、力尽きて捕虜になったというかたちのロジェストウエンスキーに対しては寛大であつたが、ネボガトフに対しては峻烈で、皇帝みずからが海軍法廷にのぞんだほどである。

もっとものち死刑がゆるされ、十年の要塞禁錮きんこの刑に処せられた。各艦長も禁錮刑に処せられた。

法廷ではネボガトフはおとなしくはなかった。かれはロシア海軍の腐敗を衝つき、勝つための真剣な準備や注意がほとんどなされておらず、艦隊は棄てられたも同然であつた、と主張した。

法廷では、

「なぜキングストン弁をひらいて自沈しなかったか」

ということにしぼられたが、しかし現場の状況はそういう余裕はまったくなかった。

東郷はその艦隊の主勢力をあげてネボガトフを包囲しつつあつた。キングストン弁をひらいて海水を入れ悠長に沈んでいるうちに、艦は東郷のもつ多数の砲のためにこつぱみじんに粉砕されて、「乗員の生命を救うため」というネボガトフの唯一の目的が達せられなくなるのである。

ネボガトフは司令塔で降伏を決定したあと、各艦にその旨を報らせ、旗艦の全士官を艦橋付近

た水師提督だが、その清国末期の北京政府でさえ丁汝昌のこの行動をゆるさず、その葬儀を営ましめなかったほどである。

「民族は軍人に対し、その合理的判断による降伏よりも、名誉と壮烈さを望んでいる。前者はその時期においては多少の生命を救うことができて、後世、その民族の子孫に自尊心をもたしめるゆえんのものではない」

という意見が、ロシアにおいては圧倒的な正当さをもっていた。

ネボガトフにさらに不利な条件が加わっているのは、戦闘前に司令長官ロジェストウエンスキが出した命令のなかに、

「もし艦が優勢なる敵兵力に包囲され、避くべからざる不運が必至とおもわれる場合」

という条項があったことである。その場合は「艦を自沈せよ」とある。もともと戦闘の直前にいわば不急の、「心得」というにちかい内容のものを命令のかたちで出すというロジェストウエンスキーの側にも提督としての問題があるかもしれない。いずれにせよネボガトフはこの命令にも違反しているのである。

ついでながら、巡洋艦オレーグというのがこの戦場からはるか南へ落ちのびてマニラ港に遁入し、戦時国際法によって米国軍艦に武装解除されたが、その副長だったS・ボソコフが手記を書いていて、

「自分たちの行動は正しかった。しかしネボガトフの降伏は不可解であり、かつゆるしがたい」と、奇妙な攻撃をしている。自分たちは第三国である米国に軍艦を抑留されたが、ネボガトフ

「降伏しよう」

と、いった。

たいていの国の海軍刑法では、ネボガトフのこういう処置はその主将が死刑に該当することになっている。奮戦してのちの降伏なら「名誉の降伏」ということになるのだが、戦わずして敵に降り、その艦船もしくは兵器を敵に交付した場合その指揮官は死刑——ということになっている。

ロシア海軍はとくにこの点で厳格な伝統をもっていた。かつてクリミア戦争のとき、ロシアの軍艦一隻がトルコ海軍にうばわれ、トルコ軍艦として戦域を出没していたことがある。ときの皇帝はこれをロシアの汚辱とし、全海軍に対し、

「かの軍艦を搜索し、撃沈せよ」

と命じ、執拗に督励したことがある。その皇帝の名は、皮肉なことにこのネボガトフの旗艦の名前であるニコライ一世であった。

ついでながらネボガトフとよく似た処置をとった艦隊指揮官としては、日清戦争のときの北洋艦隊の司令長官丁汝昌^{ていじよしょう}がある。かれは根拠地に追いつめられ、万策尽きて降伏し、包囲していた日本の連合艦隊司令長官伊東祐亨^{すけゆき}に艦船をさしだした。その理由は部下の生命をすくうためということで、ネボガトフとおなじであった。ただ丁汝昌はそれを決定するとともに毒をあおいで死んだというちがいだけがある。当時清国政府は腐敗しきっていた。丁汝昌は名将の評判の高かつ

は、たとえその無傷の状態を目で見せつけられても、公算として信じられることではない。

このネボガトフ艦隊をかこむようにしてあらわれた日本側の陣容は水雷艇をのぞいて二十七隻であつた。それにひきかえネボガトフの旗艦ニコライ一世は攻撃力も防御力も見すばらしい旧式戦艦にすぎない。あとにつづく新鋭戦艦のアリヨールは海に浮かぶ鉄屑であつた。もつとも射撃は多少とも可能であつた。アリヨールは徹夜で修理作業をし、二十五門以上の大小の砲はなんとか射てるようになってゐる。

ロシア側の五隻の軍艦には、なお生きている乗員があわせて二千五百人いた。かれらはまるで屠殺場に送られた家畜のようなものであつた。

「むだだ、戦うのは」

と、艦長はつぶやき、参謀長のクロッス中佐の顔をみた。クロッスはうなずき、無言ながら同意を示した。

この参謀長は司令塔のネボガトフのもとにゆき、艦長の意向をつたえ、司令官としての決心を問うた。

この場合、艦長や参謀長の意見よりもネボガトフの意志決定のみがすべてであつた。もし降伏となれば、軍法会議で死刑を宣告されるのはネボガトフ自身なのである。

もつともネボガトフ自身はすでにこういう状況を予想していたらしく、態度に昂奮がみられなかった。勝ち目のない戦闘で二千五百の生命をうしなわしめるのは無用のことだ、という結論に達していたらしくひどくおだやかな物言いで、

艦長のスミルノフ大佐はきのうの戦闘で負傷していたが、押して艦橋に立っていた。この艦長とネボガトフのあいだを参謀長のクロッスという中佐がひどくいそがしげに二度ばかり往復した。

艦長は戦うことに絶望的になっていた。かれは一本眼鏡をかざして四方をながめていた。日本の戦隊の数はしだいにふえつつあった。上村の第二戦隊が出現したとき、

「無傷だ」

と、絶望的な声をあげた。もつとも「浅間」だけはみえなかった。おそらく一艦だけはロシアの奮戦によって沈めることができたのだらうとスミルノフ大佐はおもったが、しかし事実とはちがっていた。浅間はこのとき東郷直率の第一戦隊のほうに臨時に属していたのである。

その東郷の戦隊が単縦陣をもって北方の沖合にあらわれたとき、スミルノフの戦意はまったく喪^{うしな}われた。東郷の艦隊がまったく無傷であることに目を見張らざるをえなかった。

三笠は依然として先頭にあった。二番艦の敷島がつづき、富士、朝日、春日、日進とつながっている。ロシア側にすればきのう砲きあきするほど繰りかえしみせつけられた東郷の第一戦隊の陣容であり、おどろいたことにどの艦の外観も変化しておらず（遠望するスミルノフの目からみれば）、いまだから観艦式に出かけるようにいきいきと航進してきた。

（いったい、あれだけ奮戦したきのうの戦いは、あれは何だったのだろうか）

と、スミルノフ大佐はおもった。ロシアの戦艦や装甲巡洋艦で千発以上の砲弾を敵へ送った艦はさらにあったであらう。それらの砲弾が東郷の艦隊にカスリ傷をおわせなかったということ

三笠は、第五戦隊からの無電をうけとると、すぐその方角にむかつて走りだした。

無電は、何度も入ってきた。走りながら敵状がよくわかった。戦艦二隻をふくんだ五隻が北東にむかい十二、三ノットで走っているという。

「おそらく敗残艦隊の主力ですな」

と、加藤がいうと、東郷がうなずいた。針路は敵の前途を扼すべく指定された。三笠のうしろに、無傷の主力艦隊（第一、第二戦隊）がつづいている。

午前八時四十分になった。

なお見つからなかったため、「前途を扼」するといっても前途がありすぎたのかもしれないという不安が、三笠の艦橋を占めた。

敵の所在地点は、見張りの第五戦隊から打たれてくる無電でわかっている。東郷は、二手ふたてにわかれることを決意した。

上村彦之丞の第二戦隊をしていきなり敵の所在地へ急航せしめようとした。ただし命じたのは戦闘ではなく、「接触を保て」ということであつた。戦闘は、第一戦隊である東郷直率の戦艦戦隊がやらねば討ち洩らすおそれがある。東郷はそこまで用心ぶかかった。

上村の装甲巡洋艦出雲以下が、針路を変えた。その場所へ波を蹴って急航した。戦闘というより捕物とりものにちかかった。

ネボガトフは戦闘指揮の位置につくべく、旗艦ニコライ一世の司令塔に体をうつしていた。

の煤煙をみつけた。日本側の煤煙は良質の英国炭をつかっているために薄かった。このため発見は、日本側よりややおくれた。

「あの煤煙は味方じゃないだろうか」

と、ネボガトフは、先任参謀のセルゲーエフ大尉にいった。かれはこの陣列のなかにいない戦艦シソイ・ウエリーキーやナワールリンなどが、息せき切つてあとを追つてきているのではないかと期待した。それらの艦の運命を、ネボガトフがむろん知るよしもない。

「日本人です」
ヤポンスキ

と、長身のセルゲーエフ大尉が、観念したように小声でいった。

「味方はいないか」

ネボガトフは、他の幕僚たちをふりかえつた。かれは温和な表情をすこしも変えていない。かれが発したこの質問は、もしこの付近に味方がいればそれを指揮下に入れて交戦する決意が含まれていたのだろうか。

「敵ばかりです」

と、幕僚が口々にいったところは、日本の第六戦隊も「艦影」のなかに加わっていた。もつとも、第五戦隊にせよ第六戦隊にせよ、搜索を主目的とする弱小艦ばかりだったから、かれらが挑みかかってくればネボガトフ艦隊はこれを一掃することができた。しかしかれらはあくまでも搜索・警戒の任務から踏みはずそうとせず、ロシア戦艦の主砲の射程外に用心ぶかく距離を保ちつつ、送り狼のようにつき従ってくる。

と、艦橋で参謀長の加藤友三郎は、不機嫌そうにつぶやいた。真之は、
「どこかの網にかかるでしょう」

と、答えた。かれは自分の数字を信じていた。かれは敵がそのコースをたどるであろう水域を
いくつか設定し、綿密に計算して各戦隊をばらまいておいたつもりである。

午前五時現在の各戦隊の位置は、さきにふれた第一、第二戦隊のそれをのぞくと、つぎのお
りである。

第四戦隊（浪速、高千穂、明石、対馬のほかに第三戦隊の音羽と新高を臨時に編入）は、鬱陵島の南微
西・約六十海里。

第五戦隊（厳島、鎮遠、松島、橋立、八重山）は、韓国冬外串とうがいかんの東方・約四十三海里。

第六戦隊（須磨、千代田、秋津洲、和泉）は、韓国冬外串の北東微東・約五十二海里。

ところが、厳島を旗艦とする第五戦隊が、夜があけてからほどなく東方の沖合に煤煙をみつけ
たのである。すぐさま各戦隊に速報するとともに速力をあげて接近するにつれ、煤煙は数条にな
った。厳島には第三艦隊の司令長官片岡七郎が座乗していた。

すぐさま無電で全艦隊に報じ、そのまま接触を保った。敵は戦艦二隻、海防艦二隻、巡洋艦一
隻である。

ネボガトフは、発見された。

旗艦ニコライ一世の艦橋にいたネボガトフ少将も、ほぼ同時に厳島など五隻から成る第五戦隊

東郷の諸戦隊は、夜を徹してひた走りに走り、二十八日払暁までにそのほとんどは鬱陵島付近に達していた。

東郷は待ち伏せというかたちでの追撃戦の戦法をとった。かれの真価は二十七日の主力決戦よりもこの追撃戦にあったと評価されているが、しかしこの方針は既定のことでもあった。東郷に課せられている戦略方針は敵の一艦といえどもウラジオストツクへやらないというところにある、かれの指揮下にあるすべての艦艇はこの方針でうごいていた。水兵まで知っていた。もし艦艇のなかの士官がごとごとく戦死しても——そういう悲惨なケースはなかったがたとえ存在しても——その艦艇は操舵員や機関兵の手で鬱陵島付近まで運ばれてきたにちがいない。

もつとも敵を索^{もと}むべき海域はひろすぎ、すべてを捕捉できるかどうかという物理的困難もあった。

ただ東郷に幸いしたのは二十八日の夜明けは前日にくらべ、みごとに朝焼けでもつてはじまつたことである。海上は前日の大うねりが多少残っているが、濛気はほとんどなく、視界はよく利いた。

この払暁、三笠は第一、第二戦隊の各艦とともに鬱陵島の南微西・約三十海里の地点に達していた。

太陽が昇ると、海がびっくりするほどに濃い紺色に変わった。

「見えんな」

してたまたまナワリーンの近くまできたときに、第四駆逐隊の襲撃をうけ、艦尾に魚雷を二本くらった。舵がやられたために左右二つの機関の回転を調整しつつ操舵したが、それでもなお沈まず、第四駆逐隊が離脱したあと、さかんに海面を乱射して戦艦であることの威力を示した。

「シソイ」

と、日本側は、この三笠に似た形の戦艦をよんでいた。これだけの破損をうけてなお沈まなかったというのは、当時の攻撃力に比して戦艦の防御力がいかに大きかったかを証拠だてている。シソイは終夜、微速で動いた。艦長オーゼロフ大佐はウラジオストックまでもとて辿りつけないとおもい、乗員をすくうために対馬方向へ針路を転じた。夜明けごろ、巡洋艦モノマーフが駆逐艦一隻をともなつて付近を航進してきたためこれに救助をもとめたが、モノマーフの返答は冷たかった。

「ワレモ沈没ニ瀕セリ」

と応答して、去った。事実モノマーフは対馬東方で沈没に瀕し、乗員は佐渡丸に救いあげられた。装甲巡洋艦ナヒーモフもそのあたりで相前後して沈んだ。

モノマーフがともなつていた駆逐艦は、グロームキーだったが、駆逐艦不知火に追跡されて捕獲され、ほどなく沈没した。

他のロシア軍艦の個々の運命についてはいちいちこれを追うにはあまりに状況が雑多すぎる。要するに一個の提督に指揮されてまがりなりにも艦隊を組んでウラジオストックに針路をむけているのは、ネボガトフ少将の五隻だけであった。

うけたのだから陣列から落伍してしまっても不自然ではないとおもった。このために発光信号を送ってみた。応答がなかった。そのときナワリーンの影がみえた。鈴木は各艦に対し攻撃を命じた。

戦艦ナワリーンは昼間の砲戦でひどく損傷していた。

この戦艦はロシア製で、福井静夫氏によれば英国設計の影響がみられるという。煙突は四本だが、二列縦隊のように二本ずつ組になってならんでいるという特異なかたちで、このため目標になりやすかった。日没前、主力決戦がおわったころには、砲弾でぶちぬかれた孔から海水がどんどん入り、なかば沈んだ艦尾をひきずってすすんでいたが、午後九時ごろついに海水は上甲板まできた。このため僚艦から離れ、ひとまず機関を停止して漂泊し、弾孔の填塞^{てんそく}をしたり排水をしたりしていたが、この作業中、鈴木貫太郎の第四駆逐隊に発見されたのである。

「一発も弾を撃って来なかった」

と鈴木はいうが、事情はよくわからない。なぜならば五分で沈んでしまい、生存者は三人にすぎなかったからである。朝霧は六百メートルで魚雷を発し、白雲は三百メートルまでせまって発射した。轟沈^{こうしん}といってよかった。

同時に同地点で発見された戦艦シソイ・ウエリーキーはべつにナワリーンと隊伍を組んでいたわけではなく、偶然である。この戦艦は艦齡十年で、英国戦艦ロイアル・ソヴェレーンを模倣した設計であった。主力決戦で完膚^{かんぷ}なきまでにやられ、艦首が沈下した。それでも微速ながら航進

るものだった。

ところがロジェストウエンスキー直率の諸艦は、その訓練がまったくできていなかった。口提督はこの意味からも、賞めらるべき指揮者ではなかった。

このため、第二戦艦戦隊に所属していた諸艦は途中で各個に脱落してしまっただけでなく、日本の駆逐隊・艇隊が波間をくぐるようにしてやってくると、飛びあがるようにおどろいて探照燈をつけ、砲火をひらいた。

「敵が砲撃したり、探照燈を照らしたりしたおかげで、よく目標がわかった」

という意味のことを鈴木貫太郎はのちに語っている。かれははるかな後年、太平洋戦争の終末期の日本の首相にならざるをえない運命をもったが、この当時においては世界の海軍の水準からみて水雷戦の指揮官としては超一流であったであろう。

かれはまず戦艦ナワリンを撃沈した。

「水雷で敵を攻撃するこつは、敵が発見しないうちにこちらがうんと近づいてしまうことだ」という考え方を鈴木はもっていた。それには鋭敏な索敵感覚が必要だった。

鈴木たちがナワリンを発見した刻限はすでに夜半をすぎている。二十八日の午前二時半ごろで、たまたま半月があがっていた。右舷に二つの艦影がみえた。はじめはシソイ・ウエリーキーの影が目に入った。ひどく三笠に似ていて、

「三笠ではないか」

と、鈴木は駆逐艦朝霧の艦橋で首をひねった。鈴木にすれば三笠は昼間あれだけ敵の集中弾を

嘲笑していたし、航海中面倒をみてくれたフランス海軍でも「犠牲の艦隊」とひそかによんでいた。極東を征服するための戦争をおこした以上は、ロシア帝国は勝つための態勢をとるべきであった。ネボガトフはもしウラジオストックにたどりつけなかったならば兵員の命を救うため、みずから死刑を覚悟して降伏しようと考えていた。

「この五艦以外の艦はどうしたのだろうか」

と、ネボガトフはまわりの幕僚に問うともなくつぶやいたが、むろんたれひとり正確な答えをもっているはずがなかった。

じつは、この艦隊に追いつるべくすくなくとも三艦が後続していたことはたしかだった。第二戦艦戦隊の二番艦だった戦艦シソイ・ウエリーキー（一〇四〇〇トン）と三番艦の戦艦ナワリーン（一〇二〇六トン）それに装甲巡洋艦ナヒーモフ（八五二四トン）というむれである。

なぜなら、この夜、第四駆逐隊の四隻をひきいて海域一帯を走りまわっていた鈴木貫太郎佐が、そのようにつながってゆくところを目撃しているのである。

じつはロシアからネボガトフが直率してきた第三戦艦戦隊は、ながい航海中、ネボガトフの指示で夜はずっと無燈航行をやってきた。そのことはすでにふれた。ネボガトフは夜戦になったばかりにそなえてそれを訓練しておいたために、かれの「直参」じきさんの諸艦はこの二十七日から翌日にかけての夜、無燈火で平然と縦隊を組んでゆくことができたのである。かれらが日本の水雷攻撃をかわしてぶじに二十八日の朝を迎えることができたのは、この夜間の忍び歩きのたくみさによ

のとき、その駆逐艦が、ロジェストウエンスキーの命令というのを伝えたのである。

その内容は、指揮権をネボガトフに委譲すること、針路をウラジオストックにとれということであった。ロ提督がスワロフを脱出して駆逐艦に移ったとき、その命令を出した。その命令が通^{てい}伝^{でん}されて、いま通りすぎた駆逐艦が伝達役になったのである。

夜に入つて、日本の水雷戦がはじまつた。

この夜、ネボガトフとその艦隊は運がよかった。というより、かれはかねて自分の艦隊に無燈航行の訓練をしておいたため、この夜、闇にまぎれることによって幾度かの危機をすりぬけた。

かれはたとえ日本の駆逐艦や艇隊が近づいてきても探照燈をつけることを禁じ、射撃さえ禁じていた。

かれは旗艦の艦長が倒れてしまったため、自分で操艦していた。魚雷がちかづいても、ひどく落ちついた態度で、面舵^{おもかじ}とか取舵^{とりかじ}とかといつてこれかわした。

——ネボガトフが居るかぎり安心だ。

という気分が、旗艦乗組のすべてに横溢^{おういつ}していた。この老練で冷静な彼が翌日、東郷が出現したとき、戦わずして洋上で降伏するとはたれも想像できなかったし、むしろこの艦のちに日本の艦籍に入つて「老岐^{おいき}」という名前に改められようとは夢にもおもっていなかった。

ネボガトフは、一度もそのことを言動にあらわしたことがないが、こういう寄せあつめの老朽艦を自分にひきいさせてロジェストウエンスキーの艦隊に合流せしめたロシアの海軍省というものをひどく憎んでいた。勝てるはずがなかった。水兵までが「自沈艦隊」と、みずからの艦隊を

「ワレニ続航セヨ。針路、北二十三度東」

という信号をその旗艦にかかげつつ進んだ。たまたまかつての新鋭戦艦五隻のうち、たった一隻生き残っているアリヨールが、息たえだえになっているそばを、ネボガトフの旗艦が通りすぎた。アリヨールは砲弾のために三百に達する穴をあけられており、海水がどんどん入ってきて、艦内に三百トンもの水を呑みこんでしまっていた。艦上はほとんど廃墟になっていたが、機関と舵機だけはぶじだった。この艦はネボガトフに従った。

ネボガトフの旗艦ニコライ一世についてきている残存軍艦は、二番艦がほんのきのうまで世界でもっとも新鋭とされた戦艦アリヨールであり、この艦には主計兵ノビコフ・プリボイが「自分の艦はまるで筏いかだのような姿になった」とあきれつつもぶじに勤務していた。

第三番艦がアブラクシンで、殿しんがりを走っているのがセニャーウインである。もう一艦いる。快速をもって知られた巡洋艦イズムルードで、この艦は旗艦と並航してネボガトフのために通報艦の役目をひきうけていた。

ネボガトフ少将は、五十の半ばをすぎている。かれはロジェストウエンスキーのような海軍省における官僚的な切れ者ではなかったが、練達の船乗りとして知られていた。ずんぐりした体に白い戦闘服をまとい、黒いズボンをはいている。髪もひげも真っ白で、目が大きく、変に愛嬌があつて、軍人というより商店のおやじといった感じだった。

まだ海上に残光がのこっているところ、味方の駆逐艦がかれの旗艦の横を通りぬけて行った。こ

クリミア戦争をやった好戦的な皇帝の名であり、他の艦はそれぞれロシア帝国の名誉をあげたかつての海軍の名将の名前がついている。

が、日本海軍はこのネボガトフの艦隊の質をよく研究していた。その結果、

「主力決戦のときには全力をあげて敵の新鋭主力艦をたたく」

という方針がとられ、五月二十七日の日中いっぱいづいたあれだけの激烈な戦いのなかで、このネボガトフの第三戦艦戦隊だけは、いわば見のがされていた。

このため、ネボガトフは夜に入っても航海をつづけることができたのである。

その損害は、旗艦が左舷に十個の砲弾をうけた程度で、アブラクシンは後部砲塔の左砲がやられ、前部艦橋の下の方舷側をうちぬかれた程度で軽傷であった。セニャーウインもほぼ同程度の怪我^{けが}ですんだ。もつともウシャーコフは乱戦のなかで艦隊から離れてしまい、翌二十八日午後六時十分、島村速雄がひきいる磐手^{いわて}、八雲^{やぐも}のために撃沈された。

二十七日の乱戦のなかで、あれだけの威容を誇ったバルチック艦隊は灰を吹いたような他愛なさで散ってしまい、艦隊はばらばらになり、どの艦がどうなっているかが互いにわからなかった。

ネボガトフは、司令長官の運命を確認することができなかったが、しかしこの想像を絶した砲弾の嵐と惨況を見てしまった以上、ロジェストウエンスキーの生存を想像するだけでもむだだった。その座乗艦スワロフとともに海底に沈んだにちがいないとネボガトフはおもった。

ネボガトフは、敗勢を収容すべき自分の立場をおもった。日没寸前、かれは、

ネボガトフ

ネボガトフ少将は、

「浮かぶ火鬨^{アイロン}斗」

といわれた旧式戦艦をひきい、ロジェストウエンスキーの航海とは別経路をとり、地中海をへてインドシナ半島のヴァン・フォン湾で合流した。その後は、第三戦艦戦隊として組みこまれ、極東にむかった。

対馬海峡にさしかかったときは全艦隊が二列縦陣になっていたが、ネボガトフのひきいる第三戦艦戦隊は左縦陣をなした。

旗艦はニコライ一世（九五九四トン）である。ずんぐりした艦型で舷側が高く、大砲が変に短くみえる軍艦で、新鋭のスワロフや日本の三笠などからみれば姿からして間がぬけてみえたし、脚も遅く、十五ノットしか出なかった。以下、三隻の装甲海防艦がくっついてゐる。アブラクシン（四二二六トン）、セニャーウイン（四九六〇トン）、ウシャーコフ（四二二六トン）で、旗艦の艦名は

などという話は先例にないことだったし、どういう空想小説の書き手でもここまでの設定は現実リアリテ感をうしなうとして抑制するかもしれないほどの事実だったからである。

結局、ベドーウィを佐世保までひっぱってゆき、ロジエストウエンスキー提督を佐世保海軍病院に入院させた。

と、相羽の語った速記が残っている。相羽は提督が旗艦スワロフと運命を共にしたはずだともっていたのである。

「つれて来い」

と、相羽は信号した。塚本はその信号どおりに金モール（幕僚）の一人にそう命ずると、その幕僚は拝むまねをした。提督は重傷の身である、という。

結局は曳航することにした。

ロープを渡す作業が終了して現場を出発したのは夕闇のせまるころである。

一晚、走った。

（万一のことがあれば撃沈するまでだ）

と相羽はおもっていたが、たしかに気味がわるかった。もし敵の巡洋艦でも出現すれば駆逐艦など一たまりもなくやられてしまう。

二十九日の夜が明けたころ、後方沖合に巡洋艦が一隻煙をはいていた。みると、三等巡洋艦の明石（二七五トン）だった。宇敷甲子郎大佐を艦長とするこの巡洋艦は駆逐艦や水雷艇の保護者として二十七日の夜以来、じつによく働いていた。相羽は迷子が母親に出遭ったような気がした、と語っている。すぐさま明石にすべてを通報した。明石の宇敷艦長はおどろき、これ無電で三笠に打った。

（本当だろうか）

と、真之はその電文を見ながらくびをひねったほどだった。海戦の水域で敵の司令長官を拾う

塚本克熊中尉が敵艦に乗りこむために先方は人質として四人の士官を連に送ってきている。しかし敵艦内にいる兵員のなかで、発作的にどういう行動に出る者が飛び出すかわからないのである。

塚本は銃剣をもった兵員十人をつれてベドーウィに乗りこんだ。

案外、武装解除はすらすらといった。上甲板はそれでよかったが、塚本としては艦内をぜんぶ検分しておかねばならず、艦の下の方へ降りようとした。

ところが、大きなロシア水兵が「入るな」と遮さへぎるような態度を示した。塚本はかまわずに入った。ある部屋の入口にも、ロシア兵が何人か立っていた。その連中が、拝むまねをして入ってくれるな、と哀願するのである。その連中がくちぐちに喋しゃべっていたが、塚本にはむろん意味が通じない。ただ、

「アミラル、アミラル」

という言葉が、耳にひっかかった。英語でいう提督アドミラルのことではないかとおもい、扉をあけて入ると、薄暗い電燈の下で、頭を繻帯で覆った人物がベッドに臥ふせていた。軍服の金モールがみえた。そのまわりにも四、五人の金モールの人物が立っていた。塚本はまさかとおもったが、

「かれはロジエストウエンスキー中将であるか」

と、英語できいた。立っている金モールの何人かがイエスとうなずいたので、塚本は戦闘中もおぼえなかった異様な戦慄が胴を走った。とりあえず本艦に手旗で連絡した。

「そんなはずがない、と私は思いました」

にもつとも興味ある理論をのべた者もいた。

「このふねは駆逐艦ではない。病院船だ」

ということである。病院船である証拠には提督とその幕僚たちという負傷者が乗っている。というのだが、どの艦にも負傷者が無数に存在し、ベドーウィだけが病院船であるとはいえなかった。しかし病院船であるためには武装を無くすという形式をとらねばならない。そのために各砲の覆いをかけっぱなしなのである。

ベドーウィはついに機関をとめた。機関をとめるというのが戦時国際法による降伏の意思表示のひとつである。と同時に、マストに万国信号をかけた。

「ワレニ重傷者アリ」

この信号を漣からみていた相羽少佐は混乱した。敵はすでに降伏しているのか、とはじめて気づいた。かれが見誤っていたことは、先刻、マストにあがった旗である。かれは戦闘旗だとおもっていた。しかしよくみると、それは食堂の白いテーブル掛けであった。

相羽は打ち方やめを命じ、伊藤という先任の中尉にむこうへ行かせることを命じた。伊藤は出かけて行ったが、言葉が通じなかった。絵の上手な塚本中尉は、英語にも堪能だった。

相羽は塚本をやることにした。この時期でもなおかれはあのブリキのような駆逐艦に敵の提督が乗っているとは夢にもおもわなかった。

このしごとは、よほど勇氣が要った。

「落着いたものだな」

と、艦長の相羽は敵の態度に感嘆して声をあげた。よほど近距離にならないと駆逐艦の射撃はあたらないのである。敵はそれを知っていると相羽はおもったのである。しかし相羽は敵に対する観測を一つだけ欠いていた。敵の砲は覆^{おほ}いをかけられているのである。しかしそれを相羽の不注意とするわけにもいかなかった。戦闘中の駆逐艦が砲の覆いをかけっぱなしということがありうるだろうか。

駆逐艦ベドーウィでは騒ぎがおこっていた。

合戦準備の命令も出なかった。たまりかねた兵員たちは砲のそばへかけ寄り、覆いをとろうとした。しかしすぐその動作が禁じられた。水兵たちは騒いだ。なかには小銃をもち出してきて、弾込めをしている者もいた。おそらくこのまま捨てておけば反乱になったであろう。いざとなれば士官たちよりかれら水兵のほうが愛国心が強烈だったというところに、帝政ロシアの構造のむずかしさがあった。この国はこの当時の日本がすでに国民国家を成立させていたのに、まだ王朝のままの状態でいた。士官は王朝の構成員であったが、水兵は単に民衆にすぎなかった。民衆が政治をにない、国家の安危を共同に分担するという政体ができないかぎり、近代にあつては他国と近代戦をやるというのは不可能であるかもしれない。士官たちは八方に走って水兵たちをなだめた。

「責任は自分がもつ」

といった者もあれば、「提督の命令だ」といった者もある。事実、提督は命令していた。さら

ウラジオストックへゆくならゆくで、たとえば「ワレニ後続セヨ」という命令がはねかえってくるはずである。それもなかった。

(しかたがない)

シエフスキー中佐は何事か、不快な翳^{かげ}が胸を横切った。(単艦で戦うのみだ)とおもった。

中佐は合戦準備を命ずると同時に四つの汽罐^{かま}の蒸気をあげさせ、速力をあげた。

これに対し、陽炎は追跡した。追いつがって砲を射ったがあたらない。グロージヌイも逃げつつぶつ放した。が、双方あたらなかった。どの国の駆逐艦も射撃がへたであった。はげしく動揺しつつ全速で走っているなかで照準が困難なうえにすぐれた射手は戦艦にあつめられていた。砲戦は二時間つづいた。距離は四千メートルから六千メートルであった。

これでもって、陽炎はとりにながしてしまったのである。バルチック艦隊の総兵力のうち、東郷の手からのがれてウラジオストックに遁入できたのは、かつて極東総督用の遊覧ヨットに軽砲を積んだ巡洋艦アルマーズと二隻の駆逐艦だった。グロージヌイはわずか二十六ノットという速力で、これにひきかえ陽炎は三十ノット近い速力を出すことができた。なぜとりにながしたかということについては、いっさいの資料は沈黙している。

漣は一本マストで風を切って、どんどん近づいた。

鬱陵島が右にみえる。午後四時四十五分、四千メートルの距離まで近づき、射撃を開始した。命中しなかった。ところがベドーウィは逃げてはいても、その砲門をひらこうとしない。

相羽恒三艦長はつぶやき、

「合戦準備」

と、ふりかえって叫んだ。艦内にひとびとが走り、それぞれの配置についた。艦は三十ノットに近い物凄いスピードをあげた。海面までわずか二・五メートルしかないこの駆逐艦はたちまち上甲板に波が走った。

相羽は、攻撃の目標の分担をきめた。後続する陽炎に対しては、敵の後続艦（グローズヌイ）をやれと命じた。

一方、ロシア側でも気づいた。

後続している駆逐艦グローズヌイの艦長アンドレイ・シェフスキー中佐はむろん戦う気であった。双方駆逐艦であり、双方二隻ずつである。この状況で砲戦をしない軍人はどの国にも存在しないし、軍人というのは士官も兵もそのようにして教育されてきた。しかも同中佐はいまは艦長という国際法からいっても一艦をもって国家を代表する職分があり、戦闘中においてもこの艦に關するすべての名譽はかれの指揮ひとつにかかっている。

かれは速力をあげてベドーウイの右舷すれすれにならび、

「イカガスベキヤ」

と、手旗をもって問うた。

「ウラジオストツクへゆくべし」

命令はそれだけである。本来なら戦闘についての命令があるはずなのにそれは無かった。また

てきたのであろう。かれの戦略目的によれば「数艦でもいい、ウラジオストックに走りこめばそれ自体が日本の戦略を大きく拘束する」ということであつた。そのとおりであつた。

それなら、この地点からうまく突つ走れば同港まで一昼夜半である。ところが、かれはその戦略よりも自分の生命のほうを貴重とした。かれの移乗作業のために、この四艦を一時間以上拘束した。ドンスコイには移乗用のボートをおろさせた。

提督はかれのお気に入りの駆逐艦ベドーウィに移つたとき、

「この艦に白旗があるか」

ときいたという話がある。この重大な発言は幕僚がそういつたともいわれ、提督自身が唇を動かしていつたともいわれている。提督の発言だという説には、信号兵一人、伝令兵一人の証人があつた。いずれにしてもいざという場合にはこの提督とその幕僚は降伏するつもりでいたのである。

事態は、よく構成された演劇のように進行した。連の塚本克熊中尉が、午後四時すぎ、かれが宝物のようにしているブリズム式双眼鏡でもつてその煤煙の正体が敵の駆逐艦であることをとらえた。

二隻いた。後続するのは駆逐艦グローズヌイであつた。他の二隻の艦（ドンスコイとブイヌイ）とはすでに別れてしまつていた。

（四本煙突、二本マスト。ロシアの駆逐艦に相違ない）

やしげな幕僚会議には記録者のセミノフは参加せず、昏睡していたとしている。従ってセミノフの手記はこの機微を語るくだりについては巧妙に海霧を漂わせて自分の気持の正体を晦ましてゐる。

——どの艦をえらぶか。

ということになった。常識でいえば装甲された六二〇〇トン・十七ノットの巡洋艦ドンスコイをえらぶべきであろう。巡洋艦だけに石炭搭載量も多く、ウラジオストックまでの燃料の心配はない。途中砲戦しても装甲があるため駆逐艦より安全であつた。

コロメイツェフ艦長も、海軍の専門家としての当然の判断から、「ドンスコイにお移りねがえますか」と提督に念のためきいてみたのである。

ところがロジェストウエンスキーは、はっきりと、

「ベドーウィに移る」

といった。駆逐艦をえらんだというのも異様だが、ベドーウィの艦長バラノフ中佐が、あの海戦中、あくまでも旗艦スワロフの通報艦としてそのそばを並航していなければならぬのに混乱にまぎれて離脱してしまつた男だつた。提督はそのことをこそ責めるべきであつたのに、逆に座乗艦としてベドーウィをえらんだのは、しばしば臆測されているように、バラノフ中佐というこの専門技術に乏しい、しかしながら官庁の出入り商人のようにおべっかのうまいというその点を見こんだのかもしれない。

それにしてもロジェストウエンスキーという男はなんのためにその大艦隊を極東までひっぱつ

このあとコロソ参謀長は、わざと艦長にはいわずウールムという大尉をつかまえて「白旗を用意せよ」といった。敷布^{シツブ}でいい、ともいった。同大尉はその命令に従って調達した。

が、艦長はその直後、この事実を知り、敷布をひき裂いて海中にすて、

「この悲劇中に喜劇を演ぜんとするか。自分はロシア海軍の艦長である」

と、叫び、艦橋へあがってしまった。

——あの男は、だめだ。

と、ロジェストウエンスキーは、この駆逐艦の艦長コロメイツェフ中佐の硬骨を不愉快におもったかとおもわれる。コロメイツェフ中佐は敷布をひき裂くときに、

「この艦の指揮権は艦長としての自分にある。わがロシア海軍の司令長官を敵国の俘虜^{ユリョ}としてひきわたすことはできない」

といったのである。

この言葉はすくなくとも幕僚たちを失望させたことだけはたしかであった。

夜があけると、小さな幸運が訪れた。

水平線上に三隻のロシア軍艦が煤煙^{ばいえん}をあげてすすんでいるのをみた。装甲巡洋艦ドンスコイと

二隻の駆逐艦だった。駆逐艦はグロズヌイと、なんと提督がもっとも寵愛していたバラノフ中佐を艦長とするベドーウィであった。

すぐ信号によって連絡がとれ、四隻の軍艦は洋上でひとつになった。ついでながらこの間^{かん}のあ

「ボートの櫓にでも結びつけろ」

と、憤然と声を放ったというから、この提督の精神の構造は理解しがたいものがあつた。長官旗をかかげるならこの駆逐艦ブイヌイのマストにこそひるがえすべきであつた。多数の乗員をスワロフに置きすていながらなおスワロフに長官旗をかかげさせようというのは、日本側の注目を漂流するスワロフにあつめさせて自分だけはこのめだたぬ駆逐艦で逃走しようというつもりであるのかもしれない。

黒い塗料を塗られた四本煙突、二本マストのこの駆逐艦ブイヌイは懸命に走つた。

ところが夜半、機関が急に力をうしないはじめてたのである。

提督に艦長室を提供してしまつたコロメイツェフ中佐はずつと艦橋にいたが、様子がおかしいといふので機関室に降りてみると、蒸氣の力がうんと落ちていた。汽罐に海水を使用しているために滓が厚くなり、このため石炭をいくら焚いてもおもしろい出力があがらないうへ、他に作動しない部分も出ており、この調子では手持の石炭が計算よりも早くなくなりそうであつた。

艦長はやむなく幕僚たちの部屋へゆき、この旨を報告してふたたび機関室にもどつた。

その間、幕僚たちのあいだで降伏の申しあわせができあがつたのである。この艦を日本のどこかの浜に着け、提督をボートで上陸させたあと、艦を自沈せしめようというもので、コロ参謀長はその結論をもつて提督の部屋へ行つた。提督は、

「自分に顧慮するな。諸君がこのさい必要であると信ずる決心を断行せよ」

と、意味やや不明なことをいった。要するにまかせるといふことであつた。

ど駆逐艦らしかった。二隻いた。

この先頭の駆逐艦に、ロジェストウエンスキーが乗っていたのである。もし塚本のプリズム双眼鏡がなかったとすれば敗残の提督はうまくウラジオストックに逃げることでできたであろう。

ロジェストウエンスキーがこの水域まで到達したことについての経緯^{いきざつ}には、多少の謎がふくまれている。

二十七日午後五時半すぎ、旗艦スワロフを捨てたかれは、かれがかねて憎悪していたコロメイツェフ中佐の駆逐艦ブイヌイに移乗した。この艦長のふねに身を横たえねばならぬというのは、提督にとって居心地がよくなかったにちがいない。

提督はせまい艦長室に運ばれ、軍医の手当をうけた。そばにいたセミョーノフに瞳をむけると、

「指揮権をネボガトフに。――」

と、聞きとれぬほどの小さな声でいった。はじめて指揮権移譲についての意思を明瞭にした。しかし第三戦艦戦隊をひきいているネボガトフがどこににいるのかわからなかった。

ブイヌイはたまたま出遭った他の艦に対し、手旗信号をもって、「ネボガトフ少将の旗艦ニコライ一世をさがし出して以下の旨をつたえよ」と、命じた。

提督はさらに、自分が捨てた旗艦スワロフの長官旗を降ろすな、と命じた。しかしスワロフの現状は長官旗をかかげるようなマストなどなかった。コロン参謀長がその旨をいうと、

カール・ツァイス社が開発したプリズム式のこの双眼鏡が驚異的な倍率をもっているということは塚本はきいていたし、この双眼鏡は東郷しかもっていないことも知っていた。実際に手にとつてのぞいてみると、想像をはるかに超えるほどのものであった。

塚本はそれがほしくてたまらず、

——おなじものがほしい。

といって、さっそく銀座の玉屋に注文した。玉屋はそのころ、横浜の十番館のコロソ商会のサブ・エージェントをしていた。この時期、コロソ商会にたまたま一つか二つ在庫があったのであらう。おどろいたことにそれが対馬の駆逐艦の基地にいた塚本あてに送られてきたのである。値段は、三百五十円であった。

「そのころの中尉の給料の一年分でした」

と、未亡人のマスさんはいわれる。マスさんは明治十九年うまれで、この稿のこの時期、八十歳である。

この塚本中尉が、自慢のプリズム双眼鏡で四方をながめていた。他の者は艦にそなえつけの本メガネといわれる望遠鏡でながめていた。

午後二時十五分ごろ、鬱陵島に近づいた。このとき前方沖合に二すじの煙が空をうすく染めているのを塚本のプリズム双眼鏡がとらえたのである。

「あれは。——」

と、塚本は言葉もどかしく叫び、相羽に自分の双眼鏡をわたした。相羽がのぞくと、なるほ

のうとは打ってかわったような快晴で、視界がよくきいた。

針路は、東郷に命ぜられているように、鬱陵島である。漣と陽炎は、懸命に海面をひっ搔きながら航走したが、敵艦どころか味方の艦影も発見できなかった。

昼も過ぎてしまった。

この漣に、塚本克熊という、広島県出身で、明治十三年生れという若い中尉が乗っていた。未婚だったが、婚約者がいた。マスという少女で、塚本はひまさえあればこの婚約者に手紙を書いていた。

塚本は画才があつた。とくに油絵の腕が素人ばなれしているほどに達者で、勤務の余暇にはよくスケッチしていた。かれは少年のころ東京美術学校へ行つて画家になろうとおもっていたが、しかしちよつとしたはずみで兵学校を受験する気になり、うまく合格したために海軍士官になつてしまった。もつとも長男の塚本張夫氏は画家だから、子息の代になつて塚本克熊の夢は実現したといえるかもしれない。ただし、塚本克熊が画家になつていればロジエストウエンスキーは捕虜になるような運命におち入らずに済んだであらう。

塚本中尉の配置は、開戦後、はなやかな現場から遠かつた。「海門」という古い海防艦に乗つて機雷をとりのける掃海のしごとをしていた。その海門が触雷して沈んでからは、他の乗組員とともに一時、三笠に収容されていた。

その三笠で、東郷を知つた。塚本は東郷にせがんで、その双眼鏡をみせてもらった。ドイツの

て走った。が、すぐ気づいて味方をさぐすべく他のほうに転じたが、ふたたび左舷に三隻の艦影を見た。

「あれは明石です」

という者がいた。明石（二七五五トン）というのは日本の三等巡洋艦だったが、左舷に出現したのはあとでわかったことだがロシアの巡洋艦だった。魚雷発射には絶好の距離だったが、しかし相羽はひるんだために好機を逸し、艦影は去った。

漣は、諸事、ついていかなかった。

味方をさがすうちに艦そのものが故障したのである。

相羽はとりあえず蔚山港で艦を修理しようとおもい、いそぎ戦域を離れた。

蔚山港に入ると、似たような事情で駆逐艦陽炎かげろふも入ってきていた。陽炎は第五駆逐隊に所属していて、両艦は隊がちがっていた。

「どうも、運がないよ」

と、相羽少佐は陽炎へ話しかけた。陽炎の艦長は大尉で、吉川安平といった。吉川はしきりに首をふっていた。ボンクラ同士が吹き寄せられた感じで、あいづちを打つ元氣もなかったのである。

両艦とも故障がなおったのは二十七日の夜があけてからだった。

二艦で臨時に隊を組もうということになり、階級が一つ上の相羽が仮の司令になった。漣がさきに立ち、曙光にかがやく海へ出て行った。海上は昨夜までのうねりは残っていたが、天候はき

この運命劇の主役として登場するのは、三〇五トンの小さな駆逐艦だった。漣さざなみという艦で、相羽恒三あいばつねぞうという少佐が艦長だった。

漣は東雲しののめ、薄雲、霞かすみとともに四隻で仲間を組み、第三駆逐隊を構成している。司令は吉島重太郎中佐であった。

この二十七日の夜は星がなく、海上はまったくの闇であった。ときどき光るロシア艦の探照燈をみつけては走った。相羽はこの索敵行の心境をこう語っている。

「海上はおそろしく静かで、マストに騒ぐ風の音と、機関の響きだけが物音のすべてであった。波浪にもまれてゆくうちに生死のことなどはわすれてしまった。功名をしようという欲もなかった。ただ日本国家に仇あだをなす敵をほろぼしたいという一念のみで、いまこのときのことを思いだすと、自分にもあのような気高さがあったのかと、ふしぎな思いがする」

という。

この駆逐隊は、四隻の敵艦隊をみつけた。魚雷を射つのに敵と向きあったかたちが効果的だとされているから、駆逐艦は敵の単縦陣のまわりを一時間ばかりぐるぐるまわり、ついに敵の嚮導艦のへさき四百メートルというところを突っ切るといふ冒険をおかして魚雷を発射した。敵もこれに気づき、小口径砲をさかんに撃ってきたが、距離があまり近すぎるために、砲弾はみな駆逐隊のマストを飛びこえてしまい、駆逐隊に被害はなかった。

ところがこの運動中、漣だけは味方にはぐれてしまったのである。敵の艦隊は、はじめ気づかなかったのだが、左舷に四隻の駆逐艦をとまっていた。漣はそれを味方だともい、くつつい

この駆逐隊も、他の艦艇と同様、残骸のスワロフを発見し、フル・スピードで接近した。この時刻は、あとで翁が記録と照合したところではロジェストウエンスキーが駆逐艦へ移乗中だったかもしれないという。「しかしこちらの反対側でやっていたのか気づかなかった」。フォン・クルセリ少尉候補生が放った艦尾左舷の小口径砲の閃光もみた。閃光と同時に不知火に黒煙があがった。命中したのではなく、炭塵^{たんじん}があがっただけであった。

「スワロフの繩梯子^{リギン}に水兵たちが鈴なりにぶらさがっていて、しきりに助けを求めるのです。その顔をいまでもおぼえています。助けようにも戦闘中で不可能でした。スワロフを他にまかせてさらにゆきますと、波間で助けを求める声がしきりにきこえました。目をつぶってゆかざるをえませんでした。赤い艦底を出した敵艦がうかんでいました」

と、以上は徳田翁のはなしである。

砲弾と魚雷とスクリューに掻きまわされたこの海域において、二十七日とその夜、そして二十八日にかけて、無数のありうべき現実群が発生した。それと同量のややふしぎな事象^{むらが}などが簇^{むら}りおこった。

しかし主決戦の翌二十八日においておこった以下の事象ばかりは神と悪魔が合作してもおこりうべからざる運命的な事件だったかもしれない。

日本海という広大な洋上において、ロシア側の主将のロジェストウエンスキーとその幕僚がぜんぶ捕虜になったのである。海戦史上、類のないことであった。

同艦乗組の軍楽手で戦闘中伝令をつとめた河合太郎氏の記憶では、二十七日夕、戦闘がおわったとき、上甲板に立って、「お母さん、無事でしたよ」と叫んだという。河合氏が下士官浴室をのぞくと、そこは死体安置所になっていた。戦死者が重ねて積みあげられており、浴槽には水が張られていた。水は真っ赤になっていた。艦の動揺とともにゆれていた。

艦は波で動揺しているだけではなかった。機関による振動が加わっていた。レシプロ式蒸気機関を積んだ戦艦というのは、ふだんは振動を感じさせない。馬場良文氏は大正四年の海軍兵学校入校だから日露戦争の参加者ではないが、レシプロ式軍艦の経験がふり。馬場氏によると、「方向転換をしたり速度を変えたりするときにはシューシューという蒸気を吹く音がします。しかし機関による振動は全速くらいにならないと出て来ません」という。河合氏の記憶ではこの夜、鬱陵島にむかって突っ走っている三笠は、

「艦はガタガタと不気味に振動していた」

というから、汽罐をいっぱいに焚き、全速力をあげていたのであろう。

夜戦による水雷攻撃という、いわば落武者狩りを担当していた五十余隻の小艦艇は敵艦のサーチライトと砲撃をおかして駆けまわっていたが、その状況下にいた徳田伊之助翁のはなしをかかげる。徳田翁は明治十三年、山口県うまれ、同三十二年海軍兵学校入学、この戦闘においては中尉で、駆逐艦夕霧の乗組だった。

四隻で隊を編成している。司令は広瀬順太郎中佐で不知火、叢雲、夕霧、陽炎で、二四七トンという小さなふねだった。

鬱陵島

——全艦隊は鬱陵島^{うつりょうとう}に集合せよ。

——駆逐隊・艇隊は夜襲。

というのが、東郷が大小すべての艦長・艇長に徹底させていたプログラムだった。

この日から翌二十八日にかけて、この海域における無数の現場に居あわせたひとびとの感想をラ
ンダムに羅列しておく。

当時三笠乗組で三インチ砲の部署で働いていた四等水兵石原清松氏の記憶では、

「その日（二十七日）の戦闘に疲れて、夜は早くから休みました。翌二十八日朝、〃総員起し〃で、上甲板の清掃が始められました。そのとき各部の損傷がまったくひどいのにあらためて驚きました。この日（二十八日）は前日とはうって変わって風は凪^{なみ}ぎ、波もおだやかでした」

と、あって、石原氏のこの記憶ではこの夜から翌朝にかけての三笠の艦内は拍子ぬけするほどに日常的である。

らかれの友人が懸命に押しとどめたためようやく思いとどまりはしたものの、結局、戦後に出生した長男の大を僧にすべくしつこく教育し、真之が大正七年に病没するときこの長男にかたくそのことを遺言した。大は成人後、無宗派の僧としてすごした。この海戦による被害者は敵味方の死傷者だけでなく、真之自身もそうであつたし、まだ未生のその長男の生活もこの日から出発したといえる。

じつは真之は艦橋から降りたあと、艦内を一巡してしまつたのである。

いたるところに弾痕があり、あの軽やかな濃灰色で装われた艦体は砲火と爆煙にさらされたためにひどく薄ぎたない姿になっていた。

負傷者が充満している上甲板は、真之が子供のころに母親からきかされておびえた地獄の光景そのままだった。どの負傷者も大きな砲弾の弾片でやられているために負傷というよりこわれもので、ある者は両脚をもぎとられ、ある者は腕がつけねから無く、ある者は背を大きく割られていた。どの人間も、母親のお貞がかれをおびえさせた地獄の亡者の形容よりすさまじかった。

かれは、昼間、艦橋上からみた敵のオスラービアが、艦体をとごとく炎にしてのたうちまわっていた姿の凄さを同時におもいだした。真之はあの光景をみたとき、このことばかりはたれにも言えないことであつたが、体中の骨が慄えだしたような衝撃を覚えた。

（どうせ、やめる。坊主になる）

と、みずから懸命に言いきかせ、これを呪文のように唱えつづけることによつて、その異常な感情をかううじてなだめようとした。真之は自分が軍人にむかない男だということを、この夜、ベッドの上で泣きたいような思いでおもつた。兄の好古はいま満州の奉天付近にいますでつた。その好古へのうらみが、鉄の壁にさえぎられた暗く狭い空間のなかで灯つたり消えたりした。

秋山真之という、日本海軍がそののちまで天才という賞讃を送りつづけた男には、いわばそういう脾弱さがあつた。かれは戦後、実際に僧になるつもりで行動を開始した。しかし小笠原長生

のかたちをなさないまでに混乱していることだけはたしかである。それらが、広大な日本海のほうばうに散りつつあるであらう。それらを一艦々々捕提してゆくのは今夜の水雷攻撃の成否にかかっており、さらにあすの第二日目の決戦にかかっていた。

参謀長の加藤友三郎は、

(妙なやつだ)

と、真之の挙動をみて、にがにがしく思わざるをえなかった。

真之のやることは、どうみても軍人らしくなかった。第一、戦闘終了後に加藤とひとことも口をきいていない。机にむかつて何か書きつづけているのはいいとしても、従兵が食事をはこんでくると、食器類を書類のわきにひきよせ、物を食いながら筆を動かした。

やがて仕事を終えると、加藤にあいさつ一つせず、ぷいと自分の部屋へひっこんだ。

真之は仰臥した。相変らず靴をはいたままであった。疲れきっていたが、神経が変にたかぶって、ねむれそうになかった。かれはすでにこのとき、作戦家でも軍人でもなくなっていたといえるかもしれない。

(このいくさが終われば)

と、そのことを考え、それを考えることで自分の神経のたかぶりを鎮めようとしていた。この状態ではとうていあす再び艦橋に立つというような自信はなかった。かれがこのとき懸命に自分に言いきかせていたのは、この戦争がおわれば軍人をやめるということだった。

ろう覚悟でいた。

——非常な決意をもっておられたのだということはこのときはじめて感じた。

と、鈴木は語っている。

東郷は長官室に入ると、緑茶を一杯飲んだ。これが、かれがとほうもない海戦をやつてのけたあとの唯一の終了儀式だった。

真之は幕僚室に入つて、戦闘概報をまとめはじめた。他の若い参謀たちは東京へ送るべき電文の起草にとりかかった。

参謀長の加藤は、海図を見おろした。室内は銀行の店内であるかのように静かで、どの男の動きも事務的だった。たれも大声をあげず、また戦果についての乱雑な感想を述べあたりもしなかった。たれもが疲れきっていた。真之などはまっさきに足を投げだしてソファに寝ころがりそうな男だったのだが、それが机にむかつて鉛筆をうごかしつづけていた。あれだけの海戦が、まるで白昼夢であつたかのようにであり、たれの心にもどういふ感動もあたえていないようでもあつた。

このぶきみすぎるほどに静かな空気は、かれらが身につけている規律正しさというようなものでは説明ができなかった。

理由は、かれらの仕事はまだ緒ちづに ついたばかりだったからであらう。あの海戦ではたしかに五隻のおそるべき戦艦のうちの四隻までは沈めた。群小の艦の何隻かは沈むか、沈んだも同然になつているかもしれないが、詳細はまだわからなかった。敵は四十隻あまりいたが、それらが艦隊

真之は艦橋を降りながらおもった。

三笠に乗組んでいる鈴木重道軍医総監（少将）は、下甲板後部居住区に充滿している負傷者の手当に忙殺されていた。

この日の死傷者は三笠が旗艦だっただけに他の艦にくらべて圧倒的に多く、死傷百十一人にのぼった。ついで殿艦の日進が多く死傷九十六人である。

鈴木が後年語ったところによると、かれが治療をしているところへ、ちょうど戦闘を終えた東郷が艦橋からおりてきて下甲板後部居住区を通りかかった。左右に負傷者がびっしり横たわり、一人がやっと通れるくらいの通路があげられている。東郷は、長官室へもどる途中、このあたりへたちよったのである。驚嘆すべきことだがこの人物の表情は、戦闘中も、いま左右の負傷者をかきわけるようにして通っているときも、すこしもかわらなかった。

一人の負傷者のそばにしゃがんでいた鈴木が立ちあがって、

「だいぶ怪我人ができました」

こというと、東郷はやっと立ちどまり、

「もつとできるつもりだった」

と、いった。鈴木に言っているのだから自分に言いきかせているのだから、どちらでもとれる呟き声であった。東郷の実感であったであろう。この日の戦法では三笠に敵の主砲の砲弾が集中する。彼自身も艦橋で死ぬつもりで立ちつくしていたのだし、最悪の場合は三笠もろとも沈むであ

であるがために東郷の主力はこれを半ば黙殺し、第一、第二の戦艦群ばかりに攻撃を集中したのである。

東郷は、午後七時二十分、この日ずっと立ちっぱなしにしていた艦橋からはじめて靴の底を離した。

真之も、うごいた。

加藤も動き、疲れの浮き出た横顔をみせて左舷の沖をちよつと見、やがて東郷を先導するようにして艦橋を降りた。

海上はもはや海戦が不可能なまでに暮色が濃くなりはじめていた。三笠はなおも激しく波を切っており、二番艦の白波が暮色のなかに見えた。三番艦は艦影もみえなかった。針路は北をさしている。

海戦は、真之のいう、

「七段構え」

の第一段目を終了した。第二段目は夜襲である。夜襲は五十余隻の駆逐艦・水雷艇のうけもちであった。かれらは夜明けまで一睡もしないであろう。

夜が明ければそれらの小艦艇はひっこみ、ふたたび主力艦隊が舞台に出て第二日目の決戦をおこなう。そのために東郷の主力艦隊は今夜高速力でウラジオストック方向に走り、敵の残存艦隊の前途を扼してしまわねばならないのである。それが、第三段目である。

(第三段目だけでおわりそうだな)

に交針せしめたが、この交針の直前、富士が放った十二インチ砲弾が六千メートルを飛んで戦艦ボロジノに命中し、汽罐が爆発し、つづいて火薬庫に火がまわりついに大爆発をおこし、ほとんど一瞬で沈んでしまった。すでにボロジノはこの時期までに艦内の将校はほとんど戦死して指揮者もいなくなっていた。この艦は文字どおりの轟沈であったため生者も死者もことごとく艦とともに沈み、その沈没水域で日本の駆逐艦が救いあげた浮遊者は水兵ただ一人であった。

さらにこの日、ずっと火災と左舷傾斜にもだえつづけていた戦艦アレクサンドル三世も、ボロジノより二十分ばかり前に沈没した。

これによってバルチック艦隊の決戦兵力であった新式戦艦五隻のうち四隻までが沈み、ノビコフ・プリボイの乗っている戦艦アリオールのみがわずかに暮色にまぎれてのがれ去ることができた。もつともアリオールは二門の小型砲をのぞき備砲の大部分を破壊され、牙をくだかれた狼然になっていた。

ネボガトフ少将のひきいる旧式戦艦四隻（第三戦艦戦隊）は幸運にも現場を脱することができた。

「ワレニ続航セヨ。針路、北二十三度東」

と、ネボガトフは旗艦に信号をあげた。ネボガトフにすれば夜を徹して蒸気をあげ、ウラジオストックに逃げこむつもりだった。いずれも旧式および小型戦艦で装甲はもろく、速力は遅かったが、神がもし恩寵をあたえてくれるとすればウラジオストックへの到着は可能かもしれない。この五月二十七日の昼間においては神よりも東郷が恩寵をあたえてくれた。第三戦艦戦隊は旧式

水雷艇というのはあたかも指一本のように弱々しいものだが、しかし五本の指を握って拳固にすれば敵への打撃力は強くなるという考え方で、四隻ほどかたまつて行動することになっていた。

富士本梅次郎少佐は、第七十三号艇に乗り、四隻のちっぽけな艇を指揮していた。かれらは敵と戦うよりその前に風浪のために覆没する危険性とたたかっていたが、午後七時すぎ、スワロフを発見した。そのころ、日本の第三艦隊に属する小さな巡洋艦たちがすでにスワロフを発見しており、中小口径砲をもって射撃していた。その中小口径砲はカムチャツカを破壊し、あとで魚雷をもって沈めることができたが、しかしすでに漂泊する廢墟とはいえ、戦艦のスワロフは容易には沈まなかった。

富士本の四隻の水雷艇は浪を蹴って直進し、三百メートルの至近距離まで近づき、数本の魚雷を送った。二本が命中した。

そのとき、スワロフにたった一門残されていた艦尾の二インチ砲が最後の火を吐いた。少尉候補生フォン・クルセリが発砲したものであり、この最後の咆哮ほうごうがおわるや、艦体は左舷が海中に入り、ついで赤い艦底をみせたかとおもうと大きな渦をのこして姿を消した。富士本はその報告において「スワロフの最後の砲火」について印象的な一句を書き入れている。

三笠の東郷が、この日の昼間戦闘の終了を命じたのは、午後七時十分である。

三笠がまず砲撃をやめた。

つづく各戦艦がつぎつぎに射撃をやめ、同二十分、予定どおり夜戦配備に移るべく艦隊を北方

送りつづけたぼう大な量の手紙はロジエストウエンスキー航海の貴重な記録として後世にのこされた。

ポリトウスキーの戦闘中の職務は、

「医務の補助」

ということになっていた。戦闘中、セミヨーノフ中佐が目撃したところによると、ポリトウスキーは手術室で白衣をつけ、赤十字の繻帯を手にもっていた。かれはこの姿のまま手術室付近で戦死したかのである。

が、ポリトウスキーの妻が戦後、たれからきいたのかはわからないが、この技師は艦体にあけられた穴をふさぐために艦底にもぐりこんで指揮をとっていたという。ロ提督が駆逐艦に移るとき、生き残った幕僚たちはみな従ったが、この技術幕僚には声がかからなかった。もしその妻の得た消息がたしかであるとすればかれは艦底にあって艦を救うために作業をしていたのであり、そのまま艦もろともに沈んだことになる。ポリトウスキーはその妻に対してロジエストウエンスキーがいかに冷酷な提督であるかということを書き送りつづけたが、最後にそれを裏付けるような仕打ちに遭って、生から死へ送りこまれたことになる。ただしこの若い造船技師はその死後、その提督に対する痛烈な告発者になった。その妻が、この造船技師が送りつづけた手紙をことごとく出版したからである。

夕闇がせまるころ、日本の駆逐艦や水雷艇が魚雷を抱いて戦場をかけまわりはじめた。

このころ、日本海軍にあっては水雷戦の特殊なシステムが考案され、実施されていた。個々の

の用心のために筏いかだのようなものを縛着ばくちやくした。

かれはその提督ぐるみの筏を艦の後方まで運び、後部六インチ砲塔前の切断舷という断崖のような形のところまでおろした。そこで駆逐艦ブイヌイがせりあがってくるのを待った。駆逐艦は小さい。戦艦の右舷舷門あたりまでとどくには大波にせりあげてもらうのを待たねばならないのである。

ついに、移した。

他の生残りの幕僚（参謀長、航海長、セミヨーノフ中佐など）も移った。

その機会に何人かの士官や兵員も飛び移ったが、しかし八百人以上の乗組員は艦に残った。もともとそのほとんどは提督が艦をすてたことを知らず、火の中か、戦時治療室かあるいは持ち場にいた。クルセリも艦を去らなかつた。

やがて駆逐艦ブイヌイは勢いよく後進をかけ、旗艦スワロフから離れた。

「ときに午後五時三十分だった」

と、セミヨーノフ中佐は腕時計によってその時刻を記録している。

ブイヌイは艦首を北東へむけると、全速力でウラジオストックにむかった。

戦場にスワロフが孤艦として残された。

左舷を海面へ傾けて漂泊している。艦内にはまだ数百の生命がのこされていた。さらに数百の死者も残っていた。その死者のなかに、造船技師ポリトウスキーもいた。かれが故国の若い妻に

規の士官養成コースを経ておらず、そのために平素はあまり役立っていなかった。ところが戦闘が惨烈になるにつれてかれは信じられぬほどに沈着になり、艦内のあちこちを燕のように飛びまわっては消火の指揮をしたりした。

セミヨーノフ中佐はあまり人好きのする男でなかったが、クルセリはこの男にはよくなつき、絶えず冗談を言い、茶目を演じた。セミヨーノフが艦がめちやめちやにやられている真つ最中に自分の私室の様子を見にゆこうとしたことがある。途中、クルセリに出遭った。

「ぜひご案内しましょう」

と笑いながら、地理感覚を狂わせるほどに破壊された場所を通りぬけて案内に立ち、部屋のそばまでゆくと、

「どうぞ御休息を」

と、片手をのばした。部屋は、歩も踏み入れられないまでにこわされていた。セミヨーノフはこの期になっても茶目をやめないクルセリに腹が立ち、怒鳴りつけて去ろうとすると、クルセリは追っかけてきてセミヨーノフの手に葉巻を一本にぎらせた。

「そいつは旨いですよ」

言いすてて駈け去ったが、そのクルセリが、ロジェストウエンスキーの運搬を指揮している。かれは翼のついた天使のように提督の前後左右をとびはねつつ運搬作業をすすめてゆくのである。

クルセリは提督を焦げた吊床ハンモックに寝かせ、吊床ごと縄でしばった。さらに万一海中に落ちたとき

触れざるをえなかった。ロ提督がこのときいった言葉は、

「フィリボウスキーをつれて来い」

ということだけだった。この大佐は航海参謀で、航海参謀さえ連れていれば提督は全艦隊をな
おも指揮する意思をもっていたというのちの証拠になる。「提督は名目だけでも全艦隊を指揮し
なければならなかった」とセミヨーノフは書いている。

思いあわせてみると、ロジェストウエンスキーは、世界史がもったこの最大規模の海戦におい
て一方の主将として指揮らしい指揮をほとんどすることなく、また東郷のためにその出演時間さ
えわずかしか与えられず、いまは運搬されるだけの物体になってしまった。

運搬は難事業だった。壊れた砲塔扉からこの大男がはこびだされたとき、作業に従事したひと
びとはすでにへとへとになつた。

この作業の指揮をとった士官は、艦長ではなかった。あの快活だった艦長はすでに死骸になつ
ていた。副長もおらず、他に二、三の大尉がそのあたりにうずくまっていたが、負傷のために動
けないのか、それとも艦をすてて脱出しようとする司令長官や幕僚たちに好意をもたなかったの
か、指揮をとろうとしなかった。

率先してこの指揮にあたつたのは少年のように幼い顔をした少尉候補生のクルセリだった。フ
オン・クルセリという茶目で敏捷で（びんしょう）ちよつと頭の抜けたところのある青年は、この旗艦のすべて
の士官のマスコットののような存在だった。かれは子供のときからの商船乗りで、海軍における正

なかでの勇敢な救助者としてよく働いた。

ブイヌイは、まさきに沈んだ戦艦オスラービアに対し、弾雨を冒して接近し、海面に漂う二百四人をすくいあげ、わずか三五〇トンという小さな艦に収容した。乗員と被救助者で艦は満員になった。そのあとブイヌイは味方の巡洋艦隊を発見し、その殿艦に追いつくべく走っていたとき、海上にただよっている旗艦スワロフの残骸を発見したのである。もともと形体こそ残骸だったが、まだ呼吸がのこっている証拠に、スワロフは微速ながらも針路を南にとつてうごいていた。

よろこびがスワロフに湧きあがった。

中央六インチ砲の砲塔の廃墟のそばにいたセミヨーノフ中佐は、右脚を骨まで砕かれていたが、このよろこびを口提督につたえるべくカカトで歩行し、やっと右舷中部砲塔にたどりついた。その中に入ると、口提督はすわっていた。頭を垂れていた。その様子は人間というよりボロギレのようであった。

セミヨーノフは、

「長官、駆逐艦がきました」

と、抱きつくようにして叫んだ。

ロジェストウエンスキーは、この旗艦からもこの戦場からも逃げ去るつもりであった。しかし単身逃げれば軍法会議その他の批判が悪くなるかもしれない。司令部をブイヌイに移すという形をとればよかった。口提督を英雄に仕立てるべき役割だったセミヨーノフでさえ、そのことに

義務も当然背負わされていた。

この海戦は、多分にロジェストウエンスキーにとっていわば劇的な人間表現であるといえだが、しかしいかなる劇作家でも以下のような偶然はそれを設定することをはばかるであろうともわれるほどの事態がかれを訪れつつあったのである。

ロ提督がもつともきらっていた駆逐艦の艦長がいた。ブイヌイのN・N・コロメイツォフというまだ三十八歳の中佐で、艦隊随一といってもいいほどの駆逐艦乗りとされ、かれの海軍知識や技術はそのまま英国海軍に編入されても一流の船乗りとして通用するだろうといわれていた。ただ自分の腕に自信をもっている人物にありがちな傲岸さ——上官に対しての——をもっており、兵員たちからもっとも人気のある艦長の一人でありながらロジェストウエンスキーからは、無能、陣列の素乱者^{びんらんしゃ}、勝手者などということばでもって罵倒されていた対象であり、あのながい航海中、しばしば信号旗でもって名指しでののしられた。ロ提督にとってはベドーウイのバラーフ中佐が善玉であり、コロメイツォフ中佐はそれと対蹠^{たいせき}的な悪玉で、しかも一般の士官や兵員からみれば逆であるという、安っぽい田舎芝居でもこれほどぬけぬけした設定はしにくいとおもわれるほどの設定のもとにかれらは存在していた。

コロメイツォフ中佐が指揮している駆逐艦ブイヌイはじつによく働いた。働くといっても、戦闘ではなかった。もともと駆逐艦は敵に肉薄して魚雷をぶっぱなす兵器であったが、ロ提督の戦法ではこの兵器をそのようにしては使わず、もっぱら救助用につかっていた。ブイヌイは乱戦の

ロ提督がなぜ数ある駆逐艦の艦長のなかでこの男だけを愛したのか、かれがロシア皇帝の代理者として演じたこの大海戦という叙事詩のなかでの疑問の数行とされている。ロ提督は、ベドゥイを通報艦にえらんでいた。伝令者としてあるいは秘書として、通報艦の艦長というのは無能な艦長ではつとまらなかつたし、また海戦中、旗艦に敵の砲弾が集中するため、その旗艦のそばにすることを義務づけられている通報艦の艦長というのはよほど勇気のある男でなければつとまらなかつた。上村における通報艦千早の艦長江口鱗六中佐はよくその任務をはたしたが、ロジェストウエンスキーにおける駆逐艦ベドゥイのバラノフはどこへ行ったのか、行方をくらましてしまっているのである。

バラノフ中佐は艦隊幹部のなかではもつとも評判のわるい男だが、ロ提督にだけは物売りの商人のような態度でとり入っていた。ロ提督も、

「すべての艦長はバラノフに見習え」

といったりしてかれが激賞する唯一人の艦長であつたが、しかしバラノフはじつは機械の軍艦というものには素人で、艦長級ではめずらしく海軍兵学校も出ていなかった。砲術も、魚雷も知らず、信じられないことだが艦長の主要任務である操艦もへたで、かれは自分の艦を繫留するのにつねに二十分も三十分もかかるといわれていた。

ロジェストウエンスキーがこのような人物を寵愛したのは、ひよつとすると海戦中旗艦がやられた場合に自分を收容してくれる男として期待していたのかもしれない。むろんその期待は見当はずれなものではなかつた。侍女のように旗艦にくっついてくるベドゥイには看護婦としての

ら、駆逐艦や水雷艇による夜戦にきりかえられた。すべてプログラムどおりに戦闘が進行した。

午後五時すぎ、旗艦スワロフは、かつてそのマストに聖アンドリュースの軍艦旗と、皇帝の指揮権を代行する司令長官旗がひるがえっていた光栄の新鋭戦艦とはとうてい思えないような姿で海面にうずくまっていた。

甲板の上は鉄屑の山であった。砲塔は裂け、艦橋は炎の中にあり、マストは吹つとばされていた。艦体は左へ傾いていたがそれでもなお沈没しないというあたりに、戦艦の不沈性を目標としたこの時代の造艦技術の水準のサンプルをみるような景況であった。

この時期、ロジエストウエンスキーは右舷中部砲塔の中で、剣闘に敗れた闘士のように横たわっていた。全身に無数の擦過傷があり、両脚もうごかなかった。頭部に仮^{かりほうたい}繃帯が巻かれていたが頭蓋骨の一部が陥没し、そのおびただしい出血が繃帯を赤く染めていた。意識はあった。しかしときどき薄れた。

スワロフは、孤艦になっていた。もともと工作艦カムチャツカだけがそばにいた。カムチャツカはこのあたりを通りかかったのだが、どうしていいのかわからず、手をつかねて眺めているといったかっこうだった。そのカムチャツカ自身も、煙突を吹っ飛ばされて黒煙をあげていた。

この海域には無数の忠誠と勇氣と臆病と裏切りが発生したが、ロジエストウエンスキーは、かれにとって自分に忠実な男として可愛がっていた一人の五十男に裏切られていた。駆逐艦ベドーウイの艦長N・W・バラノフ中佐だった。

敵にとつて都合のいいことに、煙霧がいよいよ濃くなつてきた。ロシア側の艦隊が、一艦々々灰白色の水蒸氣のあなたに消えはじめた。ときに午後四時四十分すぎである。

「水雷を出しましょう」

と、真之は参謀長の加藤にささやいた。敵の主力を傷めつけて戦闘力をうしなわせたあと、駆逐隊をくりだして魚雷による肉薄攻撃をやらせて撃沈するというのが、真之の立案した戦法であつた。むろん攻撃は夜間までつづき、終夜襲いつづける。よかろう、と加藤はうなずいた。

「駆逐隊・艇隊は、極力敵を襲撃せよ」

という信号が「三笠」のマストにあがつた。

この海域に出ていた日本のこの種の肉薄用の戦力は、駆逐艦が二十一隻、水雷艇が約四十隻であつた。かれらは主力決戦がおこなわれているあいだは戦場の外縁で風浪とたたかいながら待機していた。かれらは動きだした。むろんこの刺客のような艦艇群は陽のあるうちには肉薄しない。日没とともに敵艦を見つけ次第、それへ抱きつくようにして接近し、魚雷を放つのである。重装甲の戦艦を沈めるには砲弾をいかに集中しても困難で、水線下に魚雷をぶちあてることによつてそれが可能とされていた。

この間、旧式装甲艦や小型巡洋艦で構成されている第三艦隊は主として敵の似たような艦種をねらつてはこれを攻撃しつつあつた。

東郷、上村の主力艦隊はこのあと何度か敵を見うしない、あるいは発見し、戦闘をくりかえしていたが、午後七時十分、ついに日没に近づいたため、発砲を停止した。主力による昼間戦闘か

と、三笠の艦橋上で砲術長の安保少佐がいった。

わずか三分後に、五百メートルちぢまった。この六千五百メートルの射距離で、三笠以下の戦艦戦隊の右舷の砲門が轟然と火を噴きあげた。

上村の巡洋艦戦隊はその左前方に出て敵をつつむようにして射撃を開始した。

ロシアの戦艦群はもはや艦隊の体^{てい}をなさず、四分五裂した。

三笠はさらに接近し、ついには二千メートルという信じがたいほどの距離にまで近づき、火砲だけでなく魚雷まで発射した。

やがてロシア側は堪えきれずしてふたたび北方へのがれるような形勢を示した。この修羅場から脱出するための偽針路であった。

「ことごとく沈めよ」

というのが、東郷に課せられた戦略的要請であった。

日没までの時間は多くはない。ロシア側は日没の来るのを頼み、それまで持ちこたえるために針路を転々とさせてのがれようとした。東郷はどうあってもこれを扼^ぐさねばならない。以後、東郷はサーカスのようにめまぐるしい艦隊運動をくりかえすのである。

たとえば午後四時三十五分、東郷は信号をかかげて艦隊に対し左八点一斉回頭を命じ、あざやかに横陣をつくってみせた。東郷は北にむかつてすすんだ。

ところがロシア側はこれをまくように逆に南へ走った。東郷はすかさず右八点の一斉回頭をおこない、単縦陣にもどった。南進した。厳密には南東微東に針路をとった。陽は傾いている。

「それも運でしょう」

といった。梨羽は笑い出して、六分も運、四分も運ならみな運ではないか、という佐藤は、前の六分は本当の運です、しかしあとの四分は人間の力で開いた運です、といった。

佐藤は決して自分の手柄であるとも秋山真之の手柄であるともいわなかった。真之自身が、「天佑の連続だった」といつているのである。

ただ佐藤はこの説明のつかない「六分の運」について海軍大学校の講義で、

——東郷長官はふしぎなほど運のいい人であった。戦いというのは主将を選ぶのが大切である。妙なことをいうようだが、主将がいかに天才でも運のわるい人ではどうにもならない。と述べたことが残っている。

もしこの海戦において勝利をもたらした無数の人間のなかでただ一人の名をあげよといえ、この海域にいない山本権兵衛であったであろう。かれは、舞鶴鎮守府長官という閑職にいて予備役を待つばかりの境涯にいた東郷を抜擢し、明治帝がおどろいてその理由をきくと、

「東郷は運のいい男ですから」

と、答えた。山本は歴史を決定するものが、佐藤のいう「四分の運」のほかに「六分の運」があるという機微を、それ自体異様なことだが、知っていたのである。

多分に偶然ながら、東郷と上村による連繫態勢が成立したのは、午後三時五十八分である。「七千メートルですね」

南から追っかけているのである。そこへ東郷の三笠以下の戦艦戦隊が西方の沖合からあらわれた。

ロシア側は挟撃されるかたちになった。

この日本側の光景を燃えあがる旗艦スワロフからながめていたセミョーノフ中佐は、日本の戦術運動が神技というほかないというような感嘆をもつて述べている。

しかし出雲の艦橋にあった佐藤鉄太郎は、

「運だった」

と、戦後、冷静に語っている。

佐藤が戦後、海軍大学校の教官をしていたとき、なしばとみおき 梨羽時起という海軍少将があそびにきて、

「佐藤、どうしてあんなに勝ったのだろうか」

と、梨羽はかれ自身実戦に参加しているくせにそれがふしぎでならないようなことをいった。たしかに奇妙すぎた。科学的に探究しうる勝因というのは無数に抽出して組織化することはできる。しかしそれでもなお不明の部分が大きくのこる。なにしろ人類が戦争というものを体験して以来、この戦いほど完璧な勝利を完璧なかたちで生みあげたものはなく、その後にもなかった。

「六分どおり運でしょう」

と、佐藤はいった。梨羽はうなずき、僕もそう思っている、しかしあとの四分は何だろう、と問いかさねた。佐藤は、

と、当時出雲の砲員たちがこまったという。ボロジノたちが騰げる煙と炎のすさまじさは、これらの行動を昏ますほどであった。上村の砲員たちは、わずかに敵のマストにひるがえる旗をみとめては射つのみで、艦型などはとてもわからなかった。雲が厚く、海の色が白っぽかった。乳色の濛気が濃くなっていた。

(こいつは敵を逸するかもしれない)

と、佐藤は不安になってきた。

事実、この間、三十分ばかり日本側はバルチック艦隊の主力を沖合に見うしなった。

ところが、日本側にとって幸運なことに、戦場を遠く去っていた東郷直率の第一戦隊が、午後三時五十八分、北走しつづつある敵艦隊と出くわしたのである。

——三笠以下がふたたび出現した。

というのは、ロシア側にとって悪魔との邂逅のようなものであった。

海戦というのは広い海域のなかで艦艇が高速で走りまわるもので、しかも互いの認識は眼鏡程度のものに拠っており、いったん敵味方が離れ、水平線上のあなたに没してしまふと容易に遭遇できない。まして視界をさえぎる濛気がある。しかもロシア側はふりきってなんとか逃げようとしている。こういう絶対的な、あるいは相対的な条件下でふたたび相遭うなど、奇蹟に近かった。

しかもただの遭遇ではなかった。上村の巡洋艦戦隊が、大浪を艦首でくだきながらロシア側を

第一戦艦戦隊は、旗艦スワロフがすでに浮かぶ廃墟になった。代わって二番艦アレクサンドル三世が先頭に出てきたが、これも集中射撃をうけ、列外へよろめき出た。

かわって、三番艦のボロジノが先頭に出た。このボロジノの艦長セレーブレンニコフ大佐は、「もはやなす術がない。むしろ日本艦隊の後尾を突破して北方へ遁走しよう」

と、判断した。ウラジオストックへの直航針路をはじめ捨てたのである。

かれはこのため、にわかに左八点の正面変換をおこなって針路を北方にさだめた。

このため敵味方のカタチが変わった。上村艦隊は、ボロジノの艦隊にとって右舷の沖に見えるようになった。ボロジノたちは、右舷の砲をばげしく連射しつつ北へ走りはじめた。佐藤の判断のとおりだった。

佐藤は機敏だった。それよりも早く「左十六点の正面変換」をおこない、北走する敵を追った。小型の犬が豹の群れを追っているようだった。しかし豹の群れは傷ついていた。列はみだれていたし、速力はまちまちだった。

約四分のちに上村艦隊は追いつき、射撃命令が発せられた。左舷戦闘であった。

「ちよつと、遠いなア」

と、上村は艦橋でいった。距離六千メートルである。しかし上村艦隊は巡洋艦であるために足が早く、しだいに接近して「遠いなア」といったときから、六分後には三千百メートルになった。射撃にはうってつけの距離であった。

——敵が、騰煙のために見えなくなった。

「よろしう」

と、上村はその案に同意した。艦隊はただちに左十六点の正面変換をおこなった。というのは、各艦が逐次に左へ百八十度転ずるということであり、これによって艦隊の左舷の砲火をぜんぶ敵にそぐことができた。艦隊は西北西に新針路をとった。

このとき、敵の旗艦スワロフは猛炎と舵機の故障で孤立状態におち入っていたが、上村のメッセンジャーをつとめている通報艦千早（二三三トン）という小つぽけなふねがにわかに走り出てきて、みるみるスワロフに接近し、魚雷二本を放った。一種、滑稽な光景でもあった。

ロシア側は、惨澹たる状況になった。

出雲の艦橋に立っている佐藤が、

——敵は、北走するつもりではないか。

と判断していそぎ陣形を変えたのは、的確であった。佐藤はやや奇癖性をもつ作戦臭があり、大作戦計画の立案という点では真之におよばなかったが、しかし現場現場での処理では、剣客のような神秘的な応変性があった。

事実、ロシア側は北走しようとしていた。

この間の事情は、錯綜している。ロシアの第二戦艦戦隊のほうは旗艦オスラービアが沈んだため二番艦のシソイ・ウエリーキーがこれに交代した。がこの艦もすぐ大火災につつまれて列外におちてゆく。

訓の実例が、みごとに上村艦隊の行動にあらわれている。

ノビコフ・プリボイが、沈みつつある戦艦オスラービアの状況について書いている。

「上甲板には敵弾の落下がつづいていた。本艦には、すくなくとも六隻の日本巡洋艦から砲弾が送られていた」

とあるのは、上村艦隊がこの運動をした時期のことである。上村艦隊はオスラービアのとどめを刺そうとしていた。

ノビコフの書くところによれば、オスラービアのまわりの海面は落下弾で沸きたち、上甲板も最上甲板も、うなりをあげる焰と砲弾の炸裂音と無数にとびちる鉄片のために人々はつぎつぎに戦闘能力をうしなってゆき、やがて大砲のほとんどが役立たずになった。たとえばある砲の分隊長をつとめていたエデルミールという大尉などは、

——もはやこれ以上は戦闘はできない。

として、海軍ではめずらしいことであつたが砲員を解散し、自分は砲側でピストルを頭にあて、自殺してしまった。猛炎はいかに消火隊が走りまわっても消えそうになく、やがて艦首は水に突っこみ、次いで午後三時七分から十分ごろにかけて右舷がかたむき、やがて海面に大きな渦をつくって沈没してしまった。

出雲の艦橋にいる佐藤は、オスラービアの沈没とほぼ同時刻に、べつな直感をもった。

（敵は、北方へ逃げるつもりではないか）

と、そのうごきをみて判断し、さらに敵の頭をおさえるために陣形を転じた。

一度だけでは、殿艦の日進が先頭になってしまつたため、さらにもう一度その運動をくりかえし、三笠を先頭とする順番号の単縦陣にもどつた。非常な手間かづがかつた。これを繰り返して、とうとう、東郷が午後二時五十八分に、

「左八点の一斉回頭」

をやるといふ失敗をおかしたために、これをあと二度やらなければもとに復せず、敵にも近寄れないといふかっこうになつた。戦いはたけなわで、いわば敵をにがすか殲滅するかの正念場であるはずなのに、東郷はそののんびりした艦隊ダンスに熱中していなければならなかつた。

東郷がその無用の艦隊ダンスに熱中しているときは、かれの三笠以下の戦艦戦隊（第一戦隊）は射撃も中止していた。第一、射撃をしようにもすでに敵から遠くはなれてしまつており、射程は遠距離射撃に近く、容易に命中するものではなかつた。

この間、ロシアの戦艦戦隊と四つに組んでたたかっていたのは、装甲巡洋艦という、戦艦に対してはやや非力とされている艦種で編成された上村の第二戦隊であつた。それも浅間が洋上で舵機の修理中だったため、出雲以下わずか五隻である。このことは、上村と佐藤の冒険の成功というよりも、連合艦隊という場からいへば無言でも機能するチーム・ワークが存在したといふべきかもしれない。あるいは、上村や佐藤などが海戦に勝つためのこつをよく心得ていたといえるかもしれない。ネルソンが、「もし旗艦の信号がみえなかつた場合、後続する各艦は迷わずに敵へ突進せよ」と、たえずその艦長たちに言いきかせていたといわれるが、その勝者のための教

その出ばなを、上村艦隊はくじいた。上村は例の

「面舵」

という、敵前へ殺到する命令をくだしたために敵との距離がみるみるちぢまり、ついには二千五、六百メートルという近距離になってしまった。この間、猛烈な射撃をロシア側に加えた。

あらたに嚮導艦になったアレクサンドル三世はたちまち燃えあがって、列外へ出た。ついで三番艦ボロジノが嚮導艦として出てきたが、陣形は混乱に混乱をかさねた。この「ボロジノ型」という名前で世界に新鋭を誇った戦艦もこの混乱のもとでは、たかが装甲巡洋艦の艦隊の猛射に対抗することが困難になっていた。

この間の上村艦隊の独断専行の行動については、ロシア側の海戦参加者の手記で驚嘆しているのがあったが、筆者はそれがどの資料だったかをいまさがし出せない。

フランク・ツイースというドイツ人が「対馬」という書名でこの海戦のことを書いたが、

「対馬で戦った日本人はすべて小東郷であったといっても言いすぎではない」

といっているように、上村艦隊のこの行動は第一戦隊との組みあわせにおいて、最初から台本でしめしあわせた集団舞踊をやっている観があった。なぜならば、「三笠」以下の第一戦隊は敵行動を誤認したため午後二時五十八分「左八点の一斉回頭」をやってしまったことから、この時期には戦場から、遠くへ去ってしまったのである。ついにながらひとたび去ってしまった第一戦隊がふたたび敵に接近するのは艦隊運動上の非常な困難をともなった。敵のそばへ寄るために、三笠は戦隊に対し、午後三時五分、もう一度左へ一斉回頭をおこなったのである。もっとも

「敵艦隊をして弾着距離外に脱する機会をあたえることになったであろう」

と、遠慮気味に書いている。極端に言えばロシア側の大部分は戦場を脱し、ウラジオストックにむかって遁げることができたかもしれない、ということであつた。

ついでながら、昭和十年代に、当時新潮社の社員だつた八幡良一氏が、隠棲中の佐藤鉄太郎に会つたとき、たまたまこの「誤認」の話が出た。八幡氏がおどろいて、そのことをなにかに書いてもよろしゅうございますか、ときくと、佐藤ははげしく手をふつて、

「それはいけない。どうしても書きなければ僕が死んでからにしてくれ」

と、いったという。このくだりは、筆者が八幡氏から聴いた。

ついでながら佐藤鉄太郎は昭和十七年三月四日に病没した。もし、この五月二十七日午後二時五十分すぎの段階で上村と佐藤が出雲の艦橋にいれば、この海戦はもつとちがつた結果になつていたにちがいない。

上村の第二戦隊のこの冒険は成功した。

敵の嚮導艦キョウドかんのスワロフもオスラービアも燃えあがつていて小さな上村艦隊の接近に十分対抗できず、状態ではなかつた。スワロフにいたつては北へ回頭し、さらに大角度で、小さな円をえがきつつぐるぐるまわりはじめたのである。

それをみて二番艦アレクサンドル三世（艦長ブウォストフ大佐）が機敏にもみずから嚮導艦になるために先頭に出てきた。

艦隊を右折せしめるというのは、各艦各個に左一斉回頭をしている第一戦隊との間隔をそれだけ遠くするということになり、第一、第二戦隊がだんだんごになることだけはまぬがれるが、しかしこの装甲巡洋艦戦隊は東郷の戦艦戦隊より前面に出ることになり、海戦は戦艦が主役をなすという常識をやぶるカタチになる。

右折すれば敵がどんどん近づくといいカタチになるから、危険このうえなかった。

こちらは、装甲巡洋艦の戦隊にすぎない。

敵は戦艦の戦隊が前面に出て押し出している。巡洋艦がその薄い装甲と弱い攻撃力をもって戦艦に立ちむかうというのは、陸戦でいえば厚い胸牆きょうしょうにかこまれた要塞に対し、攻撃側が、裸の人員で軽砲をひっぱって近づいてゆくようなものであった。

無謀というほかなかった。

上村艦隊がせり出してこの無謀の陣形をとったのは、上村と佐藤の決断と勇敢さということもあったが、もとはといえば三笠の首脳部の錯覚による。戦後、上村も佐藤もついにこの「錯覚」について揚言しなかったのは、東郷が世界戦史に類のない完全勝利を得たため、東郷は無謬むびやうの名将になったからである。事実、東郷は無謬にちかかったが、それをさらに完全な無謬的存在にすることは、上村や佐藤などの礼節であつたらしい。

佐藤はのち中將になってから「大日本海戦史談」という海戦の歴史を書き、この局面についてふれている。この書物にも、東郷の「誤認」ということには触れなかった。ただ、第二戦隊が第一戦隊のとおり「左八点の一斉回頭」をやっておれば、

ということになる。

が、佐藤は数秒、それ以上の工夫が思いつかなかつた。事実、思いつける状態でもなかつた。その間も、第二戦隊は従前どおりの針路をまっすぐにすすんでいる。その前方で、第一戦隊が、各艦ごとくるとすると左へ九十度回頭をしている。第二戦隊はそのなかへ突っこんでしまうことになる。

事実、わずかながらそのようになった。

軍艦と軍艦とがだんごになつたようにかさなりあつた。ということは、第一戦隊の射撃を第二戦隊が邪魔することになり、敵からみれば日本の軍艦が重なっているために照準が容易になる。戦闘中の艦隊運動でもっとも警戒すべき悪陣形ができあがつたのである。

佐藤は、後悔した。

が、いまさらどうすることもできず、みずからの戦術行動で、みずからを縛りあげてしまう結果になつた。このとき佐藤がおもいだしたのが、伊庭想太郎から伝授された心形刀流の極意だつた。つまり窮地におち人つたとみればなんでもいい、瞬息に、そして積極的行動に出よということであつた。

佐藤は上村に体を寄せ、

「長官、こうなれば仕方がありません。面舵（おもかじ）（右まわし）をとつて、敵の頭をおさえましょう」と、いった。

出雲の航海参謀は、山本英輔大尉だった。山本は日進の信号どおりに「左八点の一斉回頭」という信号をマストにかかっていた。

が、佐藤鉄太郎は気づかなかった。

「旗艦」がかかっている信号旗は、信号旗をおろしたときにその命令どおりの行動が各艦において開始される。山本は、

「佐藤参謀、信号をおろしていいですか」

と、声をかけた。

このとき佐藤はふりむき、信号があがっていることにはじめて気づいた。同時に東郷が命じている第一戦隊に対する信号内容が意外なものであることを知った。しかも前方の第一戦隊はその信号どおりに各艦とも急に艦首を左へまげつつあったのである。

「いかん、おろすな」

と、佐藤は狼狽した。

ということは第二戦隊だけは命令どおりの行動を留保するということになる。留保では、

「かえって第一戦隊を誤解させることになりはしませんか」

と、次席参謀の下村延太郎少佐がいった。佐藤は混乱した。しかしすぐ冷静になり、

「運動旗を一旋あげておけ」

と、命じた。運動旗をかかげるというのは、

——おれについてこい。

上村は、理由はいろいろあったにせよ、グロムボイ、ロシアを追跡することを途中で断念し、リューリックの沈没現場にもどってきて海面にただようその乗員を救助したのである。救いあげたロシア兵は六百二十七名という多数にのぼった。各艦とも魚雷発射管のある室まで捕虜がいっぱいになった。

「戦略目的を犠牲にしてまで敵の漂流兵をすくうのは、宋襄^{そうじやう}の仁^{じん}である」

とまで真之はいったが、上村にとっては戦争は人間表現の場であり、敗敵へのいたわりがなければ軍人ではないという頑固な哲学があった。かれは日清戦争のときも敵の捕虜たちを艦に収容するとき、敵の面目を考え、堵^{とちう}列^{れつ}する水兵たちに廻^{まわ}レ右^{みぎ}をさせて背をむけさせた。

その上村は、あの蔚山沖での海戦中、午前六時三十分、リューリックが舵機に故障を生じた瞬間をありありとみた。そのときの光景が、いまスワロフの様子とそっくりだったのである。

スワロフの回頭が舵機の故障によるものと知った佐藤は、肉薄追撃の絶好の戦機とみた。当然、東郷はそれをするだろうとおもった。ところが、東郷は、

「左八点の一斉回頭」

という、各艦いっせいに左方九十度に針路を変えよと命じたのである。

東郷は信号旗をかかげて命じた。三笠が信号をあげると、後続する各艦が順次あげてゆき、後方へ後方へと伝達してゆく。第一戦隊は殿艦^{でんかん}の日進でおわる。日進の信号を、それにつづく第二戦隊の旗艦出雲がかかげる。

「舵の故障ですな」

と、佐藤は出羽なまりの軋きしむような発音で、横の上村にいった。上村も眼鏡をもつて注視しつづけていたのだが、このとき即座に、

「まちがい無なか」

と、ゆっくり、しかし大声でいった。

上村は絵にかいたような猛将だったが、開戦当時からつきにめぐまれていなかった。第二艦隊と称せられるかれの装甲巡洋艦の艦隊は、ある時期、敵の海上交通破壊戦を封ずるための任務を負わされていたが、ウラジオストクを根拠地とするリューリックなどの巡洋艦はつねに上村の目のとどかぬところで出沒し、ついには陸軍の輸送船常陸丸ひたちまるを撃沈したりした。上村の評判はわるく、議会の壇上で海上の上村のはたらきの無さを論難して「無能」ときめつける議員もいた。

ついに去年の八月十四日早晩、蔚山沖うるさんおきを南下してくるリューリック以下三隻のウラジオ艦隊の艦影を発見し、上村はすぐさま出雲以下四隻で追跡した。追跡一時間数十分ののち、第一弾を发射した。敵も逃げつつ応射し、猛烈な砲戦のすえリューリックが撃沈された。他の二隻であるグロムボイ、ロシアはふたたび活動できないまでに破壊されたが、かろうじてウラジオストクへたどりつき、港内に遁入した。

「あの二隻を遁くがすべきではなかった」

と、秋山真之がのちのちまで、上村の追跡の不徹底さは戦略的立場からみて重大なマイナスであったと批判しつづけたが、このあたりはむずかしい課題であった。

そのとおりにした。

佐藤が少佐になったころ、伊庭は、

「君は参謀官だそうだから、心形刀流の極意を教えておこう」

といつて、剣の上での実例をいくつか挙げ、「剣にかぎらず物事には万策尽きて窮地に追い込まれることがある、そのときは瞬息に積極的行動に出よ、無茶でもなんでもいい、捨て身の行動に出るのである、これがわが流儀の極意である」といつた。

佐藤はこのことばをよく覚えていた。やがて彼の第二艦隊は第一艦隊の敵状誤認行動によつて窮地におち入るのだが、このとき出雲の艦橋で佐藤の脳裏をかすめたのは伊庭が伝えたその極意であつた。佐藤はとつさに無法にちかい積極行動をおこすことによつて連合艦隊そのものを、あやうく敵艦隊をとり逃がすところから救い出したのである。奇妙なことに佐藤のこのときの行動はその後ながく海軍部内では秘密になつていた。

佐藤は、旗艦スワロフを注視しつづけていた。スワロフが北へ頭を振ったとき、三笠の東郷たちとはちがい、

(舵かたの故障だ)

と、おもつた。おもわず靴のカカトでもつて艦橋めいぶの床を蹴つたのは、佐藤にすればよほどうれしかったにちがいない。スワロフが意図的に回頭しつづつあるのではないという証拠に、その半ば折れたマストに信号旗らしいものがあがつていないのである。

といわれ、海軍部内で早くから戦術の天才という評価をうけていた。もし真之がいなければ、連合艦隊の先任参謀の位置にこの佐藤がついたにちがいはなかった。

かれは慶応二年、出羽庄内藩士芳賀家に生まれ、家老の佐藤家を嗣いだ。真之における伊予松山藩もそうであつたが、ともに戊辰戦争のときには佐幕派に属し、苦汁くじゅうをなめた。この当時、海軍は「薩の海軍」といわれていたように東郷も上村も戊辰の官軍の薩摩の出身であつた。真之と佐藤が、その旧官軍出身者の下につかえているというのはとりあわせとして多少数奇でなくもなかつた。

佐藤は明治十二年、満十三歳のとき鶴岡から東京まで徒歩旅行をつづけて築地の海軍兵学校のジュニア・コースに入つた。

かれは、剣道家ともいえたかもしれない。尉官時代、かつて幕臣の流儀だつた心形しんぎょう刀流を、その宗家の伊庭想太郎いばけから学んだ。伊庭は四谷よつやで文友館という道場をひらいていたのである。

伊庭は、はじめ佐藤の体つきをみて、どうも君の様子ではいくら稽古をしてもたかが知れていゝる、と稽古をさせなかつた。

「稽古をしても、頭のたたかれ損のようなものだから、ひとり稽古で極意に達する方法を教えてあげよう」

といつて、奇妙な方法をおしえた。

糸を横にひっぱっておくのである。それを前にして真剣を抜き、ふりかぶつて力まかせにふりおろす。そのとき、糸を切らずすれすれで白刃をとめる。その習練をせよ、といった。佐藤は、

これを扼する必要があつた。

「こちらも、左八点の一斉回頭をしましょうか」

と、加藤は砲声のなかでどなった。

東郷は双眼鏡をのぞきつつうなずいた。

「左八点、一斉回頭。――」

加藤は、甲高い声をはりあげた。

三笠のマストに、旗旒信号が点々と揚がつた。

その信号の意味は、各艦が各個に、そして同時に左へ九十度針路を変えよ、ということであつた。後続する各艦がおなじ信号をつぎつぎにかかげた。

ところで、東郷の麾下のなかでただ二人だけが、

(スワロフは回頭したのではない。舵機の機能をうしなつてよろけはじめたにすぎない)

と認識した者がいた。ただ二人だけではなかったかもしれないが、それを認識し、同時に異常な単独行動を決断した者が二人いる。

第二艦隊の旗艦出雲の艦橋にいた参謀佐藤鉄太郎中佐がそのひとりであつた。佐藤の横に、司令長官の上村彦之丞がいた。この兩人である。

佐藤は、

――秋山か佐藤か。

である。ところがその予感どおりにスワロフが北へ回頭しはじめたのである。加藤ほどの男が、この進行中の事実を冷静に観察するよりも、自分の予感のほうに判断を短絡たんらくさせてしまった。

加藤は、切り裂くように真之をふりかえった。

まずいことに真之は、双眼鏡をもっていなかった。

「肉眼で見るほうがたしかなところがわかる」というこの天才的な男の一種神秘性をもった肉眼信仰が、この場合ばかりは役に立たなかった。スワロフの艦首の微細な変化など、肉眼でとらえられるはずがなかった。

加藤が真之の同意を得るべくふりかえったとき、真之はその両眼をするどく光らせてはいたものの、しかしあごだけはしきりにうごいていた。例の空豆の煎ったのをポケットからとりだしては、噛みくだいているのである。

（このほか。――）

と、加藤はあとあとまでこのときのことをおもっては腹が立った。真之はたしかに天才的な設計者であつたであらう。しかし天才というのはその半面暗い不具性を兼ねているものかもしれない、現場での運営指揮ということとはべつなものであるようだった。

加藤は、東郷の横顔をのぞきこんだ。

東郷はそのプリズムの双眼鏡によつて、より大きな像としてのスワロフをとらえていた。東郷もまた、加藤とおなじことをおもった。敵はわが艦隊の列後にまわつて北走すべく回頭したのであるまいか。

と、いった。たとえ舵機の修繕ができて、舵機操縦の機関部へ命令をつたうべき通信設備がことごとく破壊されていることがわかったのである。伝声管も、艦内電話機もすべて用をなさなくなっていた。

この前後に、旗艦スワロフがまるでなにごとかの意志を示すかのようにゆっくり回頭しはじめたのである。

しかし、その回頭がなんとなくよろめいていかにも不自然であるということを察したのは、スワロフに後続している戦艦アレクサンドル三世の艦長ブウォストフ大佐であった。かれは旗艦のあやしげな挙動をみて、

「舵機に故障がおこった。従う必要はない」

と、正確に判断した。さらにかれはみずから先頭に立とうと決心した。

加藤友三郎は三笠の艦橋でたえずからだの位置を移していた。相変らず神経性の胃痛が間歇的にかれをおそい、体をうごかすことよって痛みをなだめようとした。加藤は双眼鏡をのぞきっぱなしだったが、このとき、レンズに拡大されて映っている敵旗艦スワロフの艦首がわずかに北へうごくのをみて狼狽した。

かれは後年もまるで冷血動物のように表情を変えないといわれたが、このときばかりはその小さな、ちやうど萱で切ったような両眼に色が走った。このことをかれは予感していたのである。予感していたことが、つかいの先入主になった。敵艦隊が北走するのではないか、ということ

並航する東郷艦隊をやりすごすべく、北へ針路をむけ、艦隊をひきいて逃げ去ろうという意志かと三笠の艦橋はおもった。

ところがスワロフの実情は単に舵機が破壊されたためにおこった回頭で、ロジエストウエンスキーの意志によるものではなかった。

この司令長官は防御甲板の下に住居甲板にある戦時治療室にいて手当をうけたあと、「下部発令所」とよばれている部屋へ身をはこんだ。もはや司令塔は用をなさなくなっていた。「下部発令所」というのはこういう場合のために艦の水線部の下に設けられている予備の指揮所であった。

重傷の艦長も、航海長のフィリポウスキー大佐も提督とともにその部屋に入った。この航海長も負傷していたが、しかし軽傷であった。

「敵状にとくに変化がないかぎり、しばらくこの針路を保持せよ」

と、ロジエストウエンスキーは、航海長に命じた。

ということからも、北への回頭というのはロジエストウエンスキーの意志ではない。

このときすでに舵機が破壊されていることは提督は知っていた。

しかし参謀のクリジリアネフスキー大尉が、「なんとか応急の修理ができるかもしれません」といって現場へ行っていた。提督はそのことに期待していた。が、同大尉がもどってきて、かぶりを振った。

「だめです」

れば敵をとりにがすおそれがあったが、かれは双方の形態の変化によって運動を変えつつも、つねに敵の前面をおさえこんでゆくというかれの主題をかたくまもりつづけた。この運動方法を、秋山真之は古水軍から言葉をとって、

「乙字戦法」

と名づけていた。艦隊そのものが乙字運動をくりかえすのである。このため、ロシア側のある幕僚は悲鳴をあげるように、

「三笠はいつもわれわれの前面にいた」

と、魔術師の魔法を見たように語っている。

しかしその東郷も失敗するときがきた。

東郷だけではなかった。加藤友三郎、秋山真之をふくめた三笠の艦橋上の三人がともどもに敵状に対し重大な誤認をした。

午後二時五十分すぎの段階である。

猛炎を噴きあげている旗艦スワロフが、突如、北へ回頭したのである。

——針路を転じた。

と、三笠の東郷以下はこの敵の異変をロジェストウエンスキーの意志から出たものとみた。この時期の双方の艦隊のかたちは、二ノ字型になって砲戦している。二ノ字型のままいずれも東にむかって並航していたのだが、スワロフのうごきが変わった。北方へ回頭した。ということとは、

展望できた。日本艦隊はいた。

「ところが敵艦隊は、最初見た姿とまったくおなじ姿でわれわれの前途にいたのである。火災もなく、傾斜をおこしている艦もなかった。一艦といえども艦橋を破壊されている艦はなかった。かれらにとってあたかもこれは戦闘ではなく、射撃演習のようであった」

さらにセミョーノフはいう。

「わが艦隊は殷々^{げんげん}として砲声をとどろかせること三十分におよんでいる。この間、大量の砲弾を発射したはずであったが、あのぼう大な砲弾は一体どこへ行ったのであろう」

セミョーノフはその原因を砲弾の威力にもとめようとした。かれによればロシア製の砲弾は粗悪で不発弾が多かったのではないかという。たしかに日本側の観測でもロシア砲弾には不発のものもあった。しかしセミョーノフが呪うほどあったわけではない。

セミョーノフはさらに日本が発明した新砲弾の威力を過大なほどに評価した。

「日本の砲弾は普通の綿火薬でなく下瀬火薬を用いている。大ざっぱに言えば、炸裂せる日本砲弾の一弾の破壊力はロシア砲弾の十二個ぶんの威力をもっていた」

とセミョーノフは、日本のもつ物理的な力にすべての原因を帰せしめようとしたが、その動機のひとつはかれがロジェストウエンスキーの記録者として、その提督の戦術が拙劣であったということを覆いたいということから出ていた。

これに対し、東郷は巧妙すぎた。

両艦隊は、運動している。双方航走しつつ戦う以上、東郷にすればよほど運動を巧妙にしなけ

このころには水線部付近に大穴があげられており、海水が滝のように入ってきて、艦が左へ傾いた。戦時治療室は中甲板にあった。この満員の病室にも命中し、そのあたりが火になった。造船技師ポリトゥスキーはこの戦闘の日、軍医補助として白衣を着て負傷の手当をしていたが、この火の中で戦死したかと思われる。ロジェストウエンスキーはちやうど戦時治療室から去ったばかりのときで、あやうくたすかった。が、去る途中で左脚のくるぶしをくだかれ、転倒した。

それでもなおロシア側はかろうじて陣形を保ちつつすんだ。主力艦のほとんどが火炎を背負っており、黒煙は艦隊をおおった。ある艦は列外へよろめき出、ある艦は浮かぶ廃墟同然になりながらも艦体だけが航走していた。だがなお射撃可能な砲は火光をたばしらせて砲火を歇めようとはしなかった。

「記録のため」

という目的で旗艦スワロフ艦内のあちこちを駆けまわっていたセミョーノフ中佐は、もう一度上甲板に出て日本艦隊を見ておこうとおもった時期がある。

上甲板へおどり出たかれは、まず火とたたかわねばならなかった。死体を避けねばならず、こわれきった構造物と構造物のあいだをすりぬけねばならなかった。かれは艦首へ出ようとした。(日本艦隊も相当やられているはずだ)

と、かれの古参士官としての堅牢な想像力がそのようにかれを予想させた。

かれは艦首へちかづいた。十二インチ砲と六インチ砲とのあいだの右舷に出ると、前方の海が

ついでには秋山真之がこの戦いがおわるとまっさきに二六式無線電信機の開発者である木村駿吉を訪ね、「勝利はあの二六式に負うところが多かった」とわざわざ礼をのべたということでも、両艦隊の性格がよくあらわれている。

ロジエストウエンスキーは顔中が血だらけになっていた。軽傷とはいえ、小さな鉄片で額を割られていたのである。

そのあとわずか五、六分後にふたたび司令塔にぶちあたった十二インチ砲弾は、司令塔のあらゆる隙間から鉄片を塔内にむかって噴射した。ロジエストウエンスキーは脚をやられて倒れ、イグナチウス艦長も、ノコギリの刃のような細片を両腕いっぱいを受けた。

提督は戦時治療室に運ばれた。艦長はそのあとしばらく傷に耐えていたが、さらに頭部をやられた。艦尾にいたセミヨーノフ中佐がふたたび艦首へゆくべく司令塔に近づいたときに、ちょうど艦長が手すりにつかまりながら降りてくるところだった。

この艦長の陽気な性格はたれからも親しまれていたが、このときも平素とかわらず、「たいしたことはないよ」と、大声でいった。その背後に炎があがった。

セミヨーノフが司令塔に入ると、そこは死骸だけの部屋になっていた。舵輪も原形をとどめないまでに破壊されていた。

そのころ、後部主砲の砲塔につづきま二発の砲弾が命中し、左砲は根もとから上へねじあげられた。しかし砲塔そのものはなお旋回し、ときどき思いだしたように右砲が咆哮した。

所をかけまわり、海面にただよっている兵を救いあげ、約四百人を救助した。かつての乗員は八百五十人であった。この救助作業中、日本艦隊はこれらの駆逐艦に対し、戦士としての優しさをもっていた。どの艦もこれらの駆逐艦に対し一弾も送らなかった。

旗艦スワロフが自由をうしなうまでに三十分とはかからなかった。

東郷の艦隊が最初の射弾をあげせかけたときに、前部煙突が吹っ飛び、第二回目の射撃のときに十二インチ砲弾が司令塔の覗き孔のぞにあたり、あたって塔内の人員の一部を即死させ、過半を負傷させた。

このときロジェストウエンスキーは運つよく軽傷だけで済んだ。しかしかれは司令長官であることに絶望せざるをえなかった。

なぜならば、艦隊の有力な指揮手段である無電装置がこわれ、無電技師のカンダウロフが死体になって提督の足もとにころがったからである。各艦に対するかれの意思が通じにくくなった。もつともこの提督は東郷がその優秀な日本製無線機を好んだようには、そのスラヴィアルコ無線機を好まず、ほとんど旗旒信号きりゆうにたよっていた。ひとつにはスラヴィアルコは故障が多かつたともいうが、真因はこの提督の保守的性格にあつたかもしれない。かれは無線指揮というものを頭から非能率なものだと信じてこんでいたような形跡があつた。この無線指揮については日本側とは対照的であつたかもしれない。日本側はもつとも優秀な将校をえらんで通信科の水準を高めていたが、ロシア側はそういうこともせず、通信は軍人がやらずに技師が担当していた。これに

スラービアの檣頭をかく司令官旗をひるがえさせていた。従って新司令官も任命しなかった。信じられないようなことだが、第二戦艦戦隊は司令官を欠いたまま、そのくせ「旗艦」としてスワロフとともに先頭に立って進みつつ戦場に入ってきたのである。

この戦艦は、他の戦艦が二本煙突であるのに対し、めずらしく三本煙突であった。このため日本側は目標として識別しやすかった。

東郷は午後二時十分、はじめて射撃を命じたが、わずか十分後にオスラービアは慘澹たる景況を示した。

まず大櫓が吹っ飛んで半分だけになり、後部煙突は消えて二本になった。舷側には無数の穴があき、もつとも大きなものは直径二十フィートに達した。さらに前部砲塔が砲塔ごと海中に飛ばされ、艦首も碎かれた。碎かれた箇所さらに命中し、ついに口が大きくあき、そこから海水が奔入した。艦は前へのめりこむようなかたちになり、びようさこ錨鎖孔のあたりまで沈んだ。やがて艦体が左へ傾いた。さらに傾き、十五度にまでなったとき、猛炎につつまれたまま列外へよろめき出た。それでもなお艦尾にのこっている一、三の小砲が、閃々として火花をきらめかせて射ちつづけていた。

午後二時五十分ごろにはまったく戦闘力をうしなった。下甲板は浸水し、上中甲板は猛炎につつまれ、兵員は逃げまどった。午後三時十分、にわかには艦首を海中に突っこんだかとおもうと艦尾を高くあげ、海面に黒煙をのこしたまま吸いこまれた。艦長ベール大佐はタバコを口にくわえたまま艦橋にいた。そのまま艦と運命を共にした。付近にいた駆逐艦ブイヌイほか一隻が沈没箇

戦艦オスラービアは、やがて大きく腹をさらけだして仲間などの艦よりもさきに海底へ沈んでゆく。装甲鉋で充分に防御された戦艦が砲戦で沈むなどはありませんべからざる珍事であった。この当時の戦艦は不沈の実質をもっていたし、事実砲弾に対しては不沈の力をもつと世界の海軍軍人から信じられていたのである。

この戦艦は、母国のリバウ港を出港したときから、不吉の影を帯びていた。出港した翌朝、この戦艦が従者のように従えていた駆逐艦ブイストルイ（三五〇トン）が急に接近し、衝突してしまつたのである。破損したのは駆逐艦のほうであつたとはいえ、門出に際しての事件であり、縁起をかつぐロシア人にとって愉快な事故ではなかつた。

その後、長い航海中、艦隊で病死者が何人か出たが、このオスラービアがもつとも多かつた。造船技師ポリトウスキーの手記にも、

「オスラービアにはしばしば死亡者あり」と、書かれている。

この艦は、第二戦艦戦隊の旗艦で、フェリケルザム少将が座乗し、同少将は三隻の戦艦と一隻の装甲巡洋艦の司令官をつとめていた。が、少将は出港早々から健康状態がわるく、航海中はほとんど司令官私室で病臥したきりであつた。ヴァン・フォン湾を出てから病状が悪化し、海戦の四日前、艦隊が台湾東北沖に達したときに死没した。遺体は白い檜製の棺におさめられた。が、葬儀は行なわれなかつた。

ロジェストウェンスキーが艦隊の士気にかかわることをおそれ、その死を秘し、依然としてオ

下し、命中し、炸裂した」
と、表現した。

旗艦スワロフの惨況もすさまじかったが、とくに第二旗艦ともいべきオスラービアはひどかった。この艦は日本側の最初の集中射撃で火炎と黒煙につつまれた。第二回目の集中射撃が海上にとどろいたとき、この艦は爆煙をあげ、火炎を噴き、黒煙が海面をおおい、艦形が見えなくなった。

この艦はスワロフ型の四隻の新鋭戦艦よりも速力が早いかわり、装甲が薄かったが、しかしそれでもこの当時、

「さかなる砲弾でも Harveded armour をつらぬけなう」

といわれていたハーヴェイ式装甲を艦体に巻いていた点で、スワロフ型とおなじであった。ついでながらハーヴェイは米国人で、ニッケル鋼を用いて装甲の強度を飛躍的に高めた。日本の戦艦では三笠のほか朝日と敷島がこれを用いていたが、富士はそうではなかった。富士はハーヴェイ鋼からいえば旧式の合成甲鉄を用いており、このためオスラービアや敷島などが装甲九インチの厚さですんだものが、十八インチもの厚さを必要とし、それでもなお九インチのハーヴェイ鋼と同等もしくはそれ以下の防御力しかもっていなかった。

オスラービアのハーヴェイ鋼はよく日本の砲弾に耐えた。しかし焼夷性の高い下瀬火薬が艦体そのものを火にしまったのである。

という作戰主題を、東郷はこの苛烈な、ときに心理的動揺でもってその主題を変えなくなるかもしれないであろう戦況のなかにあっても偏執的なほどに変えなかった。かれがこの戦闘中前後五時間にわたっておなじ場所でおなじ姿勢でいたのは、その最良の主題への執着を象徴していたともいえるかもしれない。

これに対しロシア側の陣形にはつよい主題性がなかった。信じられぬほどのことであつたが、ロシアが国運を賭けたこの主力決戦の初段階において砲戦に参加しえたのは前の方の五、六隻にすぎなかつたのである。

——いかほど頑強な敵でも撃破されるのは当然である。

と、真之はこの戦場を語るとき、つねに感情をまじえず、数式を説明するような態度で語つた。東郷のやり方は数式どおりであつた。第一、第二戦隊の片舷百二十七門の主、副砲がつねに稼働できるように艦隊をうながしつづけた。

ロシア側の匿名幕僚の手記にも、

「兇悪なる砲火はスワロフおよびオスラービアの二艦に集中せられた」

と、書かれている。

日本側の命中率は驚異的な高さを示した。スワロフに乗っているセミョーノフも、

「黄海海戦のときは、自分はツエザレウィッチに命中する大口徑砲弾の個数をかぞえるゆとりがあつた。こんどはそれどころではなかつた。日本側の命中率のよさは自分がかつて見聞もせず想像もできなかったほどのものであつた。砲弾が一発々々命中するのではなかつた。雨のように落

死 闘

日本海海戦は二日間つづく。しかし秋山真之は終生、

「最初の三十分間だった。それで大局がきまった」

と語った。さらにこうも語っている。

「ペリー来航後五十余年、国費を海軍建設に投じ、営々として兵を養ってきたのはこの三十分間のためにあった」

「三笠」は、相変らず長蛇の陣をひきい、その先頭をすすんでいた。

海面は敵砲弾の落下のために沸きだち、その林立する水柱のなかに三笠の艦橋が宙に浮かんでいるような感があった。東郷は依然としてかれの場所をうごかなかった。飛沫がしばしばかれの双眼鏡をぬらした。そのつど東郷は小さな布をとりだしてぬぐった。それだけが東郷の身動きの唯一の変化であった。

「わが全線の砲火をもって敵の先頭に集中させる」

伊集院信管を特徴とする日本砲弾は徹甲弾においてはむしろ短所を露呈した。この砲弾は敵艦の装甲に命中しても、砲弾自身の圧縮発熱のために敵艦のいわば装甲表面で自爆してしまい、徹甲能力を欠き、貫通はほとんどしなかった。貫通しなければ戦艦を沈めることはできない。

軍艦の装甲構成というのは、艦の水線付近に厚くほどこされている。水線より上は薄い。水線以下は、まったく装甲されていない。その理由は水線以下は海水そのものが、陸上でいえば土塁のごとく防弾力をもっているからである。

ところがこの日、真之が大本営に打った電文にあるように、

「浪高し」

であった。風浪のためにロシア軍艦がたえず動揺し、腹（水線以下の無防御部分）を見せるためにそこへ日本の砲弾が命中し、海水の防弾力を借りる条件に乏しかった。このためそこから海水が入り、さらに一方、波浪が奔騰するため、水線以上の薄い部分に日本砲弾が命中して大穴をあけた場合も、海水がどっとそこから入った。このため艦はかたむき、ついにひっくりかえって海底に沈むという物理的結果になった。

もしこの日「浪高し」でなくても夜間の魚雷攻撃によって似たような結果になったかもしれないが、日本砲弾の威力が驚異的に高まったのは激浪のたすけによるところが多く、さらに東郷が風上へ風上へと自分の艦隊をもって行ったことは、日本の全砲門の照準をたやすくさせるのに大いに効果的であった。

二インチ砲弾さえ、戦艦を沈めることができないというのが世界の海軍の定説であった。

「戦艦は沈まない。とくにスワロフ以下五隻の新鋭戦艦の装甲はいかなる砲弾にも耐える」

と、ロジェストウエンスキーもその幕僚たちも信じていた。当然の常識であり、たとえば旗艦スワロフで観戦と記録の義務をもっているセミヨーフ中佐が、艦内のあちこちをとびまわりつつも、この戦艦スワロフが沈むなどということは一瞬もおもっていなかったようであった。

秋山真之も、

——砲弾のみではとても敵の新鋭戦艦を沈めることはできない。

として、昼間、砲弾で痛めつけ、夜間、駆逐艦と水雷艇のむれをくりだして満身創痍（もうい）の敵艦に肉薄させ、魚雷をもって仕止めるという計画をたてていた。このため駆逐艦たちも魚雷をかかえ、激浪とたたかいつつこの戦場についてきていたが、昼間の戦闘は大艦がやるため海上でいけば時間待ちをしていた。

要するに十二インチ砲弾でも戦艦を沈めることができないというのが定評でありながら、この海戦で、結果においてはロシア側の戦艦が日本の砲弾のためにどんどん沈んだのである。

その理由についてはのちに種々の意見が出た。

「日本の下瀬火薬と伊集院信管による」

という意見は、ロシア側に多かった。なるほどこの日本が開発した奇妙な砲弾は、世界一般の海軍砲弾の概念で律するよりも、後世の焼夷弾（しょういだん）により近いもので、現象としては鉄をも燃えあがらせるというものであった。しかし戦艦はたとえ燃えても沈まないのである。さらに下瀬火薬と

中したのは回頭開始から実に八分後の午後二時十二分。三十センチ（十二インチ）弾が命中したのはそれよりさらに一分後である。（中略）目標が回頭中、一点に集弾させることはジャイロコンパスのなかった昔の軍艦ではできない芸当なのである」

とし、黛氏は東郷のえらさは大冒険をやったことではなく、それを知りきって「不安なく回頭を命じた大英知」にあるとしている。

戦術上の評価論はべつとして、純砲術論的にいえば、その權威である黛氏の説のとおりであろう。

この黛氏の文章をここに拝借したのは東郷の敵前回頭についての評価をしたいからではなく、そのことはすでにこの稿でふれてしまっている。ただ当時、軍艦が軍艦に対して砲弾を命中させることがいかに困難なものであったかということを黛氏の文章でもって、そのふんいきを知ろうとした。

東郷はかれの命令である「旗秘第四九七号」において、百発百中を希望する、などという誇大な表現をとっておらず、「もし」と仮定し、

「訓練によって百発七十中」

の域に上達せしめることができればわが艦隊の現勢力にあらたに数隻の戦艦・装甲巡洋艦などを増加したとおなじ結果になるとし、「此事ハ決シテ期シ難キニアラザルナリ」としている。

この時代、戦艦の装甲板の防御能力はじつに高く、これを攻撃するための最大の砲弾である十

が、黛氏は、

「あれは砲術上からみれば大勇断ではない」とされる。

が、すべての説はこれを大勇断としている。敵の射程内において一艦ずつが一定の時間的間隔をおいて規則正しく左折してゆく。左折するとき、ロシアの砲員からみれば艦が停止状態同然になる。それを順次一艦ずつ撃ちくदैてゆくことも技術次第で可能であり、だから東郷は放胆きわまりないことをしたという。日本のかつての海軍大学校もこれを勇断として讚美するのがいわば戦史講義の型になっていたし、この海戦当時、秋山真之とならぶ戦術家とされた佐藤鉄太郎（第二艦隊参謀）ものちのちまで大冒険説をとった。しかし黛治夫氏は、ごく平凡な事実に気づいた。

当時の海軍は、日本であれロシアであれ、あるいは他の国であれ、大回頭中の目標に対してとつさに有効弾を送る技術をもっていなかったということである。射撃諸元の調定やら照準やらする時間が、どうしても数分はかかる。

以下、黛氏の文章の一部を借りる。

「戦史を調べると東郷長官が『取舵』を命じてから百四十五度回頭するまでに約二分間を要する。その間、スワロフ以下敵の新式戦艦五隻から、大口径砲はおろか中小口径砲の一発さえ射っていない。二番艦敷島が新針路に入ったところ、やっと射ち出したのである。（中略）三笠が取舵をとつてから三分間は全く射撃されていない。そして始めて十五センチ砲の小さな弾丸が三笠に命

力は弱い、文字どおり艦体の装甲部をぶちぬいて大穴をあけるための砲弾である。鍛鋼榴弾ではふつう、軍艦は沈まない。

東郷艦隊が最初鍛鋼榴弾を用いたのは、遠距離ではいかに徹甲榴弾を打っても貫徹力がにぶいことを知ったからであった。このため、

「彼我の距離が三千メートルになるまでは鍛鋼榴弾をつかう。それ以内に入れば徹甲榴弾に切りかえる」

という方法をとった。徹甲弾というのはいかに名称が甲を徹す^ととはいえ、二千五百メートル以内でなければとても敵の装甲をつらぬくことができないという計算を日本側はもっていたのである。ロシア側はそういうことはいっさい考えなかった。以上のことどもを考えておれば問題は砲員の優劣という次元よりも、東郷とその幕僚と、ロジェストウエンスキーとその幕僚の優劣という次元で考えらるべきことであろう。

海軍砲術史の權威である、^{まゆずみ} 黛治夫氏と志摩玄吉郎氏の談話や論文に負うところが多い。

黛治夫氏はかつての海軍大佐だったが、むろん日露戦争のころのひとではない。が、砲術の研究者としてその面から東郷の指揮を分析し、すぐれた見方をもっておられる。

東郷をして成功に導いたかれの敵前回頭という戦術は、英国の観戦士官のペケナムにも、ロジェストウエンスキーとその幕僚たちにもこれを狂気の沙汰としか映らなかったのだが、のちにこの大勇断がかれの名前を不朽にした。

というが、三笠の砲術長の安保清種はそのようにしたが、戦艦富士の山岡豊一砲術長は戦闘中、前橋のトップにのぼり、そこで射距離をきめてはよく透る声でメガホンで直接各砲塔に号令していた。かつて三笠の砲術長だった加藤寛治が「最良の観測位置は前橋トップである」としているから、富士のほうがいっそう合理的だったかもしれない。

もともと富士の山岡はメガホンだけで伝えたのではなく、ラッパの音で数字をきめたり、指示盤を用いたり、ライド通信器によったりして、数種類の伝達法を併用することによって迅速と確実を期した。彼我の砲声のやかましいなかで伝達するのはそういう入念さが必要であつたかもしれない。

東郷の「旗秘第四九七号」は原則とはいえ、具体的な説明も入っている。以下、その一部を口語に直すと、

「艦橋よりの射距離命令は迅速を要する。それが下甲板砲台に達するのにもし二十秒以上を要するとすればその命令はもはや死令となるかもしれない。なぜならば実戦に際し、射距離の変化は十秒間に百メートル以上になる場合がしばしばあるからである」

さて、砲火についてさらにつづける。ただわずかに話柄わづかを変える。

「日本艦隊は、鍛鋼弾から徹甲弾に詰めかえた」

という意味のノエル・ブッシュの記述だが、このことも東郷があらかじめ定めておいた方法であつた。

鍛鋼榴弾というのはただ炸裂して兵員その他を殺傷するだけの砲弾である。徹甲榴弾とは殺傷

「旗秘第四九七号」という東郷命令で、東郷はすでに、

「射撃ノ指揮法ガ射撃術ノ重大要素タルコト最早疑ヲ容ルルニ足ラザルナリ」

として、新しい方法の骨子を各艦艦長および主務将校に示しているのである。

この東郷の「旗秘第四九七号」において、

「射距離は艦橋において掌握する」

という「一艦の照尺の統一」の新思想が明示されている。

この新思想は、偶然、英国でもほぼ同時期に開発され、Broadside firing と名づけられたが、しかし英国はその効力を試す機会（海戦）がなかったために、東郷艦隊が開発の栄光をになつた。

東郷の統率のおもしろさは、その原則を示しただけで、その実際上の運営法については各艦の艦長と砲術長にまかせたことである。

東郷の原則は、

「砲火指揮はできるだけ艦橋で掌握し、射距離は艦橋より号令し、砲台にて毛頭これを修正せざるを可とす」

というもので、各砲台は毛頭修正しない。ロシア側が、各砲台ごとに射距離を決めて一つの艦のなかでもばらばらに射つたということとまったくちがっている。

「艦橋で掌握」

くなら命を捨てにゆくようなものだとおもひ、東京の海軍省の齋藤実次官^{まこと}あて手紙を書いて退艦させてくれとたのもうとさえおもつた」

と、後年、前記山本信次郎がロンドンへ行つたときに述懐したという。

「ところがいざ海戦に参加してみると、日本艦隊の命中率のすごさにはおどろいた」

別の艦隊をみるようであつたという。

この変化は、東郷が鎮海灣でひたすら砲員の訓練をした効果があがつたということに主因があるが、見方によつては東郷とその幕僚および砲術関係者が、

「砲員の能力も大切だが、それ以上に射撃指揮法が大切である」

と、「砲員の能力に頼つていても飛躍はない」ということに気づき、指揮法を研究して世界の海軍常識とは別個の、というよりまったく独創的な方法を鎮海灣において開発したことがこの海戦に重大な結果をもたらした。

ここで、別な叙述を差しこむようだが、やはり触れておかなければならない。ロジェストウエンスキー艦隊の砲員の能力についてである。低かつたという。それが日露双方の定説のようになつてゐるが、しかしかれらの能力がとくに低かつたということについて決定的な証拠をさがすことは困難である。艦砲の射撃がいかに困難なものであるかについてはすでにのべた。その困難さという絶対条件の上に立つ以上、東郷の砲員がロジェストウエンスキーの砲員よりすぐれていたとしても（げんに優れていたが）たかが知れた差である。

決定的な差をなしたのは、むしろ東郷とその部下が開発した射撃指揮法にあつたであらう。

波沖海戦だけでなく、日露戦争のころでさえ基本的につきまといていた。

日露戦争における黄海海戦は、東郷艦隊と旅順艦隊の最初の全力対決であったが、射撃能力は日露ほぼ同水準で、双方とも成績はよくなかった。日本側が辛勝しえたのは、「運命の一弾」といわれている日本の十二インチ砲弾が敵の旗艦の司令塔付近で爆発し、ウィットゲフト長官以下を吹っ飛ばして敵の指揮が混乱したおかげであり、秋山真之がのちにつねに語っていたように、「あのときは勝てるとは思わなかった。天佑としかいいようがない」といつていることが正直な実相であった。

砲火指揮について、つづける。

鎮海湾で待機中、その初期においては東郷艦隊の射撃能力は決して巧妙とは言いがたかった。当時、三笠で十二インチ砲と三インチ半砲二門を担当していた山本信次郎大尉が、のち少将になってから回顧して語っていることばが残っている。

「あるとき、鎮海湾の中にあります小さな島を標的にして射撃をしました。ところがなかなか中らないのであります。そんな馬鹿なはずがない、と思いました。が、どうしてもあたらない中

この原因は——あとでわかったことだが——射撃能力の拙劣にあったのではなく装薬が変質していたためだということがあきらかになったのだが、それにしても訓練の初期のあいだはなかなかあたらなかった。その証拠に、この艦隊に従事していた英国の観戦武官ベケナム大佐が、

「鎮海湾のある時期、私は日本艦隊の射撃の拙劣さにおどろき、こんな艦隊と一緒に戦争にゆ

ある考えぬくことを行ない、さらにその考えを思いつきにせず、それをもって全艦隊を機能化した、ということである。

とくに東郷は、

「海戦の要諦は、砲弾を敵よりも多く命中させる以外にない」

という平凡な主題を徹底させ、かれの戦略も戦術もこの一点に集中させたのである。いかなる国の海軍においてもこの時期の東郷ほどこれを徹底させた例はなかった。

しばらく砲火についてふれておく。

東郷が、鎮海湾での待機中、全艦隊に対し気がくるったかと思われるほどに射撃訓練をほとんどしたことはすでにのべた。

「弾というものは、容易にあたるものではない」

というにがい経験が東郷にあった。日本史上、洋式軍艦同士の海戦の最初は、明治元年一月四日の「阿波沖海戦」といわれるものであった。幕府軍艦「開陽」と薩摩軍艦「春日」とが交戦した。開陽にはオランダ帰りの榎本武揚えのもとたけあきが座乗し、春日にはまだ少年のにおいのぬけない薩摩藩士東郷平八郎が、左舷四十斤施条砲ボルトセリようほうを担当していた。双方、二千八百メートルで砲火をひらき、千二百メートルで砲火たけなわになった。結局は春日が優速を利用して開陽をふりきったために戦闘はおわるのだが、この交戦中、双方一発の命中弾もなかったのである。

海上の射撃はそれほど困難で、敵味方とも船が動いているだけでなく、風浪のために砲口はたえず動揺しており、源平のころに那須与市が浪の上から平家の扇を射たほどに至難の条件が、阿

砲火指揮

東郷が演じたあざやかな戦術運動について、ノエル・F・ブッシュという人が、

「日本艦隊は、敵の装甲を貫徹させるために徹甲弾に切りかえた」

と、書いている。日本艦隊は東郷が演出するダンシング・チームのように整然と行動したことが、このみじかい文章によく感じが出ている。敵前における逐次回頭もそうであり、各艦の砲術長が艦橋で全砲火の指揮を、手ににぎるといふ新方法もそうであり、各艦が敵の近距離に踏みこむと、それまで鍛鋼榴弾りゅうだんをぶっぱなしていたのが、徹甲榴弾にきりかえたというのもそうである。

その意味では、この海戦は、敵味方の各艦の性能や、各兵員の能力や士気より、日本側の頭脳がロシア側を圧倒したというほうが正確であろう。

ちなみにこの場合の「頭脳」とは、当然ながら天性のそれを指していない。考え方というほどの意味である。より正確に言えば、弱者の側に立った日本側が強者に勝つために、弱者の特権で

の砲の水煙かわからず、近いのか遠いのか、照準の修正もできなかったのである。

一方、三笠たちの砲は、変針運動中は沈黙しつづけていた。運動が終了したとき、厳密にはロシア側に射たれてから二分後に、轟然と火ぶたを切ったのである。むろん日本式の射撃法によっていた。つまり最初に三笠の各砲のうち一門だけが試射をする。その水煙を見、その弾着を確かめて、三笠の艦橋上にいる安保清種が各砲台に距離を知らせるのである。この合理的方法が、整然たる統制のもとにおこなわれた。

三笠が敵に対する射距離をつかみ得たころ、天も海も晦冥^{かいめい}した。各艦から猛烈な射撃がおこなわれたのである。もはや射撃というより砲弾の大集団が嵐をまきおこしているようなものであった。

この火と煙の嵐は敵の旗艦スワロフにのみ殺到した。

れであつたかもしれない。

この時期、おどろくべきことにスワロフと三笠の距離は、わずか二千四百メートルにまでちぢまつていたのである。この戦闘中、東郷とロジェストウエンスキーがもつとも接近した瞬間であり、ほとんど主將同士の一騎討ちで刺しちがえるというような形勢を現出した。三笠の艦橋で動いている人影までみえた。ロジェストウエンスキーは昂奮した。そのあまり、

「トーゴーを殺せ」

とまで、おもつた。

かれがいかに昂奮していたかということは提督みずからが一介の砲術長（中佐か少佐級）のようになつてじかに射撃命令をくだしたこともわかる。

かれは砲まで指定した。砲は前部左舷の六インチ砲であつた。目標はむろん東郷である。

「三笠を沈めよ」

という信号は、ロジェストウエンスキーはこの戦闘中のある時期にすでに掲げていた。いまこそその好機であつた。スワロフの前部左舷の六インチ砲は轟然と火を噴き、黒煙をあげ、徹甲弾を発射した。艦隊の各艦はそれにならつた。

三笠の前後左右に無数の水煙があがり、艦形を水で覆つた。が、ロジェストウエンスキーがふりかざした、刀は不幸にも外れた。弾は三笠に命中しなかつた。ロシアは、射撃理論において日本よりも甚だしく遅れていた。日本の加藤寛治が開発した射撃指揮法のようなものは持っていなかつた。ロシア側の各砲は勝手に射つた。このため三笠付近に水煙が林立してもどの水煙が自分

く命中率が落ちた。

それにひきかえ、一艦も燃えていない東郷側は、つねに風上^{かざかみ}に立つ有利さもあって、命中率がいよいよ正確になってきた。

旗艦スワロフは、燃えている。しかしその司令塔のみはまだ外形を保っていた。司令塔は当然ながらつよい防弾能力をもっていた。

傘形^{かさがた}の頑丈な屋根がこれを覆^{おほ}って落下弾をふせいでいるのである。まるい壁は厚さ十インチもある鋼板でできあがっていて、艦隊の首脳たちの生命を守っていた。外界をみるにはほそい隙間からのぞかねばならない。ちょうど人間の目の高さにそれがあつた。ロジェストウエンスキーもその幕僚も海戦中ずつとその隙間をのぞきつづけていた。

三笠が午後二時四十五分変針したとき、典型的な貴族である参謀長のコロシ大佐は、この期^どにいたつても遠慮ぶかけに、

「閣下、ミカサです。こちらへ接近しています」

と、ロジェストウエンスキーの注意をうながした。提督は背をかがめて隙間をのぞきこみつつ「わかつている」とどなった。しかしすぐには、異変に即応する命令は出さなかつた。この独裁者は、幕僚の助言を雑音程度にしかおもっていなかつた。かれは自分の頭脳にのみ信頼をおいていた。しかしこの錯綜^{さくそう}した戦闘場面での指揮においては頭脳が占める部分は寡少であつた。それよりも勇気が行動を決定すべきであつた。が、ロジェストウエンスキーに不足しているものはそ

ると、あらたな砲弾が飛んできてあらたな火災をおこした。

東郷が第一、第二戦隊に命じた午後二時四十五分の「南東・二分の一東」の変針のとき、スワロフの艦上にいたセミヨーノフ中佐の実感では、

「東郷はまた新針路を進航してきた。三笠は単縦陣をひきいてわが艦隊の前面を横切ろうとするため、右方にまがった」

ということになる。

当然、ロジエストウエンスキーに通常の戦意があるならば、かれの艦隊も東郷にあわせて右折しなければならぬ。右折し、左舷の砲で戦うのである。

（提督はおそらくそうなさるだろう）

と、セミヨーノフがおもったが、しかしロジエストウエンスキーは依然針路を変えずにどんどん進んだ。おそらく東郷を右へいなし、そのしつぽのあたりを突破するつもりで、ロジエストウエンスキーはいたのかもしれない。

しかし、ロジエストウエンスキーが戦術でもって艦隊をひきずってゆく時機はかれの艦隊の状態においては遅過ぎていた。そういう知的作業は開戦の前後の時間内でやるべきであった。いまは司令長官の戦術よりも、各艦各砲の砲員の目と手と気力にかかっていた。彼我の距離はわずかだった。砲員たちは敵の艦影を見つけ次第射ちまくり、命中させつづけねばならなかった。ところがバルチック艦隊の戦艦の多くはすでに火炎をあげており、砲は破壊されたものが多く、生き残った砲も、艦をおおっている火炎や黒煙のために砲員たちの射撃操作が阻害され、いちじるし

この間の東郷の指揮は、ほとんど無謬むびやうといつてよかつた。

東郷は敵に打撃をあたえつつ、ときどき艦隊の針路を変えた。変えた目的はつねに敵の前面を抑圧しつづけるためであつた。

「三笠はつねにわが前面にいた」

と、ロシア側の諸記録はいふ。常にバルチック艦隊の前面に三笠が姿をあらわすためには、東郷は無理な運動をしなければならなかつた。

東郷は敵前回頭によつて一度はバルチック艦隊の頭をおさえたが、しかしバルチック艦隊も航走している以上、彼我つねに同形を保てるというようにはならない。当初、東郷艦隊は北からきた。それがさまざまの陣形運動をかさねたすえ敵前回頭し、東北東へ航進した。これに対し、ロジェストウエンスキーの艦隊はいったんは首を東へ振つて左舷で砲戦した。このかたちは東郷にとつてのぞましかつた。

東郷はさらにより一層敵の頭をおさえるべく、午後二時四十五分、

「南東・二分の一東」

へ変針し、完全な形態としての前面圧迫の陣形をとつた。この陣形によつて東郷直率の第一戦隊とそれにつづく上村の第二戦隊は、敵に対して猛烈な縦貫射撃を加えたのである。

旗艦スワロフの司令塔にいるロジェストウエンスキーは、なすところを知らなかつた。

スワロフは速力こそ衰えなかつたが、猛炎につつまれ、ひとびとは消火に奔走した。炎が消え

戦艦オスラービアに火災がおこったのは、三笠が射撃を開始してからわずか五分後の二時十五分である。

ついに東郷艦隊は彼我五千メートル以内に踏みこんだ。この肉薄の状況は、真之がかつて造語した「舷々相摩す」という形容にやや近づきつつあった。五千メートル以内に入ると、東郷艦隊から発射される砲弾の命中率が飛躍的によくなった。

真之は相変らず双眼鏡を用いなかった。肉眼でみても、すでに敵艦隊の状況はよく見えた。

戦艦オスラービアの損害は大きく、大櫓は折れ、煙突は吹っ飛び、火災は艦内の各所におこっていた。しかもこの艦は水線部を砲弾で縦横につらぬかれており、その弾孔から大量の海水が入りつつあった。

「オスラービア、傾く」

と、真之はメモをした。

旗艦スワロフのマストも折れており、艦体は火炎でつつまれていた。真之の肉眼では見えなかったが、加藤友三郎の双眼鏡にはスワロフの甲板上を駆けまわっている消火隊の様子が手にとるようにみえた。

火災のもっともひどいのは戦艦アレクサンドル三世であった。

これら火を背負って駆けまわる各艦の猛煙が、海上に薄絹のように垂れた濛氣と入りまじって、思わぬ煙幕をなした。このため日本側は照準が困難となり、ほんのしばらくながら射撃を中止するという処置までとられた。

バルチック艦隊は、東郷の試射の段階においてすでに前述のような惨況を呈した。本格的な射撃がはじまればどうなるのであろう。

セミヨノフが艦橋にのぼったとき、旗艦スワロフにつづく戦艦アレクサンドル三世と同ボロジノという、ロシア帝国の威信の象徴ともいふべき二隻の戦艦が、火災をおこして淡黄色の煙につつまれていた。

(なんとということだ)

と、セミヨノフは思ったが、しかしかれの感想を吹っ飛ばすようにして例の薪が飛んできた。どの薪も肉眼で見えたし、どの薪もみなかれの立っている艦橋をめがけて襲ってくるように思われた。艦橋などに立っていられるものではなかった。かれはあわただしく艦橋を降りた。しかしどこへゆくあてもない。

(艦尾へゆこう)

と、ノートをもったまま駆けだした。途中、足の踏み場もないほどに落下物やら死体などがころがっていた。信号所も距離測定所も着弾観測所もみな日本の砲弾のために破壊されており、旗艦スワロフは軍艦として備えている目と耳の機能をすでに失いつつあることをセミヨノフは知った。

一方、三笠の艦橋では秋山真之もノートをとっていた。この日本海軍における文章家はセミヨノフのように英雄礼讃らいさんの物語を書くことを義務づけられているわけではなく、あとで戦闘詳報を書かねばならないために時々刻々に変化してゆく戦況をメモしているのである。

「すこし各艦の間隔を変えたほうがよさそうですね、だいぶ敵弾が中^{あた}りすぎているようですから」

といったが、ロジェストウエンスキーは賛成しなかった。かれは陣形に修正を加えるということが自分の艦隊にとつていかに大儀なものであるかを知っていた。

「こっちの弾だつて中つているのだ」

と、提督はいった。ロシアの徹甲弾は日本の軍艦に突きささつて艦内に入ってから爆発するために煙も火炎も見えない場合が多い。

(のん気なものだ)

と、ロジェストウエンスキーの讃美者であるセミヨーノフもこのときばかりは腹立たしく思った。この司令塔の連中は、いま艦内がどれほど悲惨な状態にあるかを知らないのだとおもつたのである。

セミヨーノフは司令塔を出て、艦橋へのぼつた。ここからは戦場が一望のもとにみえた。

かれがこの艦橋にのぼつたとき、東郷艦隊はその十五分を要するという回頭運動を終了したばかりであつた。まだ東郷は本格的な砲戦をおこなっていないその十五分間のあいだでさえ、旗艦スワロフは右のような状況になつていた。

セミヨーノフ中佐がスワロフの艦橋にあがつて海域を一望したときは、東郷の艦隊は試射の段階をおわつたばかりだつた。

その能力によつてその三倍の砲門をもっているにひとしかつた。

セミヨーノフ中佐は後部艦橋にこれ以上いることの危険さを感じた。しかしすぐ、危険などは艦内のどこにいても平等に訪問してくることに気づき、

(いっそ、前部の司令塔へゆこう)

とおもつた。ひとつには記録者として、ロジエストウエンスキーや旗艦艦長のイグナチウスの奮闘ぶりを見ようと思つたのである。

かれは肥つた上体をまるくし、細い脚を気ぜわしく動かして上甲板を前部にむかつて走つた。途中、いくつもの死を見た。とくにほんの十分ばかり前に口をきいた信号長が、五体を上甲板に散乱させて倒れているのを見たが、べつに感動はおこらなかつた。ただその血糊ちのりのために足をとられてあやうく転倒しそうになつた。

司令塔は、厚い装甲の壁と鉄の蓋ふたで鎧よろいわれていた。その窓から、ロジエストウエンスキーはやや猫背になつてのぞいている。舵輪のそばには、一人の人間がたおれてゐた。ひとりほは操舵員で、一人は砲術長のベルセーネフ中佐だつた。ベルセーネフは頭をやられてゐた。おそらく即死だつたにちがいない。

この艦隊のなかでもっともすぐれた船乗りである艦長のイグナチウス大佐は、その天賦の美質である快活さをうしなつてはいなかつた。

「どうでしょう」

と、イグナチウス艦長は、双眼鏡をのぞいているロジエストウエンスキーに話しかけた。

た。第二弾は、近すぎた。第三弾は前部煙突のあたりに命中した。

ついで第四弾が、艦尾左舷の六インチ砲塔に命中し、相次いで大火災がおこった。下瀬火薬の特徴は、艦の装甲をぶちやぶつて艦内で爆発するという式ではなく、触れた部分が鉄であれ木であれことごとく火にしてしまうというところにあった。

前部煙突のあたりに巨大な火柱が立っており、艦尾も燃えはじめていた。

戦艦アリヨールの艦上で、日本の戦艦がぶつ放してくる砲弾をみていたノビコフ・プリボイは、

「飛んでくる水雷のようだ」

と言い、また巡洋艦オレーグの艦上にいたS・ポソコフという士官は、

「これは砲弾という機雷である。炸裂すると不消散質の煙をぱつと撒き、海中に落ちてさえ破片がとんでわれわれに被害をあたらえた」

と、書いている。

スワロフの後部艦橋にいたセミヨーフは、開戦数分後に、艦尾にいた十二、三人の信号兵が、右舷六インチ砲塔のまわりに肉片をまきちらして全滅してしまっていることを知った。

（たった数分のあいだに）

ということが、セミヨーフを戦慄させた。日本艦隊の射撃能力は、ロシア艦隊のそれのゆう、三倍以上であることを知った。日本側は備えつけの砲の数だけをもっているのではなかった。

日本の砲弾は、世界のどの海軍の砲弾にも似ていなかった。下瀬火薬を詰めこみ伊集院信管いじゅういんをはめこんでいるために細長かった。

かつてこの砲弾を相手に戦った旅順艦隊の連中は、この砲弾に、

「チエモダン砲」

というあだなをつけていた。そのことはすでにふれた。以前、旅順艦隊に属していたセミヨノフ中佐は、この砲の姿や威力についてはよく知っていた。

ところがいまあらためて目撃すると、なんとも奇妙なものであることを認識しなおした。

「ちようど薪まきをほうり投げたように」

と、セミヨノフはその印象を説明する。薪がクルクルと空中でまわりながら飛んでくる様子で、その飛んでくる姿が肉眼でもみえるのである。飛翔音もたいしたものではなかった。ロシアの砲弾がごうごうと鉄橋を列車が通りすぎてゆくような音響をたてるのに対し、この独特の長形弾はブーンといういかにも優しい音響をたてるだけで轟音というようなものではなかった。

「これが例のチエモダン砲というやつか」

と、レドキンが、あきれたようにいった。

最初の砲は、かばんスワロフを飛びこえて海中に落ちた。こういう場合、ロシアの砲弾なら水没して長大な水煙をあげるだけだが、日本の砲弾はその鋭敏な伊集院信管によって海面にたたきつけられると同時に海面で大爆発するのである。このため艦体に命中しなくても弾体は無数の破片になつて艦上を襲った。その破片が、舷側や甲板上の構造物に当っては、するどくみじかい音をたて

なかった。

むろん、かれは、

——何隻かはウラジオストックへ辿りつける。

とおもつてはいた。しかしかれのとらわれは、その遁入成功の何隻かのなにかれ自身が乗っていないければならないと思つていたことであつた。そのとらわれが、かれの戦術思考をして尖鋭さを欠かしめ、かれの決断をして鈍重たらしめた。東郷の奇術の前にほとんど無策でいたといふかれの事情はそういうところにあつたであらう。

東郷とその艦隊のスワロフへの砲弾の集中ぶりはものすごいものであつた。砲戦を開始して以来、数次にわたる戦闘中、スワロフに命中した日本砲弾は数百発以上にのぼつたであらう。これからみれば三笠が蒙つた命中弾数など、比較にならなかつた。

記録を担当するセミヨーノフ中佐は、できるだけこの戦闘を網膜におさめようとおもつた。

セミヨーノフは最初、後部艦橋にいた。

見物者であるセミヨーノフの横に、さしあたっては暇なレドキン大尉もいた。レドキンは艦尾右舷六インチ砲の砲台長で、砲戦が左舷砲でもつておこなわれているあいだは用がないのである。

セミヨーノフの双眼鏡に映つた日本側の最初の砲煙は、三笠が変針して新針路につき、つづいて敷島、富士、朝日が回頭したとき三笠から騰つたものであつた。

が、旗艦スワロフの司令塔内にいるロジェストウエンスキーは東郷に対抗するのにそれにふさわしい戦術を用いようとはしなかった。ただ砲員たちに対して射撃を命じるとどまった。開戦の幕は午後二時八分、ロシア側の砲火によって切り落とされたことはすでにのべたが、ロシアの各艦の砲員たちは個々に活動し、個々によく働いた。しかし艦隊という大きな場からみればこの艦隊は砲員という手足のみが存在し、司令長官という脳髓が存在しないということさえ言えそうであった。というよりロジェストウエンスキーその人が、海戦概念のもち方において東郷よりはなはだしく劣っていた。かれは海戦といえは相かわらず旧来のまま単艦によってたがいに叩き合うという思想からわずかしが出ていなかったのである。東郷とその幕僚たちにくらべ、基本的な海戦という動態のとらえ方がちがっていた。

ロジェストウエンスキーのこの海戦に臨んでの考え方は、いまこれを推測すれば、神と各艦の艦長と各艦の砲員の働きにまかせきっていたということとは言えた。

さらにいえば、ロジェストウエンスキーのこの場の思考には重大なとらわれがあり、それがつねに純粹で透明であるべきかれの戦術的思考の足をひっぱり、歪曲させ、にぎらせていた。

「東郷のすきをみつけてこの戦闘海域から足を抜き、ウラジオストックへ遁入する」ということである。

純粹に東郷とこの海域で智と勇と誠実さのかぎりをつくして戦いの航跡を描ききろうという考えはかれにはなかった。もしかれがその覚悟をきめ、この海域を正念場として死力をつくしてたたかえば、たがいにその麾下の諸艦を沈めあいつつも残艦がウラジオストックに入れたかもしれない

「わが全力をあげて、敵の分力を撃つ」

という東郷の戦法は、その思想が奇抜であつただけでなく、その思想を実現するために演じた艦隊運動（敵前回頭）も奇抜であつた。

繰りかえすようだが、この光景を目撃した旗艦スワロフの幕僚たちの感想は三通りにわかれた。

「東郷、狂せり」

とおどりあがつてよろこんだ者、

「東郷は例によつてアルファ運動をやつた」

と、無感動な説明式の感想だけでおわつた者などがいるが、いまひとつは、

「この運動が問いかけているなぞは何だろう」

と、戦術的課題として考えた者もいた。主将のロジエストウエンスキーもそのひとりであつた。しかし答えが出なかつた。答えが出なければ、考えているより猪突^{ちよとつ}すべきであつた。もしロジエストウエンスキーがすぐれた戦闘者であつたなら、戦いの意志の命ずるままに変針運動中の東郷にむかつて突進すべきであつた。

なにしろこの提督は東郷の三笠よりも艦齡の若い新鋭戦艦（第一戦艦戦隊）をひきいてるのである。もしこの新鋭戦艦たちをひっさげて全速力で東郷の艦隊の後尾にむかつて突進すればあるいは東郷のこの魔術的な運動はせつかくの魔術効果を發揮せず開戦早々に陣形を混乱させたかもしれない。

じつは安保もそのことはわかつている。かれは東郷のほうに笑顔をむけて、太い眉をさげた。「ただいまのは、じつは激励のためにそう言いましたので」と、いった。

東郷の胸もとにぶらさがっている双眼鏡のことはすでに何度かふれた。かれの双眼鏡だけがツアイス製の高倍率のプリズムで艦隊のどの士官のめがねよりもよくみえた。

「明治三十七年二月、日露開戦のとき、カール・ツアイス製のプリズム双眼鏡がわが国の軍部において初めて採用されたのである。それ以前においては軍部を初め一般用に使されたのは、仏国のルメヤ製の双眼鏡であつた」

と、片山三平氏がその著「測量機の發展史」で述べている。が、「初めての採用」とはいえ、実際にはこの双眼鏡は東郷と、もうひとり駆逐艦乗りの塚本克熊かつくまという若い中尉がもっていただけであつた。

ついでながら片山三平氏は明治十八年三月岡崎市のうまれで、明治三十三年に銀座のめがね屋の「玉屋」に小僧として入り、その後光学機械販売の草分けとして富士測量機の取締役などを経られたが、いまこの稿のこの時期（昭和四十七年）八十六歳の高齢ながら矍鑠かくしやくたる印象で、

「そのころ私は玉屋で寝起きしておりました。東郷さんのお屋敷まであの双眼鏡を届けに行ったのは私でした」

と、語っておられる。

の言葉を思いだしては自分の気持を保った。なにしろ東郷は、彼を輔佐する真之がうまれたときにはすでに幕末から戊辰戦争にかけての数次の戦闘を経験した薩摩藩の海軍士官だったのである。

古今東西の将帥で東郷ほどこの修羅場のなかでくそ落ちつきに落ちついていた男もなかったであらう。

艦橋にいる砲術長の安保清種少佐は、たれよりもいそがしかった。かれは目標の敵艦から目を離すことなく、当方が射ち出してゆく砲弾の弾着の状況を迅速的確にとらえては、伝令をくりだし、全砲火の射撃指導をしていたが、その間、かれが気をつかったのは艦底に勤務している兵員のことだった。艦底での配置といえは機械室、弾火薬庫、^{かましつ}罐室などの勤務がある。かれらは戦闘を見ることが不可能であるため、不安が大きかった。安保清種はこれを察し、かれの義務以外のことであったが、射撃指導のあいまを縫っては、伝令をつかい、戦闘の状況を艦内くまなく知らせていた。

たとえば、

「いま三笠の十二インチ砲弾がボロジノにあたったぞ」

と叫んだことがある。

東郷はこのとき安保のうしろにいた。東郷は笑いをふくんだ声で、

「砲術長、^{いま}今なア、^{あた}中っちゃ居らんど」

と、薩摩弁でいった。

ち、ローブが切れた。水兵は万歳の声をのこして後方へ流れ去った。

一方、先頭艦の三笠の被弾状況は刻々惨烈さを加えた。

一弾が大櫓の上部に命中して、弾片を四方八方に散らした。艦橋にいた真之がふりかえって仰ぐと、その瞬間まで全艦隊の象徴としてひるがえっていた大将旗と戦闘旗が消えていた。

ところが、この大櫓の檣楼^{しやうろう}見張の配置にいた信号係の下士官の柏森源次郎が、かねて個人的に用意していた戦闘旗をとりだし、すぐさまそれを檣頭にかかげた。

「おもしろいことをするやつだ」

と、真之は声をあげてひとりごとをいった。

東郷はちらりとふりかえっただけでふたたび敵艦のほうを見た。この戦闘旗が一度消えてふたたびあがったとき、後続する各艦の艦長以下がひどく感動した。しかし当の三笠ではほとんどどの者が、マストが折れたのも旗がふたたび揚がったのも気づかず、操艦、射撃、伝令などの戦闘動作に夢中になっていた。

東郷はかねて、

「海戦というものは敵にあたえている被害がわからない。味方の被害ばかりわかるからいつも自分のほうが負けているような感じをうける。敵は味方以上に辛^{つら}がっているのだ」

というかれの経験からきた教訓を兵員にいたるまで徹底させていたから、この戦闘中、兵員たちのたれもがこの言葉を思いだしては自分の気をひきたてていた。真之でさえこの戦闘中、東郷

ゼンチン国であつた。日本ではない。

この二艦が竣工されようとしているのを英国海軍が目をつけ、日本にあれを買つてしまわないか、と示唆した。ロシアもこれに気づき、アルゼンチンをめぐつてたがいに購入競争をし、ついに日本が思いきつた買収価格を出したために開戦の直前、日本の手に落ちた。

この二艦を地中海から回航してきたのは、いまこの海域で駆逐隊司令をしている鈴木貫太郎たちであつた。その回航を地中海の洋上でなしうるかぎりの邪魔をしたのは、いまこの海域でロシア側の先頭にいる戦艦オスラービアであつた。

この春日、日進は、その設計に日本側が参加していない艦であるため、日本海の波浪の荒さが計算に入っていないかつた。このため、ロシアの軍艦の多くがそうであるように、吃水きつすいに近い舷側の砲は波をかぶつて照準がしにくかつた。

とくに春日はひどかつた。いよいよ砲戦が開始されるといふとき、舷側砲の「砲門扉」ほうもんびは当然ながら外にむかつて開けられていた。その扉は繫止鏈とらひしれんでつなげられて動かぬようにされている。

扉のすぐ下は海であつた。怒濤が奔騰していた。そのうち十二番六インチ砲の砲門扉は波に連打されつづけてきたために、あれほど頑丈な繫止鏈がひきちぎられてしまった。すぐ修理すべきであつた。しかし艦内から手をのばして扉に触れようにも扉が重く、とうてい力が及ばない。そのうち怒濤は砲門をも洗い、近づくこともできなくなつた。このとき二等水兵の池田作五郎という力自慢の兵が自分の体をロープでしばり、砲門から舷外に出た。かれは舷外で扉につかまり、切れた繫止鏈をつなぎとめようとした。ようやく繫ぎとめたときに、大波がこの水兵の全身を打

目は十二インチ砲弾であつた。砲弾は、残っていた左側の砲身をこなごなに砕いた。

また六インチ砲弾が、大櫓に命中した。

このとき、日進の大櫓にのぼっていて弾着の観測をしていたのが、中島文弥という声の大きい三等兵曹だつた。かれは落ちないように体をマストに縛りつけ、上桁じょうとうに腰をおろして元気のいい声で弾着を報じていたが、このときの命中弾で右脚を付け根から持ち去られ、そのため体中の血がその大きな傷口を筒口にして艦上へ降りそそぐというかつこうになつた。中島はマスト上にはりつけになつたようなかたちで絶命した。

春日、日進というのは、つらい軍艦であつた。

この二隻はわずか七七〇〇トンの装甲巡洋艦であるのに、三笠以下の戦艦の戦隊（第一戦隊）に編入されていた。昨年、旅順沖で機雷のために沈んだ二隻の戦艦（初瀬、八島）の身代わりとして編入されたことはすでにのべた。

戦艦は主砲が大きく、装甲が厚い。この攻撃力と防御力を基礎にして戦艦の戦隊の戦術運動ができあがっているのだが、戦艦からみれば小児のような春日と日進が、大人なみの運動にくっついてゆかねばならないのである。ただその主砲は十インチと八インチ砲ながら仰角が大きく、一万五千メートルという長大な射程をもっていた。さらにこの両艦は副砲を片舷に六門ももっていたために戦艦の代用がとまると判断されたのである。

開戦前、この二艦はイタリアのゼノアの造船所ではほぼ竣工されようとしていた。注文主はアル

が、奇運になった。降りたと同時に、

「頭上のほうで、なんとも言いようのない、腹の底をえぐるような轟音がきこえました」

と、いうのである。あわてて上へあがつてゆくと、砲塔が半ば消えていた。そのあたりは猛火で、足もとは血の海になっていた。手足が飛び、胴がころがっていて、重傷の砲塔長をのこすほか、全員が戦死していた。

十二インチ砲弾が命中してしまったのである。砲弾は砲眼孔^{ほうがんこう}をぶちぬいて塔内で爆発し、右砲身を根元から折った。塔内ではたまたま砲員たちが弾丸を装填中^{そうてんちゆう}だったため火が発射装薬に引火し、一瞬で塔内が熔鉱炉になったように火が充満したのである。

六番艦の日進の状況もすさまじかった。

この艦は殿艦だったために、三笠に次ぐほどの砲弾量を浴びた。

開戦三十分後に十二インチ砲弾が飛んできて、前部主砲の砲塔に命中したのである。このため右側の砲の砲身は吹っ飛んで海中へ落ち、弾片が四方に散ってその一部は艦橋にいた参謀松井健吉中佐の胴から下をうばって即死させ、さらに鉄片群は上甲板、中甲板、下甲板を襲い、十七人を死傷させた。

そのあとさらに九インチ砲弾が、すでに廃墟になっている前部主砲の砲塔に落下して大爆発し、その破片は司令塔のなかに飛びこみ、司令官三須宗太郎中将や航海長を負傷させた。さらに当時高野といった山本五十六候補生など約九十名も血みどろになった。この碎かれた前部主砲砲塔はまるで磁気をもっているようにしばしば敵の砲弾をひきよせた。三たび砲弾が襲った。三度

とく重軽傷をうけて全滅した。

ほどなく彼我の距離が五千メートル台になった。

「七千メートル以内でないと射撃の効果があがらない」

というのが東郷の持説であつたが、五千メートル台というのはもはや接戦であるといつていい。甲板を動きまわっている兵員の姿までたがいに見えるのである。海面はたえず落下弾に掻きまわされ、沸騰し、水煙が林立した。とくにロシアの十二インチ砲弾の水煙は艦橋を越えるほどの高さで騰り、滝のように甲板に崩れこんだ。海面をたばしる発射音、炸裂音の物凄さはどうやら大気そのものが割れる音であり、天が崩れおちるのではないかとおもわれた。

東郷の艦隊を各艦ごとに見れば、どの艦もまるで敗北の様相であるかのような、生き地獄そのままであつた。

三番目を走っている戦艦富士の後部主砲の砲塔のなかで働いていた西田捨市翁は、揚弾機を操作する係だつた。艦底の弾薬庫から巨大な十二インチ砲弾を揚弾機でひきあげてきてそれを弾込めするのである。

後部主砲の砲塔は前部のそれとおなじく二門の大砲がつき出ている。この砲塔を指揮しているのは寺西益次郎という兵曹長であつた。寺西以下九人でこの砲のすべてを操作している。三十分ばかり射ちつづけていると、揚弾機が故障して弾があがらなくなった。

当時、若い三等兵曹だつた西田翁はすぐ故障の修理をすべく艦底の揚弾機室へ降りた。それ

べし」

というのは、秋山真之が日本の水軍の戦術案から抽きあげた戦法であった。この思想は、外国の海軍にはなかった。

東郷は真之の樹てた戦術原則のとおり艦隊を運用した。秋山戦術を水軍の原則にもどすと、「まず、敵の将船を破る。わが全力をもって敵の分力を撃つ。つねに敵をつつむがごとくに運動する」

というものであった。

このためロジェストウエンスキーの旗艦スワロフと、それと並航しているかのごとくにみえる戦艦オスラービヤは、またたくまに日本の下瀬火薬につつまれた。その二隻をとりまく小さな空間は濃密な暗褐色の爆煙でつつまれ、絶えまなく命中弾が炸裂するため爆煙のなかで、閃々と火光がきらめき、やがて火炎があがった。

ロシア側も、撃ちに撃った。

「三笠」

が、目標になった。

三笠が最初の射撃をおこなってから二分後に、ロシア側の六インチ砲弾が前部煙突をつらぬき、信管がにぶかったせいかわずらただけで炸裂せずにむこう側へ飛び去った。次いでその一分あとに戦艦の主砲の砲弾である十二インチ砲弾がものすごい飛翔音をあげつつ落下してきて三番砲の砲郭の天蓋をぶちやぶり、砲郭内で大爆発をおこし、同砲の砲員は一人をのぞくほかことごと

旗艦三笠はぐりとまわって新正面に艦首をむけたとき、三笠にとってバルチック艦隊の艦艫もうどう四十余隻は右舷の海にひろがったことになる。

彼我の距離はわずか六千四百メートルにすぎず、三笠以下が気が狂ったように急航するためにそれがみるみるちぢまるように思われた。

艦橋にいる砲術長の安部少佐は左手に秒時計をもっている。右手で眼鏡をのぞいたり、艦橋のどこかをつかんだりした。艦がゆれた。波浪だけではなく、敵弾があたり艦体が動揺するのである。ときどき視界をうばわれた。砲弾の炸裂煙のためであった。

かれがこの運命の戦いで最初の射撃命令をくださったのは、午後二時十分である。

右舷の大小の砲がいつせいに火を吐き、多くの砲弾がライン・ダンスのような均整のみごとさで同時に飛び出した。その反動で艦体が撓たふむかとおもわれるほどに軋きんだ。

目標は、敵の旗艦スワロフであった。

つづく敷島が回頭をおえて直針路に入ると、三笠同様に右舷射撃をおこなった。富士も同様であり、朝日、春日そして殿艦の日進もそのようにした。さらに出雲以下の第二戦隊がそれを終了したときには、東郷の全主力は、各艦の片舷の諸砲あわせて百二十七門の主、副砲が、バルチック艦隊の先頭をゆく旗艦スワロフとオスラービアをめがけて砲弾を集中させていたことになる。この意味ではこの戦術は数学的合理性のきわめて高いものであるといえた。

「水戦のはじめにあたっては、わが全力をあげて敵の先鋒を撃ち、やにわに二、三艘を討ちとる

巡洋艦といわれた。装甲はむろん戦艦より薄い。主砲の大きさも戦艦よりは小さい。しかし速力は迅^{はや}かった。日本の戦艦が十八ノットであるのに対し、二十ノット強は出すことができ、運動性の高さが評価されていた。

この六隻の装甲巡洋艦を主力決戦の重要な単位として入れたのは、日本の独創である。山本権兵衛がこれを決定した。各国とも巡洋艦といえば防御力がよいということで、主力決戦のための要素としてあまり評価されておらず、その名称のごとくこの艦種の役割は遊撃的なものであった。

各国では、十年前、日本が戦艦と同数の装甲巡洋艦をそろえつつあるのをみて奇異におもい、英国海軍筋では、

——戦略上、不合理ではないか。

と忠告をしたことがあるほどであった。しかし実地にこれが主力勢力の副勢力として海上で威力を発揮してから山本のプランがまちがったものではなかったことが実証され、このあと、世界中の海軍が有力な主砲をもつ装甲巡洋艦を重視してついに巡洋戦艦が出現するにいたるのである。

ただし、それには運用がよほど巧妙でなければならなかった。東郷と上村はこれをうまく用いたが、それでもなお、この仲間の浅間はこの十五分間のあいだで艦尾ちかくに十二インチの巨砲弾をくらい、その爆発による激動で舵機^{だき}に故障を生じ、操艦の自由をうしなった。浅間はたちまち艦隊の列から脱落し孤艦になったのである。

異例として考えるべきだろう」

という批評が、各国海軍筋のおおむねの感想であつた。規範外のやりかただとみるのである。たしかに東郷自身がいうように、実戦の経験から出たかんがかれにこの方法をとらせた。

ロシア側は遠距離射撃がへたな上に風下^{かざしも}に立っているために波しぶきをかぶり、砲の照準がしにくい。それに対し、日本側の主力はロシア側の主力よりも優速で、しかも艦長たちが艦隊運動に長じているため、どういう状況下でも東郷の号令一つで東郷のおもうような運動を展開することができる。東郷は敵の不利と味方の有利を、彼我八千メートルというぎりぎりの瞬間で数学的総合をし、判断をし、とっさに結論をくだし、断行した。このときかれの計算には自分の戦死と三笠の沈没の公算も入っていた。

この敵前回頭という捨て身の運動中、三笠以下は艦隊のありたけの速力を出していた。運動に要する時間をできるだけちぎめたかった。これに要した十分という時間は、生と死を分ける魔の時間として無限に永いようにおもわれた。三笠は一個のドラムに化したように、ロシア製の砲弾に叩かれつづけた。

むろん被弾は三笠だけではなかった。後続する敷島、富士、朝日、春日、日進もこの間射たれっぱなしに射たれた。さらにそれら第一戦隊の後方につづいて波を蹴っている上村^{かみむら}彦之丞直率の第二戦隊にいたっては、装甲が弱いだけに被弾状況はすさまじかった。

第二戦隊の主力は、旗艦出雲以下六隻の装甲巡洋艦である。

排水量は九千トン台で、いずれも戦艦のように装甲板が張られているためこの当時とくに装甲

た。

三笠は一方的に射られた。その炸裂音の物凄さは、巨大なハンマーで艦体をたたきのめされているようであり、備砲のうち一発も射たないうちに破壊されたのもあった。砲弾の破片は艦内を飛んで兵員たちを薙ぎたおし、甲板はたちまち流血でいろどられた。

以下の事態は応射後におこったことだが、右舷第十六発目の命中弾は兵員厠外の鉄板をつらぬいて内壁で大爆発し、そのあたりの兵員を将棋倒しにしてしまっただけでなく、無数の破片が四方に散った。

それが司令塔にまでおよんだ。装甲にかこまれているはずの司令塔にまでとびこみ、そこにいた参謀飯田久恒少佐と水雷長菅野勇七少佐および下士官兵二名を傷つけ、次いで別な破片が、副長松村竜雄中佐以下八名を負傷させた。

その間、東郷は双眼鏡をかざしたまま艦橋のかれの位置に立ちつくしていた。水中への落下弾のしぶきでこの艦橋さえびしょぬれになっており、砲弾の飛翔音は間断なく頭上に鳴りつづけていた。そのうち、砲弾の大砲片が東郷の胸もとわずか十五、六センチの空間をかすめて飛来し、横の羅針儀に突きささった。羅針儀はびっしり釣床をもって巻かれていたが、その釣床のひとつに突きささったのである。釣床の緒が切れ、釣床一本が東郷の足もとにころがった。

東郷がやった敵前回頭については、

「海軍戦術一般の原則にはなりにくい。東郷をとりまいている諸状況のなかでのみ成立しうる特

て最初の砲弾を三笠へ送った。艦体がずしつとふるえ、砲煙が背後へ去り、ひとびとは砲弾の行方を見まもった。

その初弾は砲戦における初弾の多くが命中しないように、むなしく三笠の上を飛びこえて、その二本煙突のむこう側で水煙をあげた。

そのあとは、バルチック艦隊の主力艦という主力艦が、主砲、副砲をめったやたらに射ちまくった。

が、三笠は応射しない。他の艦も、ノビコフのいう「びっくりするほど鮮かな手際の」陣形運動をしずかにおこなっているのみで、応射はしなかった。陣形運動のために応射しようにもそれができなかつたのである。たしかに運命の神が、この東郷運動の完了するまでのあいだ十五分間は一方的にロジエストウエンスキーに微笑^{ほほえ}みつづけたのである。

命中弾も多かつた。そのほとんどを、旗艦三笠が吸いこんだ。東郷は最初からそのつもりでいた。

真之は、のちにこのように語っている。

「敵がはじめて火蓋を切つたのは午後二時八分であつた（真之は艦橋上でそれをノートに書きこんでいた）。そのあと、敵の各艦が猛烈に射ってきた。この最初の三、四分のあいだに飛来した敵弾の数はすくなくとも三百発以上であつたかとおもう」

この間、三笠の被害はすさまじいものであつた。三笠はこの日一日の海戦で、右舷側に四十個、左舷側に八個の弾痕をとどめたが、その大半はこの最初の回頭直後にこうむつたものであつ

と、のちに東郷は語っている。

「適切な時機をつかんで猛撃を加えることである。その時機を判断する能力は経験によって得られるもので、書物からは学ぶことができない」

用兵者としての東郷はたしかにこのとき時機を感じた。そのかんは、かれの豊富な経験から弾き出された。

旗艦スワロフの後部艦橋で三笠の奇妙な運動をみたセミヨーノフ中佐は、

「東郷は狂したか」

と、たまたま横にいた右舷副砲の後部砲塔の指揮官レドキン大尉にむかって叫んだ。レドキンも、

「日本人は何を為そうとしているのか」

と、雀躍雀躍した。レドキンにいわせれば、東郷の艦隊は、いま回頭運動をしつつある三笠と同様、つぎつぎにその場所場所で動かざる一点になるのである。ロシア側はその一点に照準をつけて射ちさえすれば射的遊戯のようなたやすさで日本の主力艦を一艦ずつ葬り去ることができる。

スワロフの司令塔のなかで東郷のこの変化を見たロジェストウェンスキーは、すぐさま射撃を命じた。あたかも三笠が回頭を終えて新針路にころとしたときであった。ときに、午後二時八分、距離は七千メートルである。スワロフの前部主砲十二インチ口径の巨砲が、日本海を震わし

にとつては極端に言えば静止目標を射つほどにたやすい。たとえ全艦が十五ノットの速力で運動していても、全艦隊がこの運動を完了するのは十五分はかかるのである。この十五分間で敵は無数の砲弾を東郷の艦隊へ送りこむことができるはずであった。

戦艦アリヨールの艦上からこの東郷艦隊の奇妙な運動をみていたノビコフ・プリボイも、

「ロジェストウエンスキー提督にとつて、一度だけ運命が微笑したのである」
と、書いている。

戦艦朝日に乗っていた英国の観戦武官W・ペケナム大佐は東郷を尊敬することのあつた人物だが、この人物でさえ、このときばかりは東郷の敗滅を予感し、

「よくない。じつによくない」

と、舌を鳴らしたほどであつた。

稀代の名参謀といわれた真之でも、もしかが司令長官であつたならばこれをやつたかどうかは疑わしい。かれはおそらくこの大冒険を避けて、かれが用意している「ウラジオまでの七段階備え」という方法で時間をかけて敵の勢力を漸減させてゆく方法をとつたかもしれない。

が、東郷はそれをやつた。

かれは風むきが敵の射撃に不利であること、敵は元来遠距離射撃に長じていないこと、波が高いためたださえ遠距離射撃に長じていない敵にとつて高い命中率を得ることは困難であること、などをとつさに判断したに相違なかつた。

「海戦に勝つ方法は」

しない。ロシア側の戦史では、

「このとき東郷は彼がしばしば用いるアルファ運動をおこなった」

という表現をつかっている。

繰りかえすと、東郷は午後二時二分南下を開始し、さらに一四五度ぐらい左（東北東）へまがったのである。後続する各艦は、三笠が左折した同一地点にくると、よく訓練されたダンサーたちのような正確さで左へまがってゆく。

それに対しロジェストウェンスキーの艦隊は、二本もしくは二本以上の矢の束になって北上している。その矢の束に対し、東郷は横一文字に遮断し、敵の頭をおさえようとしたのである。日本の海軍用語でいうところの、

「T字戦法」

を東郷はとった。

T字戦法の考案は、秋山真之にかかっている。真之がかつて入院中、友人の小笠原長生の家蔵本である水軍書を借りて読み、そのうちの能島流水軍書からヒントを得たものだということは以前にふれた。ただこの戦法は実際の用兵においてはきわめて困難で、場合によっては味方の破滅をまねくおそれもあった。

げんに、敵とあまりにも接近しすぎているこの状況下にあつては、真之もこれを用いることに躊躇ちゆうちよした。

三笠以下の各艦がつぎつぎに回頭しているあいだ、味方にとっては射撃が不可能にちかく、敵

瞬間、加藤は東郷に問うた。東郷が點頭した。このとき、世界の海軍戦術の常識をうちやぶつたところの異様な陣形が指示された。

「艦長。取舵一杯。――」

と、加藤は、一度きけばたれでも忘れられないほどに甲高い声で叫んだ。

艦長伊地知大佐は、一段下の艦橋にいた。かれの常識にとつてもこの号令は信じられないことであつた。取舵の号令は、「トオオオ」と長くひっぱって、「リカアジ」とむすぶ。左まわしのこである。取舵とは面舵（右舵）に對することばで、日本古来の水軍用語である。

「一杯」というのは極度にまで舵をとつて艦首を左のほうへ急転せしめることをいう。

伊地知がおどろいたのは、すでに敵の射程内に入っているのに、敵に大きな横腹をみせてゆうゆう左転するという法があるだろうかということであつた。

伊地知はおもわず反問し、

「えつ、取舵になるのですか」

と、頭上の艦橋へとなりあげると、加藤は、左様取舵だ、と繰りかえした。

たちまち三笠は大きく揺れ、艦体がきしむほどの勢いをもつて艦首を左へ急転しはじめた。艦首左舷に白波が騰り、風がしぶきを艦橋まで吹きあげた。有名な敵前回頭がはじまったのである。

要するに東郷は敵前でＵターンをした。Ｕというよりもα運動というほうが正確にちいかも

「君が、ひとつスワロフを測ってくれるか」

といった。このあたりが、加藤という、いつのばあいでも不気味なほどに冷静でいられる男のふしぎさであった。敵旗艦スワロフとの距離は長谷川少尉が測距儀をのぞきながら報告したばかりであり、安保少佐があらためて測りなおすまでもなかった。しかし加藤はこの場になってもその入念な態度をうしなわなかった。

安保少佐は真之の横をすりぬけて後方へゆき、長谷川少尉と交代した。のぞくなり、おどろいた。すでに彼我の距離は八千メートルに近づいていたのである。

「もはや八千メートル」

と叫び、そのあと、

——どちら側で戦さをなさるのですか。

と、どなった。

左舷か、右舷か、どちらであるかを決めてもらわねば射撃指揮の準備ができないのである。このとき安保清種ほどの者でも、東郷が考えていた陣形を想像することができなかった。

「……私は大声でつぶやいたのです」

と、安保清種はのちに語っている。つぶやいたというのは東郷と加藤をどなりあげるような失礼をしたわけではない、ということであろう。

ところがかれがそうつぶやいたとき、安保砲術長の記憶では、かれの眼前で背を見せしている東郷の右手が高くあがり、左へむかって半円をえがくようにして一転したのである。

押しおしの戦いくささをするのか、あるいは擦れちがいざまに射ちあう反航戦をやるのか、射撃指揮を一身であずかっている安保清種にすればそれによつて射撃戦がずいぶんちがつてくるのである。

この当時の射撃指揮は、その後のちに発達した便利な道具や理論がないために、安保自身の頭でさまざまな諸元を考え、かれ自身の頭で照尺量を出して各砲に号令することになる。諸元というのはたとえば自分の艦の速力や大砲の射線、敵艦の速力や方向、風むき、風力などといったもので、それらを瞬時に計算して瞬時にだいたいの照尺量を出してこれを各砲に号令することである。

彼我の艦隊は刻々近づいている。安保清種はできるだけ落ちつくように自分に言いきかせていたが、しかし彼我の速力が相当早く、気のせいまぼたか、瞬まばたくごとに敵の艦影が大きくなるような気がする。

安保砲術長の部下が、測距儀に両眼を押しつけている長谷川清少尉であった。その長谷川が、「距離八千五百メートル。――」

といったとき、安保砲術長はたまりかねて東郷と加藤に対し、「もう八千五百メートルです」と、言わでものことであつたが陣形決定をせきたてたい気持もあつて叫んでしまった。

加藤参謀長はふりむくなり、

「砲術長」

と、蒼白な顔でいった。加藤の胃痛はこのときもなおつづいていた。

方式で弾を敵艦に当てようとするのは僥倖きやうしやうを期待するようなものであり、敵に決定的打撃をあたえることは不可能に近かった。

加藤寛治は黄海海戦で三笠の砲術長をつとめて苦汁をなめた。かれはこの海戦で軽傷を負ったが、かねて考えていたこの射法を立案し、東郷によって採用され、後任を安保清種少佐にゆづったのである。

その骨子は、

「艦砲火の指揮は艦橋において掌握し、射距離は艦橋より号令し、各砲台においていっさいこれを修正せざることを原則とす」

というもので、はたして激戦中にその号令伝達がうまくゆくかどうかについては多少の疑問が残されていたが、ともかくも現砲術長の安保清種はこの方法を踏襲し、それがために艦橋を離れずいたのである。

「私は気が気ではなかった」

と、安保清種はのちに語っている。

かれはいかにも砲術科将校らしく大ぶりの風丰ふうほうをもった男で、平素は一見ものにこだわらない印象をひとにあたえている人物だったが、このときばかりは職掌柄いらだたざるをえなかった。

どういう陣形で戦うのかを、東郷も加藤もこのぎりぎりの場になっても明示しなかったからである。

つまり敵を右に見て戦闘をやるのか、左にみてやるのか、それとも敵とならんで航走しつつ平

「秋山とおれとが、おそばに残る。飯田と清河は塔内で仕事をしろ」

飯田と清河はそのとおりにした。副官も入った。

艦橋に残ったのは、東郷とその二人の幕僚だけになった。ほかに艦の砲術指揮をしなければならぬ安部少佐と測距儀を操作している長谷川清少尉と玉木という少尉候補生などが残っている。

Z旗があがった時刻は、午後一時五十五分であった。

ロシア側は、まっすぐに北上してくる。

日本側はこれに対し北からさがってきてロシア側に対し反航するかたちをとった。反航とは敵に対しすれちがうかたちをいう。

東郷艦隊はこの時期、かつて三笠の砲術長だった加藤寛治少佐の提案によって「統一した照尺距離を用いる射法」という世界最初の方法を採用していた。このことは以前ふれた。

繰りかえすことになるが、その射法とは一艦のすべての砲火を、艦橋にある砲術長の指揮によっておこなうという方式であった。

それまでは、各砲ごとの指揮官の判断と号令による独立射方どくりつうちかたと称すべき方法がとられており、砲火指揮はいわばばらばらであった。

ところが黄海海戦の経験によってこの方法は決戦には不向きであるということが明瞭になった。とくに反航戦という、あつというまに過ぎ去る戦闘時間で砲戦をする場合、このばらばら

と、いった。副官の永田泰次郎中佐が東郷に寄り添うようにして、かさねて頼んだ。さらに加藤参謀長も「ぜひ」といって、言葉を添えた。

しかし東郷はうごかなかった。艦橋はいわば露台^{ろだい}で、吹きっさらしである上に、戦闘中は砲弾が飛び交い、炸裂^{ざくれつ}した砲弾の破片がそのあたりの人員を薙^なぎたおしてしまふ公算が高い。そのために司令塔という装置がある。司令塔に入ると視野が制限されるとはいえ、しかしそれを囲んでいるぶの厚い装甲（十四インチ）が、戦闘中指揮官の生命を守ってくれるはずであった。

しかし東郷は動かず、命令のかたちで、

「自分は齡をとっているから、老い先から考えてどこでどうなっても知れている。だからここ（艦橋）にいる。みなは塔の中に入れ」

と、いった。開戦ともなれば、先頭艦であるこの三笠に敵の砲弾は束になって集中するであろう。東郷にとって過去の提督の模範はネルソンしかなかったが、ネルソンは戦闘中に戦死した。東郷もおそらくこの戦役におけるこの最終決戦において自分の生命は終わると覚悟していたにちがいない。

参謀長の加藤友三郎は、東郷のその気持がよくわかった。

「では」

と、幕僚たちにむかい、分散しよう、といった。かつて黄海海戦のときに三笠の幕僚たちが艦橋上でかたまっていたために一弾で数人も負傷するという事態が発生した。分散しておればたれかが生き残るだろうと加藤はおもったのである。

やったわけだが、一水兵にすぎなかった西田翁からすれば、これが奇蹟の現象のように感じられたらしい。

「じつにふしぎでした。にわかに黒雲が出て、敵側に強風が吹きはじめたのです。風上に立てば砲の命中率はよくなります」

と、西田翁は大阪府摂津市浜町の自宅で語られた。

この直後、三笠の艦橋の風景が変わった。

東郷は依然その場所にいる。

それに寄りそって参謀長加藤友三郎と秋山真之が風の中に立っているが、他の幕僚たちは一段下へ降り、装甲で鎧よろいわれた司令塔のなかに入った。

この前後のことをすこし詳しくのべると、Z旗がかかげられたあと、後続する各艦が、

「了解」

という返答をあらわす応旗オウシをかかげた。参謀清河純一大尉が旗甲板でZ旗の降ろし方の指揮をしていたとき、最上艦橋では秋山真之が、東郷に対し、

「司令塔の中に入ってください」

とたのんだのである。

が、東郷はかぶりをふった。

「ここにいる」

というのはかねて用意した特別の旗旒きりゆう信号のことで、のちに有名になるZ旗がそれであった。艦隊の各艦とも信号書をもっている。その信号書に、この出動の数日前、四色のZ旗一旒がかげられた場合の信号文が、エンピツ文字で書きこまれていた。その文章については各艦の航海長か航海士が知っている程度で、艦隊のたれもが知らない。

すでに戦闘の開始は、分秒をかぞえるまでにせまっている。

真之が許可を乞うと、東郷はうなずいた。

真之が、すぐ信号長へ合図した。四色の旗はやがて飄風ひようふうのなかに舞いあがった。

皇国の興廃、此の一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。

各艦とも、この信号文がすぐさま肉声にかわり、各部署の伝声管を通じて全員の耳につたわった。

旗艦三笠にあっては、伝令をつとめていた河合太郎翁も、かれのそばの伝声管にひびいてきたこの声をきいた。かれは大いそぎでそれを口移しに各パイプに伝声した。

当時、戦艦富士の後部十二インチ砲塔の砲員だった西田捨市翁も、この信号文を聴いた。伝声管の声はカン高く、しかも文語であるため意味はよくわからなかったが、この海戦に負ければ日本はほろびるのだというぐあいに理解し、わけもなく涙が流れた。

東郷が運動してゆくにつれて風向きが変わった。東郷は風上に立った。東郷にすれば意図的に

という疑懼が多少もたれていたが、しかしかれは意外に冷静であつた。やや猫背のかれは、司令塔のなかから、ふたたび外界をのぞいた。すでに上村艦隊の出雲の艦影がありありとみえた。そのあとに吾妻がつづき、さらに常磐、八雲、浅間、磐手という大巡洋艦がその艦影をおもおもしろく近づけつつあつた。

風が檣頭で悲鳴をあげるように鳴りつづけている。

旗艦三笠の揺れがひどくなり、わずかにエンジンのひびきが床につたわってきていた。

艦内は無人の森のなかのようにしずかであつた。配置についている兵員たちは凍りついたように身動きせず、私語をする者もなかった。新参の水兵たちは口中が干あがり、のどに送るべきつばがなくなつた。黄海海戦を経験しなかつた者も多かつた。かれらはこの重苦しい緊張に堪えかね、自分のつぎの行動と生死を決定してくれる号令を待ちかねていた。

前部艦橋では、ひとびとの位置は先刻とかわらない。東郷は相変らず両脚をわずかにひらき、敵の旗艦スワロフを見つめつつ、ときどき胸もとの双眼鏡をあげたり、おろしたりしていた。

のち東郷に親炙した小笠原長生は、この午後一時五十分すぎの情景をこの艦橋のひとびとからくわしく取材した。かれの文章を借りると、このとき秋山真之が東郷に近づき、

——先刻の信号、整へり。直ちに掲揚すべきか。
ときいたという。

「先刻の信号」

れを準戦艦とみなしての単縦陣で、あわせて六隻であつた。

——東郷は、八月十日のようにしてやってきた。

といったセミヨノフの言葉は、

「やっぱり、おれのおもつたとおりだ」

という、自分の経験にとらわれ、その経験を誇示しようとするためにそのように見えてしまった錯覚であつた。いや、錯覚ではなく、たしかに東郷はこの日も、主力の六隻であつた。しかし八月十日とちがうのは、準主力というべき上村艦隊を後方にひきいてやってきたのである。セミヨノフの目は東郷の後方が見えなかつた。というより、三笠以下の六隻を見ただけで、自分の予想を誇るように叫んでしまつたのである。

しかし、セミヨノフが英雄詩の主人公に仕立てあげようとしているロジエストウエンスキーは、さすがにかれの宮廷詩人よりも冷静な軍人であつた。

「ちがうよ。六隻だけじゃない。あのうしろを見たまえ。東郷はぜんぶ連れてきている」

と、双眼鏡を目からはなし、そのあとセミヨノフを黙殺して、他の幕僚全員を追いたてるように、

「さあ、配置につきたまえ」

そういつて、艦橋を降りた。そのあとかれは艦長や幕僚たちとともに厚い装甲で鎧よろわれた司令塔のなかに入つた。

ロジエストウエンスキーは、その平素の性格からみて戦闘ともなれば狂いまわるのではないか

「東郷は八月十日とおなじ陣形でやってきています」

と、セミヨーノフ中佐が叫んだその陣形というのは、かれの言うとおりではない。東郷は八月十日（黄海海戦）とはべつなかたちでできた。

しかしセミヨーノフは叫ばざるをえない。幕僚のなかでかれだけがかつて旅順艦隊に属し、あの激烈だった黄海海戦に参加した生き残りなのである。かれの口ぐせによれば、

「下瀬火薬のにおいを知っているのはおれだけだ」

ということであつた。さらにかれはその文章で兵学校一番とか二番とかという履歴をもつた他の幕僚たちをのろい、「かれらは机の上の秀才であるかもしれないが、実戦を知らない。まして東郷の癖も知らない。それらのすべてを知っている自分をのけものにして東郷と戦えるはずがないではないか」という意味のことをいっているように、かれにとって「八月十日」ということが自信のよりどころであり、自己顕示の場所でもあつた。

明治三十七年八月十日の黄海海戦は東郷にとってつらい戦いであつた。旅順艦隊が六隻の大戦艦をもっているのに対し、東郷は初瀬と八島を機雷でうしなっていたため、三笠以下四隻の戦艦しかもつておらず、戦いの運命を決する戦艦主砲の数は、ロシアの二十四門に対し、日本は十七門でしかなかった。

そのうえ東郷にとって致命的なことは、戦艦の補助をすべき装甲巡洋艦四隻（上村艦隊の出雲、吾妻、常磐、磐手）を欠いていたことである。このため東郷が八月十日につくった主力の陣形は、三笠、朝日、富士、敷島の四戦艦のほかに、春日、日進という二隻の新鋭一等巡洋艦を加え、こ

セミヨーノフは、軍人としても記録者としても分析能力を欠いていたが、ただ一種の精神を牢ろう乎ことしてもっていた。

「この艦隊はかならず勝つ」

という信念である。その信念は皇帝への忠誠心と愛国心から出ていたが、しかしひよつとすると嚴密な意味での愛国心ではなく、自己愛が単に拡大されたものとしてのそれだったのかもしれない。かれは冷静な觀察者というよりも、熱っぽい叙事詩的文藻ぶんそうのもちぬしで、英雄詩を書くにはあるいはふさわしい人であるかもしれない。事実、かれはこの日本海においてロジェストウエンスキーをたたえる英雄詩を書くつもりであり、いまからおこる海戦はかれにとって、おこる以前から主題がきまっていた。つまり偉大なる統率者であるロジェストウエンスキーが、東郷とその艦隊を海底へたたき沈めてしまうことである。

そういう雄大な「詩」をセミヨーノフ中佐が書く予定よにしているということは大英雄の予定者であるロジェストウエンスキー自身はむろん知っており、そういう詩人を軍隊が伴ってゆくというのはロシアの習慣でもあり、習慣であればこそロジェストウエンスキーはべつに気羞きはずかしさのようなものは感じていなかった。

この大艦隊のどの軍艦にも世界を征服すべき義務を象徴する聖アンドリュースの軍艦旗がひるがえっていたが、その軍艦旗にもっともふさわしい人物がこの詩人中佐であり、かれは、かれの詩を成立させるにはともかくもかれの提督に勝ってもらわねばならないのである。

えこんでいるウラジミール・セミョーノフ中佐であった。

セミョーノフ中佐は多少文筆の才能はあったが、かれは不幸なことに艦隊作戦やその他の艦隊勤務に不可欠の人物であるとはおもわれていなかった。かれは作戦会議から疎外されていただけでなく、いかなる勤務にもつけてもらっていなかった。かれはこの不名誉を憤懣かんまのかたちでつねに持ち、かれの仲間全員を呪のろわしくおもっていただけでなく、それを終生、忘れなかったという驚嘆すべき執拗しつようさをもっていた。

しかしながらこの孤独な海軍作家の救いは、ただ一人の人間に對してのみ、そのあらゆる欠点をむしろ長所であるとして見てやる情愛をもっていたことであつた。たつた一人の人間とは、司令長官ロジェストウエンスキーのことである。

ロシアの海軍省がかれに期待している仕事は、この大艦隊が演じつつある世界史的な壮舉を、その名文によつて後世に残すことであつた。

しかし結果としては、記録者としてのかれの才能は乏しかったといわざるをえない。かれの文章は、造船技師ポリトウスキーがその新妻にあてて送りつづけた手紙の文章にくらべ、はるかに粗雑で、しかも記録性のとばしいものであつた。

「ロジェストウエンスキー航海」

とよばれる長期の大航海の記録については、セミョーノフはまるつきり怠つてしまつていたし、またロシア人が軍艦という近代技術の粋をあつめた物体に乗つて海にうかんだ場合の無数の課題については何等ふれるところがなかった。

左翼（第二、第三戦艦戦隊）にむかつてやってきたのである。

戦艦アリオールの前部上甲板には、士官や兵員があつまつて、日本艦隊を見ようとしていた。

「あれは三笠じゃないか」

と、叫んだ士官の声が印象的であつた。

まだ日本のすべての勢力を見ることができず、先頭の艦影とそれにつづく十隻ばかりが見える程度であつた。その先頭に三笠が波を蹴たてているというのが、なにか、まぼろしをみているような不思議さを全員にあたえた。

三笠は旅順の封鎖作戦中に、機雷にふれて沈んだものと信じられていたのである。

「そんな馬鹿な」

と否定する士官もいたが、日本の艦型を諳記^{あんき}しているたれもが、それが三笠であると認めざるをえなかつた。そのとき、天を覆っていた雲がわずかに切れ、強い太陽が海面を照らした。たしかに三笠であつた。濃灰色の三笠は、おりから降りそそいできた光線の束に照らされ、青く輝いているようにみえた。

旗艦スワロフの前部艦橋にいるロジエストウエンスキーは、東郷がかれを発見すると同時にかれも東郷の三笠の艦影を濛気のむこうに発見した。

「閣下、ご覧なさい。東郷は八月十日とおなじ陣形でやってきています」

と、ロジエストウエンスキーにむかつて叫んだのは、記録係の幕僚で、人の三倍も脂肪をかか

たしかにロシア人たちの神経は、巨大な運命を前にして意外なほどに余裕をもっていた。

たとえば第一戦艦戦隊の戦艦アリョールにいたっては、ロシア海軍の習慣である昼食後の午睡さえとっているものがいたのである。その習慣が、この日もまもられた。午睡の終了は、午後一時二十分であった。号令で終了が告げられた。午睡のあとは、ロシア人の日常生活に欠くことのできないお茶を飲む許可がある。ロシアの軍艦には、ロシアのどの家庭にもある銅製の湯沸し器が積まれていた。午睡終了の号令のあとは、

「茶を飲め。――」

という号令がかかる。兵員たちはそれぞれ湯呑みを手にして、巨大な湯沸し器のそばへゆくべく駆けた。人間が、その精神の秩序と安定をまもるためにはいかなる場合でも習慣というものから切りはなされてしまつてはいけないという鉄則でもそこにあるかのようで、号令も、号令につられて走ってゆく兵員も、そして熱い液体を食道にながしこむ生理的作業も、ふだんとまったく変わりがなかった。

ただし、この時刻には日本艦隊は出現しておらず、兵員たちが茶を唇につけたあととすくなくとも十分以内にあらわれるのである。

「日本艦隊は単縦陣を組み、非常な速力でもってわが第二戦艦戦隊後方の運送船の方向にむかつて進航しつゝあった」

要するに東郷艦隊は南下してきた。バルチック艦隊は北上しつゝある。さらに東郷艦隊はザチョールツイが「わが第二戦艦戦隊の」といつているように、バルチック艦隊の脆弱部とみられる

敵密には、二列でさえないのである。第一戦艦戦隊の右舷にそれに付き添うがごとく第一駆逐隊が並航し、その第一駆逐隊のうしろに特務船隊がいて、その特務船隊の後尾の左舷に第二駆逐隊がならんでいる。さらに第一戦艦戦隊の左舷からすこし遅れて第二戦艦・第三戦艦戦隊の縦陣が走っており、それら全体の中央後方に第一巡洋艦戦隊がいるといったぐあいで、たしかに、「ヘンナカタチ」

であり、陣形などというよりダンゴになってやってきたというのが正確であろう。

ロシア側に、目を移す。

第二戦艦戦隊の最後尾を航走している装甲巡洋艦ナヒーモフの士官であつたザチョールツイの手記の文章を借りると、

「日本の艦隊が、わが左舷の方角より出現したのは、一九〇五年五月二十七日午後一時二十分（註・実際は三十九分）であつた。そのときバルチック艦隊は海峡のもつとも狭い所にいた」

——海峡のもつとも狭い所にいた。

というのがいかにも自然に存在したように書かれているが、東郷とその幕僚が敵とこの場所であらうべく計算し、行動していたのである。

「兵たちはずっと前に昼食をすませていた。すこし落ちついた連中は、食後の一休みをしていた」

と、いう。

ということであつた。東郷は平然としていて、その表情も声もふだんとすこしもかわらなかつた。かれの海軍生活は幕末からかぞえて四十年にちかく、その実戦経験は薩英戦争以来、世界中のどの軍人よりも豊富であり、この切所^{せつしよ}に立ちいたつても妙な昂奮をするということではなかつた。

「カタチ」

というのは、陣形のことである。たしかに、東郷の八倍の双眼鏡にうつつたバルチック艦隊は、へんな陣形をしていた。

「堂々たる二列縦陣」

という印象をうけた目撃談が多いが、しかし実際はそうではなかつた。ロジェストウエンスキーはロシア海軍におけるとっておきの秀才提督であつたとはいえ、東郷のような実戦の経験はもつていなかった。

当然、海戦をやる場合、単縦陣でやらなければ味方の砲火の効果を十分にあげることができないということをロジェストウエンスキーはよく知っていた。ただこの秀才は、この日本海の玄関に入ろうというぎりぎりの段階になって、うるさくつきまとう日本の搜索艦隊（出羽の第三戦隊）のちっぽけな巡洋艦たちを追つばらおうという無用のことをして陣形を変えた。これがロジェストウエンスキーの重大な失敗であつたことはすでにのべた。二列縦陣になつた。それを単縦陣に変えようとしてあわただしく信号をあげたり速力の調整をしたりしているうちに合戦（海軍用語）の時間と場所へ突入してしまつたのである。

の全容を東郷の視界にあらわしきつたのは、午後一時四十五分ごろだったようである。

彼^{ひが}我の距離は、ざっと一万二千メートルであった。

東郷はかねて、

「戦闘は七千メートル以内に入らなければ砲火の効果はあがらない」

と繰りかえし幕僚たちに言っていたし、そのことは幕僚たちの方針というより覚悟になっていた。敵は九千メートル程度でもどんどん射ってくるであろう。東郷にすればその砲弾を浴びつつ沈黙のまま接近し、命中率の高い射程に入ったときに猛然と射撃を開始するつもりであった。

艦橋にいる旗艦砲術長の安保清種少佐は、三笠の全砲火を指揮するだけでなく、事実上艦隊そのものの射撃をリードせねばならない責任を負っていた。かれはすでに東郷のその言葉をきいていたから、

（きようは思いきった接戦をされる方針にちがいない）

と、覚悟していた。

——思いきった接戦。

という安保の想像は、しかしその後の実現する東郷の指揮によって、想像と常識を超越した接戦であることを知るのである。

いずれにせよ、この午後一時四十五分ごろ、彼我の距離ざっと一万二千メートルのときに東郷がつぶやいたつぶやきを、かたわらの参謀長加藤友三郎はながく記憶していた。

「ヘンナカタチダネ」

前任参謀の秋山真之はこれらの群像の左後方にやや離れて立ち、秋山家系の容貌の特徴である隆い鼻を風になぶらせながら、ノートをもち、うつむいてそれへ敵状を書きこんでいた。そのあたりに、なにか変人のおいがあった。この場にいたってノートをとることがどれほど必要性があるのか、他の連中にはよくわからなかった。

これらの幕僚たちのうしろに、測距儀レンジファインダーをのぞきこんで敵との距離を測定している士官がおり、ときどき大声をもって距離をどなった。

眼鏡で拡大してみると、バルチック艦隊の艦体は、日本の軍艦が濃灰色であるのに対し、真っ黒に塗られていて空の色と区別することが容易であり、それに煙突が黄色に塗られていることも日本側の識別をたすけた。この黄色は、見る者によって多少、色がちがってみえた。

たとえば三笠、敷島につづいて波を蹴立てている戦艦富士の後部砲塔の砲員だった西田捨市三等兵曹の感じでは、

「どうも、白っぽい赤土色にみえました」と、いう。

——敵は濛気の壁をやぶって。

という表現をつかっている印象記もある。たしかに濛気の壁を一艦また一艦打ちやぶって東郷の視界に入ってきたという形容は、印象として正確だったかもしれない。

そのバルチック艦隊のすべてが濛気のカートンを背景にし、ややシッポはおぼろながらも主力

艦長の伊地知彦次郎は、緒ら顔に剛いあごひげをはやし、ほんの最初に双眼鏡をのぞいたきりで、目を遠目に細めて敵の艦影を見つめつづけている。

羅針儀のそばにいる航海長の布目満造中佐は海図をのぞきこんで敵味方の位置をはかり、そのややうしろに砲術長の安保清種少佐は弾道の時間をはかるためのクロノグラフ（秒時計）をにぎって敵をみつめていた。

参謀長の加藤友三郎少将は双眼鏡を目にあてたままほとんど微動もしなかった。

東郷平八郎はこれら幕僚たちよりも半歩ばかり前に出て立っていた。という意味ではかれは連合艦隊のたれよりも敵にもっとも近い位置にあつてその肉体を曝していたということになるであろう。東郷はくびからつるしたその自慢の双眼鏡をほんのすこしかざしただけで、あとは人並はずれて視力のいいその肉眼によつて敵をとらえようとしていた。かれは両脚を休メのかたちにしてわずかにひらき、左手に長剣のつかをにぎり、身動きというものをまったくしなかった。かれの統率上の信条はどうやら、司令長官は全軍の先頭のしかも吹きさらしの空中（前部艦橋）にあつて身動きをしないということに基本を置いているようであり、その姿は、一種不動の摩利支天を見るようであつたという。

この艦橋にあつてクロノグラフをにぎっていた安保清種は、後年、

「その刹那の三笠艦橋における光景は、なんというか、莊嚴としか形容のしようのないものでした」

と、繰りかえし語っている。

ふせぐだけの戦略を検討しぬいて確立し、山本権兵衛を代表とする、勝つための艦隊の整備をおこなった。

要するにあらゆる意味で、この瞬間からおこなわれようとしている海戦は癸丑甲寅以来のエンゲルギーの頂点であったといつてよく、さらにひるがえつていえば、二つの国が、たがいに世界の最高水準の海軍の全力をあげて一定水域で決戦をするという例は、近代世界史上、唯一の事例で、以後もその例を見ない。

旗艦三笠が、ついにロジエストウエンスキーの大艦隊を発見するにいたるのは、午後一時三十九分である。

「左舷南方」

といわれる。

厳密には南西であろう。その沖合にこめる乳色濛気のなかに点々と黒いしみ、がにじみはじめたかとおもうと、その濛気のキャンパスを破るがごとくして、意外に大きな艦影がつぎつぎに出現した。視界がひろくなかったためこの発見の瞬間には、すでにそれほど近い距離で遭遇するはめになったのである。

三笠の艦橋では、

「来た」

とも呟いた者はいない。

ないにしても、最小限に考えて対馬島と艦隊基地の佐世保はロシアの租借地になり、そして北海道全土と千島列島はロシア領になるであろうということは、この当時の国際政治の慣例からみてもきわめて高い確率をもっていた。

むろん、東アジアの歴史も、その後とはちがったものになったにちがいない。満州は、すでに開戦前にロシアが事実上居すわってしまった現実がそのまま国際的に承認され、また李朝鮮もほとんどロシアの属邦になり、すくなくとも朝鮮の宗主国が中国からロシアに変わったに相違なく、さらにいえば早くからロシアが目をつけていた馬山港のほかに、元山港や釜山港も租借地になり、また仁川付近にロシア総督府が出現したであろうという想像を制御できるような材料はほとんどないのである。

日本海海戦は、幕末から明治初年にかけての革命政治家である木戸孝允（たかよし）が、生前口ぐせのように言いつづけたところの、

「癸丑甲寅（みづのうし）以来」

という歴史のエポックの一大完成現象というべきものであった。

癸丑はペリーがきた嘉永六年のことであり、甲寅とはその翌年の安政元年のことである。この時期以来、日本は国際環境の苛烈ななかに入り、存亡の危機をさけんで志士たちがむらがって輩出し、一方、幕府も諸藩も江戸期科学の伝統に西洋科学を熔接し、ついに明治維新の成立とともにその急速な転換という点で世界史上の奇蹟といわれる近代国家を成立させた。

同時に海軍を、システムとして導入し、国産の艦船をつくる一方、海上よりくる列強の侵入を

した」

という。和泉たちが退避してきたのだろう。市五郎少年の視界にはまだ東郷の主力艦隊がみえなかった。それよりさき、西北の海面にバルチック艦隊が出現するのが見えたのである。

「二列になり、ちょうど基石をならべたようで、ああも整然と隊伍を組めるものだと思いました。あの大艦隊の偉容をみたおどろきはいまも体じゅうに残っています」

時間と空間が次第に圧縮されてゆく。刻々ちぢまってゆくこの時空は、この日のこの瞬間だけに成立しているものではなく、歴史そのものが過熱し、石を熔かし鉄をさえ燃えあがらせてしまふほどの圧縮熱を高めていたといつてよかった。

日本史をどのように解釈したり論じたりすることもできるが、ただ日本海を守ろうとするこの海戦において日本側がやぶれた場合の結果の想像ばかりは一種類しかないということだけはたしかであった。日本のその後もこんにちもこのようには存在しなかったであろうということである。

そのまぎれもない蓋然性は、まず満州において善戦しつつもしかし結果においては戦力を衰耗させつつある日本陸軍が、一挙に孤軍の運命におちいり、半年を経ずして全滅するであろうというものである。

当然、日本国は降伏する。この当時、日本政府は日本の歴史のなかでもっとも外交能力に富んだ政府であつたために、おそらく列強の均衡力学を利用してかならずしも全土がロシア領になら

バルチック艦隊を誘導すべく接触をつづけていた片岡七郎の第三艦隊の主力第五戦隊である。旗艦敵島がみえた。鎮遠、松島、橋立とならんで艦影を大きくしてきた。さらに、二、三千トンのちっぽけな三等巡洋艦もあらわれた。第三艦隊の第六戦隊であった。この日の早暁から敵にしつこく食いさがっていた和泉がいそぎあしでもどつて来つつある。ほかに、須磨、千代田、秋津洲がつづいている。千代田の艦長は東伏見宮依仁親王よりひとという皇族であった。

「第三艦隊のうしろにバルチック艦隊がつづいている」

と、三笠艦橋でたれかがいった。まだ敵の艦影が見えるまでにいたってないが、第三艦隊がかれらを誘導していることは間断なく入っている入電によってよくわかっていた。

第三艦隊の任務は、この誘導でなかば終わったというべきであった。かれらはいわば敵戦艦の主砲をくらえびとたまりもない老朽艦と小艦こぶねのあつまりで、主力決戦の役に立つような軍艦ではなかったから、誘導の役がすめば舞台を三笠以下の主力艦隊にゆずり、後方へひきさがることになっていた。こういう役目のわりふりはすべて真之の構想によるものであり、それらはすべて予期以上にうまくいった。

日本海海戦における市民としての唯一の目撃者である沖ノ島の佐藤市五郎少年のことはすでにのべたが、市五郎はこの刻限、島の大きな木の上にのぼり、枝に腰をおろして海面を見わたしていた。

すでに八十翁になっている市五郎氏の談によると、

「そのうち、和泉ともう一隻の小さな巡洋艦が、島の根に押しつけられるようにして寄ってきたま

のウラジオストックまで全力をあげて遁走するのが艦隊の主目的である以上、減速は単に減速ではなく敵地にとりのこされるような恐怖をもったのかもしれない。

「敵の二列縦陣のうち左翼縦陣が弱そうですね」

と、三笠の艦橋上で、秋山真之が、片岡の入電によって見えざる敵を想像した。たしかに左翼は第二、第三戦艦戦隊だから戦艦の質が、第一戦艦戦隊よりもよわい。

「左翼を衝きましょう」

というと、加藤は了承し、そのように味方をもってゆくべく針路を指示した。

旗艦三笠の艦橋で、

——敵か。

という声があがったのは、午後一時十五分である。

たしかに、南西微西の方角にあたって数隻の艦影がみえたのである。

が、すぐ敵ではないことがわかった。索敵に出ていた味方で、海軍戦術を最初にひらいた山屋
他人を艦長とする笠置以下の巡洋艦四隻（第三戦隊）であった。旅順閉塞で知られた有馬良橋を
艦長とする音羽、それに千歳と新高である。かれらは東郷の戦列にいそぎ参加すべく高速で近づ

いてきた。

ほどなく西方の沖に、点々と艦影がうかびはじめた。艦橋はふたたび緊張したが、これも味方であつた。

たしかにダンゴになっていた。

旗艦スワロフの艦橋にいたロジエストウエンスキーの背後に、かれが早暁まですわっていた安楽イスがおかれている。

かれは自分の艦隊のこの混乱に多少いらだった。しかし以前のかねならば狂犬のように怒声をあげて狂いまわるところであつたであらう。しかし戦闘を前にしてさすがにこの提督は沈静を保つた。

かれは出羽の第三戦隊が濛氣のむこうに逃げ去つたあと、所期の単縦陣をつくるべく、

「第二戦艦戦隊は、第一戦艦戦隊の隊尾に続航すべし」

という信号旗をスワロフのマストに掲げさせた。

しかし十二ノットの速力で航進中の艦隊が、走りつつ短時間で陣形を変えろという芸当は、よほど練度の高い海軍国でなければ不可能にちかかった。この高等芸ができる艦長たちをもっているのは、地球上で英国海軍と日本海軍だけであるかもしれない。

“二列”を解消して単縦陣をつくるためには、まずロジエストウエンスキー直率の第一戦艦戦隊が増速しなければならない。第一戦艦戦隊は命令どおり増速した。

それにとまって左翼をすすむ第二、第三戦艦戦隊がそろって減速しなければならない。げんにロジエストウエンスキーは彼等に対して「二ノット減らせ」と命じた。しかしどういうわけか左翼をゆく第二、第三戦艦戦隊は容易に減速しなかったのである。理由はわからない。

しいていえば、心理的なものかもしれない。すでに日本海の西玄関に入っている。目的地

海戦史上、片岡の第三艦隊ほど搜索部隊としての能力を高度に發揮した例はなかった。

「敵を見ざる前に敵の陣形その他を知ることができた」

という旨の大本営への報告文を、のち秋山真之起草で東郷が出している。

「敵は二列縦陣でやってくる」

という旨の無電が片岡から入った。

しかし整然たる二列縦陣といえるかどうか。

ロジェストウェンスキーはじつは定石^{じようせき}どおりに単縦陣でもって戦いたかった。

ところが、すでにのべたように、かれが出羽の第三戦隊を追っばらおうとして艦隊に陣形を示したとき、戦艦アレクサンドル三世が信号を見誤ったことから大混乱がおこり、陣形が変なぐあいになった。

スワロフ以下の第一戦艦戦隊が先行し、その左翼に並航して（つまり二列になって）オスラービア以下の第二戦艦戦隊が走り、それにつづいて第三戦艦戦隊が息せき切るようにしてあとを追うというぐあいであった。二列である。

二列でもなかった。

これにくわえて第一巡洋艦戦隊がやや遅れて左右に戦艦の長蛇の列をながめつつその真中に入りこんでしまっているのである。

「敵はダンゴになってやってきた」

というのが、このあと実際にバルチック艦隊を見たときの日本側のおおかたの印象であった。

ていた。それだけであつた。まわりは吹きさらしで、高所恐怖症の者なら気が遠くなるような高さの露天台である。

この正午すぎ、バルチック艦隊の出迎えをしている片岡七郎の第二艦隊から入電があつた。

「敵ハ壱岐国^{いさくに}」

と、無電はふるい呼称をつかつている。

「壱岐国若宮島^{にやくしま}ノ北方十二海里ニアリテ、北東微東に航シツツアリ。速力ハ十二ノット」

この第二艦隊の誘導は、じつに有効であつた。

このおかげで、三笠の航海参謀は、適宜針路を変じてゆくだけで敵に遭遇しうるのである。この場合、針路を右に折つて、西にむかつた。

波浪が大きくなつた。

山のような、という慣用表現がそのままではまる大波で、そのあたかも山脈をなすような波が艦首へ激突し、はじけくだけで前部上甲板を洗うだけでなく、烈風が巻きあげる飛沫^{ひまう}は、はるか高所にある艦橋までふきあがってきた。

艦橋にある東郷は、一文字吉房の長剣のコジリを床にコトリと落し、両足をわずかにひらいたまま動かなかった。足もとの床は飛沫でびしょ濡れであつた。ちなみに東郷は戦闘がおわつてからようやく艦橋をおりたのだが、東郷の去つたあと、その靴のあとだけが乾いていたという目撃談がある。

東郷だけが、私物ながらドイツのツァイスが開発した「ツノガタメガネ」（プリズム双眼鏡）と通称される倍率の高い双眼鏡をくびからぶらさげていた。

東郷はその双眼鏡を用いることなく黙然と右舷のほうを見つめている。眼鏡を用いるまでもなく、濛氣のカーテンが垂れこめていて、視界は相変らず五海里程度だった。この程度なら眼鏡を必要とせず、肉眼で十分であった。

それでもつい人情が、望遠鏡をかざさせた。どういう場合でも冷厳な態度をくずしたことがないといわれる参謀長加藤友三郎少将でさえ、つい望遠鏡に目をあてた。

「むりですね」

と、副官の永田泰次郎中佐がつぶやいた。

——あれは何というか、ヘンな人だったよ。

と、奇行でもつてのちのちまで海軍に伝説をのこしてそう言われた秋山真之だけが、両眼を三角にして左舷の沖を見つめているのみである。かれは望遠鏡を用いなかった。望遠鏡を持ってさえいなかった。かれはそれが持説で、

——見つめてさえいれば肉眼で十分だ。

と平素からいっており、この場合でさえ裸眼でそのあたりをぎよろぎよろながめていたのである。

艦橋は、ずいぶん高所にある。眼下に前部主砲の砲塔があり、二本の主砲が突き出ている。艦橋の床は木製で、スペースは狭く、艦橋のまわりは簡単な柵でかこまれ、ハンモックで防御され

戦とは言い条、戦死の確率はどうか高そうだということを覚悟していた。

関重忠はかつて七年間英国に留学していたため英語が流暢りうちようで、このためペケナム大佐のためにずっと通訳をひきうけてやっていた。

関は海戦の実況が撮れないことをくやしき思い、これより前にペケナムにすすめてコダックを買わせていた。

「艦橋の上に立っていれば飛んでくる砲弾だって撮れるさ」

と、ペケナムは陽気に笑っていたが、ただ観戦という目的だけで戦闘中に艦橋にのぼることはよほどの勇気を要することだが、この英国人はそういう点では平気のようであった。

「沖ノ島の西方」

というのが、東郷の司令部が算出した会敵地点であった。

ところが東郷の南下軍は早く予定戦場付近に来すぎた。正午ごろ、東郷の長大な単縦陣の先頭をすすむ三笠は、沖ノ島北方約十五海里の地点に達してしまったのである。

「もう来るはずだが」

と、艦橋上で参謀の飯田久恒少佐が同じく参謀の清河純・大尉へささやきかけた。飯田も清河も、当時一本メガネと通称されていた備えつけの望遠鏡で右舷の水平線を見つづけていた。このメガネは倍率が低かったが、このころの世界のどの海軍でも一般にこのメガネが用いられていた。

と、叫んだ。風が声を吹きちぎって、後列の連中にまではよくきこえなかった。

伊地知の訓示の内容は、わが艦隊はいまから二、三時間後にバルチック艦隊と相見あいまみえることになった、長い期間、鎮海湾でおこなった訓練はただこの一戦のためのものである、全国民がわれわれに期待しているところはすこぶる大きい、うんぬんというもので、最後に、

「この世における最後の万歳を唱える」

と言ひ、すべての者が声をかぎりに祖国の永遠のために万歳をとなえた。その声は日本海の怒濤の上を走ったが、妙なことにそれがこだましてもどつてきた。たれもがそのこだまをきいた。山も島もないのにこだますはずがなく、ひとびとの幻聴か、それとも偶然他の艦の万歳がかすかにきこえてきたのかもしれない。

戦艦朝日の機関室では、機関長の関重忠が写真機の手入れをしていた。

かれは当時としてはめずらしく写真に興味があり、写真屋がもっているあの大きなキャビネ型三脚つきの機械をもっていた。日本海軍で個人として写真機をもっているのは十数人いたが、撮影技術がたしかなのはこの関重忠ぐらいのもので、この当時の作戦中の軍艦の写真はほとんどかれが撮ったものであった。しかしいざ戦闘になれば関は機関室にもぐっていなければならぬため、かんじんの戦闘中の実況を撮るわけにはいかなかった。

「ぜひ、君が撮ってくれ」

と、関は一人の西洋人に念を押していた。

西洋人はW・ペケナムという英国海軍の大佐で、観戦武官として戦艦朝日に乗組んでおり、観

運命の海

連合艦隊は、南下をつづけている。

旗艦三笠の艦長伊地知彦次郎大佐は、この当時の海軍でもっとも優秀な船乗りといわれている。かれはバルチック艦隊の旗艦スワロフの艦長イグナチウス大佐とただ一点で共通していた。海戦ともなれば彼^{ひが}我の砲弾がおたがいの旗艦に集中し、おそらく生きて故国の土を踏めないだろうという点においてである。

伊地知はこの戦場への航行中に総員に対して別れのあいさつをしておこうとおもった。かれは総員を後甲板にあつめ、一段高い場所に立った。

ときに風力は六である。風向は偏西で、波は依然として高く、三笠のような戦艦でさえ横ゆれがひどかった。このため後甲板に整列した総員は、みな両足をふんばっていた。

伊地知は、母音をゆるやかに曳^ひく薩摩なまりのつよい言葉で、
「これより本職最後の訓示をする」

「宗像先生」

とよんで、この世でもっともえらい人だとおもっていた。宗像繁丸は昼食の膳部を前に置き、空のめし椀に茶を注いでいるところだった。市五郎から報告をきいたが、うん、とうなずいて変に泰然としている。

ところがその直後に社務所の電話のベルが鳴った。頂上の望楼とのあいだに電話がひかれていた。宗像繁丸が受話器をとりあげると、

「バルチック艦隊が沖ノ島近海にせまった」

という望楼の水兵の声がとびこみ、すぐ切られた。

宗像は突ったままみるみる血相が変わり、その場で禪一本の素っ裸になった。

「市五郎、来い」

というなり、海岸へ駆けおり、岩の上から海へとびこみ、潔斎けつさいをしたあと装束をつけ、社殿へかけのぼった。坂をのぼりつめたとき、西南の沖にあたって、濛氣がピカッと輝いて消えた。そのあと、身のすくむような砲声がきこえた。

「これが、この大海戦のはじめての砲声でした」

と氏はいうのだが、時間からいうと、バルチック艦隊が、うるさくつきまとっている日本の巡洋艦群を射った砲声であるようだった。

宗像は神殿で懸命に祝詞のりとをあげた。その間、砲声が矢つぎばやにひびいた。宗像のうしろにすわっている市五郎は、身がしきりにふるえ、むやみに涙がこぼれてどうにもならなかった。

とある。

「この日は昨夜から西風がつよく吹きすさんで、海上はひどいシケでした」

というのは、市五郎氏の談である。

このシケのために正午前に対馬のイカ漁の漁船が島に漂着してきたので、市五郎は、漁夫を島にあげてやり、その旨を、新設の海底電線で対馬の厳原に報らせてやろうとおもひ、

「私が海軍さんにたのんであげます」

といつて、一ノ岳の上の望楼まで山道を登った。

望楼の兵舎に入ると、全員が顔をこわばらせてなにごとか協議している。かれは望楼長の笠置竜馬一等兵曹に可愛がられていた。笠置に漂着漁船のことをいうと、

「市五郎よ」

と、笠置はこまったような表情で、

「きようは民間の電信はやれないんだ」

そういつて、テーブルの上の一枚の電信の翻訳文をとりあげて市五郎に見せた。市五郎が読むと、

「敵の艦隊、対馬東水道を通過するものごとし。警戒を要す」

とあった。つまりバルチック艦隊がこの沖ノ島付近を通るのである。市五郎はわけのわからぬ叫びをあげて望楼兵舎をとび出し、下のほうの社務所までかけもどつて主典の宗像繁丸に急報した。市五郎はこのただ一人の上司である主典のことを、

なった。

この二人きりの島に、下士官を長とする五人の水兵がやってきたのは、日露戦争がはじまると同時だった。

かれらは、現在燈台のある、ノ岳（島の最高峰・二三四メートル）に望楼を設けた。近くを通る船舶の監視のためだった。

もつとも開戦第一年目の六月十五日未明に陸軍部隊をのせた常陸丸がこの島の西南海上でロシアの巡洋艦に撃沈されたため、他の設備も設けられた。たとえば下関からこの沖ノ島をへて対馬の厳原（厳原）に通じる海底電線も敷設された。このため通信番一名、通信技手二名、電信工夫一名。これに望楼長を含め計五名が常駐した。また燈台のかわりに「燈竿」という航路標識も設けられた。さらに社務所前の岩に八サンチ海軍砲一門もすえつけられた。

この少年佐藤市五郎が、この沖ノ島の頂上にちかい大きな木の上にのぼって、眼下に展開する日本海海戦を目撃したのである。

佐藤市五郎氏は、この稿を書いている現在、病氣療養中だが、満十八歳だった当時のことはよくおぼえておられる。

かれがそれを毎日書くように命ぜられていた社務所の日記がのこっている。その五月二十七日の項をみると、当日の天候は、

「西風強・曇・天霧霞」

中国の上代では、おそらく日本でいう安曇や宗像などというひとびととよく似た連中で遼東半島や朝鮮西海岸に住んでいる漁撈集團のことを、藏^{わい}などと言っていたらしい。藏は消えてあとかたもないが、日本の場合、その集團が信仰していた沖ノ島はなお九州の宗像大社の海中における神体として崇敬されている。近年、学術調査がおこなわれ、祭祀や生活に用いられた弥生^{やよい}式土器が多く発見されたことで有名である。

沖ノ島は、島というより海上からみると巨大な岩礁のようにみえる。島のまわりは四キロほどで、ことごとく切り立った断崖をなし、島をめぐる流れるのが対馬暖流であるせいかな、この島は植物学のほうでは亜熱帯樹の北限とされ、檳榔^{びんろう}樹などの原生林でおおわれている。宗像の神体島であるためにいまでも女人禁制で、男子のみが住んでいる。その居住者も神社の職員一人と燈台の職員二人にすぎない。燈台は大正十年の建設だから、日露戦争のころにはまだ所在していなかった。

日露戦争当時、この沖ノ島の住人というのは、神職一人と少年一人で、要するに二人きりである。

二人とも神に仕えている。

神職は本土の宗像大社から派遣されている宗像繁丸という主典で、祭祀をやる。少年は雑役をする。宗像大社の職階でいえば「使夫」である。

少年の名は佐藤市五郎といった。明治十九年筑前大島^{ちくぜん}のうまれで、海のなかからうまれたように泳ぎが上手だった。明治三十五年三月福岡県大島高等小学校を出るとすぐこの神体島の使夫に

一戦艦戦隊が、それにつづく第二戦艦戦隊および第三戦艦戦隊に対してわずか前方に位置しつつ、しかしあたかも並航しているかのような、なんともいえない陣形になってしまった。これでは戦争ができるカタチではなかった。

やがてロジェストウエンスキーはこの混乱を收拾して戦闘のための陣形にもどすべく信号をかけるのだが、この陣形のみだれがほどなく突入する主力決戦の場面においていちじるしい禍害をなすにいたった。

「艦隊というのは軍艦の集合状態ではない。艦隊は艦隊訓練を練りあげることによってのみ成立する」

という世界の海軍の一般原則は、このロジェストウエンスキーの艦隊に対して冷笑をむけたことは疑いを入れない。

この海域に孤島がある。

「沖ノ島」

とよばれていた。

歴史以前の古代、いまの韓国地域と日本地域を天鳥船あまのとりふねなどというくりに舟に乗って往来するひとびとには、このいわば絶海の孤島をよほど神秘的なものとして印象されたらしく、この島そのものを神であるとし、祭祀した。極東の沿岸で漁撈ぎやうろうをしている種族は、文字ができてからの名称では、安曇あづみとか宗像むなかたとかいっていたらしい。

艦に対し右八点へ正面変換をすべく命ぜられた。右八点とは右舷九十度ということである。各艦は逐次その運動をおこなった。どの艦も右舷から大波が上甲板へ押しよせた。みるからに勇壮な光景であった。

しかし右折しっぱなしではどうにもならないから、針路をもとへもどすべく左八点の一斉回頭をしなければならぬ。

ところがこの後段の回頭において、混乱がおこった。

つまりアレクサンドル三世が、旗艦スワロフにあがった信号を誤認した（練度の高いはずの大海軍国の戦艦にありえない現象だが）のである。アレクサンドル三世はそのまま旗艦スワロフの尻にくっついて走りだした。

他の後続戦艦の艦長たちはおどろき、

「アレクサンドル三世がスワロフにくっついていないか」

と、むしろ自分たちが信号を誤認したとおもってしまった。かれらはせっかく左八点の運動を正しくやりつつあったのをあわてて中止し、まちがっているアレクサンドル三世の艦尾にくっつく針路に訂正したのである。

「馬鹿艦長どもが」

と、ロジェストウェンスキーは艦橋にあってどなった。西方から吹いてくるつよい風が、その声をふきとばした。

この陣形の混乱はどうにもならなかった。とくに航行中の艦隊の、それも首脳部というべき第

と誤認したのである。

鈴木にとっては敵の針路を一分の狂いもなく確認したいという、ただそれだけの目的もしくは入念な性癖から出た前面突っ切りの行動であったが、ロジェストウエンスキーとその幕僚にとってはまさかそういう性癖を日本海軍が具備していてこの生死の切所^{せつしょ}に至ってもなおその性癖を出したとはおもっていない。

「あの四隻の駆逐艦が機雷をまいた」

というので、にわかに陣形を変更した。その撒いたであろうとおもわれる水域を避けて通ろうとした。

ロシア側の資料にもそれがある。

「日本人は八月十日（黄海海戦）でもそれをやった。機雷をまいた疑いが濃厚である」と、書かれている。

それまで日本のこの送り狼たち（老いばれではあったが）に寛大だったロジェストウエンスキーは、

「沈めてしまおう」

として、旗艦スワロフなど最優良の四隻の戦艦砲火を用いるべく、あわせて「機雷現場」を避けるべく、まず第一戦艦戦隊を右舷正面に展開することをきめた。

この目的のためにバルチック艦隊にはにが手の艦隊運動がはじまった。まず第一戦艦戦隊の各

たないからである。もし右の使命さえ全うできれば第三艦隊はぜんぶ沈んでも日本側にとってごく小さな損失でしかない。

一方、早朝から敵艦隊のもう一方の側（敵の右舷）にくつついて離れずにいる和泉は、敵の針路についてほとんど無電を打ちつづけている。

が、敵の針路というのは、敵の横っ腹から遠望していると、わずかな差異というものがわかりにくい場合が多い。片岡が疑って第六戦隊を敵の前方へ出そうとしたのはそれであった。

片岡の第三艦隊の指揮下ではなく第二艦隊に属する第四駆逐隊（司令・鈴木貫太郎中佐）もこの現場にいたことはすでに触れた。

鈴木は四隻の駆逐艦をひきいて、

（いっそ敵の前面を通過してやれ）

と、片岡とおなじことを考えたのである。

鈴木 of 駆逐艦朝霧以下は二十九ノットという快速力をもっていた。敵は十二ノットである。

鈴木はしだいに敵を追いぬいて行って、ついに前面を横切った。

「前から見ればよく判るからこれほど正しい測定はないのです」

と鈴木は後年語っている。前へ出てみると、おどろくべきことに和泉の測定はまちがっていなかった。

ところがこの朝霧らの行動は、ロジェストウエンスキーをして驚愕きょうがくさせたのである。「かれらはわれわれの進行方向に機雷を撒いた」

「みろ、またひつかえしてきやがった」

と、旗艦スワロフの艦橋で、幕僚のたれかが悲鳴をあげるようにして左舷前方を指さした。たしかに巖島を先頭にその巡洋艦群が、またしても出現した。薄霧をとおして影のようにかすむ艦影を一点二点とあらわしはじめたのである。

しかもおどろくべきことに、その一部はバルチック艦隊の前方をさえぎるべく速力をあげはじめた。まさか戦闘するつもりではないだろうとバルチック艦隊の幕僚のたれもがおもった。まともな砲火をひらけばあの老いばれた日本の小巡洋艦たちは卵のカラのようにたたきつぶされてしまう。

たしかに「敵艦隊の前を突っきる」というこの命令は、第三艦隊司令長官片岡七郎が麾下の第六戦隊（和泉）に発したものである。かれは敵の前方へ出て正確に監視できるように配慮した。というより具体的には、これより前、バルチック艦隊が日本側に所定針路をさとらせまいとしてときどき針路を変えたりしたため、片岡にすれば和泉がさきに報告したとおり（針路・北東）なのかどうかそれを敵の前方からのぞきこんでたしかめたかったのである。この正確を期することと正確への人念な態度は、東郷がもっている性向であり、同時に日本の海軍が個性としてもっている癖でもあった。しかしそのことを実行するには全滅を賭する勇氣が必要であった。もつとも第三艦隊は全滅してもよかった。かれらが東郷司令部から要求されている使命は搜索と報告と敵の誘導であり、やがて幕がひらかれるであろう三笠以下の主力決戦の場面ではさほどの役には立

「あれが、下瀬火薬か」

と、戦艦アリオールのユング艦長がおどろきの声をあげた。触れるものをことごとく火にしてみようという下瀬火薬の異様な威力についてはさんざんきかされてきたのだが、目で見るのははじめてだった。

旗艦スワロフの艦橋からは、この日本の砲弾の落下状況はよく見えなかった。

ただ小うるさくついてきた日本の巡洋艦群があわを食って逃げてしまったことについて、ロジエストウエンスキーは不愉快ではなかった。だからかれはこの命令のない射撃についていつものあの派手な叱責の言葉を送らず、

「砲弾ノ無駄使イヲヤメヨ」

という程度にとどめたのである。

旗艦スワロフの上官集会室では、ニコライ二世の戴冠記念の祝宴が張られた。

祝盃の音頭は、マケドンスキーという中佐がとった。かれは、

「陛下の神聖なる戴冠記念日たる今日、われらはいさぎよく祖国のために赤誠をつくそうとしてゐる。神の加護のあらんことを。皇帝陛下ならびに皇后陛下、ロシア帝国万歳」

といった。それに和し、出席した士官一同が、

「万歳」

と、声をあげた。ウラーは三声あがった。その第三声目がおわったところ、上甲板の一角から戦闘用意のラッパが鳴りわたった。日本の巡洋艦群がふたたびひつかえしてきたのである。

艦隊の士氣が大いにあがったのである。

「日本の艦隊など、大したことがないじゃないか」

と、たれもが言い、たれもがそう言い騒ぐことによってあの重苦しかった開戦前の緊張からぬけ出そうとしているようでもあった。

もともとバルチック艦隊の乗組員は、かつてロシアの現役兵をもつて編成されていた旅順艦隊に対し、練度や技倆の上でつよい劣等感があった。その強いはずの旅順艦隊を東郷艦隊がたたきしずめてしまったために、

——われわれは東郷の部下にはとても勝てないのではないか。

という気持があり、その不安がこの艦隊の士氣を冴えないものにしていたのだが、その不安が一時に晴れたような思いが、全艦隊にみなぎった。

砲戦は十分ほどでおわった。誤射によって発射されたロシアの砲弾は第三戦隊を傷つけはしなかったが、しかし応射した日本側の砲撃も、一弾といえどもあたらなかった。

「たいした腕前じゃないよ」

と、たれもが安心した。

もつとも日本の砲弾が水中に落下したときの異様さについては、多くの者が気づいた。砲弾が海に吸いこまれると同時に滝が逆流するようにして海面が盛りあがるというのはどこの国の海軍の砲弾もおなじである。ただ日本の砲弾の水煙には黒い煙が膜を張ったように渦巻いていたことである。

ことに左舷中部の六インチ砲の砲員は、眼前に日本の巡洋艦が白波を蹴って走っているのをみて、堪えきれなくなった。

「どうして射撃命令が出ないんだ」

と、口々に言いさわいだ。

照準手は、頭が割れるほどに緊張していた。かれはいまにも号令がくだるものと信じていた。このためまわりの怒声が、かれの耳を錯覚させた。

「撃ち方始め。――」

と、きこえたのである。

轟然たる砲声がとどろき、砲甲板は煙につつまれた。みなきびきびと動作した。

が、上官が命令をくだしたわけではない。ただ照準手の錯覚が架空の射撃命令を既成事実にした。この戦艦アリョールの第一弾は無煙火薬がつかわれていたために、まわりの各艦はどの艦が発射したものかと迷い、おそらく旗艦スワロフが戦闘を開始したのであらうと、おのおのが砲火をひらいた。とくに第三戦艦戦隊の射撃は活潑すぎた。

たちまち日本の巡洋艦のまわりに水煙があがった。日本の巡洋艦も応射し、応射しつつ遠ざかった。やがて旗艦スワロフにロジエストウエンスキーの叱責の信号があがった。

「砲弾ノ無駄使イヲヤメヨ」

この誤射は、意外な効果をもたらした。遁走してしまった日本の第三戦隊をみて、バルチック

早晩和泉が出現したときも、ロジエストウエンスキーは黙殺した。

四隻の駆逐艦があらわれたときもかれは黙殺し、さらに三隊の巡洋艦戦隊が左舷にあらわれたときもかれは別段の指示をあたえなかった。

「鎮遠がいるな」

と、かれは望遠鏡をかざしながらつぶやいた。幕僚がこもこも艦名をいった。

「松島、厳島、橋立がいます」

「捨てておけ」

と、ロジエストウエンスキーはいった。すでにせまりつつある主力決戦のためにかれは全力をあげようとしていた。それまで敵の走卒のような艦艇があらわれてもこれを黙殺したほうがよい。それらにとらわれて砲弾その他の戦闘エネルギーを浪費することは無用の沙汰だとおもっていた。このことについてロジエストウエンスキーの態度は終始一貫していたという点で正しかった。

ところが午前十一時二十分ごろ、日本の出羽重遠の第三戦隊の巡洋艦群がいちじるしく接近してきたのである。とくに戦艦アリヨールに近かった。

戦場に近づくにつれて全艦隊の士気があがり、あの情気にみちた航海中のこの艦隊とはまるで別の軍隊のようになつた。とくに戦艦アリヨールは士気が高く、砲員たちは動作のすみずみまで闘志をみなぎらせ、どの男もうまれながらに神がそのように作りあげた理想の戦士のようにであつた。

え、敵の射程内外に位置している以上は、突人以上に危険であつた。

つづいて中将出羽重遠がひきいる第一艦隊の第三戦隊も第三艦隊の第五、第六戦隊に続く形で接触していた。かれらは敵が射つて来ないためにしだいに凶々しくなり、さらに敵との距離をちぢめた。わずか三、四千メートルまで接近したとき、右正横の敵艦隊から閃々と火光がきらめき、やがて海を圧する砲声がかえ、笠置や音羽の前後左右に巨弾が落下しはじめた。

第三戦隊は巡洋艦のあつまりだけに、敵主力との砲戦ではとてもかなわない。あわてて遠ざかった。しかし遠ざかりすぎても敵を見うしなうおそれがあり、この間のかねあいむずかしかった。

一方、バルチック艦隊の旗艦スワロフの艦橋では、朝からロジェストウエンスキーが位置を離れることなく艦隊の指揮をとっている。

この五月二十七日という日は、ニコライ二世の戴冠記念日であつた。

「提督は海戦の日をこの日に持つてゆくべく艦隊の速力を調整していた」

というのは、上は幕僚から下は水兵にいたるまでの一致した推測であつた。

本来ならこの日は、艦内の士官集会室で盛大な祝宴が張られるはずだった。げんにその準備がおこなわれつつあつたが、しかしロジェストウエンスキーは、

「一同でよろしくやっておくように。私は艦橋を離れることができない」

といつていた。むろん艦長のイグナチウス大佐も艦橋を離れるわけにはいかない。

官や水兵たちは落ちついていた。所定の位置に休息して命令を待っている者、数人がむらがつて敵の勢力や陣形を評している者など、べつにふだんと変わりがなかった。この点、緒戦の旅順攻撃以来、多くの海戦を経てきた日本側の将兵は、バルチック艦隊の乗組員よりも戦闘前のこの異常な緊張に馴れがあった。

たまたま一軍医が通りかかった。

奥宮はその軍医が薩摩琵琶さつまびわに堪能であつたことをおもいだし、「琵琶をもっているか」

と、きいた。軍医は士官室にあります、と答えた。奥宮が一曲たのむ、というとその軍医は士官室のほうへ去つた。

やがて上甲板に出てきて、艦橋の下にすわつた。

艦首に波がくだけ、ときどき霧を噴きあげるように飛び散つた。上甲板はかすかに一高一低している。そのなかにあつて軍医は撥げをたたき、「川中島」を弾じはじめた。

艦長の奥宮にすれば士気を鎮静させるつもりで琵琶を弾じさせたのだが、聴いているうちにかれ自身がひどく昂奮してきた。艦は風浪を衝いて走っている。曲は一急一緩しつつ、やがて琵琶歌が佳境に入つて上杉謙信が長剣をあげ、単騎馬をあおつて敵陣に突入するあたりになると、艦のあちこちにゐる士官からかけ声がかかったりした。松島の立場はあたかも単騎敵陣に突入する謙信に似ていた。ただし突入が任務ではなく、敵にどうきられようとも、東郷の主力部隊が出現するまでのあいだバルチック艦隊に密着するのがこの第三艦隊のしごとであつた。密着とはい

かれらはずっと接近していつて、ついに左舷前方七、八千メートルの距離まで近づき、以後密着してはなれず、ひどいときは三千メートルまで近づいた。もし敵戦艦の主砲をくらえば、こなごなになるほどの距離である。

この鈴木第四駆逐隊からの無電のおかげで、片岡の第三艦隊主力は途中迷うことなく午前九時五十五分、バルチック艦隊と遭遇することができたのである。

片岡の第三艦隊は、バルチック艦隊に密着した。

針路はバルチック艦隊と同様、北東である。かれら日清戦争生残りの艦たちは、バルチック艦隊の左舷前方四ないし五海里に位置を占め、あたかも同艦隊の一構成のようにして並航した。

旗艦嚴島を先頭に、鎮遠、松島、橋立というぐあいに単縦陣ですすんでいる。

「松島」

二等巡洋艦、四二一〇トン、十六ノットの艦長は大佐奥宮衛であった。

かれはたえず望遠鏡を敵の艦影にあて、敵がいつ砲門をひらくかを注視していた。もし敵が、この巡洋艦群を撃沈させようとすれば容易であった。奥宮は元来汗っかきでもあったが、しかしこのときばかりは望遠鏡から水がしたたるほどに掌^{てのひら}が汗で濡れた。

かれは自分の艦を統率する責任者として、その士気が気がかりだった。

（逆上^{のぼ}せている者もあるのではないか）

とおもい、艦橋を離れて上甲板を一巡すると、むしろかれのほうがはずかしくなるほどに下士

く沈黙が支配した。

すでにこれより前、第二艦隊に属する第四駆逐隊（朝霧、村雨、朝潮、白雲）は敵と接触した。

この四隻の駆逐艦の大胆さは、さきに一艦で接触した和泉以上であった。この駆逐艦の司令は、日本海軍の駆逐隊指揮官のなかでもっともすぐれたひとりとされる鈴木貫太郎中佐であった。ついでながら、かれの生涯は数奇で、かれの晩年、太平洋戦争の戦況が最悪状態におち入って日本の滅亡が予想される時期に起用され、内閣総理大臣になり、四月七日（昭和二十年）内閣を成立させ、八月十五日の終戦という当時としては内政上容易ならざる課題をまとめあげて解決したことで知られている。

鈴木は朝霧に乗っていた。かれがひきいる四隻の駆逐艦はいずれも排水量はわずか三七五トンで、速力は二十九ノットから三十一ノットであった。

「この朝、私どもは対馬の尾崎湾にいた。例の信濃丸の無電は感じず、八幡丸と和泉の無電を感じた。すぐさま抜錨して出動したが、ときに午前五時ごろだったと思う」

四隻の小さな駆逐艦は二十ノットの速力でもってどんどん南へくだった。艦首で波頭を蹴やぶったかとみると、艦尾のスクリュウが波間で空転したり、かとおもうと横だおしになるほどに傾いたりして、この朝の風浪は小艦艇にとってじつにつらかった。

天気は決して「晴朗」ではなかった。海上の濛気のために視界は五、六海里を展望しうるにすぎなかった。

この四隻の駆逐艦が、午前九時、東方に敵影をみとめたのである。

が、しかし物事に対して異常な集中力を発揮できる男だけに、すくなくともここ五時間ほどの健康は大丈夫なように思われた。

東郷はふだんのままの顔でいた。ちよつと鈴木顔をみたがべつになにもいわず、ゆつたりと呼吸していた。長剣のコジリがわずかに床に触れ、剣を装飾している黄金の金具がどういふわけか青錆^{あわさ}びてみえた。

中将片岡七郎がひきいる第三艦隊が、日清戦争の老朽艦をあつめて編成されているということはずでにふれた。かれらが、予想される戦場にもつとも近い対馬で待機していたということも既述のとおりである。

東郷がこの老朽艦隊に負わせている役目は、いちはやくバルチック艦隊と接触し、接触をたもちつつその敵艦隊を東郷のひきいる主力艦隊にひきわたすというものであった。

「第三艦隊は、ロジェストウェンスキー提督を案内して東郷提督とひきあわせるというのがおもな役目だった」

というような表現で、この第三艦隊の参謀百武三郎少佐のちに語っている。

この艦隊の旗艦厳島以下が波にもまれつつすみ、やがて午前九時五十五分、神埼の南微東七海里半の地点において南方の天をくろぐると染めている煤煙をみた。

「敵ですね」

と、百武は双眼鏡をのぞきながら小さな声でいった。片岡がうなずいた。厳島の艦橋はしばら

く、自他に対してつねに氷のような理性でうごくといわれた人物であつたが、同時に行動的でもあつた。かれはすぐ艦橋を降りて鈴木軍医総監のもとにゆき、

「例の痛みです」

と、微笑ひとつ見せたことのない顔を鈴木に近づけ、「だいぶひどい」といった。

「あと五時間でいい。五時間生きられれば結構だから、劇薬でもなんでも呉れませんか」

「五時間でいいんですか」

と、鈴木はわざと笑い声をたてた。鈴木には加藤の胃痛が多分に神経性のものだということがわかつていた。

鈴木は、処置をした。

加藤は痛みをいたわるようにゆっくりした足どりで去つて行つた。鈴木軍医総監はそのあと、艦橋へ行つた。

かれの仕事は主として外科であり、この当時の軍陣医学には精神科の要素は薄かつたが、しかし艦橋で望診ながら各要人の健康状況を見ておこうとおもつたのである。

秋山真之は海図をのぞきこみ、右手をときどき上衣のポケットに突っこんだ。ポケットの中の空豆そらまめの煎いつたものを取りだしてきては口にほうりこみ、激しく歯音をたてた。

（この男も、ひどいものだ）

と、加藤はおもつた。真之がこのところずっと靴をぬいで寝たことがないということを鈴木は知っていた。その相貌に**あぶら**が浮き、あきらかに睡眠が不足していることを証拠だてていた

どの乗組員も、木製の名札を肩から袈裟けさにかけていた。その名札には表に戦闘配置が書かれてあり、裏には本籍と氏名が書かれていた。戦死して五体が大きく砕けてもこれによって誰であるかを認識するためであった。

「戦闘中は戦闘配置を動くな。大小便もその場でせよ」

という命令の出た艦もあった。

大艦の揺れはさほどでもなかったが、小さい巡洋艦や駆逐艦などは赤腹が見えるほどにゆれていた。

やがて黒潮に入った。

この南から北へ流れてくる巨大な暖流は九州西方でわかれて日本海コースをとる支流を対馬暖流とよばれているのだが、九州の漁民が黒瀬川とよんでいるとおりに色が黒く、ある境目からタミの色が変わるほどのあざやかさで変わった。艦隊は黒潮を突つきりはじめた。

艦橋にいる参謀長加藤友三郎の顔色は、ただごとでないほど青くなっていた。

胃痛がはじまったのである。

かれは元来胃が丈夫ではなかったが、ここ数週間の神経疲労のために間歇的かんけつてきに胃が痛むようになっていたことについてはすでに触れた。ところがこのときの痛みは腹をえぐられるようで立っていられず、なんとか意志力でおさえようとしたが思考の持続がおぼつかなくなった。

(この場になって、なんということだ)

と、加藤は目の前が暗くなる思いがした。かれはどういう場面に立っても狼狽ろうばいしたことがな

ばしば飛躍があり、日常神霊を信ずる人になった。

濃霧ではいけない、ということを実之はむろんわかつていた。霧にまぎれてバルチック艦隊が逃げてしまふ可能性が大きくなるからである。

しかし晴朗でもいけなかった。

晴朗ならばロジェストウエンスキーは遠距離において東郷の艦隊を発見するであろう。とすれば針路を変えて逃げることも不可能ではなかった。

現実には両軍が衝突したときは、濛気がなお残っていた。このためバルチック艦隊が東郷の艦隊を発見したときは、すでに抜きさしならぬ近距離になってしまっていたのである。ロジェストウエンスキーにすれば全力をあげて戦闘をする以外になかった。晴朗というよりもむしろ薄霧であったことが東郷の艦隊に幸いした。

「東郷は若いころから運のついた男ですから」

というのは、山本権兵衛が明治帝に対し、東郷を艦隊の総帥にえらんだ理由としてのべた言葉だが、名将ということの絶対の理由は、才能や統率能力以上に彼が敵よりも幸運にめぐまれるということであった。悲運の名将というのは論理的にありえない表現であり、名将はかならず幸運であらねばならなかった。

ただ真之の滑稽であったことは、かれの横にいる無口で小柄な老人に稀有^{けう}のつきがついているとは思ってもいなかったことである。

しかし真之は一個の祈禱師きとうしのような心情になって、

(霧はきつと薄らぐ。天運はわが艦隊に微笑ほほえむはずだ)

と、心中懸命に祈っていた。かれは後年、この日連合艦隊に幸いした天佑の連続のために神靈を信ずる人になり、山本権兵衛をして、

——秋山は天佑々と言いすぎる。後世、神秘的な力で勝ったように錯覚する者が出てきては日本の運命がややぶまれる。

と、眉をしかめさせたほどの人物になってしまったが、実のところかれはこの海戦の設計段階において智囊ちのうのかぎりをしぼってしまった。あとは天佑を待つのみであり、それを思うと気が狂いそうになるまで——というより狂ったほうが自然——というまでに心氣を困憊こんはいさせきっていたのである。かれはこの時期、神仏の名前をいくつも知らなかった。子供のころに母親からきいた神名、仏名を胸中でとなえ、さらに日本中の神々が、やがて艦隊が敵と遭遇するであろう沖ノ島の上天にふり降くだってくることを祈った。

「日露戦争において」

と、いった人がある。

「作戦上の心労のあまり寿命をちぢめてしまったのが陸戦の児玉源太郎であり、氣を狂わせてしまったのが海戦の秋山真之である」

というのだが、真之は発狂したわけではなかった。しかし腦漿のうしようをしぼりきったあと、戦後の真之はそれ以前の真之とは別人の觀があつただけはたしかである。戦後、真之の言うことにし

「気の毒だが、連れてゆこう」

と、断をくだした。

旗艦の敵島から見ると、水雷艇群が波間をはいくぐったりスクリューを天にあげたりしながら懸命についてくるのがみえる。

「あまり気の毒で、なるべく見ないようにしていた」

と、敵島乗組の参謀百武三郎少佐はのちに語っている。この第三艦隊の第五、第六戦隊は老朽艦ばかりでとてもバルチック艦隊には対抗できない。ただ水雷艇を随伴していると敵が甘くみないため、かれらが何割途中で風浪のために沈没しようとも連れてゆかざるをえなかったのである。

旗艦「三笠」以下が鎮海灣を出ると、風浪がはげしくなった。

「天気晴朗」

とはいったが、実際には濃霧にちかいほどに濃気が立ちこめて視界は十分ではなかった。

「いずれ、この霧は晴れるでしょう」

と、秋山真之は、参謀長の加藤友三郎少将にいった。加藤は不快気にだまっていた。

実際、開戦の時間になったころは、晴朗とまではゆかなくとも霧は薄くなったのだが、加藤にすれば真之が「晴朗」と大本営へ打電したことが多少不愉快であった。すこしも晴朗ではなかった。

日本側は水雷艇の数が多かった。

この五月二十七日までにとくに対馬の尾崎湾に待機していた水雷艇たちは、ながい月日を哨戒勤務についやしてきたために艇体の塗料が剥げ、煙突と艇尾の旭日旗がなければ朽ちた丸太が浮かんでいるようであった。

対馬の尾崎湾に待機しているこれらの水雷艇に出港用意が命ぜられたのが、二十七日の払曉である。

「総員起し。出港用意」

と、どの艇でも号令が発せられた。午前五時四十分、いっせいに錨をあげた。揚錨機^{キャップスクリュー}ががらと鳴り、汽罐^{かま}が燃えはじめた。

外洋に出ると風がひどく、艇を呑みこむような大波が間断なしに押しよせ、艇身は前後左右にゆれた。艇上のコンバスタに立っている士官は柱にしがみつきながら指揮をとっているのだが、もし放せばたちまち海面にほうりだされるはずであった。しぶきがたえず全身を洗ってゆくののでふつう合羽とゴム長をはいているのだが、それらは戦闘動作をさまたげるため、たいていの士官は江戸時代の盗賊のように手拭でほっかぶりをし、ズボンをたくしあげて足には足袋をはき、首筋から海水が入らぬように手拭をぐるぐる巻きにしていた。

この第三艦隊司令部では、この風浪を押し水雷艇をつれてゆくかどうかについてだいた議論があった。むしろ主力が先発し、波の静まるのを待ってかれらを後発させればいいのではないかという意見もあったが、司令長官の片岡七郎は、

雲雀、鷺、鵲、鶉それに第四十三号艇など番号のついた水雷艇が十六隻、さらに竹敷要港部や呉鎮守府に属する旧式水雷艇十四隻も参加。

当時の水雷艇というのは、およそひどい乗物であった。

汽罐をたいて煙突一本で走りまわっているハシケのようなもので、魚雷を何本か抱いている。刺しちがえの覚悟で敵の大艦の舷側にぶつかるほどに接近し、魚雷を発射して逃げるのだが、その成功にはよほどの勇氣と幸運を必要とした。

平素は軍港付近の津々浦々や、島々のあいだのせまい瀬戸を縫って走りまわり、ときどきそのあたりの岩に舵をひっかけて曲げたりしますと、艇を石崖に寄せて浜辺の村鍛冶をよび、叩き直してもらってさらに走るといふようなものでした」

と正木生虎氏は語っている。生虎氏の亡父は正木義太中将で、日露戦争の旅順閉塞のとき大尉で参加して負傷した。正木義太は明治三十二、四年ごろは呉の水雷艇の艇長をしていた。そのとき思い出を、のちに海軍大佐になる生虎に語ったのが右の内容である。

この当時、日本の海軍では水雷艇乗りのことを、

「乞食商売」

といっていた。服装がきたなく、食事が粗末で、剛もなく、居住性という点では慘澹たるものであった。そういうかれらをささえているのは、短刀一本で敵艦を抱き刺しにする海の刺客という誇りだけであった。

雲、磐手で、八代六郎大佐を艦長とする浅間がこの編制に加わっているが、他に任務があったため出港のときは姿がなく、午前十時すぎに全速力で駆けてきてこれらの僚艦に加わった。通報艦は千早である。千早は出雲と並航して走っていた。

つづいて第二艦隊に所属する二等巡洋艦浪速（三六五〇トン）を旗艦とする四隻の第四戦隊が、白波を蹴立てていた。浪速、高千穂、明石、対馬である。

この第二艦隊に所属する駆逐艦および水雷艇は以下のようである。

朝霧、村雨、朝潮、白雲、不知火、叢雲、夕霧、陽炎、蒼鷹、雁、燕、鵠、鷗、鴻、雉

このうち朝霧以下四隻は対馬の尾崎湾で待機中で、この湾にいない。

中将片岡七郎を司令長官とする第三艦隊はくりかえしのべているように対馬で待機していたが、この日いちはやくバルチック艦隊に接触してそれを東郷のひきいる主力勢力のもとに誘導すべく運動を開始していた。第三艦隊の旗艦は二等巡洋艦厳島（四二二〇トン）で、日清戦争のときの戦利軍艦である鎮遠がこれにつづき、松島、橋立という一時代前の旧式主力艦をもって第五戦隊が編まれている。通報艦は八重山であった。

同じく第三艦隊の第六戦隊は、須磨、千代田、秋津洲、和泉で、和泉のはたらきでもわかるようにこの戦隊はここ一週間ほど警戒索敵のために多忙であった。

つづいて第三艦隊の第七戦隊というのは、老朽艦で編成されている。扶桑、高雄、筑紫それに鳥海、摩耶、宇治で、鳥海以下は六百トン程度しかなかった。

この第三艦隊に所属する水雷艇は以下のとおりである。

沖ノ島

旗艦三笠は第一戦隊の先頭に立つべく速力をあげていた。

第二艦隊の上村彦之丞は旗艦出雲に座乗して加徳水道に仮泊していたが、東郷の出港命令の入電とともにそのあたりに所在する全艦艇に出港を命じた。

各艦がいつせいに動きはじめた。

そのあいだを戦艦戦隊である第一艦隊第一戦隊の敷島、富士、朝日、春日、日進がすすみ、やがて東郷の三笠が追いついて先頭に立った。三笠のななめうしろをちっぽけな通報艦竜田が従った。巨大な戦艦群がおこす波のために竜田ははげしくゆれた。

この第一艦隊に属する駆逐艦および、水雷艇は、

春雨、吹雪、有明、霞^{あられ}、暁^{おぼろ}、朧^{いなずま}、電^{いかずち}、雷^{あけぼの}、曙^{しのめ}、東雲、薄雲、霞^{さざなみ}、漣^{はやぶさ}、千鳥、隼、真鶴、鵠^{かささぎ}である。

第二艦隊第二戦隊は五隻の一等巡洋艦が波を割ってすべり出している。出雲、吾妻、常磐、八

バルチック艦隊をその最大の象徴とみていた。それを一隻のこらず沈めることは東アジアの防衛のためだと信じ、東アジアのためである以上、かつてアジアが出した唯一の海の名將の霊に祈ったのは、当然の感情であるかもしれない。なかった。

ついでながら、水雷艇群は連合艦隊の出勤とともに大艦の左右にくつついて出港したが、外洋に出ると波浪が思ったより高く、わずか百トンあまりの小さな艇では翻弄されてどうにもならなかった。艇身がときに六、七十度に傾き、大波を艇首にかぶると人も艇も水中に没し煙突のみが波間にみえているという瞬間もあった。ときにはその煙突に大波がかぶさって海水が艇内に入り汽罐の火が消えそうになるおそれさえあった。やむなく東郷の命令で水雷艇はすべて風浪がしずまるまで対馬沿岸に待機させるということになった。

当時、水雷艇第四十一号の艇長だった水野広徳ひろのりという人が筆達者で、戦後、「一海軍中佐」という匿名で「戦影」(大正三年・金尾文淵堂刊)という本を書き、またこれより前、明治四十四年刊で「此一戦」このいっせん(博文館刊)という著者名を明記した本を書いている。この二冊のどこかにあったとおもつてさがしてみたが、なかった。

もう一冊、右の水野広徳とよく似た文体の書物で「砲弾を潜りて」というのがある。著者名は川田功という海軍少佐で、この時期水雷艇の艇付少尉であった。この「砲弾を潜りて」をみると、なるほど主人公が李舜臣の霊に祈るところがある。

「世界第一の海将」

と著者がいう李舜臣は、豊臣秀吉の軍隊が朝鮮へ侵略したとき、海戦においてこれをあざやかに破った朝鮮の名将である。李舜臣は当時の朝鮮の文武の官吏のなかではほとんど唯一というべき清廉な人物で、その統御の才と言ひ、戦術能力と言ひ、あるいはその忠誠心と勇氣において、実在したことそのものが奇蹟とおもわれるほどの理想的軍人であった。英国のネルソン以前において海の名将というのは世界史上この李舜臣をのぞいてなく、この人物の存在は、朝鮮においてはその後ながく忘れられたが、かえって日本人の側に彼への尊敬心が継承され、明治期に海軍が創設されると、その業績と戦術が研究された。

鎮海湾から釜山沖にかけての水域はかつて李舜臣がその水軍をひきいて日本の水軍を悩ましぬいた古戦場であり、偶然ながら東郷艦隊はそのあたりを借りている。

この時代の日本人は、ロシア帝国をもつて東アジア併呑へいどんの野望をもつ勢力と見、東進してくる

ひとびとが艦内をいそがしく駆けまわっていたが、出港にともなうあらゆる作業その他がおわるころには、新品の白い戦闘服姿が艦内にふえはじめ、ひとびとの動きがゆるやかになってきた。

真之は他の幕僚と同様、紺の軍装である。

ただこの男は、軍服の上衣の上に剣帯の革ベルトを巻いて腹を締めあげて艦橋にあらわれた。その珍妙な姿をみて、若い士官がうつむいて笑いを噛みころしたが、真之は知らぬ顔でいた。

「ふんとしやん 禪論」

というのが、真之の持論であった。かれは禪の文字が衣へんに軍と書くのは臍下丹田せいかたんでんをひきしめて胆力を發揮するためのもので、戦さはそれで臨まねばならぬ、とかねがねいつていたが、剣帯のベルトを禪がわりにして出て来ようとは、たれの目にも意外だった。

東郷は端正な服装を好んだ。真之のこの異装をみて、めったに感情を外にあらわさない彼が、さすがにいやな顔をした。しかし真之は知らぬ顔でいた。この男はやはり相当な変物へんぶつだったようである。

余談だが、この艦隊が鎮海湾を出てゆくとき、水雷艇の一艇長が、
「りしゆんしん 李舜臣提督の霊に祈った」

という記録を書いていたものがあつたように筆者は記憶していたが、それがどの資料にあつたのか容易にみつからなかった。

寺垣は上甲板に総員をあつめ、その樽をひらいて訣別の酒杯をあげた。

寺垣のいう訣別とは、

「敷島は敵とともに沈むだろう」

というかれの言葉につづいていわれたことばである。

寺垣のいうところでは、この戦いは勝敗が五分々々というようではとても大戦略からいって間にあわない。要請されているところは敵艦を一隻のこらず撃滅してしまふことであり、そのためずいぶん無理な戦さもしなければならぬ。たとえば小口径の大砲もぜんぶ使いたい、そのためには敵艦にうんと近づかなければならぬ、そうなれば刺し違えの状況も出てくる、従って互に生きて勝利のよろこびを分かちあうこともできなくなるかもしれない、だから戦闘にさきだって今生の別れの杯を汲みかわすのである、ということであつた。

寺垣は、各階級から一人ずつの代表を出させて訣別の杯を汲みあつた。まず兵の代表が出、次いで下士官、准士官、最後に士官という順である。

艦隊が鎮海湾および加徳水道を出てゆくとき、湾のいちばん奥にいた旗艦三笠は他の艦がうごき出してからも、じっとしているかのようにみえた。

「あれはおそらく陸上との連絡があつて、遅れていたのだろう」

と、あわただしく出港してゆく各艦のなかにあつてひとりしずつまっている三笠の印象について、当時の巡洋艦の乗組員が印象を書きのこしている。

やがて旗艦三笠が動きだした。追いついて先頭に立つべく、みるみる速力をあげはじめた。

臨時のバスとしてつかわれたのは、釣床ヘンモツツクがおさめられている鉄箱であった。兵の寝る釣床は、軍艦が戦いにのぞむとき、これを艦橋ブリツジや大砲の横その他必要な部分にびっしりとならべて防御物として使われるのだが、そのため空鉄箱からが不用のままに置かれている。

その鉄箱——といっても箱に穴があいているため正しくは箱の大きさにあわせた帆布ケンバスの袋をなかに装着して——それへポンプでもって海水を注ぎ入れ、その中へ蒸気を吹きこむ。それだけで簡単に湯がわくのである。

ついでながら日本海軍の特徴として、戦闘服は下着にいたるまで新品が用意されていることで、戦闘には新装で従事する（ロシア側はもっとも汚れた服を戦闘の場合につける）。

鈴木鈴木の指示によってあらかじめ全艦隊の新品の戦闘服は消毒されたまま格納されていた。入浴後、この「消毒済」の新品被服が出され、全員が着かえた。これなら、外傷をうけた場合の化膿の可能性をずいぶんおさえることができるに相違なかった。

すべてがおわったあと、各艦の副長は砲側に砂を撒＊かせた。これはおそるべき作業であった。砲側が血みどろになった場合、兵員が足をすべらさぬようにするための配慮だった。

戦争が、人道と悪魔の作業を同時におこなうものだという意味では、これが最後の戦争といえるかもしれない。

日進では酒は出なかったが、敷島では酒が出た。

艦長の寺垣猪三が私費で買っておいだしとだる四斗樽で、掃除、入浴、そして着更えがおわったあと、

「私が戦死したら遺体を内地に帰すにはおよびません。その場で水葬してください。このことはあなたにお頼みしておきます」

と、鈴木に遺言した。鈴木は承知したが、「しかし私も同時に戦死した場合には、実行が困難になることだけはご承知ください」といっておいた。

さて。――

「石炭捨て方」

が、三笠において終了したとき、総員はすぐ炭塵でよごれた艦内を掃除した。……

鈴木はさらに戦闘の前に全艦隊を消毒してしまいたいという理想をもっていた。これをあらかじめ各艦の軍医長に通達しておいた。戦闘に出てゆく軍艦の艦内をすっかり消毒してしまうなど、世界の海戦史で例のないことで、環境衛生の歴史からみても珍例とするに足るものであった。

つまり敵弾の炸裂とともに艦内の構造物のこまかい破片が兵員の体に入る。もし治療が遅れた場合、化膿してそのために落命する場合が多い。これをすこしでも防ごうというのである。

戦艦敷島の艦長寺垣猪三が語りのこしている実例でいうと、まず艦内を石鹼でもって洗わせた。そのあと噴霧器で消毒薬を噴きつけてまわったのである。このおかげで、航走中の軍艦は清潔な「消毒済」の容器になった。

消毒はさらに入念をきわめた。全員を入浴させた。

入浴といっても艦内の既設の湯槽^{バス}だけでは足りなかった。

ンペンをぬいて戦勝を祈った。

総員に対しては、艦長竹内平太郎大佐が司令官訓示を伝達し、そのあと、

「如何に強風」

という海軍軍歌を副長が音頭をとり、艦内こぞって斉唱した。

「ロシアの艦は黒。煙突は黄」

という和泉が教えたことはこのころ全員の知識になっていた。日本の軍艦は濃灰色で、海の上で一番見えにくい色彩で統一されていた。煤煙は日本の場合のような無煙炭とはちがい、濃く濛濛と天を染めている。そのくろぐろとした一大海上勢力がいま海を圧して日本に迫っていた。そのおそるべき情景が、たれの脳裏にもえがかれていたが、「我等の眼中難事なし」と歌い終えたとき、気持が一時にしずまるような思いがしたという。

連合艦隊付の軍医総監鈴木重道は旗艦三笠に乗っている。

東郷もこの鈴木軍医総監を信頼していて、

「東郷さんは、鈴木さんに遺言を託してあったそうだ」

といううわさまであった。

通報艦宮古が沈んだことである。開戦早々、大連湾付近で宮古が触雷沈没して、多数の戦死者が出たとき、大量の棺桶が必要になった。海軍は棺桶まで用意していなかったために、調達には苦勞した。東郷がこのとき、

「会敵は正午すぎになるだろう」

と、日進ではどの士官も知ることができた。この艦の副長は秀島成忠という人物だった。

秀島はまだ時間の余裕があると見、艦内に、日本海軍が建設されて以来かつてなかった号令を発した。

「酒のほか、酒保しゅほゆるす。銭は要いらん。勝手に食え」

というものであった。艦の売店はぜんぶ無料だ、ただし酒だけはいけない、というのである。どうせ艦が沈めば酒保ごとと沈むのである。たとえ、沈まなくても生きてふたたび故郷へ帰れる者は何人あるかわからない。酒保が無料というのはその意味ではおもしろい処置であり、さらにいえばそれだけの処置で海戦の前の神経疲労がくつろぐかもしれない。げんに兵員のあいだに歓声があがり、酒保へ殺到し、そのあとあちこちでアンパンや源氏豆を食うグループができた。この時代、日本の農村は質朴で、陸海軍に入っではじめて靴をはいたという者が多く、菓子なども海軍に入っではじめて食ったという者もあった。

秀島副長は「食い放題」ということを宣言したものの、多少不安になってあとでしらべてみると、一人に菓子一袋ずつのわりあいにはすぎなかったことを知り、むしろ痛々しくおもったりした。

この日進は第一戦隊（戦艦の戦隊）の殿艦でんかんをつとめている。逆順になると先登艦になる。そのため中将の三須宗太郎が司令官として座乗していた。

午前九時十五分、この三須が士官一同を士官室にあつめ、激励の訓示をおこなったあと、シャ

の目を護るといふのが理由だった。

「三笠」

の上甲板では、河合太郎ら軍楽手もこの石炭袋の海中投棄のために気が狂ったように働いた。カマスをほうり投げる者、受けとめる者、かつぐ者、海へほうりこむ者、まったく異様な作業だった。このころの英国の無煙炭は一トン二十五円という高価なものであった。中年小学校教員の月給ほどもある額で、河合太郎はこの「捨て方」の作業に参加しながら、

(これで天井てんどんが何杯食えるやら)

と、おもった。このころの店屋モノてんやでもっとも豪華なものといえば天井だった。

一等巡洋艦でありながら春日とともに戦艦の戦隊に編入されていた日進は、甲板だけで百六十トンの石炭をつんでいた。これをことごとく捨てねばならず、それも迅速を要した。総員が炭塵で真っ黒になって駆けまわり、わずか一時間でぜんぶ捨てきってしまった。

そのあと炭塵でよごれた甲板をきれいに洗い、戦闘準備ができたのが、午前八時半である。

むろん、艦は走っている。

そのころ、バルチック艦隊に接触中の和泉から敵状についての詳細な電報が入りはじめた。敵の艦数、陣形、位置がことごとくわかった。このことは重大であった。バルチック艦隊はロジェストウェンスキーでさえ、東郷艦隊の様子はわからなかったが、日本側は、和泉のおかげで各艦がみな敵の様子についてはあらかじめわかっていたのである。

と、旗甲板から信号長がどなった。航海参謀が潮風のなかでそれを受け、そのまま加藤参謀長に復命し、加藤参謀長が東郷につたえた。東郷がうなずくと、航海参謀はふたたび信号長にむかひ、

「おろせ」

と、信号旗をおろすよう指示した。

このときすでに各戦隊では、

「出港用意。錨いかりをあげ」

と、命じていた。

各艦ともおなじ風景だが、ラッパが鳴り、伝令がピーツと号笛ごうてきを吹いて艦内を駆けまわっていた。

どの艦でも錨鎖ケープルを巻きあげる機械（キャブスタン）がカタカタと激しく鳴って艦体をふるわせていた。

「総員、石炭捨て方かた」

という前代未聞みもんの号令が、このときどの艦にも出た。

この時期までどの艦も甲板まで石炭を積みあげ、砲のそばにも砲塔がやっと動く程度に積みあげられており、上甲板での石炭袋の山は、人の丈たけを没するほどであった。このことは繰りかえすようだが、敵が津軽海峡にきた場合のためであった。それらを「総員」が、どんどん海へ捨てた。ただしこの炭塵たんじんの飛ぶ作業に砲員だけは参加しなくてよいという指示も出た。炭塵から砲員

とき、波は射撃訓練の充分な日本側のほうに利し、ロシア側に不利をもたらす。

「きわめてわが方に有利である」

ということをし、真之はこの一句で象徴したのである。このことは電文をうけとった東京の軍令部は理解した。軍政家の山本は、おそらく世界海軍史上最大の海軍のつくり手であったが、戦闘や作戦の経験がほとんどなかったため、真之の文章を単に美文とおもったのかもしれない。

加藤参謀長が、東郷に「艦隊に出港を命じます」と了解をもとめたあと、航海参謀が意をうけて信号長に対し、大声でそれをつたえた。

「予定順序に各隊出港」

と、号令した。

この伝達のスピードはじつに迅^{はや}かった。信号長から信号兵につたわり、信号兵がマストに最初の旗をあげるまで一分とかからなかった。

これら各艦への命令伝達に無電は使われず、すべて旗^き旗^{りゅう}信号が用いられた。伝達は艦隊から戦隊へ、戦隊から単艦へとつたわってゆく。

信号長は、三笠の艦橋の旗甲板に立っている。きらきらと綴られてゆく旗の言葉に対し、これを受ける各艦は、応^{アウサー}旗を半分だけあげ、やがて三笠がごとく言いおわると、各艦は応旗をいっぱいにあげ、了解をしたことを返答した。

「各艦、リョーカアイ」

次いで真之がつけくわえたところの、

「天氣晴朗ナレドモ浪高シ」

について、のち海相山本権兵衛が、

「秋山の美文はよろしからず、公報の文章の眼目は、実情をありのままに叙述するにある。美文は動もすれば事実を粉飾して真相を逸し、後世をまどわすことがある」

と、評した。原則としては山本のいうとおりであった。

しかしながらこの場合、真之のほうに分があつた。

真之は美文をつけ加えるつもりはなかつた。

かつてウラジオ艦隊の巡洋艦三隻が日本近海に跳梁して陸軍輸送船を何隻も沈めていたとき、それを追つかけるべく義務づけられていた上村艦隊が、かんじんなときになると濃霧に遭い、そのためしばしば敵をとりにがした。

「天氣晴朗」

というのはその心配がない、ということであり、視界が遠くまでとどくためとりにがしはすくない、ということを濃厚に暗示している。

さらに砲術能力については日本のほうがはるかにすぐれていることを大本営も知っていた。視界が明朗であれば命中率が高くなり、撃滅の可能性が大いに騰るということを示唆している。

「浪高シ」

という物理的状況は、ロシアの軍艦において大いに不利であつた。敵味方の艦が波で動揺する

になったのである。

電文のこと、つづく。

「撃滅」

という用語がつかわれた動機の一面についてはのべた。

いま一面は戦略的にそれをしなければ日本海海戦の意味はうしなわれるのである。こちらがたとえ半分沈んでも敵を一隻のこらず沈めなければ戦略的に意味をなさないという困難な絶対面を東郷とその艦隊は背負わされていた。

「バルチック艦隊は、戦艦、巡洋艦のうち、たとえ何隻でもいいからウラジオストックに逃げこみ、日本の海上権を攪乱する可能性を残せば、それで十分ロジェストウエンスキーの勝利である」

という専門家の論評さえ外国の新聞に載ったほどであった。ロジェストウエンスキーはウラジオストックに逃げこむのが戦略目的であった。自己の戦略目的を達成することは、たとえより薄い勝利にすぎなくあっても、成功であることにはまちがひなかった。その「成功」によってロシアは今後日本の海上交通をおびやかす、満州の日本陸軍をひびしにするという重大な戦略的優位に立ちうるのである。これを逆にいえば東郷の場合、ロジェストウエンスキーがもっている軍艦という軍艦をぜんぶたたき沈めてしまわなければ、勝利にならなかった。戦略上、東郷は「之ヲ撃滅」すべく要求されていたのである。

と、問われた。ついながら東郷には海軍大臣山本権兵衛と軍令部長伊東祐亨が同行していた。東郷はこの一座ではもつとも小柄であった。

しかも平素無口で、人念慎重な性格であり、その青年時代から経てきた数多くの戦闘においては、しばしば切れ味のいい指揮をみせてきたが、しかし大言壮語ということからおよそ遠い性格であった。その東郷が、

「かならずこれを撃滅いたします」

と、ぼそぼそと言上したのである。

この「撃滅」という極端な表現には伊東も山本もよほど驚いたらしく、あとで、

——東郷のやつ、とんでもないことを言上した。

と兩人が何度もぼやいた。兩人とも東郷と同様、薩摩人であった。薩摩ではむかしから誇張表現や観念的な表現の習慣がなく、それを卑しむ傾向のほうがつよかった。東郷は天子にむかってホラを吹く気か、という明治人らしい懼れと、それとはべつにひそかながら、

(この薄ぼんやりした東郷が、存外……)

という、見直して頼もしく思う気持とがこもこも兩人にあった。後年、この話題が出るたびに兩人はあのとときの東郷を可笑しがったというが、それほど明治軍人の感覚から誇張表現は遠かった。

しかしこの大本営に対し東郷が打つ電文にあっては、東郷としては明治帝に約束したとおりの言葉をつかうべきであった。東郷の言上については、若い幕僚まで知っていたために、この草稿

と書き加えたのである。

この電文について、いますこしつづける。この電文において、

「之ヲ撃滅セントス」

という表現を用いている。このことはこの時代を知るために重要な課題がふくまれている。この時代の軍人の軍隊文章というのは、陸海軍を問わず、現実認識という軍人にとってもっとも重要な要素から決して浮き立つことをしなかった。要するに、こういう極端なあるいは誇大な用語はこれ以前に使われたことがなかった。ついでながらこの種の誇張表現が軍隊のなかで日常的につかわれはじめたのは、軍人が官僚化し、あるいは国士気どりになって、現実認識の精神をわすれてしまった——としか言いようのない——昭和期に入ってからである。昭和期とくに日中事変前後からの軍人のこの種（現実認識と無関係な誇張の文章を書くという）の傾向は、昭和軍隊のもっとも深部のなかにおける頽廢（たいはい）に根ざしていると考えていい。昭和期の陸軍では、中隊長あたり的小さな団隊長の報告文さえこの種の誇張表現がちりばめられていた。

しかし日露戦争の東郷の司令部があえてつかったこの「撃滅」という言葉には、いわば法理的とさえいえる背景と戦略的妥当性と十分な現実認識があった。

昨年十二月下旬をもって旅順艦隊を覆滅したあと、東郷は報告のために帰京した。このとき参内（さいない）、明治帝に拝謁したとき、帝が、

「露国の増遣艦隊（バルチック艦隊）がくるというが、見込みはどうか」

(ひよつとすると、海戦はあすかあさつてに)

という予感があった。このため二十六日午前六時の天気図の判断にはじつに苦心した。この天気図の材料は、前線の測候所から送られてきたものであった。

この二十六日午前六時という時限において、中心示度九九七ミリの低気圧が九州海上に存在している。いまひとつ九八九ミリの優勢な低気圧が旅順・大連のある遼東半島付近にあり、このため九州方面から朝鮮半島、遼東半島あたりに雨が降りつつある。

さて、あす二十七日の天気であった。

それも海戦が予想される海域上での天気である。それときよりの天気図をにらみつつ予想をたてるのは、学理以外に経験が必要であった。岡田は六年の経験があった。

岡田は考えぬいたあげく、一個の断をくだした。そのあとに、文章化する作業がある。岡田は筆をとって、

「天気晴朗なるも浪高かるべし」

と、書いた。一気に書いたという。

これが大本営の無線室から鎮海湾の三笠に送られた。その天気予報が、真之の机の上に載っていたのである。

かれはむろん岡田という東京にいる技師を知らなかった。このむだのない予報文をとりあげ、さらに簡素にし、

「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」

る。

岡田は明治三十二年に東京帝大理科大学物理学科を卒業し、中央気象台につとめた。年表風にいえば、岡田の恩師の長岡半太郎が、この前年に原子核の存在を予言している。

岡田が中央気象台に入ってほどなく日露戦争がはじまったため、かれは予報課長兼観測課長として、大本営の気象予報を担当することになった。

戦争の運命を決定するのはときに気象であるということは、古くからいわれている。このため日本は開戦前後から戦場の周辺に測候所を設置しはじめた。韓国内では、釜山ふさん、仁川じんせんなど数力所におかれ、華北では天津におかれた。

日本は気象学やその行政の面でも背伸びしていた。岡田は、

「日本はロシアを相手に宣戦布告したが、世界中は日本を遅れた国だとおもっている。だから英文の報告を世界の気象台や気象学会に送るべきだ」

として、戦時予報のために毎日へとへとになつていながら、「中央気象台欧文報告」という海外向けの雑誌を発行した。岡田自身が編集し、論文も書いた。筋の通った気象研究者が何人もいないため、一つの号で岡田が四つも五つも論文を書いた。その可憐かれんさは、さきの宮古島の五人の漁夫に似ており、無私な作業といってよかった。

いよいよバルチック艦隊との衝突が近いというところになると、岡田は毎日の天気予報のために文字どおり骨身をすりへらした。

とくに五月二十六日の岡田は、

真之は、うなずいた。飯田はすぐ動いた。加藤参謀長のもとにもってゆくべく駆け出そうとした。そのとき真之は、「待て」ととめた。

すでに鉛筆をにぎっていた。その草稿をとりもどすと、右の文章につづいて、
「本日天気晴朗ナレドモ浪高シ」
と入れた。

後年、飯田久恒は中將になったが、真之の回顧談が出るたびに、

「あの一句を挟んだ一点だけでも、われわれは秋山さんの頭脳に遠く及ばない」

と語った。たしかにこれによつて文章が完璧になるといふだけでなく、単なる作戦用の文章が文学になつてしまつた観があつた。さらにそれ以上の意味もふくまれているのだが、そのことはあとで述べる。

じつをいうと、この、

「天気晴朗ナレドモ浪高シ」

という文章は、朝から真之の机の上に載つ^のかっていた。東京の氣象官が、大本營を経て毎朝とどけてくる天気予報の文章だったのである。

日本の氣象学と氣象行政は、明治八年、東京赤坂で氣象觀測されたときからはじまる。同十五年に東京氣象学会が設立され、同十七年に全国を七つにわけて地域の天気と予報が発せられた。

しかし日本の氣象学を實際におこすにいたつた人物は、岡田武松（一八七四—一九五六）であ

かれは幕僚室に帰ると、机の上に両ひじをつき、上体を乗りだし、癖のあるすごい目をぎょろぎょろさせてまわりをみた。

作戦参謀である真之のなすべきことの九割まではこの事前においてすでに終了した。あとは戦いにのぞんでその結果を神の前でテストをうけるのみであつたが、しかしいまだちにやらねばならぬことが、すくなくともひとつはあつた。

大本営に電報をうつことである。

連合艦隊司令長官である東郷が、決戦場にむかうにあたり、故国にむかつてその決心をのべるための電報であり、その起草をしなければならぬ。

真之はのちのちまで日本海軍の神秘的な名参謀といわれた。そのため、この有名な電文の起草者がかれであるということになった。かれは秋山文学といわれたくらいに名文家であつたことも、その誤解を生んだ。

この電文は、真之が起草したものではなかつた。

げんに、真之の目の前で、飯田久恒少佐や清河純一大尉らが、しきりに鉛筆をうごかしている。

やがて飯田少佐が真之のところへやってきて、草稿をさし出した。

「敵艦見ユトノ警報ニ接シ、聯合艦隊ハ直ニ^{たち}出動、之ヲ撃滅セントス」

とあつた。

「よろしう」

かった。日本人は情景が劇的であればあるほどその主観的要素を内部にしまいこんでしまうところがあり、東郷のこの光景は能に似ていた。

各艦はただ命令を待つだけになっていた。

あらかじめ各艦に対しては、

「文書による事前令達」

というものが出ていた。出港順序などもわかっており、石炭はすでに二日前に補充が完了していた。さらに機関もウォーミング・アップしており、どの艦の煙突からも煙が出ていた。

命令あり次第、全艦隊は無言無声のまま、するすると出てゆけるようになっていたのである。この点も能に似ていた。

入電したとき真之は後甲板にいたことはすでにのべた。

かれは例の奇妙な踊りをやめて、おそろしく速い足どりで歩きはじめた。当然のことながら「敵艦隊見ゆ」の瞬間にかれは幕僚室にいないとまずいのである。駈けたかったが、参謀が血相変えて走っているようでは、ひとびとは何事があったのかとうたがい、士気にかかわるだろうとおもった。このため大またの急ぎ足になったのだが、ちょうどフルスピードを出した水雷艇のように尻がやたらと左右に動いた。真之はもう満で三十七歳になっていたが、腰まわりに変化がなく、目方も兵学校のころとさほど変わらず、よくしまった筋肉質の体は、無駄がなさすぎるのむしろ難点といえるほどに小気味よく均斉がとれていた。

と、応募をすすめた。このあたりの気分は宮古島の島司と五人の關係にやや似ている。西田氏は頭健な若者で、みるからに海軍むきの体つきをしていた。三島郡内で三十九人の応募者があって三人合格した。

訓練は呉海兵団で五カ月、横須賀の海軍砲術練習所で六カ月の教育をうけた。

かれの部署は、戦艦富士の後部主砲（十二インチ砲）の砲員で、艦底の弾薬庫から百六貫という砲弾を揚弾機でひきあげて弾込めをする役目だった。

敵艦隊見ゆの報がつたわってきたとき、氏はうずくまって砲の整備作業をしていたが、頭がガングン鳴ってきて手が動かず、

「日本がもし負けたら、どうなるかなあ」

と、そればかりを思い、涙がこぼれて仕方なかったという。

加藤参謀長は、なお長官公室にいる。電報の翻訳文をみせたあと、蒼白のひたいを光らせて、「艦隊に出港を命じます」

と、東郷の了解をもとめた。

「うん」

東郷が、うなずいた。東郷が民族の興亡を決すべき運命の戦いへスタートするにあたって、意思表示したことといえただそれだけだった。かれはよく整った品のいい顔つきをしていたが、その表情からさきほどの喜色が消え、ふだんの東郷の顔つきにもどっていた。ちょうど陽のよくあたる場所で田の面をながめている老農夫の顔のように平凡でしずかで、すこしの劇的要素もな

た。

加藤は翻訳文を示した。

東郷はそれを見、すぐ顔をあげた。それでもなおこの無口な老軍人はなにもいわなかったが、ただ東郷の表情はえもいえぬ微笑でかがやいており、加藤は東郷がこれほどに喜色をうかべたのをはじめて見た。

艦隊のどの将士も、艦からみえる鎮海湾の山々や、加徳水道の海の色、巨済島の硬質の地肌がつくり出しているこの碇泊地の風景に飽きていた。

鎮海湾は、そのまわりを高さ七十メートル前後の樹木のない山によってかこまれている。

どの山のみどりも淡く、日によってはあかるい黄土色にみえたりした。この朝がそうであった。その黄土色の起伏が、背景^{バック}になっているおそろしく濃い紺色のかがやきをもった初夏の空に押し出され、海にせまっていた。まだ昇りたての新鮮な太陽は陸地にさまざまな光線の隈^{くま}どりをつくっている。そのせいか、早暁の海の色は神聖色を感じさせるほどに深いなにかを湛^たえていた。

戦艦富士の砲員だった西田捨市三等兵曹は、いまでも大阪府下で健在である。

西田氏は大阪府摂津市浜町のうまれで、氏の語るところでは、明治三十四年に大規模な海軍志願兵募集があった。当時摂津市は三島郡味舌村^{ましかた}といったが、その味舌村の村長さんが、

「わしの名誉のためにぜひたのむ」

艦出雲において艦長の伊地知季珍大佐とおなじ艦内で起居していた。このとき有名な旅順口閉塞隊員の募集があった。

ある機関兵が応募したが、選に洩れた。この機関兵が艦長室にやってきてさらに嘆願した。伊地知艦長はこれに対し、選に洩れた以上はどうしようもないと慰諭してついにあきらめさせた。その間、加藤は同室においてその対話を無表情にきいていたが、機関兵が去ったあと、顔をおおい、声を放って号泣した。

「その哭き方のすさまじさは、尋常でなかった」

と、加藤とは同期生で加藤のことはよく知っているこの伊地知が、ひとつ話のようにして加藤の死後に語っている。

この朝、加藤は蒼白の顔をして椅子にすわっていた。ここ一週間ほどの心労が神経性の胃痛のかたちになってかれをさいなんでいたのである。かれは激痛に堪えるために、両手でテーブルのはしをつかみ、足に力をこめてふんばったような姿勢をとっていた。

そこへ無線助手の加瀬順一郎がとびこんできたのである。

加藤は、ほそい指で封をひらいた。中身を一見すると、

「よし」

と、加瀬にうなずいた。加瀬は去った。加藤はどうみても日常の表情であった。

加藤は長官公室に入った。

東郷はすでに長官私室から出てきていて、その公的な執務室である公室の椅子にすわってい

真之の苦悩のあぐくのこの狂喜は、かれをして不可思議な力を感じしめるものもなった。この「ふしぎな瞬間」は人間を越えた力がもたらしてきてくれたのではないか、ということである。

参謀長の加藤友三郎少将は、どのような場合にも冷静さをうしなつたことがないという人物だった。

かれは芸州藩士の子で、兄の種之助は上野の彰義隊討伐のときは、藩兵の小隊長をつとめた。加藤は明治六年十月二十七日に東京築地の海軍兵学寮に入学した。満十二歳であった。ついにながら十月二十五日に勝海舟が海軍卿になっている。当時兵学寮には予科と本科があり、卒業して海軍少尉補になったのは満十九歳である。在学中の成績はさほどよくなく、めだたない存在であつたが、卒業のときには二番になった。

大酒が飲めるというほか、無口で表情にとぼしく、面白味のある男ではなかつたが、物事の分析能力においてすぐれているうえに、あわせて物事を総合的にとらえる能力をもち、一個の結論をひきだす上においては非常な度胸があつた。

健康のほうは虚弱といつていいほどだったが、氣力がつよく、無理がきいた。

かれが冷静で寡黙であるということから冷血の人ではないかという印象があつたが、しかし内実はそうではないという異常な情景を、かれの身辺のひとびとで目撃している人がいた。

たとえば日露戦争の初期の段階においてかれは第二艦隊である上村艦隊の参謀長をつとめ、旗

うに振って、

「シメタ、シメタ」

とおどりだしたというのである。

「秋山さんは雀躍^{くわど}りしておられた」

と、安保はのちのちまでいった。

——敵は津軽へまわるのではないか。

という疑念が、えたいの知れぬ怪物のようになってここ一週間ばかりのあいだ真之の背後から重くかぶさっていた。もし敵が津軽まわりをしてくれば真之が樹^たてた七段構えの戦法は根柢^{こんてい}からくずれざるをえず、いそぎ津軽へかけつけたところで、時間・空間という物理的制約のために敵をいくらか沈められない。対馬コースをとってきてくれれば、真之は予定した作戦計画どおりに敵を迎えることができ、ウラジオストックまでのあいだ、十分な時間とゆたかな空間を戦闘にかうことができるのである。

戦術家というのは、「敵が予想どおりに来る」というこのふしぎな瞬間に賭けているようなものであり、戦術家としての仕事のほとんどはこの瞬間に完成する。

となれば、真之が勝利感を味わったのはこの「敵艦隊見ゆ」の瞬間であった。あとは東郷という用兵者の用兵能力と連合艦隊の構成員の練度や士気が勝利を具体的なものにしてゆくにちがいない。

いずれにしても、真之は狂喜した。

このとき、軍楽手河合太郎は、他の三人の軍楽手といっしょに無線助手をつとめていた。無線機を操作する助手ではなく、伝令であつた。無線掛が受信すると、その暗号を翻訳し、それを封筒に入れる。その封筒を持って司令部へ突つ走るのが役目であつた。

四人のうち一人ずつが当番でこの仕事をするが、この日の当番は運わるく河合太郎ではなく、河合より二つ年下の一等軍楽手加瀬順一郎であつた。

受信は海軍軍令部編の公刊戦史では、

「午前五時五分ごろ」

となつてゐるが、河合の記憶では、加瀬順一郎が走りだしたときには、兵員たちは甲板で体操をしてゐた。毎朝午前五時ごろに、

「総員起し」

というのがある。艦内はいっせいに起き、手のあいた者はぜんぶ甲板に出て十分ばかり体操をするのである。

そこへ加瀬順一郎が走つてきた。走りながら、

「それ来たぞっ」

と、叫んだ。体操をしている手足がいっせいにとまり、みな総毛立つような衝撃のなかでこれをきき、いっせいに持ち場にむかつて散つた。

このとき秋山真之は後甲板でひとり体操をしていたが、このとき近くにこの旗艦の砲術長の安保清種^{あきよ}少佐がいた。安保の記憶では真之の動作が急に變化して片足で立ち、両手を阿波踊りのよ

おこなわれてみなければわからないとし、だから予断はできない、としている。

両軍の物質力がほぼおなじだとすれば、あとはこれを運用するところの両軍の将兵の資質や技倆が勝敗を決するかぎになるだろうとのべ、しかしそれらを数量化して比較できないため、それについての論評をさしひかえている。しかし、

「ロシアの将兵の資質や技倆が、世間が想像しているようにだらしないものではないと考えたほうがよい」

といっているが、日本側もこの点については決して軽んじていなかった。ただ日本の頼むところは、世界海軍史上日本が内々ながら最初に開発した大艦隊戦術という頭腦的な面と、砲弾を実際に命中させるという兵員の砲術能力においては敵よりまさっているだろうとほのかながらおもっていたにすぎない。

信濃丸が発した「敵艦隊見ゆ」の無電は、対馬に碇泊中の第三艦隊旗艦厳島から鎮海灣の三笠あて、午前五時五分に中継打電された。

すでに暗号がきめられている。タの字をつづけさまに七度打つのである。

「タタタ タタタタ」

この早晩、鎮海灣から加徳水道にかけて錨をおろしているあらゆる軍艦の無線機が、いっせいに鳴った。

むろん三笠の無線機も鳴った。

を發揮せず、またウォーターローにおけるウェリントン公爵の勝利も期待できなかったかもしれない。もし東郷がこの海戦でロジエストウェンスキー提督にやぶれるとすればどうであらう。満州における日本陸軍の戦勝は、ついに名誉のみのむなしなものになってしまふのである」

とのべ、日露両艦隊の比較を論じている。

その論評は、決戦兵力である双方の戦艦の比較からはじめている。ロシア側が戦艦八隻（うち新鋭艦は五隻）であるのに対し、日本側が戦艦四隻しかもたないというのが日本側の劣弱点であらう。もつとも日本の戦艦のうち三笠、敷島、朝日は一万五千トン強という巨艦で、ロシアの四隻の新鋭戦艦が一万三千五百十六トン（オスラービヤは一万二千六百七十四トン）であるという点でややまさっている。ただし日本のその戦艦四隻の艦齢が、ロシアの新鋭五隻よりも古くなっているという点で日本側がおとる。

要するにロシア側は戦艦の数と九インチ以上の巨砲において日本側よりも優位に立っている。これに対し日本側は、巡洋艦の数と八インチ砲以下の速射砲においてまさっているから、双方の物質的戦力はほぼ相同じということができ、とその論評にいう。そのとおりであった。

この論評は、この海戦を、

「近代的艦隊が、たがいに全滅を賭してたたかう決戦」

と規定しており、近代的大艦隊同士の決戦は、鋼鉄の防御板と巨砲をそなえた蒸気軍艦が出現して以来最初の例をひらくことになるとし、従って木造の帆船をもっておこなわれた過去の大海戦（たとえばトラファルガー海戦）とどういう点で原則が一致するかということが、実際に海戦が

拔　　錨

世界中が、この海戦のなりゆきを見まもっていた。たとえば、この五月の十九日付で刊行された英国の雑誌「エンジニアリング」にはきたるべき日露海戦がいかに注目すべき世界史的事件になるかを論じている。

「きたるべきこの海戦は、その影響するところのものは史上かつてない大きさになるだろう」と言う、

「この海戦の争点は、海上権にある。島帝国である日本の地理的条件はわが英国のそれとおなじで、満州における日本陸軍の勝利の価値を決して小さく評価するわけではないが、日露戦争における陸戦はあくまでも副位のたたかいである。日本の海軍が海上権を保持することによってのみ陸戦の戦果が評価されるといふものだからである。日露戦争における日本の段階は、たとえばナイルの戦いに勝つてなおいまだトラファルガーの海戦を経てないものである。もしネルソン提督にしてフランスのヴィルヌーヴ提督にやぶれたとすれば、イペリア半島における英国陸軍は実効

敵がすでに和泉の左舷の沖合の空を煤煙で曇らせつつわめくがごとく日本海にむかつて押しすすんでいるのである。

壹岐島も近いというあたりで、珍事がおこった。

和泉の右舷艦首の方角にあたつて、突如、汽船があらわれたのである。陸軍の輸送船だった。博多湾を出て対馬方角にむかおうとしているようで、船名は共同丸といった。

石田艦長はあわてて信号をあげさせ、これを逃げさせた。つづいて陸軍の病院船土洋丸というのがやってきた。和泉は大いそぎで信号旗をあげ「危険だから避ける」と命じた。

さらに石田を狼狽させたのは、陸軍の補充部隊を満載した陸軍輸送船鹿兒島丸が波を蹴たててやってきたことである。この船は、石田の揚げた信号も理解できなかったばかりか、バルチック艦隊を日本艦隊とおもつたらしく、甲板にあふれた陸軍の兵士が、

「バンザイ、バンザイ」

と叫んで、いよいよバルチック艦隊に接近しはじめた。石田はやむなく艦をこの輸送船に近づけ、メガホンでもつて「あれは敵だ、逃げろ」と叫んだが、バンザイの声にうち消されてきえず、いよいよ敵艦隊に近寄ろうとした。石田は非常措置として汽笛を鳴らしたり、鹿兒島丸の前面を突つ切つたりしてようやくあれは敵だということを納得させた。

鹿兒島丸では、おそらく船長や輸送指揮官以下が仰天したのであろう。あわただしく逃げて行つた。

のむこうをゆく敵艦隊の姿は、

——小ざかしきかの猿を懲らしめよ。

というニコライ二世皇帝の命令がそのまま一大軍容に變じ、極東の島帝国を征服してしまおうという威厳と鋭氣に満ちていた。

刻々その状況を報告しつつある和泉の石田艦長には、バルチック艦隊のどの艦の煙突もみな黄色であることがふしぎであった。

「煙突はすべて黄色」

と、かれは打電した。三笠の司令部はきつとよろこぶにちがいないとおもった。海戦での困難の一つである敵味方の識別ということが、敵のほうから解決してくれているようなものであった。味方としてはともかくも黄色い煙突の艦をめぐって射てばよいのである。

さらに石田艦長は、自分に渡されている密封命令のことをおもった。この命令形式は海軍のしきたりで、秘密の漏洩ろうえいをふせぐために出港直前に艦長にわたされる。出港後、指令をまって艦長がひらくのである。

「もし敵艦隊が来たらざる場合は、津軽海峡の所定の場所へゆけ」

という要旨の当時の命令が書かれていた。連合艦隊司令部をずっと支配しつづけていた重くるしい不安が、この命令にもよくあらわれていた。予期どおりにこの方面に敵がもし来なければ敵は太平洋まわりをとったものとみて、予想戦場をいそぎ変更し、津軽海峡の西出口で待ちぶせようというのである。しかしこの密封命令は幸いにも無効になった。

戦の予想地点は沖ノ島西方とみた。海軍としてはごく当然の計算ではあったが、気味わるいほどに両者の計算の結果が符合している。

ロジェストウェンスキーは、すでに会戦という避けがたいものの運命圏内に突入してしまっている以上、和泉の存在など黙殺しようとおもったのであろう。

このときにあたって、かれのとった処置で不可解な謎とされているのは、和泉に無電をゆるしつづけたことである。

この艦隊の仮装巡洋艦ウラルには、七百マイルもどくというマルコニー会社製の世界一の無線電信機が一機そなえつけられていた。この強力な電波をもってすれば、和泉の無電を妨害しつづけることなどわけはなかった。事実、ウラルはたまりかねて、提督に対し、それをしていいかという許可をもとめた。が、提督は海上信号器をもって、

「日本の無電を妨害するなかれ」

と、禁じた。この艦隊の幕僚さえ、この処置の意味を解きかね奇怪至極であるとあとまで批評したが、日本側の戦艦敷島の艦長だった寺垣猪三大佐が、戦後「これなども天佑の**てんゆう**の一つだったと思います」と語っている。日本側でも不可解だったのである。

小柄な和泉が、バルチック艦隊に、その南からずっとつき従い、北東にむかっていた。艦長石田一郎大佐は、左舷の洋上に展開する敵艦隊の壮観を見つづけていた。

時が経つにつれて濛氣が薄れ、洋上がほがらかになり、海の色が紺碧にかわった。そのうねり

ことによつて陣形がみだれたり、艦隊の速度がおそくなつたりすることをおそれたのかもしれない。

ロジエストウエンスキーは、和泉があらわれる以前に自分たちが見つけられたということに気づいていた。味方の無電がとらえている日本側の暗号通信が、午前五時ごろまでは単調なくりかえし（日本側の哨戒の点呼であろう）であつたのが、五時ごろをさかいにして大いにかわり、複雑な内容らしいものを打ちはじめていることでもわかるのである。同提督による午前五時という時間には、おそらく信濃丸が第一報を発した午前四時四十五分のことに相違ない。それ以後たしかに日本側の通信状況は急変した。ロシア側からみれば、発見されたとみてよかつた。

ロジエストウエンスキーは操舵室にいた。旗艦スワロフの艦長イグナチウス大佐をかえりみて、

「どうやらわれわれは、発見されたようだ」

と、この日本側の無電の変化の段階においてそのように言い、海図をのぞきこんだ。

速力と距離の計算の結果、玄海灘げんかいなだにうかんでいる、山頂を切りとつたような三角形の小さな岩礁（沖ノ島）を指さし、

「どうやら会戦はこの島の西方でおこなわれることになるだろう。時間は午後二時」

と、見た。

話が飛ぶが、鎮海湾にいる東郷が、信濃丸の発した無電（対馬の尾崎湾にいる第三艦隊司令部から転電されたもの）をうけとつたのは、午前五時五分であつたが、このとき即座に真之が計算し、会

「自分は、敵艦隊のすべてを、敵に遭^あう前に手にとるように知りつくしていた。それは和泉の功績である」

といったが、和泉は東郷のために忠実な目になろうとしていた。ただ一艦をもって、世界有数の連合艦隊に立ちむかっているのである。この和泉の行動を、この当時、大本營参謀だった小笠原長生が、小牧^{こまき}長久手^{ながくて}の戦いにおける徳川方の本多平八郎忠勝の果敢な接触（秀吉軍への）に比較しているが、たしかに状況と行動は酷似していた。

バルチック艦隊の匿名幕僚の手記によれば、この日午前六時に、和泉が発見されている。

八五二四トンの装甲巡洋艦ナヒーモフがこれを見つけ、

「右正横（時計の三時の方向）にあたり、敵艦をみとむ」

と、あわただしく信号を送った。ひきつづき他の艦からも和泉の発見を報じた。

が、ロジェストウエンスキー中将は、これを追っばらえ、とも撃沈せよともいわなかった。ただ午前八時ごろになって旗艦スワロフに信号旗をかかげさせ、和泉に対する処置をつぎのように命じた。

「右舷副砲および後部砲塔を指向、照準を持続せよ」

ということであった。和泉の石田一郎大佐の望遠鏡に映じたという——敵艦の砲が動きはじめて自艦にびたりと照準がつけられた——のは、このときであるらしい。

ロジェストウエンスキーはそれ以外の処置は講じなかった。たかが哨戒用の小艦に相手になる

和泉は二本マストに二本煙突で、じつに簡潔な艦型をもっている。波が高く、艦がゆれた。艦首にくだける波は、前甲板をいそがしく洗ってはふたたび海に去ってゆく。当時少尉候補生和泉にのつていた嶋田繁太郎（のち大将）は「ローリングのひどい艦だった」という述懐をのこしている。

索敵はながい時間を要した。午前四時四十五分に信濃丸からの無電を感じ取ってからほぼ二時間、早朝の海をかけまわった。海上には濛気が、走りゆくにしがたがってときに濃くなったり、とくに淡くなったりしたが、しかし空は申しぶんなく晴れていた。

和泉が、沖合に無数の黒煙をあげて航進するバルチック艦隊を見たのは、午前六時四十五分である。

北緯三十三度二十分、東経百二十八度五十分、五島の北西約三十海里の地点においてである。おりから濛気が濃くなり、展望はわずか五、六海里であった。この濛気のために和泉はより接近するしかなかった。しかし接近すれば敵に射たれるであろう。

が、和泉は猛然と接近した。距離がちぢまってついに八、九千メートルにすぎなくなった。

石田は望遠鏡をもって、陣形を見、艦数をかぞえた。

望遠鏡にうつる敵の大艦たちは、すでに和泉に気づいていただけでなく、その巨砲群をねじむけてこの小さな獵犬にむかつて照準をつけつつあった。

しかし、石田は観察と報告に没頭した。艦を、敵艦隊に並進させた。

その間、バルチック艦隊の勢力、陣形、針路などをじつに綿密に報告した。東郷はのちに、

信濃丸にもっとも近い場所で哨戒にあたっていたのは、二等巡洋艦和泉（二九五〇トン）である。

この時期、二、三等巡洋艦のうち艦齢のあたらしい何隻かは国産でつくられていた。新高、対馬、音羽、秋津洲、明石、須磨などがそうであったが、すでに艦齢二十一年というほどに老いてしまっている和泉は、英国製であった。

和泉の艦長石田一郎大佐は信濃丸からの第一報を受信したとき、自分の艦が信濃丸のもっとも近くに近づくことを考え、

「わが艦が、全艦隊の犠牲たらざるべからず」

と決断し、速力を増してバルチック艦隊と交叉するであろう地点をもとめて航進を開始した。石田にすれば信濃丸は汽船にすぎない。しかし和泉は保護甲板の厚さが〇・五インチから一インチというブリキのような小型巡洋艦とはいえず、軍艦は軍艦であった。速力も新型の国産艦ほどはないとはいえ、敵の巡洋艦に対抗できる砲力をもっている。和泉は信濃丸とその危険な任務を交代すべきであった。むろん敵艦隊に接触すれば撃沈させられる公算が大きかったが、しかし石田は、

「わが連合艦隊にとって、和泉一艦をうしなっても戦力にさほどのマイナスにはならない。それより和泉が敵艦隊に接触することによってその状況を逐一司令部に送ることのほうがはるかにプラスになる」

と考えた。

信濃丸の行動のおもしろさは、無電を打ちっぱなしで逃げきったわけではなかったことである。

この船はある地点まで脱出すると、バルチック艦隊にしつこく接触をたもちはじめたのである。

第二報では、敵の針路を報らせた。

「敵針路、東北東。対馬東水道（対馬海峡）に向かうものの如し」

信濃丸はその後なお執拗に食いさがり、午前六時五分になって、ふたたび無電を打った。

「敵針路、不動。対馬東水道を指す」

これが決定的な報告になった。

この信濃丸の第一報の打電と急転離脱という行動に対し、バルチック艦隊は気づかなかったようであった。ひとつには暁闇ぎょうあんのなかでの出来事だったことと、バルチック艦隊の見張員が、連日の緊張で目が疲れていたのかもしれないかった。

もっとも駆逐艦二隻が追ってきたという光景を信濃丸の乗員のすべてが見ている。しかし濃霧が流れてきて信濃丸を包んだために脱出できた。もっとも戦後バルチック艦隊の捕虜の証言では、

「信濃丸を見おとした」

といっており、この駆逐艦二隻の追跡はなぞのままになっている。幻覚かもしれない。

ただ、この発見を鎮海湾の東郷閣下に知らせなければならぬ、と成川はいった。送信を開始すれば当然、敵は電波で妨害する一方、砲をもって信濃丸そのものを無線機もろとも沈めるにちがいない。

「船が浮かんでいるかぎり送信をつづけるのだ」

というと、転舵一杯を命じた。船が傾ぎ、波が右舷に盛りあがって、たちまち甲板を洗い、やがて左舷のほうへ滝のように流れ落ちた。船は離脱すべく全速力を出した。と同時に、

「敵艦隊見ゆ」

との電波が、四方に飛んだ。この付近のことを、海軍ではあらかじめ二〇三地点としておいた。この電信は正確に言えば、

「敵の艦隊、二〇三地点に見ゆ。時に午前四時四十五分」

であった。二〇三という数字は、旅順要塞の攻撃の最大の難所であり、同時にそれを解決せしめるにいたった高地の標高と符合していた。成川の船はこの数字を打電しつづけた。御幣かつぎではなかったが、この数字からみてきょう幕をあげるであろう日露両海軍の決戦は容易ならざるものになるのではないかとおもった。

かれの船には、海軍技師木村駿吉がリーダーになって完成し、世界でもっとも性能のいい船舶用無線機とされる二六式無線電信機が積まれており、その通信距離は八十海里であった。木村ははや打ちをいましめ、遅くとも確実に打つことを海軍にすすめていた。信濃丸の無電は、遅く確実に、繰りかえし同じ言葉が打たれた。

おぼろげながら敵船の甲板上の様子などが見えるようになった。たれの視線も、その船にとらわれていた。

が、たれかが叫んだ。

おどろくべきことに、信濃丸はバルチック艦隊の真^まっ只中^{ただなか}にいることを知ったのである。大小の無数の軍艦が煤煙を吐きつつそれぞれが巨城のごとく海面に横たわり、楼^{やぐら}をあげ、白波を蹴り、ひた押しに北東にむかつてすすんでいるのである。信濃丸の右舷や艦首の方角にいる艦はとりわけ巨^{おお}きかった。左舷の後ろにもちかちかと大艦がせまっていた。もっとも近い艦でわずか千メートル程度にすぎなかった。

成川は、戦死を決意したらしい。

哨戒に熱中するあまり、ひどく滑稽なことに、気がついたときは敵の大艦隊の真っ只中に入りこんでしまっていたというようなことは、世界の海戦史上例のないことであつた。すでに形態としては包围環の中にいる以上、脱出は不可能とみるしかない。

成川は船橋^{ブリッジ}にいる士官たちに言った。かれ自身気づかないことだったが、口調が漢文調になっていた。

「不覚なるかな、すでにわれらは死地に入った。全力をもって脱出を試みるもあるいは能わざることあるべし。そのときこそ、この船非力ながらも敵の一艦を求め、激しく衝撃してともに沈むべし」

なるほど、闇に黒い船影がシミのようにうかんでいる。三本マストに二本煙突であった。

「仮装巡洋艦だろうか」

と、成川がかたわらをかえりみた。たれかが、仮装巡洋艦ズネーブルではないでしょうか、といったが成川は返事をせず、さらに接近を命じた。

この信濃丸がやったもつとも勇氣ある行動は、相手の舷に接するまで船を近づけたことである。相手が軍艦なら信濃丸は一発で轟沈されるところであつた。

接近して備砲がないことを知つた。

「やはり、病院船だ」

と、成川はようやく断定した。ところが相手——病院船アリヨール——が、信濃丸を僚船とみたらしく、このとき念の入つたことに、電気燈を点滅させて信号を送つてきたのである。

「こつちを仲間と知っている」

と、成川はいった。とすれば、どこかに僚船がいるという証拠である。つまり、艦隊ではないか。

信濃丸のすべての乗員が、眼を皿にして八方を見た。成川も夜間双眼鏡ナイトグラスでそのあたりをみた。しかし海上の濛氣もろきがふかいせいいか、なにもみえなかつた。

成川は、なおも入念だつた。相手の船を停めさせて臨検をしようとおもつた。かれはまずボートのおろし方の準備をととのえさせた。あとは停船命令を発するのみであつた。

このとき、夜が白んだ。

に航海しているようなものであった。なぜなら病院船がいるということは、そのあたりに巨大な艦隊が航進しているということであり、そういう推断は子供でもくだせることであった。

信濃丸の凝視はながかった。

その燈火の正体を知るべく、艦長成川大佐は接近を命じた。近づくにつれてその燈火が、後櫓に連掲されていることがわかった。色は「白」「紅」「白」である。

「敵ですよ」

と、たれかが、低く鋭い声でいったが、成川は沈黙でそれを押しかえした。かれは人念で慎重であった。その闇の中の燈火の正体をこうもわかりにくくしている理由のひとつは、さきに隠れていた月があかるくなつたためであった。月は東天にあった。信濃丸は月光を背にしている。このため目標が見えにくく、艦か船かさだかでなかったのである。

成川は増速を命じた。

「あのふねの後方にまわって、その左舷に出てみよう。相手を月の下に置けばよくわかるかもしれない」

相手の燈火も走っている。成川の信濃丸も走っている。それに速力の遅い船でもあって、「相手の後方にまわりその左舷に出る」というような動作が簡単にできるわけではなかった。じつに時間がかかった。発見が二十七日午前二時四十五分で、この運動が完成したのは午前四時三十分ごろである。

ほぼバルチック艦隊が対馬コースをやってくるという確信を得ていたが、そのことを信濃丸の艦長成川揆は知らなかった。かれは哨戒だけをしていればよく、そういう情報を知る必要もなかった。

かれは着実な勤務をつづけていた。

午前二時四十五分、船橋^{ブリッジ}でまどろんでいたかれはたれかにおこされてとび起きた。

船橋には、黒い沈黙が支配していた。たれもが叫びだしそうな衝動をこらえつつ、左舷の闇の中にボツンとかびあがった燈火を凝視していた。

（バルチック艦隊ではないか。――）

と、たれもが一樣にその疑念をもった。しかしたれもが息を詰め、声を出さず、針で突けば弾^弾け割れそうなのにかに懸命に堪えていた。

これが、バルチック艦隊の病院船アリヨール（偶然ながら戦艦アリヨールと同じ名）であることは、この瞬間の信濃丸にはむろんわからなかった。バルチック艦隊においては、この夜間航海にあたって全艦隊に無燈火を命じた。無電も禁止した。ところが病院船アリヨールのみは、同船の不注意によるものか、それとも理由があつてのことか、無燈火の命令に従わなかった。

理由があつてのこととすれば、おそらく、

「病院船はヘーグ条約によって中立侵すべからずということになっている。だから点燈していてもいい」

ということだったであろう。もしそうなら、この病院船は全艦隊の存在を日本側に知らせるため

長崎県の五島列島に白瀬という小島が、列島から遠く西へ離れて、東シナ海につき出てうかんでいる。かつては五島の漁師しか知らなかったこの岩礁は、この時期には燈台も設けられて航海者にとっては重要な島になっていた。

この、

「白瀬」

という岩礁が、この方面を担当する哨戒部隊が位置を示すためのひとつの基準になっている。たとえば、哨戒任務にあたっている第三戦隊はこのとき白瀬の北西方を遊弋していた。

汽船に砲をのせただけの仮装巡洋艦のむれは、この白瀬の西方でじゅうずつなぎになっておの指定区域内を遊弋していた。亜米利加丸、佐渡丸、信濃丸、満州丸、八幡丸、台南丸が、そのグループである。さらにこれとごく近接した東方には、三等巡洋艦の和泉と秋津洲が波を泡だたせて走りまわっていた。

信濃丸は北東にすすんでいた。この五月二十六日夜が更けてから浪が高くなった。二十七日の午前二時ごろになると南西の風が相当激しくなり、見張りをする者たちはマストやロープに鳴る風に声を吹きちぎられて、よほどの大声を張りあげなければついそばの者に意思をつたえることもできなかった。

霧も濃くなっていた。ときどき霧が薄くなったが、わずかに月の光が黒い雲間ににじんでいるのみで、星もみえなかった。

昨二十六日、鎮海湾の三笠は、「ロシアの運送船六隻が上海港に入った」という情報を得て、

台中丸を旗艦とする大小の汽船で編成されている。ぜんぶで二十四隻で、そのうち十隻は仮装巡洋艦である。その十隻はそれぞれ小さな砲をのせていたが実体は汽船で敵の軍艦とわたりあえるような力はなかった。それらはすべて哨戒任務にあたっていた。

このうち信濃丸というのがあった。二本マストに高い一本煙突をもち、総トン数六三八八トンの鋼船で、大佐成川揆^{はかる}が艦長として指揮し、連日、そのひよろ高い煙突から煙を吐きつつ所定水域を游弋していた。

信濃丸は明治三十三年に竣工した貨客船で、日本郵船が同社最大の持ち船として横浜とシアトル間の定期航路につかっていた。

話がいきなり後年のことになるが、日本船舶史上信濃丸ほどよく働いた船はなかった。この船は日露戦争のちふたたびアメリカ航路に復したが、その後船舶の進歩のために第二線のしごとになわって近海航路で働いた。さらにそこからはずされて漁船になり、北洋のサケ・マス漁業の母船としてしごとしていたが、太平洋戦争の敗戦とともに北洋の現場からひきもどされ、南方の復員軍人を母国に運ぶしごとをした。大岡昇平氏の名作「俘虜記^{ふりよき}」の主人公をフィリピンまで迎えにやってくるのはこの「信濃丸」であった。昭和二十六年ついに解体されスクラップになつてしまふが、その劇的要素に富んだ稼働生涯^{かどう}は、じつに五十年である。

哨戒艦としての信濃丸は、その僚艦とともに四月九日以来ずっとこの洋上で働きづめであつた。

場では戦艦についてゆくためにずいぶん苦勞をした。

この第一戦隊は、朝鮮南東岸である加徳水道に艦影をうかべていた。ほかにこの加徳水道での待機組には、第二艦隊の主力もまじっている。第二艦隊司令長官が上村彦之丞中将であることはしばしばふれている。その主力は第二戦隊であった。旗艦出雲いずも以下六隻の装甲巡洋艦と一隻の通報艦となりたっている。ほかに第二艦隊の第四戦隊も加徳水道にいた。第四戦隊は浪速なみきを旗艦とする四隻の巡洋艦戦隊である。

この加徳水道の奥に鎮海灣がある。そこに旗艦三笠だけが仮泊していた。陸上との連絡の便のためであり、もし出動するとすれば最後尾から走って最先頭に立つという運動をせねばならぬであらう。

第三艦隊は司令長官が中将片岡七郎で、旗艦は二等巡洋艦厳島である。その主力は第五戦隊であり、厳島、鎮遠、橋立、松島などで、いずれも日清戦争当時には花形の主力艦だったが、いまは艦齢も性能も老いてしまっていた。この第三艦隊の大部分が対馬付近で待機し、とくに快速をもった第六戦隊（須磨、和泉、秋津洲、千代田）といった二、三等巡洋艦たちや、第一艦隊第三戦隊（二等巡洋艦笠置以下四隻）の各艦が、それぞれ哨戒担当区域を密度高く巡航し、敵が対馬コースに出現する場合にいちはやく発見しようとつとめていた。

ほかに、

「附屬特務艦隊」

というものがあつた。

敵艦見ゆ

この時期の東郷艦隊の位置にふれておく。

東郷の連合艦隊は、三つの艦隊に区分されていた。

第一艦隊は東郷がこれを直率し、そのうち第一戦隊が主力部隊であった。三笠以下四隻の戦艦のほかに、装甲巡洋艦春日、日進それに通報艦一隻が加わっている。この二隻の装甲巡洋艦はかつてこの艦隊が戦艦八島、初瀬を触雷でうしなつたために戦艦のかわりのようなかたちで主力部隊に参加していた。この時代の決戦は戦艦の巨大な砲力と防御力が担当するというのが常識であった。この場合、春日と日進が問題であった。両艦は装甲巡洋艦でありながら戦艦の代用をさせられていた。ただしこの両艦には戦艦に準ずるだけの攻防力があるとみとめられていたので、いわば無理をおして第一艦隊第一戦隊という戦術単位に組みこまれている。このためかれらは決戦

坂の上の雲

八

目次

敵艦見ゆ	7
拔 錨	24
沖ノ島	53
運命の海	80
砲火指揮	142
死 闘	153
鬱 陵 島	201
ネボガトフ	220
雨 の 坂	257
あとがき集	293
解説 島田謹二	355
関連地図	371

文春文庫

坂の上の雲
(八)

司馬遼太郎



文藝春秋

著者紹介

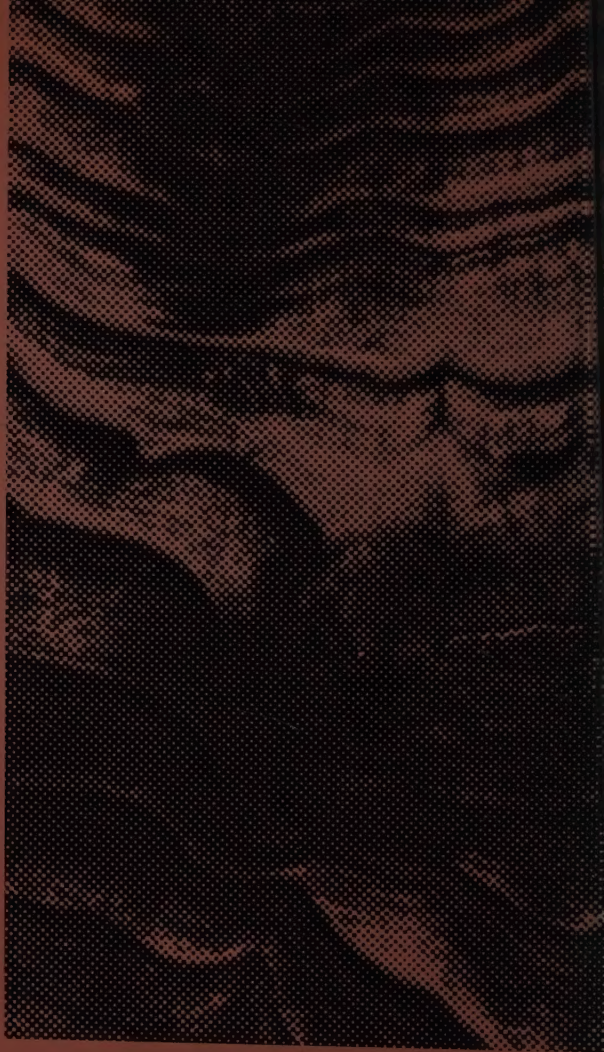
司馬遼太郎(しば・りょうたろう)

大正12(1923)年、大阪市に生れる。大阪外国語学校蒙古語科卒業。昭和35年、「梟の城」で第42回直木賞受賞。41年、「竜馬がゆく」「国盗り物語」で菊池寛賞受賞。47年、「世に棲む日日」を中心にした作家活動で吉川英治文学賞受賞。51年、日本芸術院恩賜賞。57年、「ひとびとの足音」で読売文学賞受賞。58年、「歴史小説の革新」についての功績で朝日賞受賞。59年、「街道をゆく」南蛮のみち、篇」で新潮日本文学大賞受賞、62年、「ロシアについて」で読売文学賞受賞。63年、「韃靼疾風録」で大佛次郎賞受賞。日本芸術院会員。著書に「司馬遼太郎全集」(全50巻、文藝春秋)ほか多数がある。

坂の上の雲

八

司馬遼太郎



文春文庫